太宰府市の文化財　第32集

筑前国分寺跡 I

外郭線及びその周辺の調査
国分瓦窯跡の調査

平成９年

太宰府市教育委員会

正誤表（2）

ここでは主に第14次調査の座標表記違いによる誤りを正している。完成後に気付いたため別紙にならざるを得なかった。

これは国分寺の東外郭線を示唆する重要な所見であり、不注意による誤りが発生したことは遺憾である。平成9年度刊行予定の『筑前国分寺II』において、再度訂正し正確な情報を提示することを記しお許し願いたいと思う。

（編者）

Fig.51　－45,480.0　→→　－45,483.0

　　－45,500.0　→→　－45,503.0

Fig.52　－45,498.0　→→　－45501.0

P.85－26行目　96.82　→→　93.82

P.85－27行目　325尺　→→　315尺

Fig.111　96.82（225尺）　→→　93.82（315尺）

※この変更によって図の右端の南北ラインが7SD090のほぼ中心を通過することになる。

Tab.33　14SA070aの列を遺構X座標から右のすべてを次のように変更する。

57,496.47｜－45,501.45　｜　－14.444484　｜　93.8212586　｜　－48.79893406　－48.63462789　｜　－48.47142444　｜　316.9637115　｜　315.8964936　｜　314.8364383

P.158　9行目これまで東外郭線～16行目最後まで削除し、次の文章とする。

これまで東外郭線とみられていた溝SD090中心の北延長線上で、中軸線からほぼ同じ位置に南北方向の柵列（14SA070）が存在することがわかった。柵列を検出した第14次調査では溝の検出はなく、現状では両者の関係は不明とせざるを得ない。また柵列の年代を決定できる資料も乏しく、どちらが先に建設されたかも明らかではない。今後の課題として残るものである。ただ、両者とも中軸線から315尺の位置にあることから、この位置が筑前国分寺の東端とみることはできよう。したがって左右対称の寺域とするならば東西630尺の規模が想定できることになる。

太宰府市の文化財　第32集

筑前国分寺跡 I

－第9・10・13・14・15・17・19・20次調査－
国分瓦窯跡の調査

1997年

太宰府市教育委員会

序

埋蔵文化財が密集する太宰府市の中でも国分寺がある国分地区は特別史跡水城跡、史跡筑前国分寺跡、史跡国分瓦窯跡といった国指定史跡のほか、市指定文化財の陣ノ尾1号墳があり、重要な遺跡が集中する場所の一つであります。

すでに指定されている一郭は環境整備が進行し、史跡公園として住民をはじめとした様々な人々の憩いの場として活用されていますが、ここに報告いたします筑前国分寺跡に関連する調査は、史跡指定地の隣接地あるいはその周辺で行ったもので、すべて住宅建設に伴うものであります。

しかしながら、ほとんどの調査で国分寺に関係する重要な所見を得ることができ、周辺部を含めて総合的に筑前国分寺を捉え直す必要性を痛感させる結果となりました。特に築地跡の発見は寺の南を限る遺構として初めて明らかになったものですし、東西道路の検出は国分寺に入るルートを明らかにしてくれました。

遺跡は単独で成立するのではなく、その他の様々な事象と結びついて有機的に捉えることにより、これまで判明していなかった新たな事実が浮かび上がってくるものと思われます。

拙い冊子ながら、国分寺の研究の一助として、また広く文化遺産の保存と啓発に活用していただければ幸いです。最後になりましたが、調査及び整理に参加されました作業員の皆様、調査にご理解いただきました地権者の方々に対して、厚く御礼申し上げる次第であります。

太宰府市教育委員会
教育長　長野治己

例　言

1. 本書は昭和58年度から平成7年度までに太宰府市教育委員会が調査した筑前国分寺跡に関係する発掘調査の成果をまとめたものである。

2. 本書に掲載した調査は、第9次、第10次、第13次、第14次、第15次、第17次、第19次、第20次の8地点と、寺跡の北東側に所在する国分瓦窯跡の緊急調査である。第9次から20次の内、第11次については事業の関係から『筑前国分尼寺跡II』（太宰府市の文化財第16集）に報告済みであり、第12次、第18次は福岡県教育委員会が実施したもので、すでにその報告は刊行されている。

3. 本書に掲載した発掘調査の原因、期間、面積、担当者などは各調査の報告部分に記載している。

4. 遺構の実測及び写真撮影は、各調査担当者及び当市技術職員のほか瀬口慎司、谷由紀子、藤尾薫、河田聡が行い、調査区全景の空中写真は、（有）空中写真稲富、（有）空中写真企画が行った。　また第13次調査の遺構全体図は、写真測量による機械素図作成をアジア航測株式会社に委託　した。

5. 遺構の実測には、国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度及び距離等もこれを基準としたものである。

6. 遺物の実測は、狭川真一、中島恒次郎、山村信榮、塩地潤一、森田 レイ子、境一美、鶴味加代子、松隈里恵子、酒井三保子、相川寿美子が行い、調査担当者が検査の上必要部分を補足した。また写真撮影は木器をフォトハウスおか（代表岡紀久夫）に委託し、土器その他の遺物は松隈、相川、白水文恵の協力を得て狭川が行った。

7. 図版の浄書は主として宮崎亮一が行い、一部調査担当者が行った。

8. 本書に掲載した遺構図のうち、太宰府市教育委員会が調査を行っていないものについては九州歴史資料館から原図、第二原図またはトレース原図を借用し、必要部分を当方で再トレースした。

9. 出土した銅印の分析と処理は、国立歴史民俗博物館の永嶋正春氏に依頼し、その他の金属製品の応急的な保存処理は下川可容子が行った。

10. 付編には太宰府市文化ふれあい館のシンボルとして建設した、筑前国分寺七重塔復原模型の製作に関する報告を併載した。報告文作成にあたっては、細見啓三氏、株式会社トータルメディア、株式会社トリアド工房から関係資料の提供及びご教示を得た。

11. 本書の執筆分担は目次に記載した。

12. 編集にあたっては出来るだけ視覚的な統一を図ったが事前調整を怠った部分もあり、縮尺や本文内容にばらつきが生じた箇所がある。ご寛恕願いたい。なお編集は狭川真一が担当した。

目次

I. 筑前国分寺跡周辺の様相 ―― 1

II. 調査組織 ―― 4

III. 調査の概要

(1) 第9次調査 ―― 7

(2) 第10次調査 ―― 39

(3) 第13次調査 ―― 54

(4) 第14次調査 ―― 75

(5) 第15次調査 ―― 94

(6) 第17次調査 ―― 107

(7) 第19次調査 ―― 119

(8) 第20次調査 ―― 132

(9) 国分瓦窯跡の調査 ―― 137

IV. 総括 ―― 155

付編

筑前国分寺七重塔復原模型の製作 ―― 1

(執筆分担)

I・II・.III-(1)(2)(3)(4)(6)・IV・付編 ―― 狭川真一

III-(5)(8) ―― 中島恒次郎

III-(7) ―― 城戸康利

III-(9) ―― 山村信榮

I. 筑前国分寺跡周辺の様相

筑前国分寺は、かの有名な聖武天皇天平十三年の詔によって建立された国分寺の一つである。これまでの発掘調査の結果でもそれを否定するものではなく、金堂跡及び西回廊跡付近には「国分寺」が現存し、今も法燈を伝えている。「国分寺」本堂の本尊は薬師如来とされる平安時代の古仏で、北東背後にある大城山の山頂にあった四王寺から移されたものと考えられている。

筑前国分寺の立地は、先に記したように大城山の南西裾付近で、西に向かって広がる小規模な扇状地形の基部に位置する。遺構面は花崗岩風化土が輪廻現象によって粘土化した地盤に形成されるが、地盤中には風化途中の花崗岩礫が多量に混入しており、調査される遺構面はその礫が随所で露出する荒々しいものである。伽藍の形成される範囲は東がわずかに高いがほぼ平坦な面を形成しており、過去の調査成果では一辺約192mの寺域が想定されている。現在は西に細い道路としてその痕跡を一部分とどめているが、他は明確な地上痕跡を示さない。逆に背後は東から西へ流れる水路によってかなりの段差があり、これ以上北へ伽藍が形成されていた可能性を考えるのは困難である。また西北付近は後世の削平で大きく失われており、講堂の一部もこれによって消滅している。

次に近辺の遺跡を概観することによって筑前国分寺跡周辺の歴史的位置を確認しておきたい。なお国分寺の調査については後章でまとめることとする。

寺跡の東側には縄文時代から中世の遺構や遺物を検出した辻遺跡がある。縄文時代では前期及び晩期の遺物を若干量検出したにすぎないが、古代では国分寺の南側を通過するとみられる道路遺構の一部が確認され、その側溝の一部は中世まで利用されていた。現在この地点には太宰府市文化ふれあい館が建設され、文化・文化財の啓発をはじめ様々な事業が展開されている。またこの遺跡の北側で、国分寺からみれば北東方向にあたる丘陵の斜面下位には、国分寺の瓦を供給した国分瓦窯跡がある。今回一部を緊急に調査したので併せて報告している。

国分寺の南側では、御笠軍団印を出土したと伝える地点がある。大宰府に存在した四軍団の一つの名称が明らかとなっただけでなく、その具体的位置を示唆するものとしてこの付近は注目されていた。この近辺の調査はこれまで10件余り行われているが、検出されている遺構は7世紀の早い段階の住居跡（小規模な集落）、8世紀の井戸や土壙、平安時代の工房跡などであり、確実に軍団を物語る遺構には恵まれていない。検出遺構における軍団自体の確証が何をもって行われるのか未確定な現在では、さらなる調査の蓄積に期待するしかない。

同じ南側ではこの軍団推定地の西側に千足遺跡がある。古墳時代の竪穴住居や初期須恵器が検出されているほか、南北方向に規制された奈良時代の掘立柱建物が検出されている。さらに南側では東西に延びる低い丘陵の頂部に以前は古墳が存在していたようであり、平安時代では松倉瓦窯跡が知られている。

国分寺の西側は扇状地の先端に向かって徐々に低くなる地形であるが、様々な遺跡が確認さ

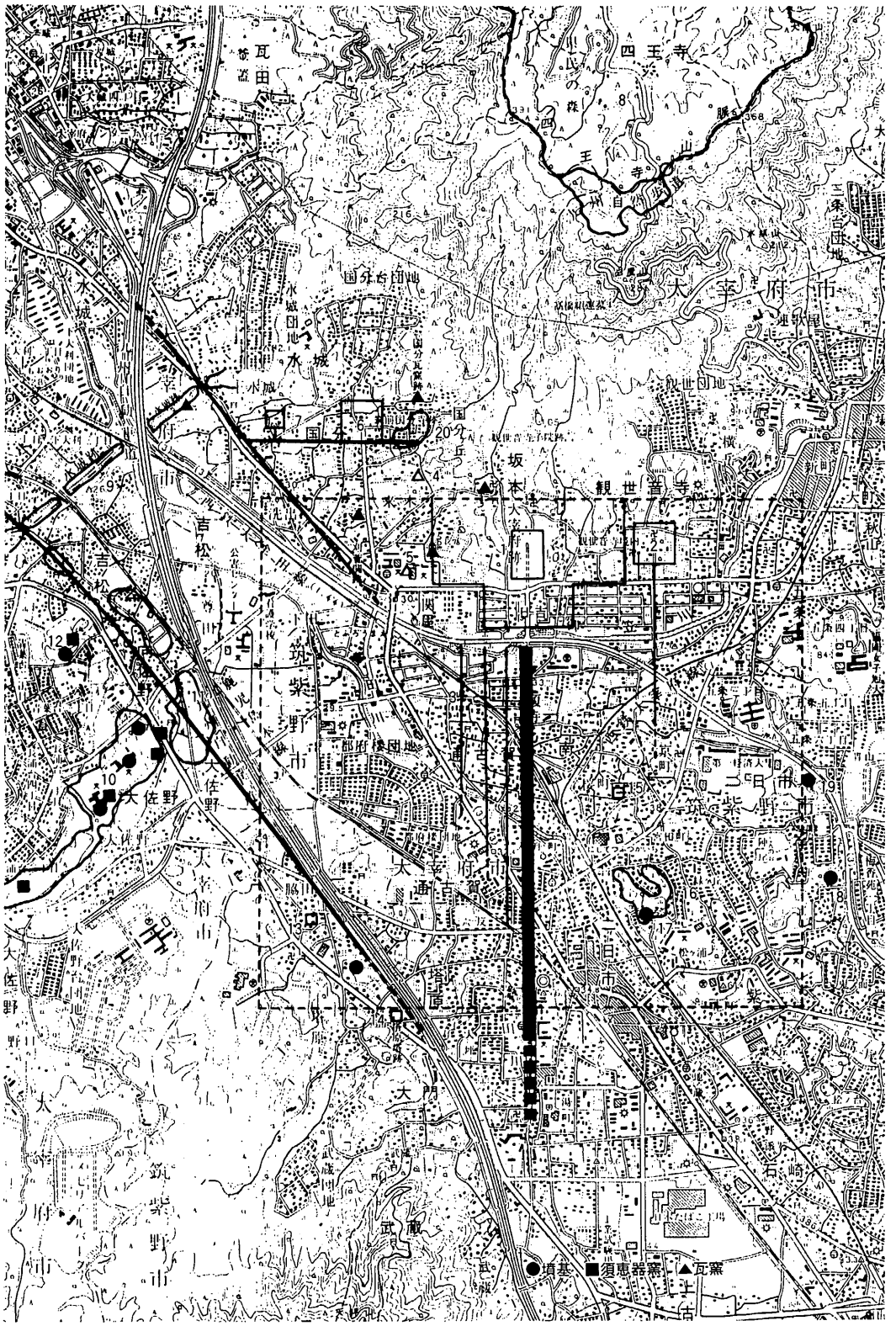


Fig.1　太宰府市周辺遺跡分布図

れている。国分寺の背後にある大城山の西端には水城が造営され、博多湾から進入する外敵を防禦していた。現在までに30件近い調査がなされているが、謎は深まるばかりである。

その水城と国分寺の間には筑前国分尼寺跡が確認されている。僧寺と尼寺の中軸線はほぼ同一方向を示し、両者は1400尺（天平尺）の距離をおいて計画的に造営されたことが窺える。この尼寺を取りまく遺跡を松本遺跡と称しているが、この遺跡からは弥生時代中期の集落、後期の墳墓群などを検出し、青銅器の鋳型も出土している。現状では具体的な規模は把握できていないが、中規模な集落を形成していたものと思われる。

このように国分寺周辺は太宰府市のなかでも遺跡の密集する地域である。行政の道路整備に伴って周辺の農地は今、宅地へと変貌している。古代の状況が明らかとなってゆく反面、のどかな田園風景はすでに過去のものとなってしまった。

Fig.1　遺跡一覧

1. 大宰府跡（九国二島を統括した、政治、外交、軍事の拠点）
2. 観世音寺（斉明天皇の冥福を祈り天智天皇が発願した寺院で、九州の僧尼を統括した）
3. 大宰府条坊跡（大宰府の全面に広がる都市遺跡。破線は鏡山説による推定範囲）
4. 御笠軍団推定地（御笠軍団の銅印の出土により推定されている）
5. 遠賀軍団推定地（遠賀軍団の銅印の出土により推定されている）
6. **筑前国分寺跡**
7. 筑前国分尼寺跡（近年の調査で中枢伽藍の位置が確定したが、金堂は未確認）
8. 大野城跡（664年築造、水城とともに大宰府の北辺を防禦する）
9. 水城跡（663年築造、長大な土塁状を呈し、内外の堀に関係して数カ所に木樋がある）
10. 宮ノ本遺跡（鏡などの出土で大宰府官人の墓地と推定され、平安時代中頃まで続く）
11. 前田遺跡（水城西門を通過する官道はここを通る。約150mに及ぶ直線道を検出）
12. 篠振遺跡（奈良時代の火葬墓と須恵器窯、中世後期の墓地）
13. 杉塚廃寺（奈良時代の寺院跡で金堂と塔が確認されている）
14. 塔原廃寺（塔の心礎が残るのみで伽藍は未確認）
15. 般若寺跡（瓦積基壇の塔跡に心礎が残る。他に北辺の柵列が確認されている）
16. 峰火葬墓（奈良時代の火葬墓）
17. 峰遺跡（古代の掘立柱建物が低丘陵上に確認されている）
18. 米噛火葬墓（不時発見ながら7世紀末に遡る可能性がある火葬墓）
19. 結ヶ浦火葬墓（和銅銭を伴った火葬墓）
20. 辻遺跡（古代の道路側溝と推定される溝を検出）

II. 調査組織

報告する調査が多年度にまたがるため、ここで一括してその当時の調査体制をまとめておく。

（昭和58／1983年度）第9次

総括	教　育　長	陶山直次郎		
庶務	社会教育課長	西山義則		
	文化財係長	黒板　力		
	主　　事	岡部大治		
調査	技　　師	山本信夫	狭川真一	

（昭和59／1984年度）第10次

総括	教　育　長	陶山直次郎		
庶務	社会教育課長	西山義則		
	文化財係長	黒板　力		
	主　　事	岡部大治		
調査	技　　師	山本信夫	狭川真一	

（平成2／1990年度）第13次

総括	教育長	長野治己			
庶務	教育部長	西山義則			
	社会教育課長	関岡　勉			
	文化財係長	鬼木冨士夫			
	主任主事	岡部大治			
	主　　事	白水伸司			
調査	主任技師	山本信夫	狭川真一	城戸康利（7月1日～）	
	技　　師	城戸康利（～6月30日）	緒方俊輔	山村信榮	
	技師（嘱託）	中島恒次郎	狭川麻子		

（平成3／1991年度）第14次

総括	教育長	長野治己			
庶務	教育部長	中川シゲ子			
	文化課長	佐藤恭宏			
	埋蔵文化財係長	富田　譲			
	文化振興係長	大田重信			
	主任主事	岡部大治	川谷　豊		
調査	主任技師	山本信夫	狭川真一	城戸康利	緒方俊輔
	技　　師	山村信榮	中島恒次郎	塩地潤一	

	技師（嘱託）	田中克子（10月1日～）

（平成4／1992年度）第15・17次

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治　川谷　豊
調査	主任技師	山本信夫　狭川真一　城戸康利
		緒方俊輔　山村信榮（7月1日～）
	技　師	山村信榮（～6月30日）　中島恒次郎　塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子

（平成6／1994年度）19・20次・瓦窯

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治　川谷　豊
	主　事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一　城戸康利　山村信榮
		中島恒次郎　重松麻里子
	技　師	井上信正
	技師（嘱託）	田中克子（～6年7月31日）　下川可容子

（平成8／1996年度）整理

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化振興係長	大田重信（～6月30日）
		田中利男（7月1日～）
	主任主事	岡部大治　川谷　豊
	主　事	今村江利子

調査	技術主査	山本信夫		
	主任技師	狭川真一	城戸康利	山村信榮
		中島恒次郎	井上信正	
	技　　師	高橋　学	宮崎亮一	
	技師（嘱託）	下川可容子	森田レイ子	

III、調査の概要

(1) 第9次調査

調査地は、太宰府市大字国分608-1に所在する。共同住宅建設に先立つ事前調査として、昭和58（1983）年10月21日から11月22日まで実施した。調査面積は340m²で、調査は山本信夫、狭川真一が担当した。なお測量及び遺構実測にあたっては、岡部大治の協力を得た。

1．層位など

現況水田面の表土を除去すると近年の地上げに伴う真砂土が厚く堆積し、その下に若干の遺物を含む暗灰色粘土層が確認された。この層を除去すると薄く茶灰色土層が検出され、遺物を包含する層であった。茶灰色土を除去すると黄色粘土（一部砂礫混じり）の地山が検出され、この面が遺構面である。遺構はすべて地山から切り込んでいた。なお調査区東端では礫が多く含まれている地山であった。

2．遺構

遺構は調査区の西側に偏重気味である。東側では土壙1基が古く、他に検出された溝や配石遺構は近世以降のものと判断される。中央から西側では、掘立柱建物、井戸、土壙のほかピット群が検出された（Fig.2～3）。以下遺構の性格別に報告する。

(1) 掘立柱建物

9SB090　調査区西南隅で検出された建物で、東西、南北とも1間分を検出した他は調査区外

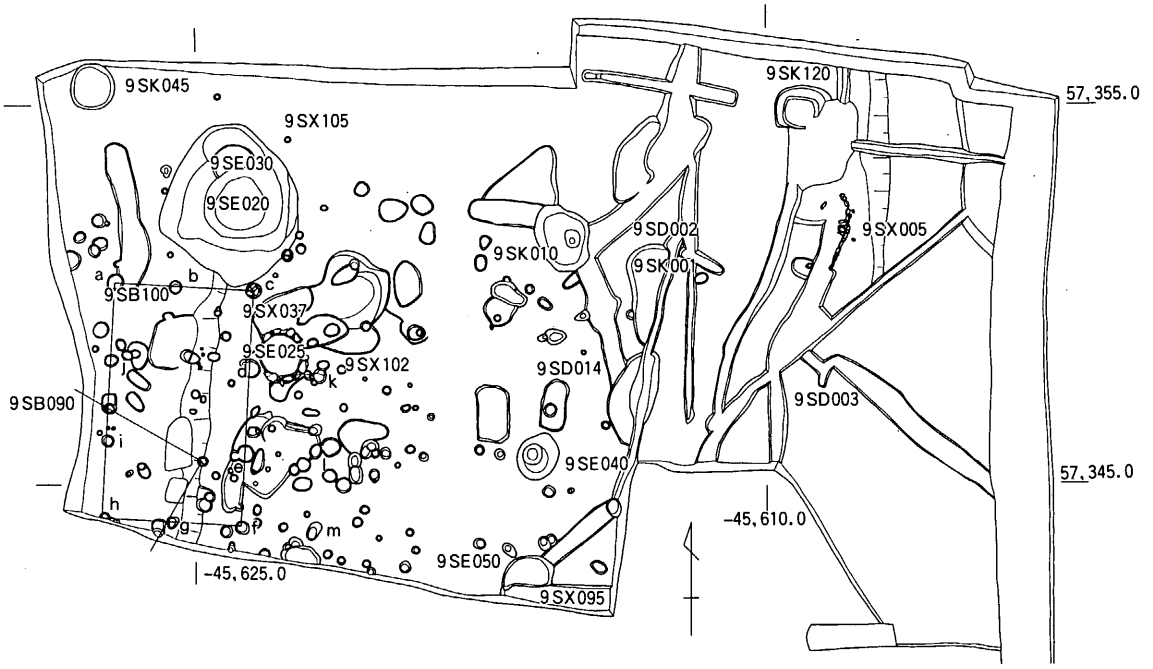


Fig.2　第9次調査遺構配置図（1/200）

に延びているものと考えられる。柱間は東西2.80m、南北は2.25mで、N-29° 15′-Eと大きく振れている。柱掘り方は小さく、略円形で直径0.3m内外である。北側の二つの柱穴底には、柱穴よりやや小さめで扁平な石を用いて礎盤としている。

9SB100（Tab.1） 9SB090に重複しているが遺構の切り合い関係はない。東西2間（3.6m）、南北3間（6.25m）を測り、N-2° 45′-Eの振れを有している。柱穴、柱間は別表に記載したとおりである。なお柱穴cには、底に瓦や陶磁器を用いた礎盤が確認された（Fig.3、Pla.）。なお柱穴k～mを一連のものとして東に庇あるいは縁の出る建物と理解することもできる。

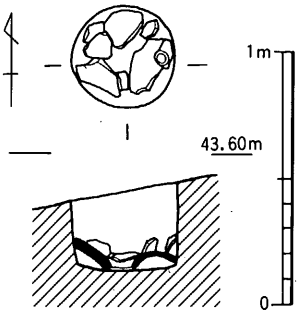


Fig.3 9SB100
柱掘り方c実測図（1/30）

Tab.1 9SB100柱穴・柱間計測表

柱番号	東西長（m）	南北長（m）	底部標高（m）	柱間	長さ（m）
a	0.42	0.42	43.03	a-b	1.60
b	0.30	0.32	42.89	b-c	2.05
c	0.41	0.41	43.14	c-d	2.10
d	0.45	0.48	43.91	d-e	2.20
e	0.44	0.45	43.15	e-f	1.95
f	0.36	0.32	43.00	f-g	1.90
g	0.30	0.30	43.02	g-h	1.75
h	0.25	0.15+	43.10	h-i	2.05
i	0.31	0.31	43.04	i-j	2.15
j	0.47	0.31	43.03	j-a	2.05
(k)	0.35	0.38	43.08	(k-l)	2.20
(l)	0.31	0.39	43.17	(l-m)	1.95
(m)	0.31	0.52	43.18	(f-m)	1.85
平均	0.36	0.35	43.13	平均	1.98
a-j 平均	0.37	0.33	43.13	主棟平均	1.98

(2) 土壙

9SK001 南北2.7m、東西1.05m以上、深さ約0.2mを測る。9SD003に東側を切られている。

9SK010 南北1.85m、東西1.4m、深さ約0.3mを測る。黒灰色粘質土の単一層で埋まる。

9SK045 南北1.2m、東西1.1m、深さ約0.35mを測る。

9SK120 撹乱で東南隅を失っているが、略方形の土壙である。南北約1.2m、東西約1.5m、深さ約0.45mを測る。土壙中程で段がある。

(3) 井戸

9SE020（Fig.4、Pla.3） 9SE030を切るもので、本来の遺構の半分以上を失っている。また、埋土は黒色粘土で構成されるが、上位層の多くは崩壊によって9SE030と混在していた。底部付

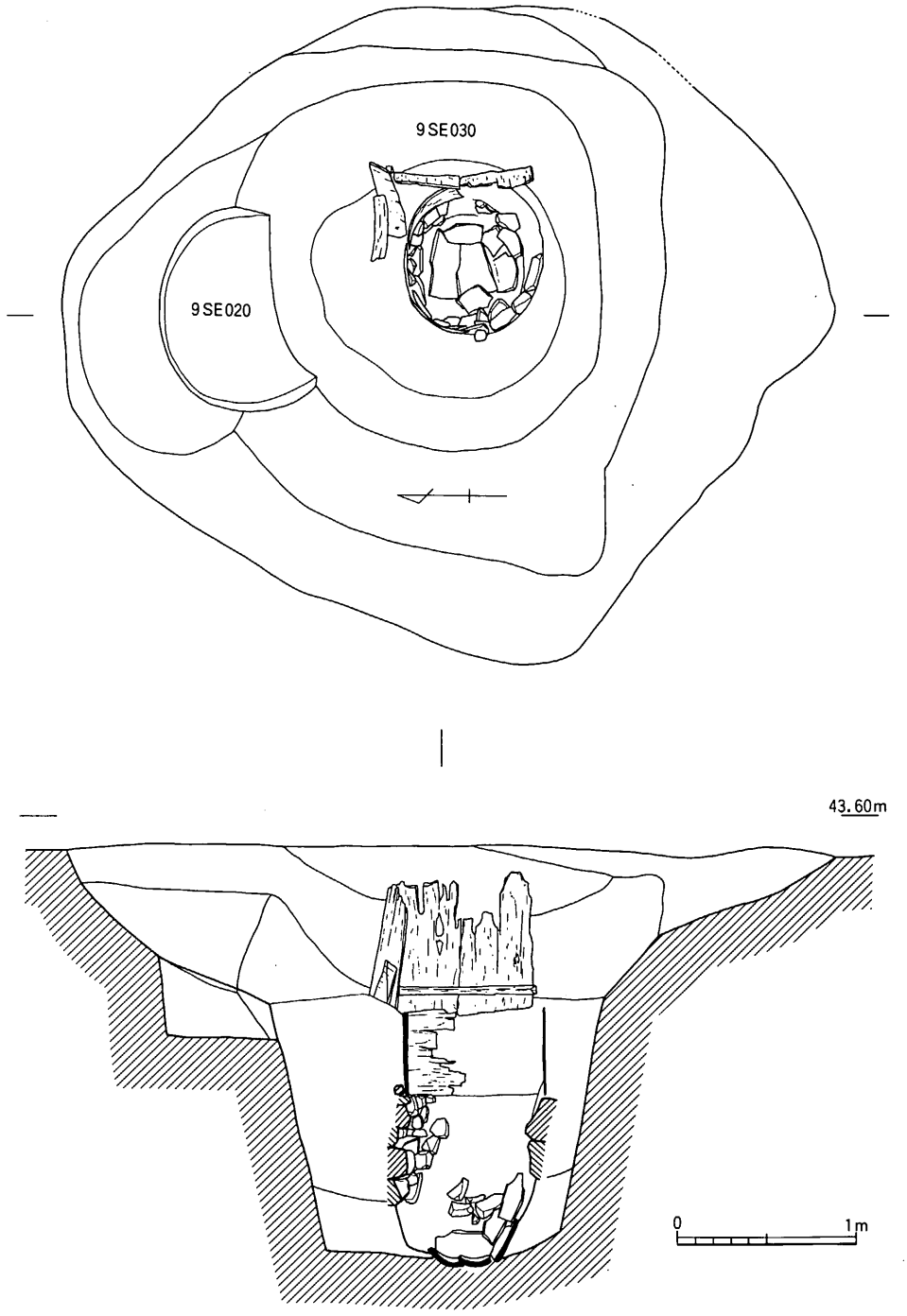


Fig.4　9SE020・030実測図（1/40）

近の直径は約1.15m、底の標高はおよそ42.35mで9SE030よりもかなり浅い。

9SE025（Fig.5）　直径1.15m、深さ約1.0mで、遺構面付近に0.1～0.4m程度の石を用いて周囲を囲っている。当初はこのまま積み上げられていたものと推定される。底の標高は42.45mで

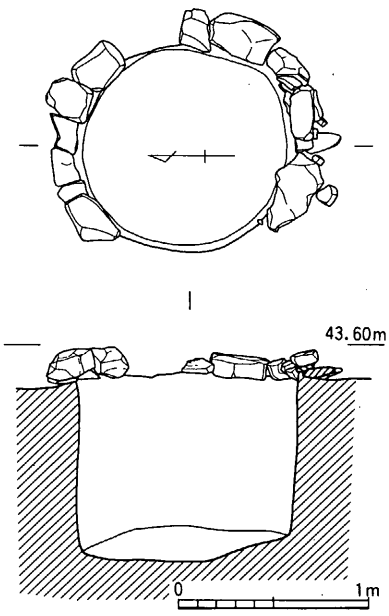


Fig.5　9SE025実測図（1/40）

ある。

9SE030（Fig.4）　9SE020に切られる井戸で、検出面では南北4.3m、東西3.65mを測るが、崩落によって規模はかなり大きくなっていると思われる。井戸本体は上位に縦板を並べたもので角材によって固定し、一辺約0.9mを測る。その下位には直径約0.75m、高さ約0.45mの曲物を置いている。さらにそれより下位は石組になっているが石の間に隙間が目立つことから当初は曲げ物などの枠があり、これらの石はその裏込めに用いられたものと考えられる。また底には瓦を数枚敷いている。検出面からの深さは約2.3mで、底の標高は41.1mである。

埋土は検出面付近が黒褐色土層、次に黒色粘土層となり、これを除去した段階で枠のプランが確認された。枠内は灰色粘土で埋まっていた。枠外の裏込め土は明灰色粘土で若干の土器を含んでいた。

9SE040　1.25×1.05m、深さ0.51mを測る。底部付近に直径約0.5m、深さ約0.17mの窪みがあり、曲物を据えていた痕跡と考えられる。

9SE050　東西約1.3m、深さ0.4m程度を測る。南側は調査区の外になり南北の規模は明らかではない。

(4) 溝

9SD002　調査区を斜めに走る溝で、幅約0.6m、深さ約0.1mである。

9SD003　調査区を南北に走る数条の溝群である。近年まで使われていた水田の湿抜きの可能性が高い。

9SD014　9SD002と同様のもので、当初は一つのものであったと考えられる。

(5) その他の遺構

9SX005　9SD003の一部を小さな石よって護岸を保護したものと思われる。溝の東岸のみに認められ、長さは約2.0m分を検出したにとどまる。

9SX037　9SE025に切られる窪み状の遺構である。

9SX095　9SE050を切る溝状の遺構である。長さ2.8m分を検出したが、調査区の外に延びており詳細は明らかではない。

9SX102　直径0.25m、深さ0.4mのピットである。

9SX105　9SE030の周囲を取り巻くように検出されたピット群で、他のピットより一際小さく、直径は0.15～0.18m、深さは0.05～0.15m程度である。ピット間の距離は一定ではなく1.7～2.8m程度である。井戸を囲う柵状の施設である可能性が考えられる。

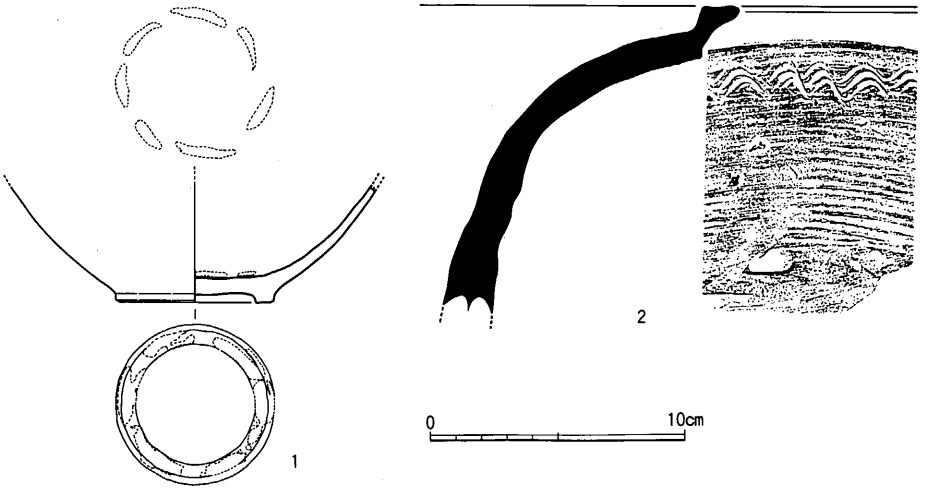


Fig.6　9SB100柱掘り方出土土器実測図（1/3）

3．出土遺物

(1) 土器・陶磁器

9SB100出土土器（Fig. 6、Pla.4）

越州窯系青磁

椀（1）　輪状高台を有するものでI-2類に分類される。見込み及び高台畳付けに7箇所の目跡が観察される。釉は淡緑褐色に発色するが不透明で光沢はない。柱掘り方cに礎盤の一部として利用されていた。

須恵器

甕（2）　口径を復原すると50cm以上になるものと思われる口縁部分の資料である。端部を複合口縁風に立ち上げており、その立ち上がりの外面は軽くつまみ出している。そのすぐ下部に粗めの波状文を巡らせている。端部を除く口縁部外面全体に平行叩きが観察されるがほとんど後の調整（ナデ）で不明瞭になっている。おそらく同一の個体と思われる破片が9SE030から出土している。

9SK045出土土器（Fig.14）

土師器

丸底坏a（3）　口径15.1cm、器高3.5cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。

9SK120出土遺物（Fig.7、Pla.4・5）

土師器

坏a（1～17）　口径11.4～12.9cm、器高2.9～4.1cm、底径5.6～8.2cmを測る。やや深手で体部と底部の境目が不明瞭なもの（15～17）を含んでいるが、ほぼ同じタイプと考えられる。内面に煤が付着したもの（1・3・5・8・13・14）があり、灯明皿として利用されたことを物語る。

須恵器

獣脚（18）　残存する高さ6.0cm、最大幅4.4cm。指は境目を沈線6本で表現する程度である。

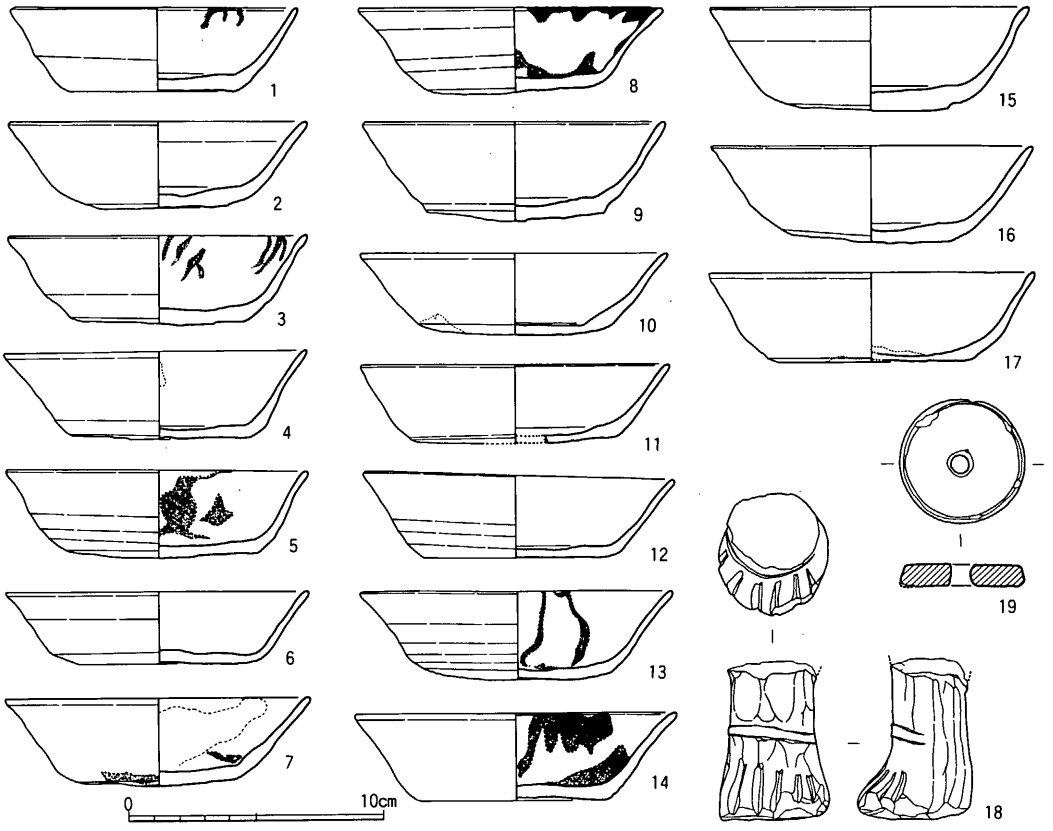


Fig.7　9SK120出土遺物実測図（1/3）

足首の外面にはたがを巻いているような表現があるが背面にはない。製品として機能している場合裏側は見えないものとして製作されたものであろう。いずれもヘラによる加工である。全体の調整は縦方向のヘラケズリである。

石製品

紡錘車（19）　滑石製で、直径2.9cm、厚さ0.9cmで中心の直径0.7cm程度の孔がある。孔は両側から穿たれている。

9SE020出土土器（Fig.8、Pla.6）

土師器

小皿a（1・2）　口径10.0・10.5cm、器高1.3・1.7cm、底径7.9・6.8cmを測る。

坏a（3・4）　3は丸底坏aに近いのもで内面底部付近にミガキbが確認される。4は椀に近い形状を呈するもの。

椀c（5～7）　口径15.1～15.7cmを測る。5は平底に近いものであるが、他は丸底に仕上げられる。7の内面底部はミガキbの可能性が考えられるが磨滅が進み不明瞭である。

鉢（8）　外面体部上半以下に縦方向の刷毛目が観察される。内面はナデ。

須恵質土器

鉢（9）　底径10.9cmで糸切りである。内外面とも調整はヨコナデである。

黒色土器

小椀（10）　高台径5.0cmを測るA類で、内面にミガキcが顕著に観察される。

椀c（11）　口径15.2cm、器高5.6cm、高台径8.5cmを測るA類で、口縁端部をわずかに外反させ、内面には6段階に分けられたミガキcが観察される。

小壷（12）　口径5.4cmを測るB類で、内外面ともに黒化している。ミガキcは外面全体と口縁部内面の一部に施されるが、体部内面はヨコナデでおわる。

越州窯系青磁

椀（13）　高台径5.8cmを測り、畳付け以外は全面施釉される。見込み及び畳付けに目跡が観察される。I-2類。

14はI類に分類される壷または水注の底部である。内面はヨコナデの痕跡が明瞭で段状を呈している。釉は外面全体と内面の底部を除いた部分に施される。高台畳付け先端部分に目跡が観察される。

9SE025出土土器（Fig.9、Pla.7）

土師器

小皿a（1～6）　すべてヘラ切りである。口径9.9～10.3cm、器高1.1～1.6cm、底径7.3～8.1cm

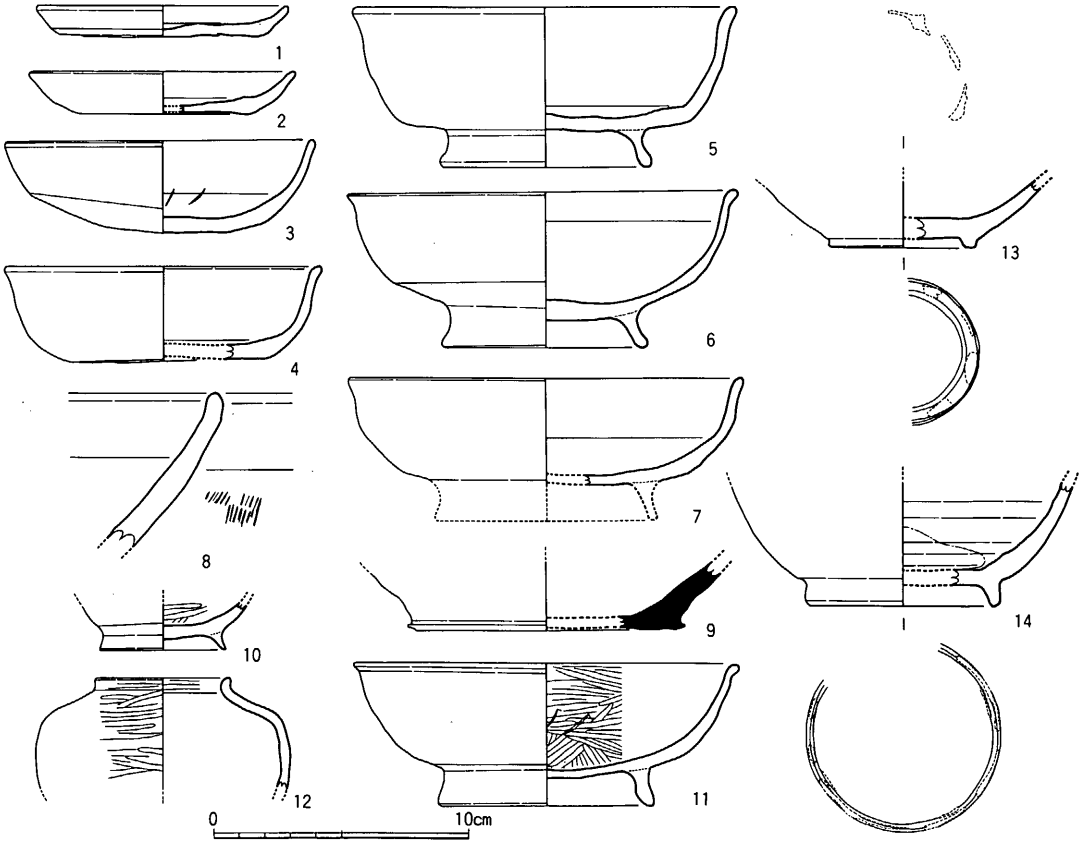


Fig.8　9SE020出土土器実測図（1/3）

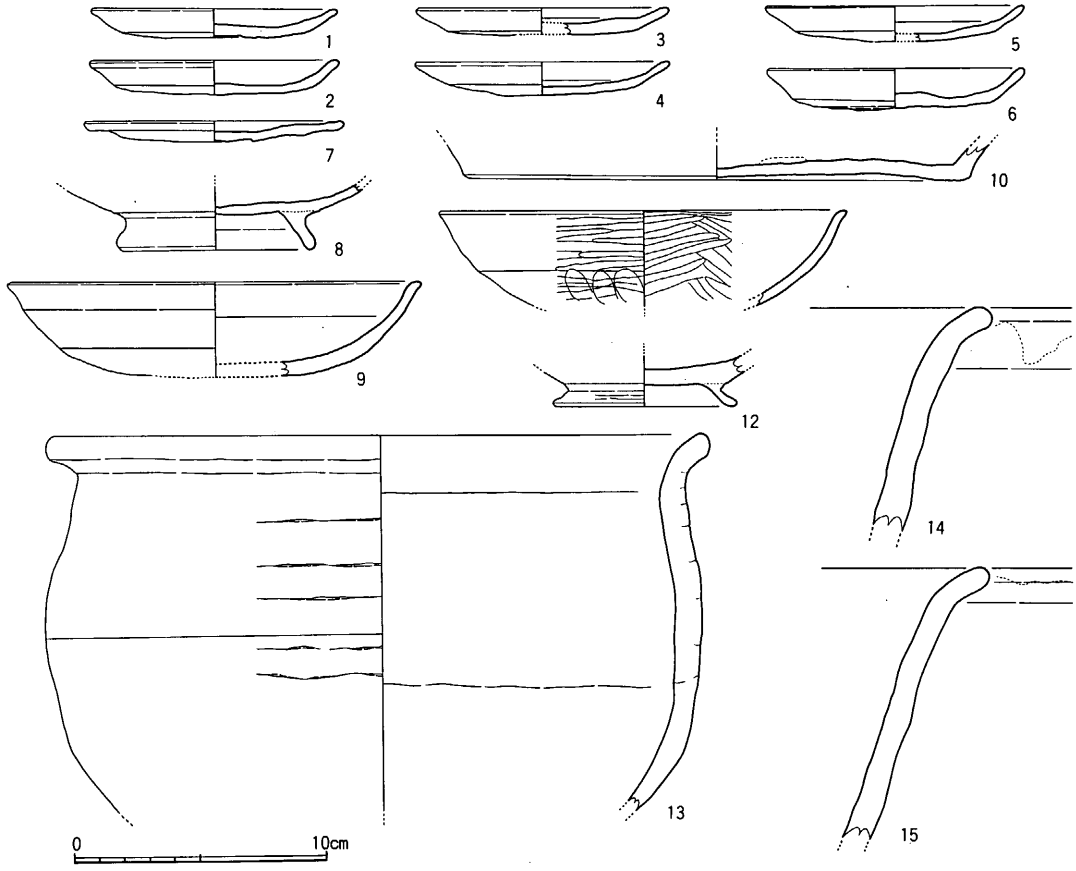


Fig.9　9SE025出土遺物実測図（1/3）

を測る。

小皿a2（7）　口径10.3cm、器高0.8cmで、口縁端部内面に沈線状のくぼみをつくる。

椀c（8）　高台部分の破片で、高台径7.8cmを測る。

丸底坏a（9）　口径16.5cm、器高3.7cmを測る。内面中位以下はミガキbが施される。

甕（13～15）　13は口径26.5cmを測るもので、外面体部下半は格子目の叩きが施される。内面はナデによって仕上げられている。外面全体に煤が付着している。14・15も同類の資料とみられ、やはり外面の大半に煤が付着している。

黒色土器

椀（11・12）　11は口径16.3cm。内外面ともにミガキcが顕著に観察される。B類。12は高台部分の資料で高台径7.4cm。内外面ともにミガキcが顕著に観察される。B類。

陶器

壷（10）　底径20.1cmを測る。内面は粗雑なナデ、外面は部分的にケズリ風の擦痕が認められるが、基本的には未調整であろう。焼成は良好で硬質に仕上げられ、胎土は1mm内外の白色粒子を若干含むが精良である。色調は表面が暗灰色あるいはそれにやや褐色味を帯びたもので

あるが断面は赤褐色を呈している。朝鮮系無釉陶器とみられる。なお、内面には墨痕が観察される。

9SE030黒褐色土層出土土器（Fig.10、Pla.8）

土師器

小皿a（1～4）　すべてヘラ切りである。口径10.4～10.5cm、器高1.4～2.1cmを測る。

坏a（5）　口径10.9cm、器高2.9cmを測る。

椀c（6～10）　6は口径14.6cm、器高5.6cm、高台径7.7cmを測る。体部中程に屈曲があり、口縁部は外反する。同様に体部を屈曲させるものに8があるが、他は丸く立ち上がるようである。8の内面にはミガキbが観察される。

甕（13・14）　口径20.7・20.8cmで、内面上位及び外面はヨコナデによって仕上げられてい

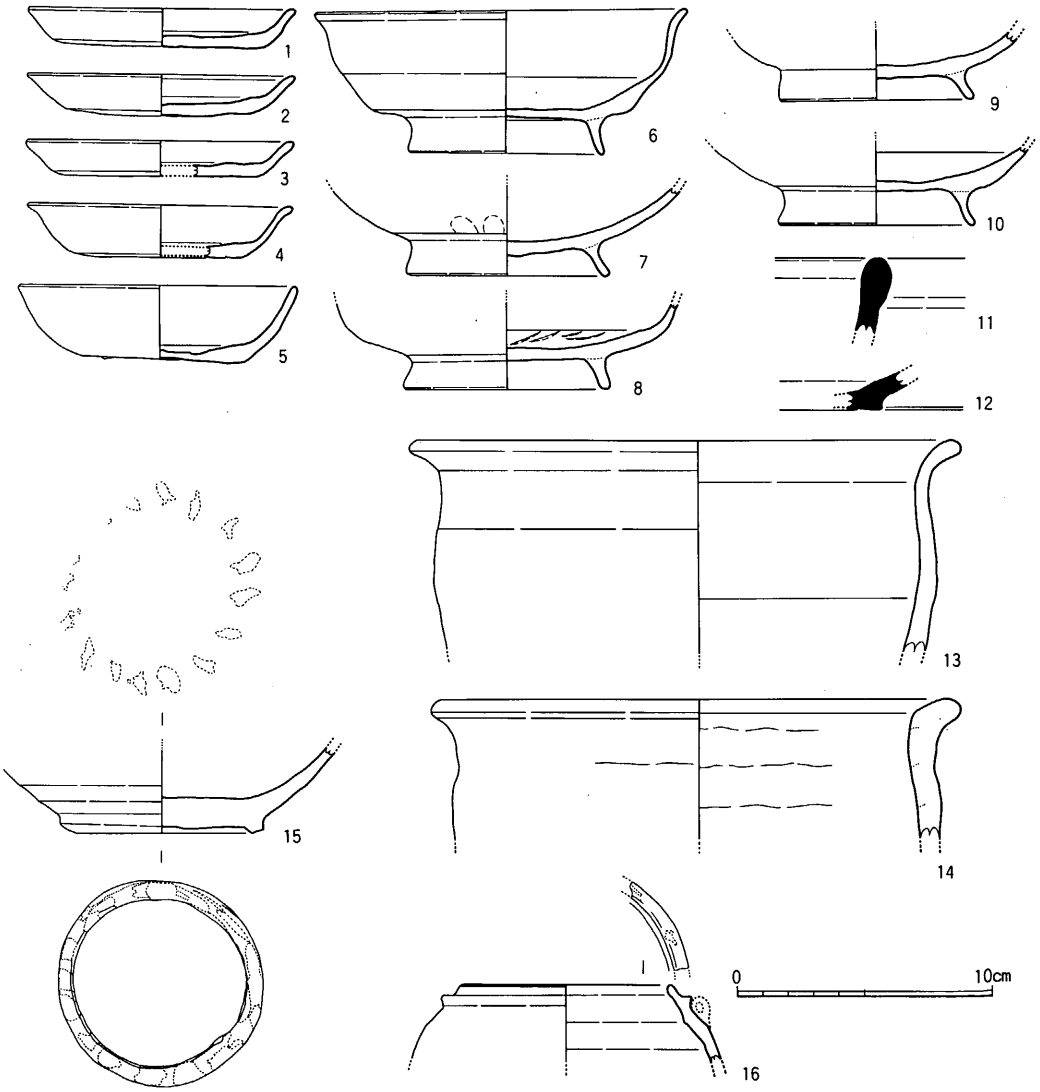


Fig.10　9SE030黒褐色土層出土遺物実測図（1/3）

る。14は口縁付近を外方へ軽く倒したような形状である。

須恵質土器

鉢（11・12）　11は端部を肥圧させるもので、篠窯産のものと考えられる。12は底部分の資料で外底は糸切りによる切り離しである。同じく篠窯産の可能性がある。

越州窯系青磁

椀（15）　輪状高台を有するもので、I-2類に分類される。内面見込み及び高台畳付けに目跡が観察される。釉は暗緑色に発色する半透明なものである。高台径8.0cm。

壷（16）　口径8.4cmを測るもので、蓋を重ねる受け部が突帯状に存在する。その上面には目跡が観察される。また体部上位で受け部下面に耳が取り付けられていた痕跡がある。本資料ではいくつの耳が存在したのかは確認できない。釉は内面が黄緑色、外面がそれよりもやや暗い暗緑色に発色するもので、内面の方が光沢が強い。I類。

9SE030黒色粘土層出土土器（Fig.11、Pla.8・9）

土師器

小皿a（1）　口径10.4cm、器高1.6cmを測る。外底はヘラ切りののち粗いナデを施す。

小皿c（2）　口径13.3cm、器高3.0cm、高台径7.7cmを測る。皿部分の深さは全体の約1／2程度で浅めである。

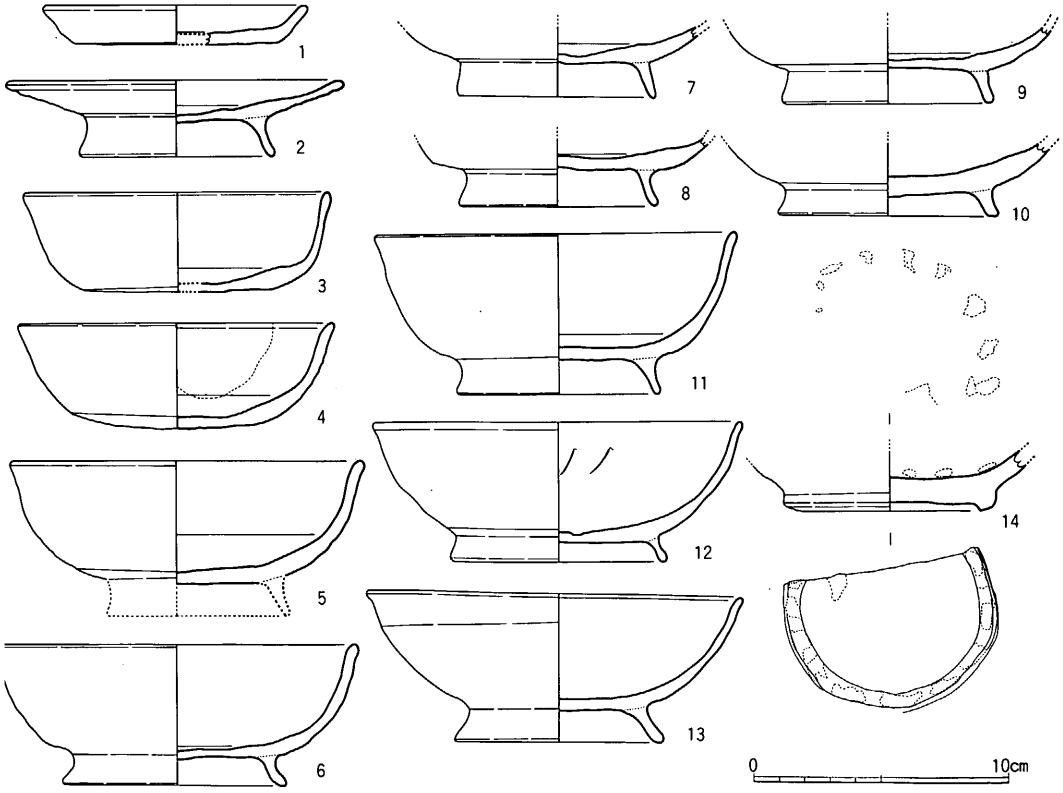


Fig.11　9SE030黒色粘土層出土遺物実測図（1/3）

椀a（3・4）　口径12.2・12.5cm、器高4.0・4.2cmを測る。3は平底で体部は直立気味であるが、4は丸底風で体部も開き気味に立ち上がる。

椀c（5～13）　高台の高低はあるが、外方へ踏ん張るような形状をしている点では共通している。体部は丸く立ち上がるものが主体を占め、屈曲を有する資料は8のみである。調整は基本的にはヨコナデであるが、12はミガキbが観察される。口径14.0～14.8cm、高台径7.9～8.8cmである。

越州窯系青磁

椀（14）　輪状の高台であるが畳付けは外方に傾斜している。高台径8.4cm。内面見込み及び高台畳付けに目跡がある。釉は深い黄緑色で、光沢がある。畳付け以外は全面施釉される。

9SE030枠内出土土器（Fig.12、Pla.9～11）

土師器

小皿a（1・2）　口径10.8cm、器高1.5・1.7cmを測る。ヘラ切り。

小皿c（3）　口径12.9cm、器高2.1cm、高台径7.9cmを測る。口縁部及び高台の一部に煤が付着している。

坏a（4～8）　4～7は、口径11.2～11.7cm、器高2.2～2.6cmを測る。8は底がやや丸味を帯びるもので、口径12.0cmを測る。

椀a（9）　口径12.0cm、器高4.3cmを測る。口縁部をわずかに外反させる。

椀c（10～12）　13は体部が直線的にのびるもので、口径はやや大きめである。他は体部がわずかに丸みを帯びている。

大椀c（14）　高台径15.2cmを測る大型のものである。体部の調整はヨコナデを主体とする。

鉢（15）　口径33.6cmに復原できるもので、体部の調整はヨコナデである。

黒色土器

椀（16）　A類で、口径14.0cm。内面のミガキは顕著である。

椀c（17・19）　17はB類で、口径14.6cm、器高5.3cm、高台径9.0cmを測る。19はA類で口径16.5cmとやや大きめである。

須恵器

甕（20）　口径17.2cmの甕である。内面の当て具は車輪文である。

壺（21）　底径5.8cm。底の厚さは2.9cmと厚い。体部の調整はケズリである。

白磁

椀（22）　口縁部を玉縁状につくるI-1-a類で、口径14.4cmに復原される。内外面ともに施釉され、釉は乳白色に発色する。

越州窯系青磁

皿（23）　I-2類。口径13.3cmに復原される。体部は内外面ともに施釉され、貫入がある。釉は暗黄緑色に発色し、光沢がある。

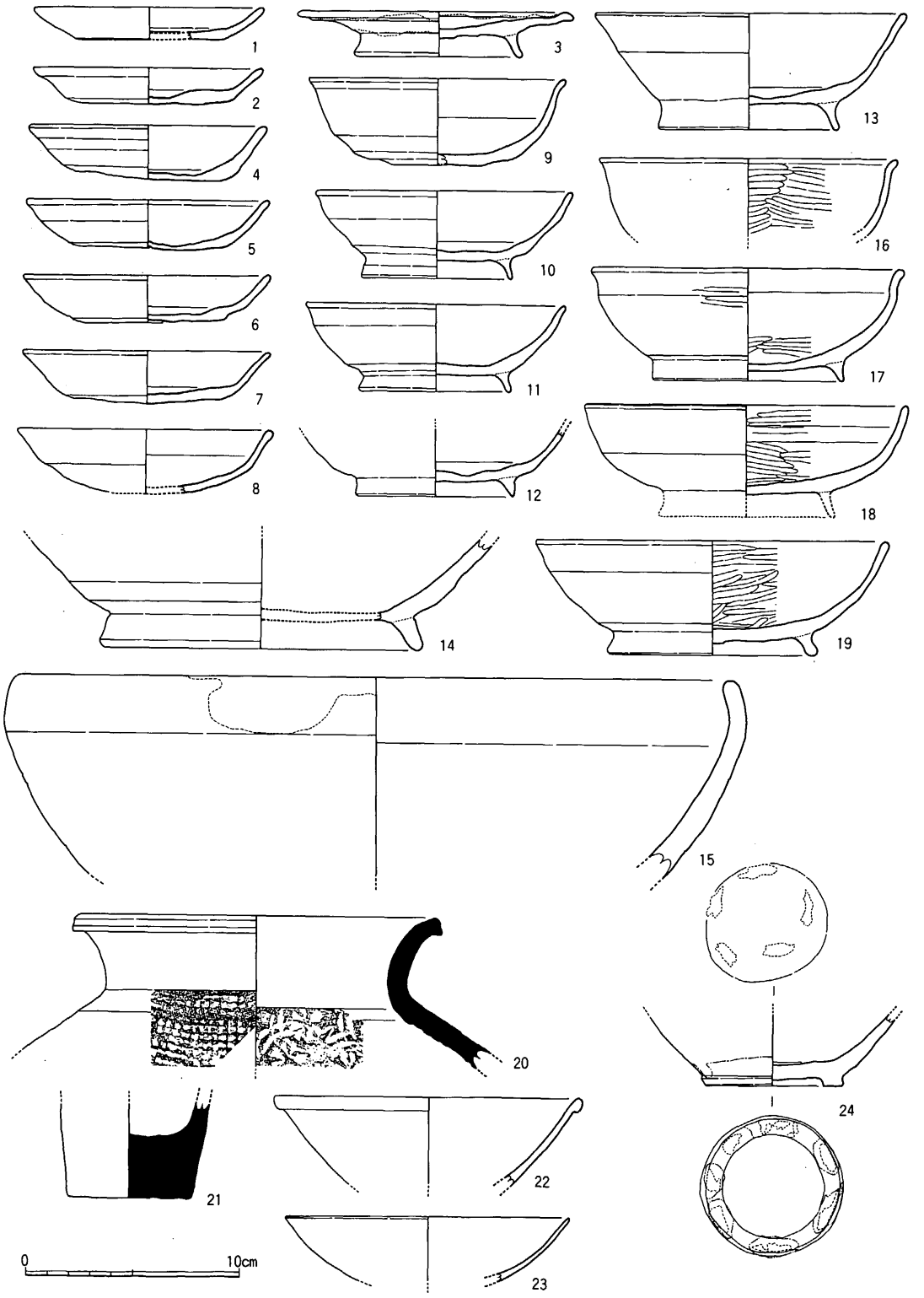


Fig.12　9SE030枠内・裏込め出土土器実測図（1/3）

椀（24）　I-1-b類。輪状高台を有するもので、内面見込みに5箇所、高台畳付けに7箇所の目跡がある。釉は外面下位及び外底には施されない。露胎部は淡緑灰色、釉は淡黄緑色で半透明なものである。

9SE030裏込め出土土器（Fig.12、Pla.10）

黒色土器

椀c（18）　A類で、口径15.1cm。内面にはミガキcが観察される。外面は底部までヨコナデ調整される。高台は失われている。

9SE040出土土器（Fig.13）

黒色土器

椀c（1）　口径14.8cmのA類で、内面にミガキcが施される。

9SE050出土土器（Fig.13）

土師器

椀c（2・3）　いずれも底部の資料で、高台径7.4cmを測る。3の高台内側には多量の墨痕が付着しているが文字を記しているわけではない。

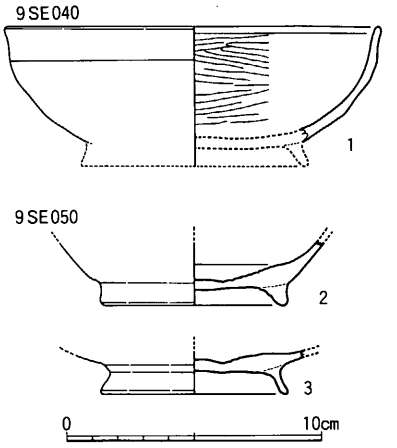


Fig.13　9SE040・050
出土土器実測図（1/3）

9SD002出土土器（Fig.14、Pla.12）

須恵器

壺（1）　底径7.8cmで底部は糸切りである。内外面ともに調整はヨコナデ。焼成は良好で硬質であり、胎土は赤褐色を呈し、白色粒子を微量含む程度の精良なものである。外面は暗灰色を呈している。

9SX037出土土器

（Fig.14、Pla.12）

緑釉陶器

椀（2）　高台径8.0cm。内外面ともにヘラミガキ調整を行った後、施釉する。釉は淡緑色を呈し、鈍い光沢がある。胎土は白色粒子を多く含むが精良で、焼成は良好で須恵質である。京都産のものと考えられる。

9SX095出土土器

（Fig.14、Pla.12）

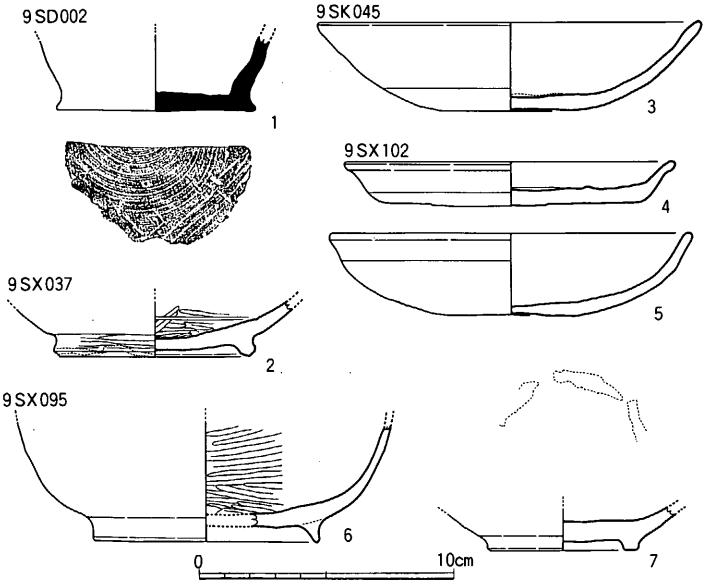


Fig.14　第9次調査各遺構出土土器実測図（1/3）

黒色土器

椀c（6）　内面のミガキcは顕著である。A類で高台径8.9cm。

越州窯系青磁

椀（7）　I-2類。高台径6.0cmで内面見込みに目跡が観察される。高台畳付けは施釉されないが、目跡は確認できない。釉は淡灰黄色に発色し、貫入が多い。

9SX102出土土器（Fig.14、Pla.12）

土師器

皿a（4）　口径13.0cm、器高1.8cmで、口縁端部をわずかに外反させる。

丸底坏a（5）　口径14.2cm。内外面は風化が進み調整は不明瞭である。

茶灰色土層出土遺物（Fig.15、Pla.12・13）

越州窯系青磁

椀（1・2）　1はII-2類で円盤状を呈する高台を有し径8.1cmを測る。内面に目跡が観察される。2は輪状の高台を有し、径は6.6cmを測る。畳付けに目跡が観察される。

須恵器

壷（3）　外面は平行叩き目で底近くに横方向のヘラケズリ、内面は強いヨコナデを施す。

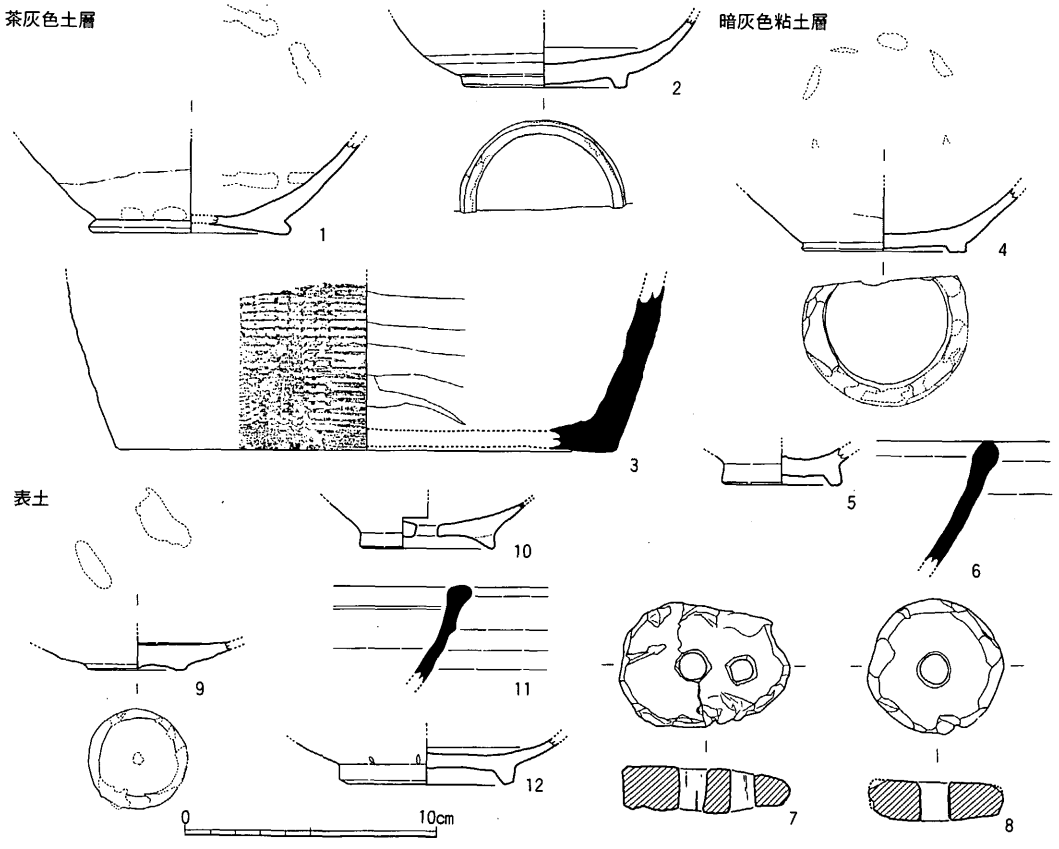


Fig.15　第9次調査各層出土遺物実測図（1/3）

暗灰色粘土層出土遺物（Fig.15、Pla.13）

越州窯系青磁

椀（4・5）　4はI-1-b類で、やや幅の広い輪状高台を有する。高台径は6.6cm。外面の体部中

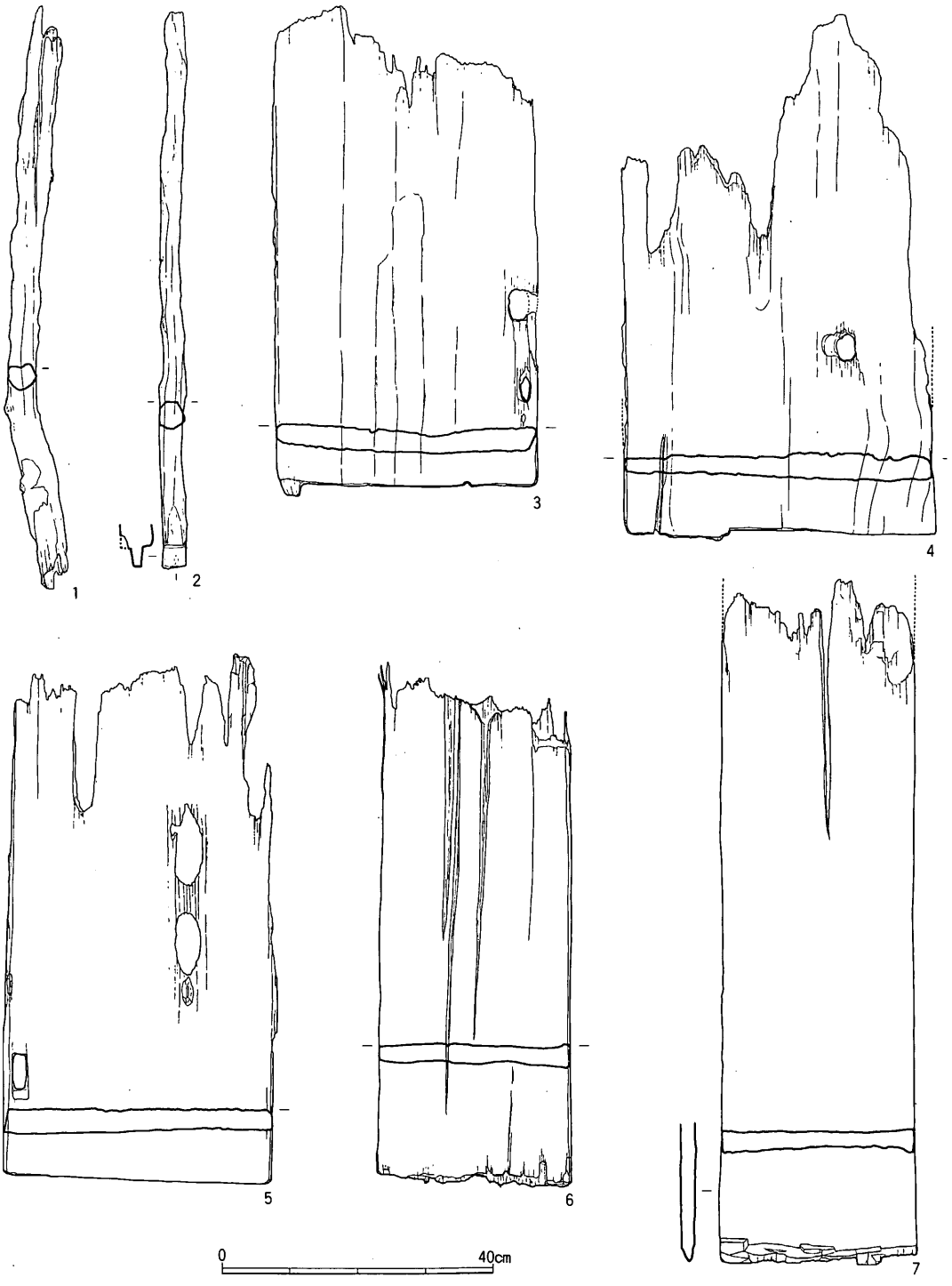


Fig.16　9SE030出土井戸部材実測図（1/10）

程以上に施釉される。5は小型のものでI類とみられる。高台径は4.8cmで畳付けに目跡が観察される。釉は畳付け以外の全面に認められる。

須恵器

鉢（6）　篠窯系。

石製品

7は2箇所に穿孔のある滑石製品で、長さ6.8cm、幅5.0cm、厚さ1.8cmを測る。8は滑石製の紡錘車で、直径5.4cm、厚さ1.5cmを測る。中央に径1.2cmの穿孔がある。

表土出土土器（Fig.15、Pla.14）

土師器

坏c（10）　底部中央に径0.9cmの穿孔がある。

須恵器

鉢（11）　篠窯系で口縁端部の上面は平坦である。

白磁

椀（12）　高台径7.0cm。内面及び外面の体部以上に施釉される。

陶器

皿（9）　唐津焼とみられ、見込み及び畳付けに目跡がある。

(2) 木器

9SE030出土木器（Fig.16～18、Pla.17～19）

井戸部材（1～7）　1・2は井戸枠を固定していた横木で、1は両端が腐食しているが表面に樹皮を残しており、自然木を利用したものであることがわかる。2は一方の端部が残っており、柄を造り出している。いずれも直径は4cm程度。3～7は井戸枠に用いられていた板材である。3は下端部の隅に突起（径3.3cm、高さ2.5cm）があり軸擦りとみられることから、扉板の転用であることが知られる。板の幅は38.5cm、厚さ3.5cmで、軸擦りのない側が当初の扉の端部を示しているかどうかは明らかではない。軸擦りのない側に側縁近くで下面から約25cmのところに4.5×3.0cmで楕円形の穿孔があるが、扉使用時のものかどうかは不明である。4は幅46.0cm、厚さ2.2～4.0cmの板材である。板材下端部で図の左から約5cmのところに、幅9.0cmの突起が存在していたことがわかる。突起は切断時点の切り残し部分の可能性もある。5は幅39.5cm、厚さ3.0～3.5cmの板材で

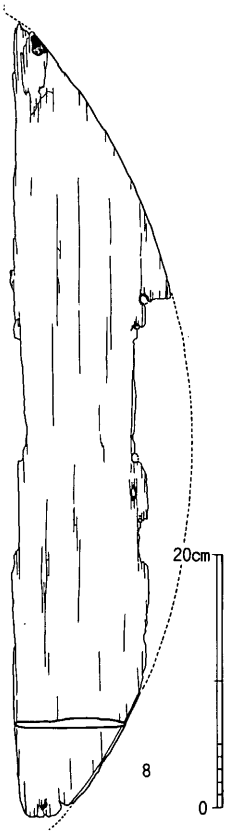
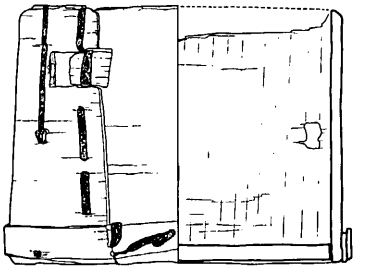


Fig.17　9SE030出土木製品実測図1（1/6）



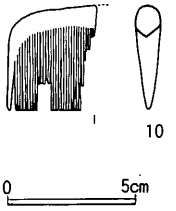


Fig.18　9SE030出土木製品実測図2（1/3）

ある。下面から13cmのところに5.5×2.3cmで長方形の穿孔部がある。下端部小口面は削りなどの調整は加えられていない。6は幅28.8cm、厚さ2.5～3.5cmの板材である。下端部小口面は削りなどの調整は加えられていないが、腐食により詳細は明らかではない。7は幅29.0cm、厚さ2.1～3.5cmの板材で、現存の長さは101.5cmである。下端小口部分の切断は両側から斧状工具で行ったようであり、その痕跡が明瞭に残る。なお、以上の井戸部材は不注意により現存しない。

円盤状板材（8）　現存長62.5cm、現存幅12.5cm、厚さ0.8cmで弧を描く。板の側縁寄りに0.4～0.7cmの穴が5箇所確認される。当初の形状を円形と想定した場合、直径は約48cmになる。

曲物（9）　曲物自体の直径は13.1cm、高さ10.0cmを測り、重ね目を外見上5段に桜の皮で縫い合わせる。底部外面と体部上位に同材で幅1.5cm程度のたがを巻く（上位のたがはほとんどが失われている）。底部のたが外面から6箇所の穿孔を行い、底板を木釘で固定している。底板の厚さは0.6cmである。側面に高さは異なるがちょうど対になる位置に略方形の穴があり、当初のものとすれば柄杓であった可能性が考えられる。

横櫛（10）　高さ4.1cm、残存幅3.5cm、基部の厚さ1.0cmを測る。歯の厚さは0.1cm弱で33本分が残存している。歯を切り込む以前にその範囲を決定する線が針状のもので描かれており、

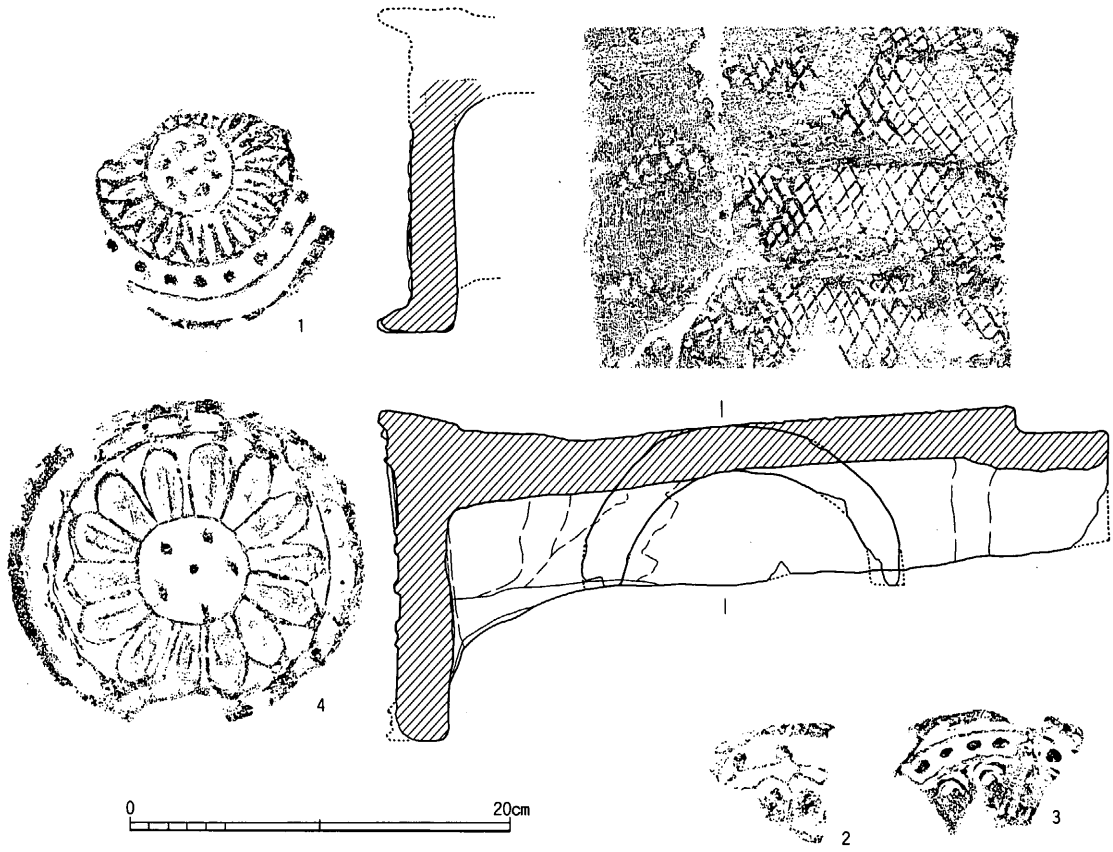


Fig.19　第9次調査出土軒丸瓦実測図及び拓影（1/4）

その痕跡が歯の基部に観察される。

(3) 瓦類

軒丸瓦（Fig.19、Pla.14）

1は、細単弁二十一葉蓮華文である。9SE030上層から出土した。2は複弁蓮華文で茶灰色土層出土。3は複弁蓮華文で鴻臚館式。茶灰色土層出土。4は単弁十四葉蓮華文で、中房の蓮子は1+5の簡素なものである。ほぼ完存する資料で、丸瓦部外面の叩き目は格子目で、丸瓦を瓦当に接合した後、支持土に施される叩き目とは（擦り消しによって不明瞭であるが）種類が異なっている。9SK010出土。

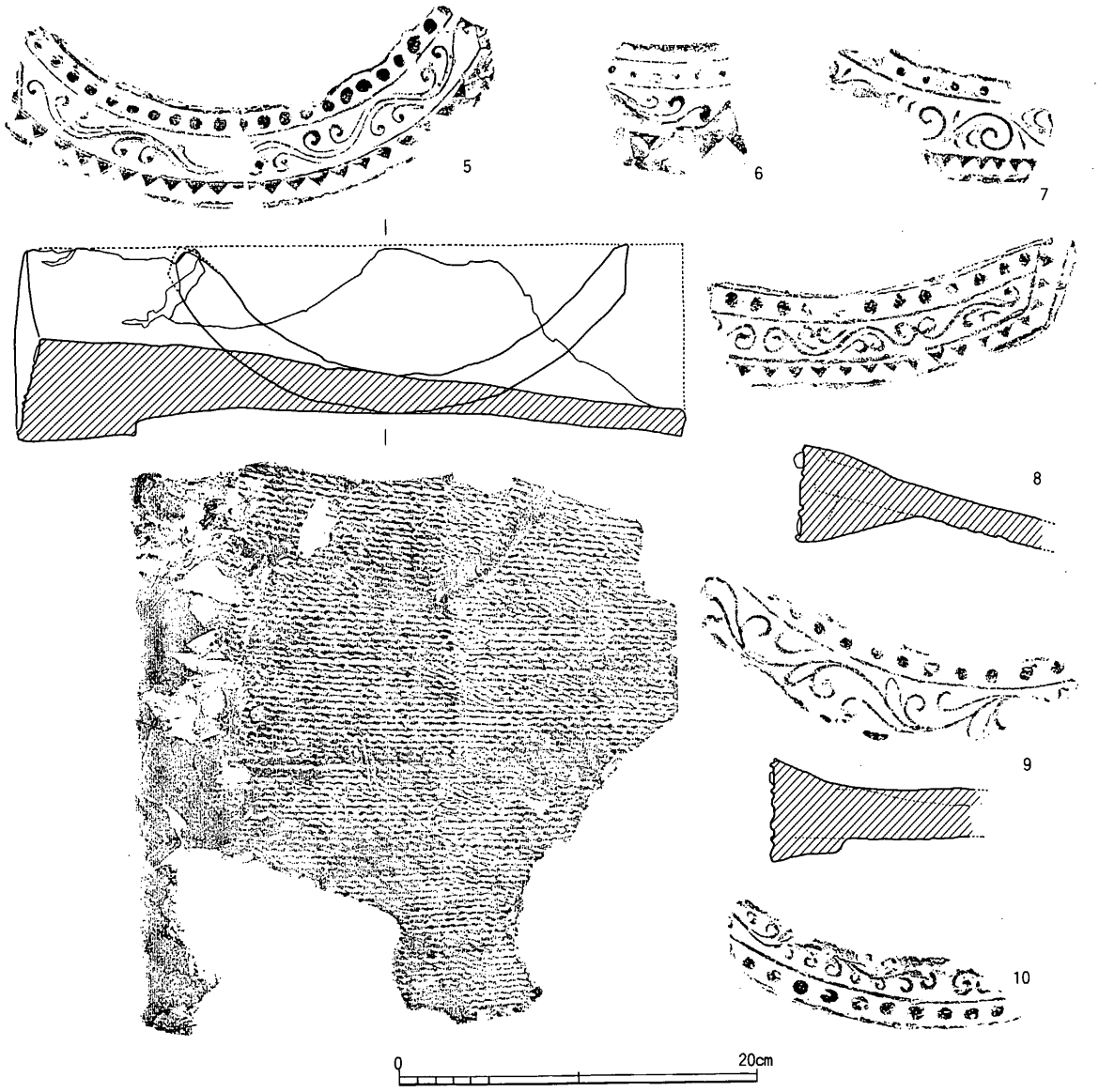


Fig.20　第9次調査出土軒平瓦実測図及び拓影（1/4）

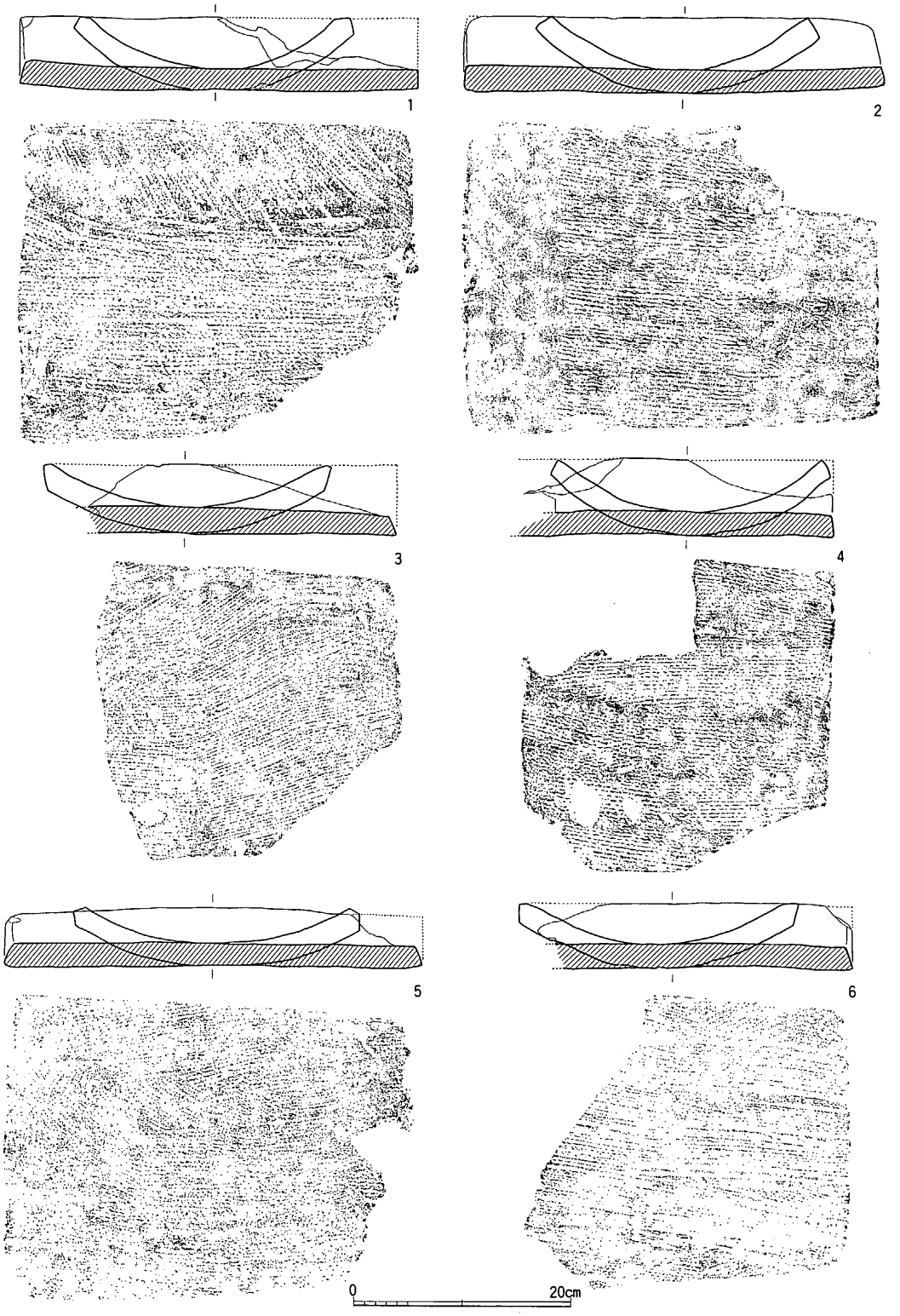


Fig.21　第9次調査出土平瓦実測図及び拓影1（1/5）

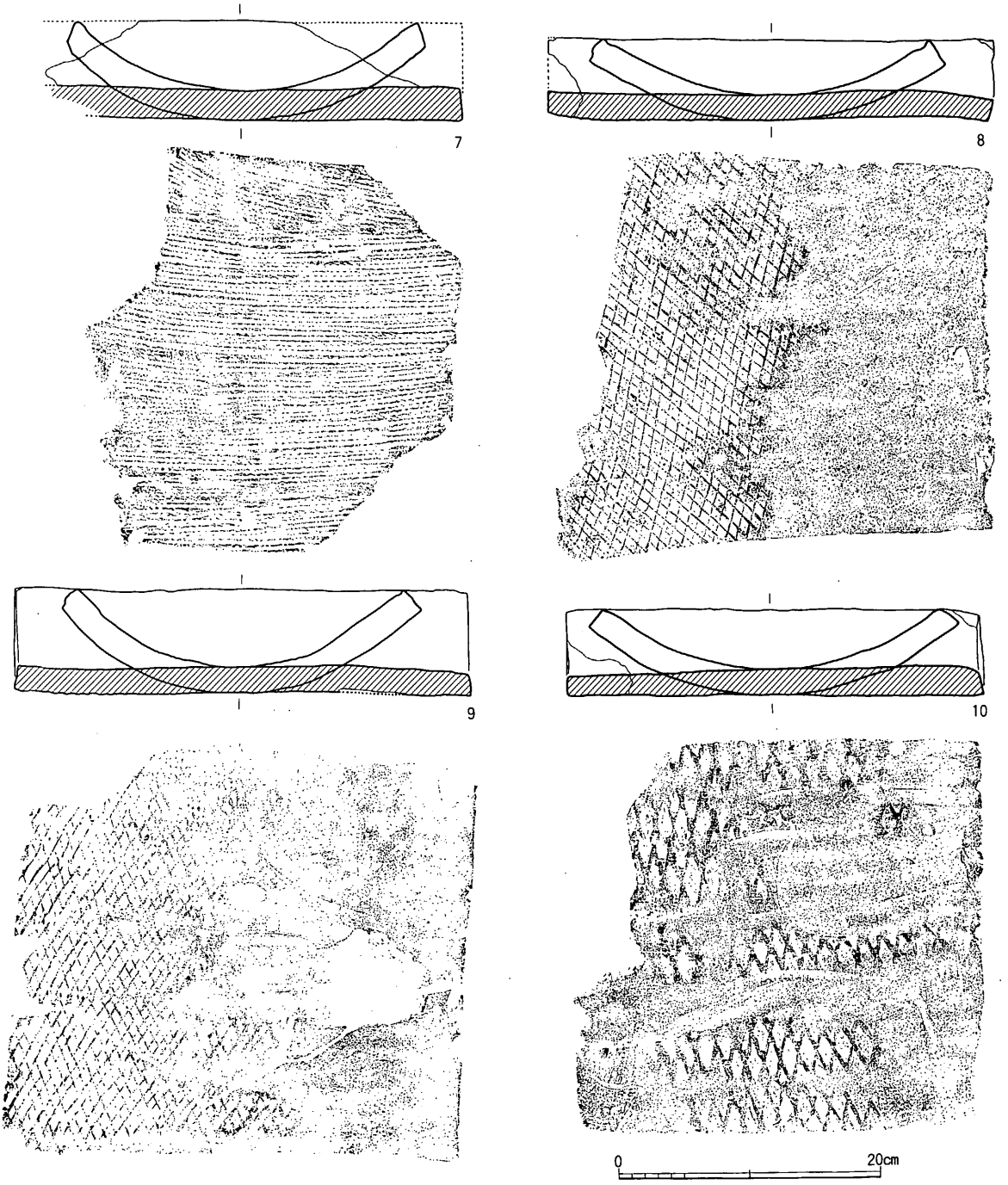


Fig.22　第9次調査出土軒平瓦実測図及び拓影2（1/5）

軒平瓦（Fig.20、Pla.15）

5は扁行唐草文で老司I式である。外面の叩きは2段階に分けて均等に並ぶ縄目で施され、顎部付近は擦り消されている。平瓦部側縁の切断はA方向である（後述する平瓦の項を参照）。9SK120出土。6は扁行唐草文で老司II式。9SK120出土。7は均正唐草文で鴻臚館式。9SE030出

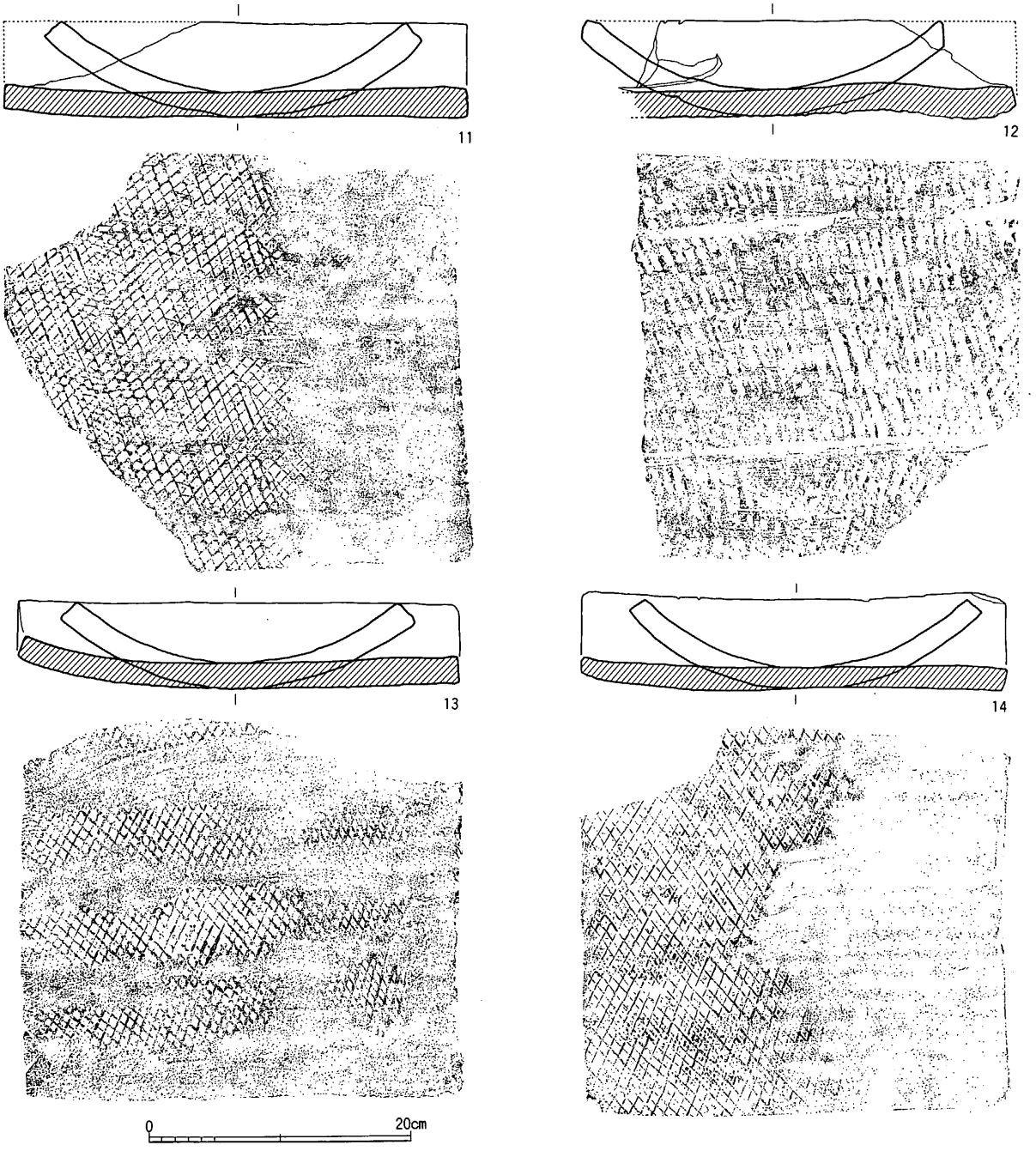


Fig.23　第9次調査出土軒平瓦実測図及び拓影3（1/5）

土。8は中心飾りを持たない均正唐草文で、9SE025出土。9は扁行唐草文で、9SE040出土。10は中心飾りを持たない均正唐草文で、9SE030出土。

平瓦（Fig.21～23、Pla.15～17）

今回出土した平瓦のうち全体の形状がおおむね知れるものを報告する。外面の叩き目で縄目

と格子目に分けられる。縄目は1～7で、1・7は縦方向のものに瓦の1／3程度斜め方向のものが加わるが、無秩序ではない。2は縦方向の叩きの両端をナデ消すもの。3は縦、斜め、縦と順序よく叩きわけるもの。4は縦方向ながらやや隙間が目立ち、粗雑な感じを受けるもの。5は粘土板糸切りの痕跡が明瞭で拓本では煩雑に見えるが、基本的には縦方向のものである。6は大きく2段階に分けて叩かれる縦方向のものである。側縁の切断面をみると円弧の中心に向かうもの（1・2・4・7）、弦に対して垂直方向に切り落とされるもの（3・5・6）がある。1・7が叩き方と切断方向に共通性があり、数量的に安定した資料を検討すると両者の関係が見えてくる可能性がある。なお、前者は桶巻き作りとみられるが、後者は現段階ではどちらとも言えない。格子目叩きを有するものは8～14であるが、8・9・14は同じ叩き板である。側縁の切断面はすべて円弧の中心に向かうもので、すべて桶巻き作りと考えられる。弦長は縄目のものが25～26cm程度におさまるが、格子目では27～29cmの範囲になりやや大きくなっていることがわかる。出土地点は、2が9SE020下層、他は9SE030であり大半が底部に敷かれていたものである。

文字瓦（Fig.24）　1は「平井」でI-8-b類。図に示したものは9SE025出土。他に茶灰色土層、9SK001から出土している。2は「佐」でII-4-b類。9SE025出土。3は「介」でXII類。図に示したものは暗灰色粘土層出土。他に茶灰色土層、9SE020から出土している。

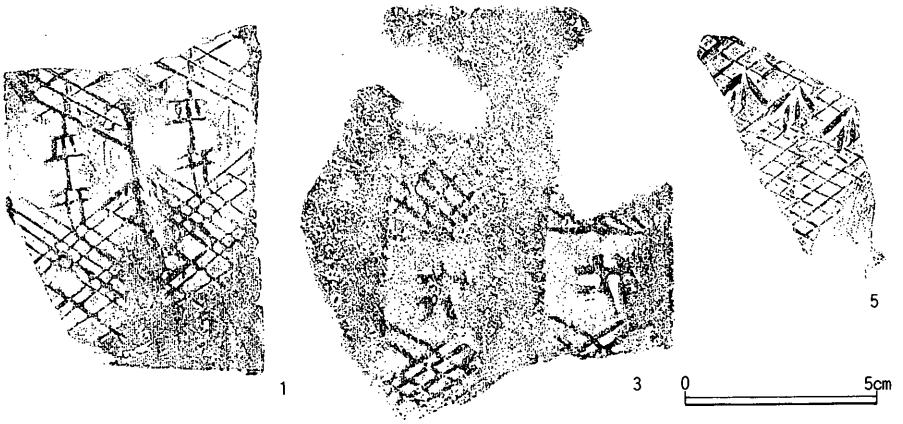


Fig.24　第9次調査出土文字瓦拓影（1/2）

4．小結

出土遺物から判断される主要遺構の年代を列記してこの項のまとめとしておきたい。

掘立柱建物

9SB100は柱掘り方から出土した越州窯系青磁及び他の土器片などからおおむね10～11世紀のものと考えられる。これと重複する9SB090は参考となる遺物に恵まれず、また切り合い関係となる遺構も存在しないので時期の特定は困難である。ただ建物の方位が著しく東に傾いており、9SB100よりも遅れるのではないかと想定するにとどまる。

土壙

9SK120は出土した土師器坏から大宰府編年のVI期に相当するものと考えられ、現状では9世

紀前半から中頃のものとされている。

他の土壙では土師器を出土した9SK045が大宰府編年XII期頃で11世紀後半とみられる他は、年代を決定する要素を持った遺物が出土しておらず、時期の特定は難しい。

井戸

9SE020・030は崩落により遺物が若干混入している可能性は捨てきれないが、おおむね大宰府編年のIX・X期頃とみられる。このうち9SE020と030黒色粘土層出土遺物についてはX期ととらえられるが、9SE030の井戸枠内から出土した椀は、体部に丸味を帯びさせることを指向しながらも未だ直線的要素を残していることからIX期の範疇で捉えることができるものである。このことから9SE030自体はIX期に位置付けできるが、上面の崩壊土及び隣接する9SE020についてはX期までくだり、井戸の崩壊時点で埋土中に遺物の混乱を来したものと理解しておきたい。なお、現在の編年観では10世紀中頃から11世紀前半に捉えられるものである。

9SE025は大宰府編年のXI～XII期のものとみられ、11世紀中頃～後半に考えられる。

以上の結果から、筑前国分寺の創建にまで遡る遺構は検出できなかったことがわかる。このエリアの利用は9SK120の9世紀前半から中頃以降と捉えるのが妥当であろう。したがって創建段階では空閑地のような存在ではなかったろうか。同様な状況は観世音寺でも観察され、南辺築地推定線よりも外側で創建時期まで遡る資料は確認されていない。寺院前面の状況を考えるうえで一つの資料を提供できたことになろう。

また土地利用の頻度が増すのは10世紀以降であり、国分寺の衰退とは逆に周辺部分では住居などが建ち並ぶ景観となっていたことが予想される。

なお調査区の東端は平安期以前の遺構が全く確認されなかった。住居が建ちはじめても空閑地として維持されていたようで、この部分が国分寺中軸線に沿う位置（南門正面）にあたることから想定すると、参道の存在による空閑地である可能性も考えられる。現状では側溝や路面の硬化部分、舗装痕跡などは確認していないが、立地と遺構がないという点からこの付近に南北方向の道路が存在していたと推定しておきたい。

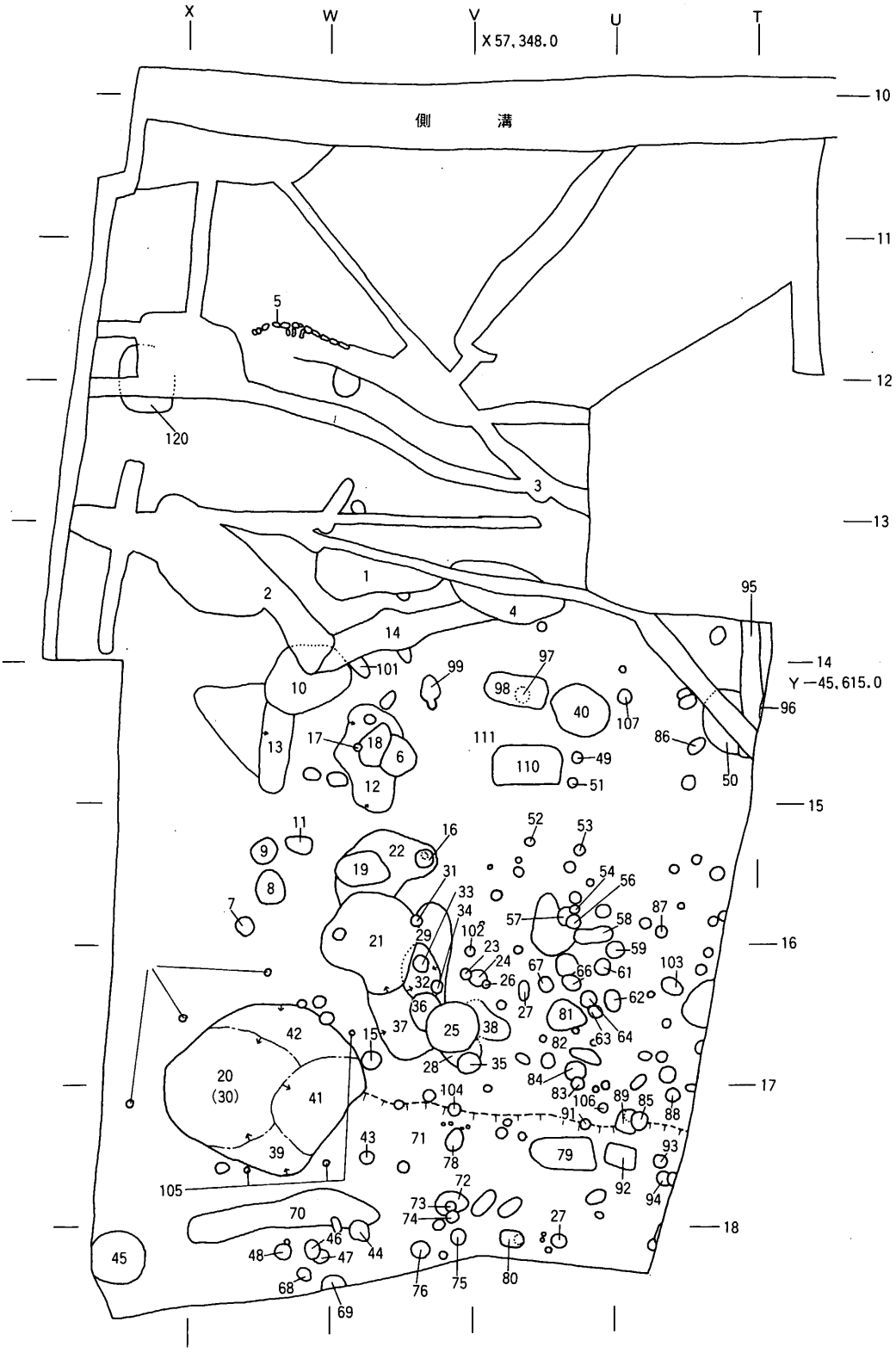


Fig.25　第9次調査検出遺構略測図

Tab.2-1　第9次調査遺構番号台帳（1）

S-番号	遺構番号	種別		古→新	地区
1	9SK001	土壙		1→3	V13
2	9SD002	溝		10→2	W13
3	9SD003	溝	田の湿抜き？		U13
4		浅い土壙状	埋土に礫を混在する	4→3	U13
5	9SX005	配石遺構			W11
6		ピット			V14
7		ピット			W15
8		ピット			W15
9		ピット			W15
10	9SK010	土壙	黒灰色粘土埋土		W14
11		ピット			W15
12		窪み			V14
13		ピット			W14
14	9SD014	溝	田の湿抜き？の一部		V13
15	(9SB100)	掘立柱建物			V16
16		ピット			V15
17		ピット			V14
18		ピット	よくしまった粘土埋土		V14
19		ピット			V15
20	9SE020	井戸	9SE030と上面では混在している。 S-20上面・黒色粘ラベル遺物は9SE030に帰属	30→20	W16・17
21		窪み			V1516
22		窪み			V15
23		ピット			V16
24		ピット			U16
25	9SE025	井戸	曲物片出土	(21→29→34→32→33) →25	V16
26		ピット			U16
27		ピット			U16
28		窪み			V16
29		窪み			V1516
30	9SE030	井戸	底に瓦を敷いている	20→30	W1617
31		ピット			V15
32		浅い土壙状			V16
33		ピット			V16
34		ピット			V16
35	(9SB100)	掘立柱建物	柱穴	35→28	U16
36		ピット	浅い、石混じり		V16
37	9SX037	ピット			V16
38		ピット			U16
39	9SE030	井戸埋土	灰黒色粘質土埋土	39→20	W1617
40	9SE040	井戸			U14
41	9SE030	井戸埋土			W1617
42	9SE030	井戸埋土			W1617

Tab.2-2　第9次調査遺構番号台帳（2）

S-番号	遺構番号	種別	古→新	地区
43	(9SB100)	掘立柱建物　柱穴		V17
44	(9SB100)	掘立柱建物　柱穴		V18
45	9SK045	土壙　井戸の可能性もある		X18
46		ピット	46→47	W18
47		ピット		W18
48		ピット		W18
49		ピット		U14
50	9SE050	井戸		T14
51		ピット		U14
52		ピット		U15
53		ピット		U15
54		ピット	57→54	U15
55	欠番			
56		ピット	57→56	U15
57		ピット		U15
58		ピット		U15
59		ピット		U16
60	欠番			
61		ピット		U16
62		ピット		U16
63		ピット		U16
64		ピット		U16
65	欠番			
66		ピット		U16
67		ピット		U16
68		ピット		W18
69		ピット		W18
70		溝？　浅い、遺物なし	70→44	W17
71		窪み		V17
72		ピット		V17
73		ピット		V17
74		ピット	73→72→74	V17
75	(9SB100)	掘立柱建物　柱穴		V18
76		ピット		V18
77		ピット		U18
78		ピット		V17
79		撹乱	新	V17
80	(9SB090)	掘立柱建物　柱穴、礎盤あり		U18
81		窪み		U16
82		窪み		U16
83		ピット		U16
84	(9SB100)	掘立柱建物　柱穴	84→83	U16
85		ピット		T17
86		ピット		T16
87		ピット　木片混入		T15

Tab.2-3　第9次調査遺構番号台帳（3）

S-番号	遺構番号	種別	古→新	地区
88		ピット		T17
89		浅い土壙状	85→89	T17
(90)	(9SB090)	掘立柱建物　(S-81・91・他1)		U17ほか
91	(9SB090)	掘立柱建物　柱穴、礎盤として瓦を敷く		U17
92		撹乱	新	T17
93	(9SB100)	掘立柱建物　柱穴、礎盤あり		T17
94		ピット		T17
95	9SX095	溝？　杭状遺構あり		T14
96		ピット	新	S14
97		ピット	98→97	U14
98		ピット		U14
99		ピット		V14
(100)	(9SB100)	掘立柱建物　(S-15・35・43・44・75・77・84・93、他2)		V16ほか
101		ピット	101→14	V14
102	9SX102	ピット		V16
103		ピット		T16
104		ピット		V17
105	9SX105	ピット群　囲い状の遺構になる		W17ほか
106		ピット		U17
107		ピット		T14
108・109	欠番			
110		土壙		U14
111～119	欠番			
120	9SK120	土壙		X11・12

37ページのつづき

S-120 (9SK120) 上面

土師器	坏a、椀c
瓦類	軒平瓦 (1)、破片

S-120 (9SK120)

土師器	坏a
瓦類	軒平瓦 (縄目叩)、破片、軒平瓦（老司II式）

Z

須恵器	甕
土師器	坏a、把手

Tab. 3　第９次調査出土遺物一覧表

表土

須恵器	坏c、高坏、甕、長頸壺
土師器	椀c、坏a
越州窯系青磁	椀；I-2(1)、I(2)、II(1)
	その他；壺×水注I(1)、壺×水注II(瓜劃)(1)
同安窯系青磁	皿；I-2b(1)
白磁	椀；I(1)、XI(1)、破片(1)
国産陶器	擂鉢(2)、鉢(1)、壺(唐津？)(1)、皿(唐津.スナ目)(1)
	破片(4)
肥前系磁器	椀×皿(2)、染付片(1)
瓦類	平瓦、丸瓦、軒平瓦

茶灰色土

須恵器	甕、皿a、鉢、坏c、壺？
土師器	高台片、甕、椀c
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀；I-2(2)、I(3)、II-2(1)、II(2)
	皿；I-2(2)
	その他；坏I-2b(1)、壺×水注I(3)、壺×水注II(2)
	水注把手I(1)、小壺I(1)
青磁	破片(1)
国産陶器	椀(唐津・スナ目)(1)
肥前系磁器	椀(1)
瓦類	軒平瓦、軒丸瓦、文字瓦I-8-b、XII

暗灰色粘土

須恵器	甕片、坏a、椀c、壺片、蓋3、破片(篠？)
土師器	椀c、坏a、小皿a
黒色土器A	破片
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；I-1b(1)、小型椀I(1)
	その他；壺II(褐彩)(1)、越?(1)
同安窯系青磁	皿；I-2b(1)
国産陶器	破片(1)
肥前系磁器	椀(1)
中国陶器	褐釉壺(1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目)、文字瓦XII、軒丸瓦
石製品	滑石製品

S-1 (9SK001)

須恵器	甕
土師器	甕、破片
瓦類	文字瓦I-8、破片(縄目叩、格子叩)

S-2 (9SD002)

須恵器	壺、甕
土師器	高台片、破片
瓦類	平瓦、丸瓦

S-3 (9SD003)

須恵器	壺
龍泉窯系青磁	椀；I(1)
肥前系磁器	染付椀(3)
瓦類	破片(縄目叩、格子叩)

S-4

須恵器	破片
土師器	高台片
瓦類	破片

S-5 (9SX005)

瓦類	破片(縄目叩、格子叩)

S-6

須恵器	破片
土師器	坏c
瓦類	軒平瓦(瓦当欠落)、平瓦(格子叩)

S-7

須恵器	甕
土師器	坏a、坏d、高台片
瓦類	破片(縄目叩、格子叩)

S-8

土師器	破片
瓦類	破片

S-9

須恵器	坏c
越州窯系青磁	椀；II(1)
瓦類	破片

S-10 (9SK010)

須恵器	坏、壺
土師器	椀c、坏a、甕
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀；I-2b(輪花)(2)
中国陶器	盤II？(1)
瓦類	軒丸瓦(格子叩)、破片

S-11

土師器	破片
瓦類	破片

S-12

須恵器	坏、甕
土師器	坏
黒色土器B	破片
瓦類	破片(格子叩)

S-13

須恵器	甕
土師器	破片
瓦類	破片(縄目叩)

S-14 (9SD014)

須恵器	甕
土師器	坏a、椀c
中国陶器	盤II？(1)
瓦類	平瓦、文字瓦 VI - 3？

S-15 (9SB100)

須恵器	甕
越州窯系青磁	椀；I - 2a (1)
瓦類	平瓦 (縄目叩)

S-15 埋土中

須恵器	甕
土師器	椀c
瓦類	破片

S-16

土師器	破片
越州窯系青磁	その他； 壺×水注 I (瓜割) (1)
瓦類	破片

S-19

須恵器	甕
瓦類	破片 (縄目叩、格子叩)

S-20 (9SE020) 上層

須恵器	壺、甕、鉢 (篠窯系)
土師器	坏a、椀c、小皿a、甕
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；I (1)、II (1)
	その他； 壺×水注 I (2)、壺類 I (1)
白磁	椀；XI - 4？(1)
灰釉陶器	壺
瓦類	軒平瓦

S-20 (9SE020)

須恵器	甕、蓋c
土師器	椀c、坏a、皿a
越州窯系青磁	その他； 壺×水注 I② 壺×水注②
白磁	椀；I (1)
瓦類	丸瓦、平瓦、文字瓦 XII

S-20 (9SE020) 黒色粘土

土師器	椀a、椀c2、坏a、皿c
黒色土器A	椀c、破片
越州窯系青磁	椀；I-2 (1)
瓦類	破片

S-20 (9SE020) 下層

須恵器	鉢 (篠窯系)
土師器	椀a、椀c、小皿a
黒色土器A	椀c、小壺、椀
越州窯系青磁	椀；I - 1a (1)、I - 2 (1)、II - 2a (1)、I (1)
	皿；I - 2 (1)
	その他；壺 I (1)
瓦類	平瓦 (縄目叩)

S-21

須恵器	甕
土師器	甕、坏a、高台片
瓦類	平瓦 (縄目叩、格子叩)

S-23

須恵器	甕
土師器	甕、坏
瓦類	破片

S-24

土師器	椀 c
瓦類	破片

S-25 (9SE025) 上面配置

瓦類	平瓦 (縄目叩、格子叩) 軒丸瓦 (1)？
	文字瓦 I - 8-b 、II - 4-b 、不明

S-25 (9SE025)

須恵器	甕
土師器	坏a、丸坏a、椀c、小皿a、甕b
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；I (1)
高麗青磁	椀；III (小形) (1)
白磁	皿； XI (1)
瓦類	軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦

S-27

須恵器	破片
土師器	小皿a、破片
龍泉窯系青磁	椀；I - Vb (1)

S-29

土師器	坏a、高台片
黒色土器A	破片
瓦類	破片

S-30 (9SE030) 上

土師器	坏a、椀c、甕b
瓦類	平瓦 (格子叩、縄目叩)、丸瓦 (格子叩、縄目叩)

S-30 (9SE030) 下

土師器	坏a、甕、高台片
黒色土器A	椀

S-30 (9SE030) 枠内

土師器	坏a
瓦類	丸瓦 (格子叩)、平瓦 (格子叩、縄目叩)、その他

S-30 (9SE030) 底

須恵器	甕、壺、高坏
土師器	坏a、椀c
黒色土器A	椀c
瓦類	軒丸瓦？、平瓦(縄目叩) 、(格子叩) 、その他

S-30 (9SE030) 裏込

土師器	坏a
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	皿；I - 2 (1)

S-30 (9SE030)

須恵器	甕、甕×壺 (1)、破片
土師器	坏a、椀a、椀c1、椀c2、甕b、鉢
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；I - 1b (1)、I (1)
	皿；III? (1)
白磁	椀；I - 1 (1)
瓦類	軒平瓦 、(縄目叩)、老司II式？ 、(格子叩)
	完形平瓦 (縄目叩)

S-32

土師器	破片
瓦類	平瓦 (格子叩、縄目叩)

S-35 (9SB100) 上

土師器	椀c
黒色土器A	椀
瓦類	破片

S-35 (9SB100) 下

須恵器	破片
土師器	椀c
瓦類	破片 (格子叩)

S-37 (9SX037)

須恵器	坏
土師器	坏a、椀c
緑釉陶器	皿 (京都) (1)

S-38

土師器	破片
瓦類	破片

S-39 (9SE030)

土師器	坏a、椀c2、甕
越州窯系青磁	椀；I (1)
瓦類	破片 (格子叩、縄目叩)

S-40 (9SE040) 内

土師器	小皿a2、椀c、甕
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	水注×壺II (1)
瓦類	平瓦 (格子叩、縄目叩)、丸瓦 (格子叩、縄目叩)
	軒丸瓦、軒平瓦 、軒平瓦 (格子叩)

S-40 (9SE040) 外

須恵器	破片
土師器	坏a、椀c
黒色土器A	椀
瓦類	平瓦 (格子叩、縄目叩)、無文塼

S-41 (9SE030)

土師器	坏a (漆？付着)、椀c、甕b
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I (1)、I-2 (1)、II (1)
長沙窯系青磁	坏；I-1? (1)
国産陶器	破片
瓦類	平、丸瓦 (縄目叩)、軒丸瓦 、不明

S-43 (9SB100)

土師器	破片
瓦類	破片 (縄目叩)

S-44 (9SB100)

土師器	坏a
瓦類	破片

S-45 (9SK045)

須恵器	甕
土師器	丸坏a、椀c
瓦類	平瓦 (格子叩、縄目叩)

S-46

土師器	破片

S-47

土師器	破片
瓦類	破片

S-48

瓦類	破片 (縄目叩)

S-49

土師器	破片
瓦類	破片

S-50 (9SE050)

須恵器	甕
土師器	坏a、椀c、甕
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；I？ (1)

S-51

土師器	破片
瓦類	破片

S-53

須恵器	坏c
瓦類	破片 (格子叩)

S-54

須恵器	蓋3
土師器	破片

S-56

土師器	破片

S-58

土師器	椀c、甕b
瓦類	破片

S-59

土師器	坏a、高台片

S-61

土師器	坏a

S-63

土師器	坏a
黒色土器A	椀c
瓦類	破片

S-71

土師器	坏a、椀c
黒色土器A	破片
瓦類	破片

S-75 (9SB100)

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	破片

S-76

土師器	破片
瓦類	破片

S-77

土師器	甕

S-78

土師器	坏c
瓦類	破片 (縄目叩)

S-80 (9SB090)

土師器	破片
瓦類	破片 (格子叩)

S-82

須恵器	甕
瓦類	平瓦 (縄目叩)

S-84 (9SB100)

須恵器	甕、破片
土師器	坏a
瓦類	破片

S-86

土師器	坏a、甕
瓦類	平瓦 (縄目叩)

S-88

土師器	坏a、椀c

S-89

土師器	皿a、破片
黒色土器A	破片

S-91 (9SB090)

瓦類	平瓦 (縄目叩)

S-93 (9SB100)

土師器	坏c、甕
瓦類	破片 (格子叩)

S-94

土師器	小甕
黒色土器A	椀c
瓦類	破片

S-95 (9SX095)

須恵器	破片
土師器	坏
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I-2 (1)
瓦類	破片

S-96

土師器	破片
瓦類	破片 (格子叩)

S-97

土師器	坏a
瓦類	無文　、破片

S-98

土師器	坏a
瓦類	破片

S-99

土師器	坏
瓦類	破片

S-101

瓦類	破片

S-102 (9SX102)

土師器	椀a、皿a
瓦類	破片 (格子叩)

S-104

須恵器	壺
土師器	高台片
瓦類	破片

S-106

土師器	破片
黒色土器B	破片
瓦類	破片

Tab.4　第9次調査出土土器計測表

A：内底のナデ　B：板状圧痕
○：有　×：無

9SE020

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（ヘラ）	1	001	1	10.0	1.3	7.9	○	×
	2	003	2	10.5	1.7	6.8	○	×
土・坏a（ヘラ）	1	001	3	12.2	3.6	−	○	×
	2	002	4	12.5	3.8	7.2	○	○
土・椀c	1	002	5	15.1	6.3	8.4	○	
	2	010	6	15.5	6.2	8.2	○	
	3	011	7	15.7	4.2+	−	○	
黒A・椀c	1	009	11	15.2	5.6	8.5		

9SE025

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（ヘラ）	1	008	1	9.9	1.2	7.3	○	○
	2	006	2	10.0	1.4	8.0	○	○
	3	007	3	10.1	1.1	7.6	○	×
	4	005	4	10.2	1.4	7.8	○	○
	5	009	5	10.3	1.5	8.1	○	○
	6	004	6	10.3	1.6	8.0	○	○
土・小皿d（ヘラ）	1	003	7	10.3	0.8	7.3	○	○
土・椀c	1	011	8	−	2.1+	7.8		
土・丸底坏a	1	010	9	16.5	3.7	−		
黒B・椀	1	001	11	16.3	−	−		
	2	002	12	−	2.1+	7.4		

9SE030黒褐色粘土層

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（ヘラ）	1	002	1	10.5	1.5	8.5	○	○
	2	001	2	10.5	1.7	7.3	○	○
	3	003	3	10.5	1.4	7.5	○	×
	4	004	4	10.4	2.1	6.6	○	×
土・坏a（ヘラ）	1	001	5	10.9	2.9	6.2	○	×
土・椀c	1	002	6	14.6	5.6	7.7	○	○
	2	005	7	−	−	8.0	○	○
	3	006	8	−	−	8.1		
	4	007	9	−	−	7.7	○	○
	5	008	10	−	−	7.8	○	

9SE030黒色粘土層

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（ヘラ）	1	013	1	10.4	1.6	8.0	○	×
土・小皿c	1	014	2	13.3	3.0	7.7	○	×
土・椀a	1	010	3	12.2	4.0	7.4	○	×
	2	009	4	12.5	4.2	8.0	○	○
土・椀c	1	011	5	14.0	−	−	○	○
	2	008	6	14.4	5.5	8.8	○	○
	3	003	7	−	−	7.8	○	○
	4	002	8	−	−	7.9	○	○
	5	004	9	−	−	8.4	○	○
	6	006	10	−	−	8.7	○	×
	7	005	11	14.3	6.3	8.0	○	○
	8	001	12	14.6	5.5	8.6		○
	9	007	13	14.8	5.8	8.3	○	×

9SE030枠内

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（ヘラ）	1	002	1	10.8	1.5	7.0	○	○
	2	001	2	10.8	1.7	7.8	○	○
土・小皿c	1	006	3	12.9	2.1	7.9	○	○
土・坏a（ヘラ）	1	003	4	11.2	2.6	7.3	○	○
	2	002	5	11.4	2.3	7.8	○	○
	3	004	6	11.6	2.2	7.3	○	○
	4	005	7	11.7	2.5	7.7	○	○
	5	005	8	12.0	3.0	−		○
土・椀a	1	003	9	12.0	4.0	4.3	○	○
土・椀c	1	004	10	12.0	4.1	7.1	○	×
	2	006	11	12.2	4.1	7.2	○	×
	3	005	12	−	−	7.5	○	○
	4	007	13	14.6	5.4	8.5	○	○
土・大椀c	1	011	14	−	−	15.2		
黒A・椀	1	007	16	14.0	−	−		
黒A・椀c	1	008	19	16.5	5.4	9.8		○
黒B・椀c	1	009	17	14.6	5.3	9.0		×

9SE030裏込

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
黒A・椀c	1	001	18	15.1	−	−		×

9SK045

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・丸底坏a	1	001	3	15.1	3.5	−		○

9SK120

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a（ヘラ）	1	005	1	11.4	3.3	6.7	○	×
	2	012	2	11.9	3.4	5.6	○	×
	3	007	3	11.9	3.5	7.1	○	×
	4	009	4	11.9	3.5	7.1	○	○
	5	001	5	11.9	3.5	7.7	○	○
	6	015	6	12.0	2.9	6.4	○	○
	7	010	7	12.0	3.5	6.3	○	○
	8	016	8	12.0	3.4	7.0	○	○
	9	013	9	12.0	3.9	7.1	○	○
	10	003	10	12.1	3.2	7.6	○	○
	11	006	11	12.3	3.1	8.2	○	○
	12	017	12	12.3	3.3	6.9	○	○
	13	014	13	12.4	3.5	7.4	○	○
	14	011	14	12.8	3.5	7.4	○	×
	15	002	15	12.5	4.1	6.4	○	×
	16	008	16	12.6	3.8	6.6	○	○
	17	004	17	12.9	3.5	8.2	○	×

9SX095

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
黒A・椀c	1	001	6	−	−	8.9		

9SX102

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・皿a	1	001	4	13.0	1.8	9.8	○	○
土・丸底坏a	1	002	5	14.2	3.2	−		×

(2) 第10次調査

調査地は、太宰府市大字国分字堀田728-3～5に所在する。住宅建設に先立つ事前調査として行ったが、他の現場と並行して実施したため昭和60年6月18日から7月10日までの期間を要した。開発対象面積は622m²であったが住宅建設位置に絞って調査したため、調査面積は123m²にとどまる。調査は山本信夫、狭川真一が担当し、測量にあたっては九州歴史資料館横田賢次郎氏のお手を煩わせた。

1．層位など

表土である耕作土及びその床土を除去すると、砂礫混じりの暗黄色粘土層が検出され、それが遺構面であった。遺構面はこの1面のみである。

2．遺構

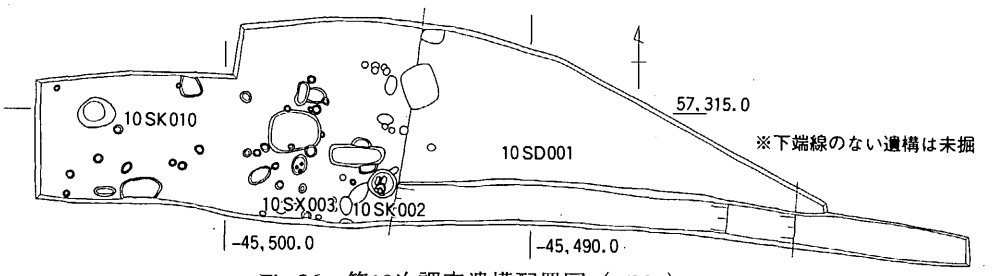


Fig.26　第10次調査遺構配置図（1/250）

(1) 大溝

10SD001（Tab.5）　調査区の東半分を占める大きな南北方向の溝と考えられる。幅は約13mを測るが、深さは1m程度確認したのみで崩落し始めたことにより完掘はしていない。埋土は上下2層に大きく分層できるが、いずれも暗灰色系の粘土質土である。下層は出土遺物から奈良時代まで遡るものと思われる。

Tab.5　10SD001各点座標一覧表

遺構番号	計測位置	X座標	Y座標	計測資料
10SD001	任意中心	57,311.70	-45,487.95	1/100平板図
10SD001	任意東肩	57,311.70	-45,481.40	1/100平板図
10SD001	任意西肩	57,311.70	-45,494.50	1/100平板図

(2) 土壙

10SK002　大溝10SD001のすぐ西側で検出されたもので、略円形のプランを呈している。規模は0.9×0.9×0.22mで、拳大～人頭大の礫が複数埋まっていた。

10SK010（Pla.21）　調査区西隅で検出したもので、平面は略円形を呈している。規模は東西1.25m、南北1.00m、深さ0.94mを測る深いものである。他の遺構に比べてきわめて深いため、井戸の可能性も残されている。埋土中からまとまって多量の土器群が出土した。

(3) その他の遺構

10SX003　直径0.3m、深さ0.21mのピットである。

3．出土遺物

土器・陶磁器

10SD001上層出土土器（Fig.27、Pla.21）

土師器

椀a（1）　口径13.6cm、器高4.3cmを測る。口縁部をわずかに外反させる。

須恵器

猿面硯（2）　須恵器甕の胴部を打ち欠き、割れ面を加工したものである。現状で加工面は1面を残すのみである。現存する長さは11.0cm、幅8.0cm、厚さ1.3cmを測る。当て具痕のある面は研磨され、使用の跡が観察される。

10SD001下層出土土器（Fig.27、Pla.22）

須恵器

蓋c3（3・4）　口径17.0・17.6cm。いずれの天井部のヨコナデ痕跡から摘みを有していたものと判断される。両者とも天井部はヘラ切り後粗いナデ調整で、内面は研磨され墨痕が確認される。転用硯とみられる。

坏a（5・6）　両者とも底部はヘラ切りで粗いナデ調整にとどまる。

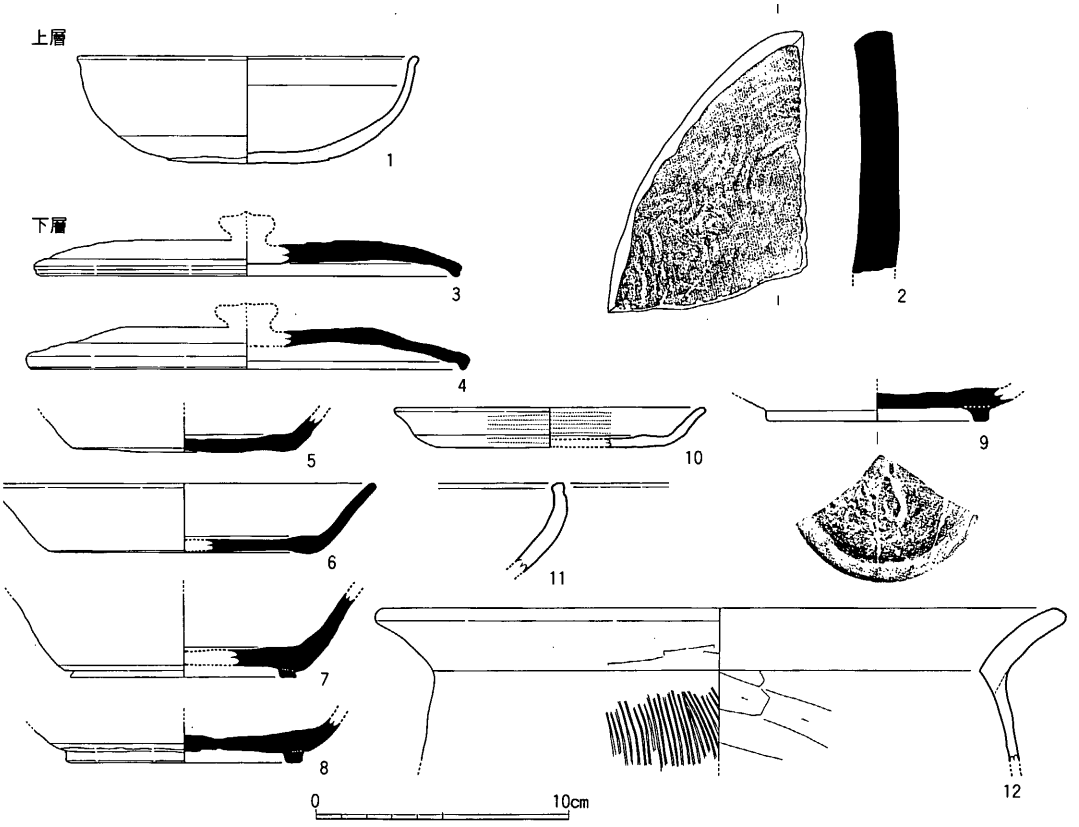


Fig.27　10SD001出土土器実測図（1/3）

坏c（7～9）　いづれも高台は低い四角形で、9の外底にヘラ記号がある。底部はヘラ切りのままである。

土師器

皿a（10）　口径12.4cm、器高1.6cm、底径8.9cmを測る。体部中程から底部は回転ヘラケズリ調整、他はヨコナデであるが、ほぼ全面にミガキaが観察される。

鉢（11）　内外面とも風化が著しいが、ミガキが施されていたものと思われる。

甕（12）　口径27.3cm。外面は縦方向の刷毛目、内面はヘラケズリで、口縁部内面に煤が付着している。

10SK002出土土器（Fig.28、Pla.22）

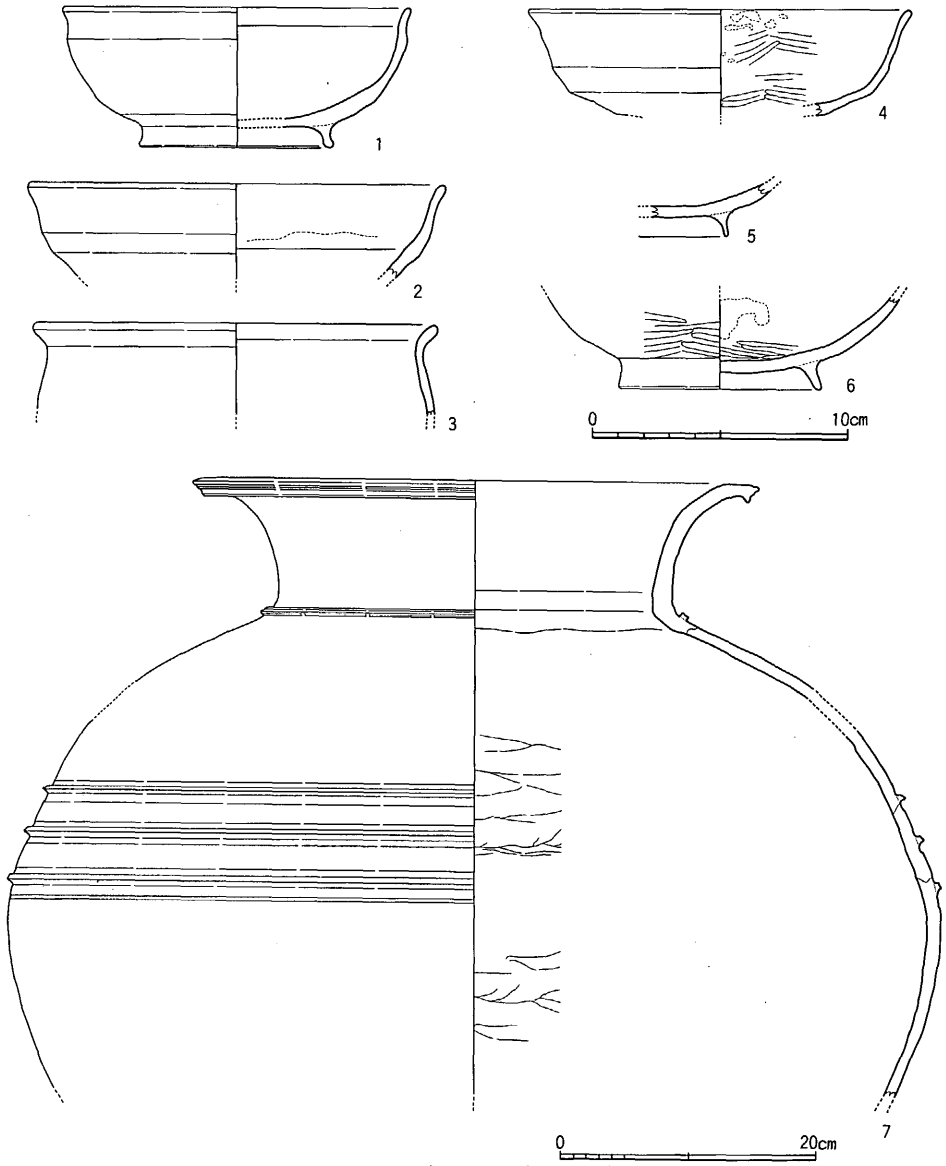


Fig.28　10SK002出土土器実測図（1/3・1/4）

土師器

椀c（1）　口径13.8cm、器高5.5cm、高台径7.7cm。体部は丸味を帯び、口縁部をわずかに外反させる。

椀（2）　口径16.4cm。体部中程に軽い屈曲がある。

小甕（3）　口径16.0cm。体部は横ナデで調整される。

黒色土器

椀（4～6）　4はA類で、口径15.1cm。内面のミガキbは顕著である。5は細い高台を有するもので、B類。6は高台径8.0cmを測るB類である。内外面ともミガキbが顕著である。

陶器

広口壷（7）　口径45.4cm、現存高48.3cmである。口縁端部はやや下向きになるまで折り曲げ、平坦部分に2条の沈線を巡らす。頚部に1条と体部上位に3条の突帯が巡る。表面は当初叩きによって成形されたようであるが、後のヨコナデおよび縦方向の軽いナデ？調整によってきれいに擦り消されている。内面の当て具痕も同様で、ナデによって消えている。焼成は良好でかなり硬く焼きしまっており、表面の色調は暗青灰色、胎土は暗赤褐色を呈している。朝鮮系無釉陶器に位置付けられるものと考えられる。

10SK010出土土器（Fig.29～33、Pla.23～31）

土師器

坏a（1～74）　口径9.0～12.4cmを測る。74を除いた平均口径は11.18cm、平均器高は2.40cmである。74は他の資料に比べて深め（器高3.0cm）でタイプの異なるものと判断した。資料群中、口縁部付近から内面にかけて油煙の付着する資料（5・11・18・37・41・43・47・66・71・72）があり、灯明皿として利用されたものが含まれることがわかる。

小皿c（75～83）　口径11.6～12.6cm、器高1.9～2.5cmを測る。皿部の深さはすべて1cm以下であり、托とする意見もある。

中椀a（84～86）　口径11.8～12.7cm。85・86の底部はわずかに平底を残しているが、84は深く丸底である。84の外面には指圧痕があり、押し出しによる底部の成形が考えられる。

小椀c（91・92）　口径7.4・10.4cm。91は小さすぎるため体部の形状はやや直線的であるが、92は丸味を帯び口縁端部を外反させる。

中椀c（93～108）　体部を丸く仕上げ、口縁端部をわずかに外反させるもの（93～107）と、体部が直線的なもの（108）に分けられる。108は量的にも少なく古い資料の混入とみられる。他は口径の差はあるが、形状は基本的には同じものである。口縁部付近から体部内面にかけて油煙の付着する資料（93・96・100）がある。

椀c（109～113）　口径14.2～15.5cmで体部の形状は丸味を帯び、口縁端部をわずかに外反させる。

大椀（87～90）　87・88は口径20.4cmと特に大きい。口縁端部内面がわずかに肥圧化してい

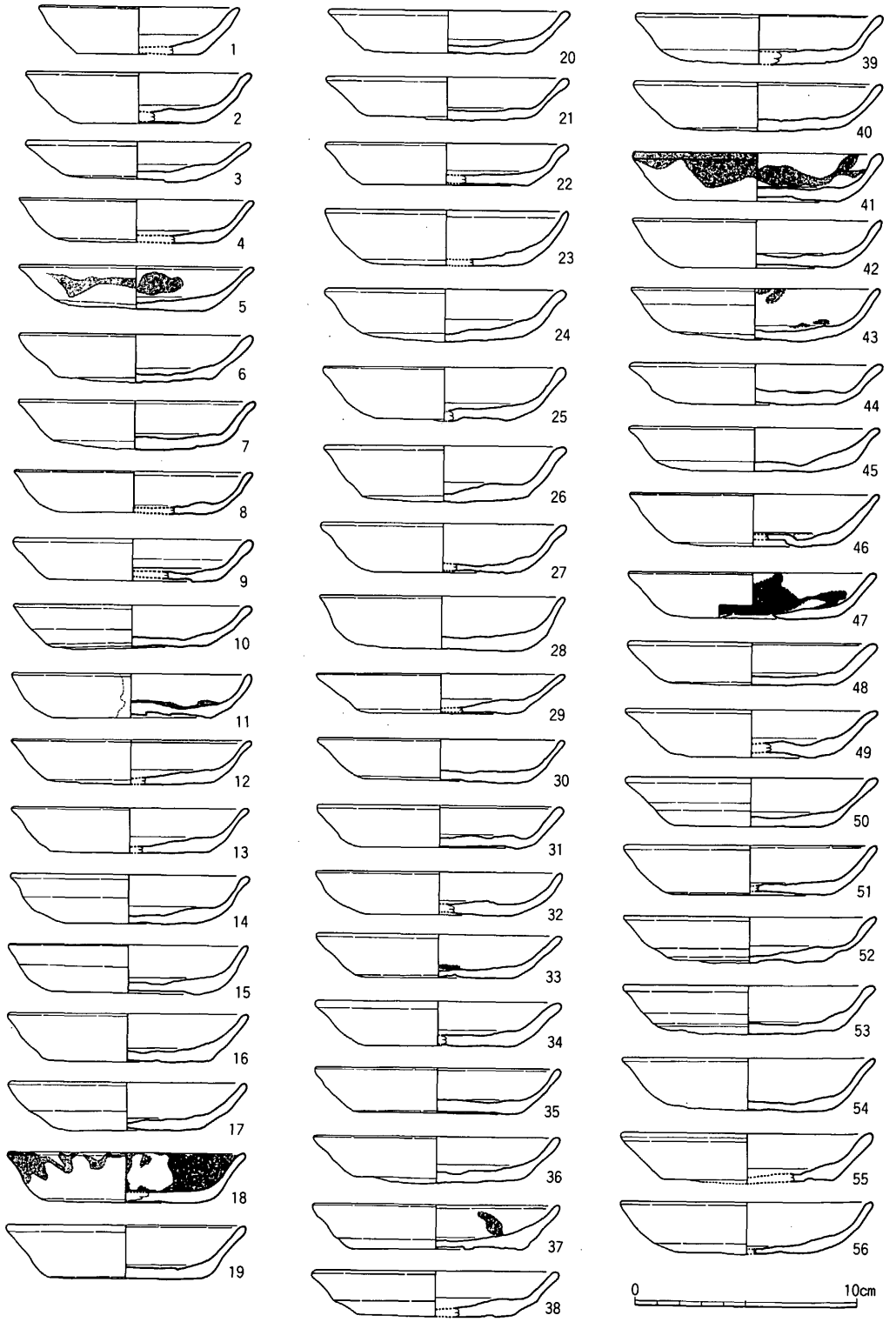


Fig.29　10SK010出土土器実測図1（1/3）

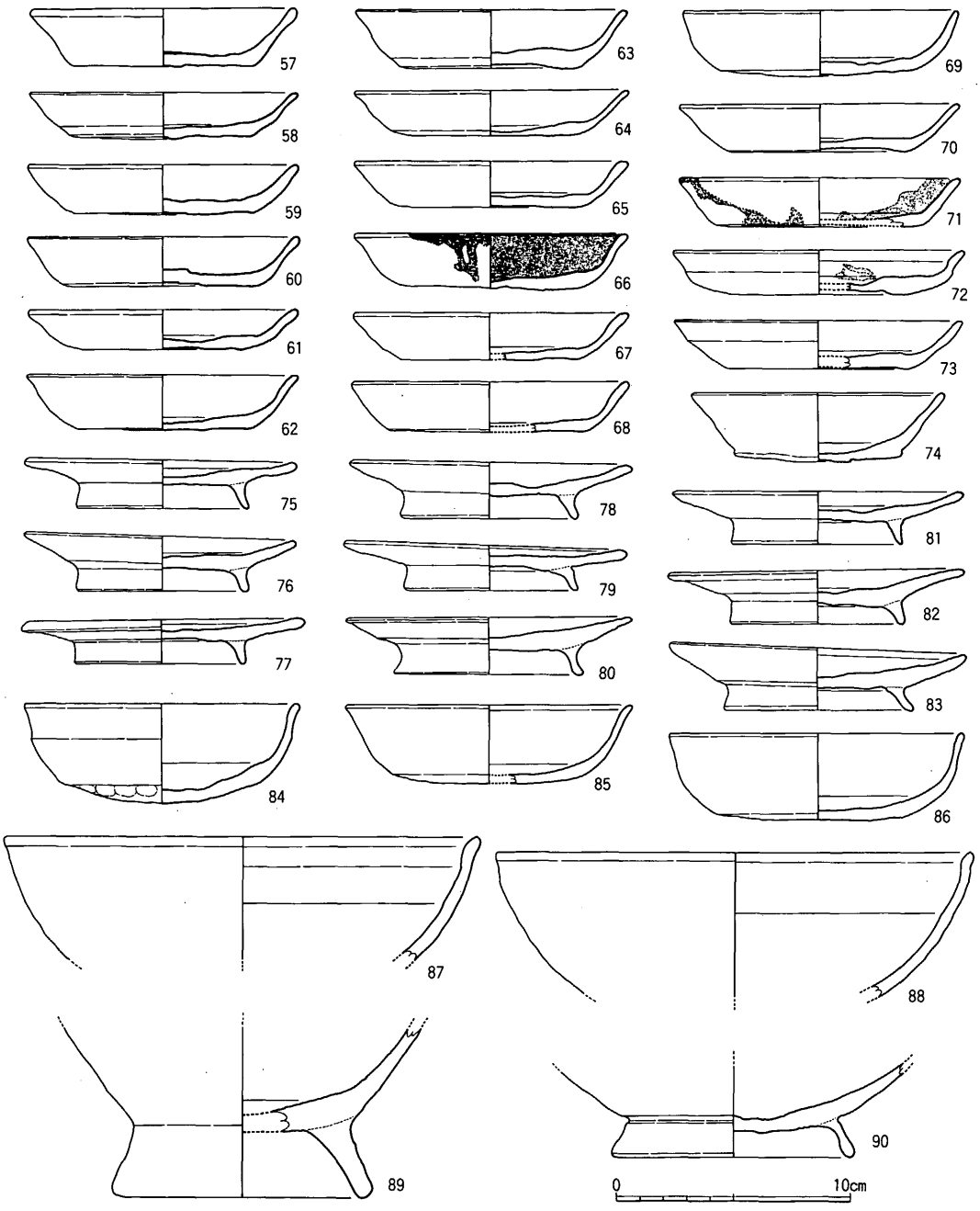


Fig.30　10SK010出土土器実測図2（1/3）

る。体部は丸味が強い。89は高台部分の資料で、高台の高さ3.0cmは非常に高い部類である。90も高台部分の資料である。体部の開き具合から口径が20cm程度に予想されるためここに加えた。

鉢（114）　口径37.8cmで、口縁部は内側に折り曲げている。体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。調整は外面がヨコナデ、内面はナデである。

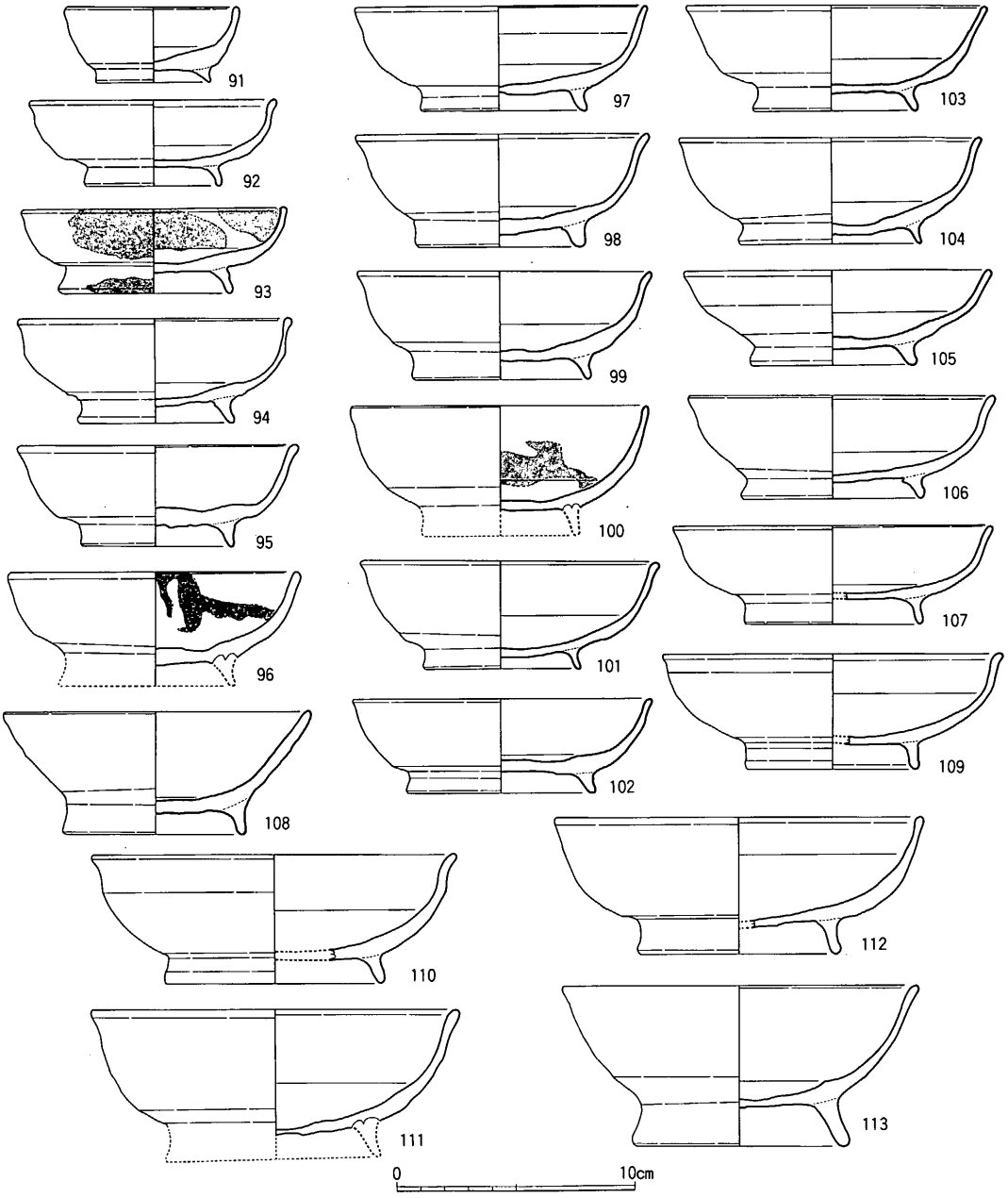


Fig.31　10SK010出土土器実測図3（1/3）

小甕（115）　口径5.0cm、器高4.6cmを測る手捏ねの資料である。体部は軽い指圧で成形され、口縁部は横方向にナデながら仕上げる。

甕（116～118）　口径24.4・25.2・31.4cmを測る。117の調整は不明瞭であるが他は内外面ともナデまたはヨコナデで仕上げられ、成形時の痕跡をほとんど残さないものである。

甑（119）　底径21.3cm。底部内面に高さ1cm内外、幅2.5cm程度の突起が3箇所以上設けられていたことがわかる。外面は叩き痕が明瞭で、内面の一部に刷毛目が認められる。

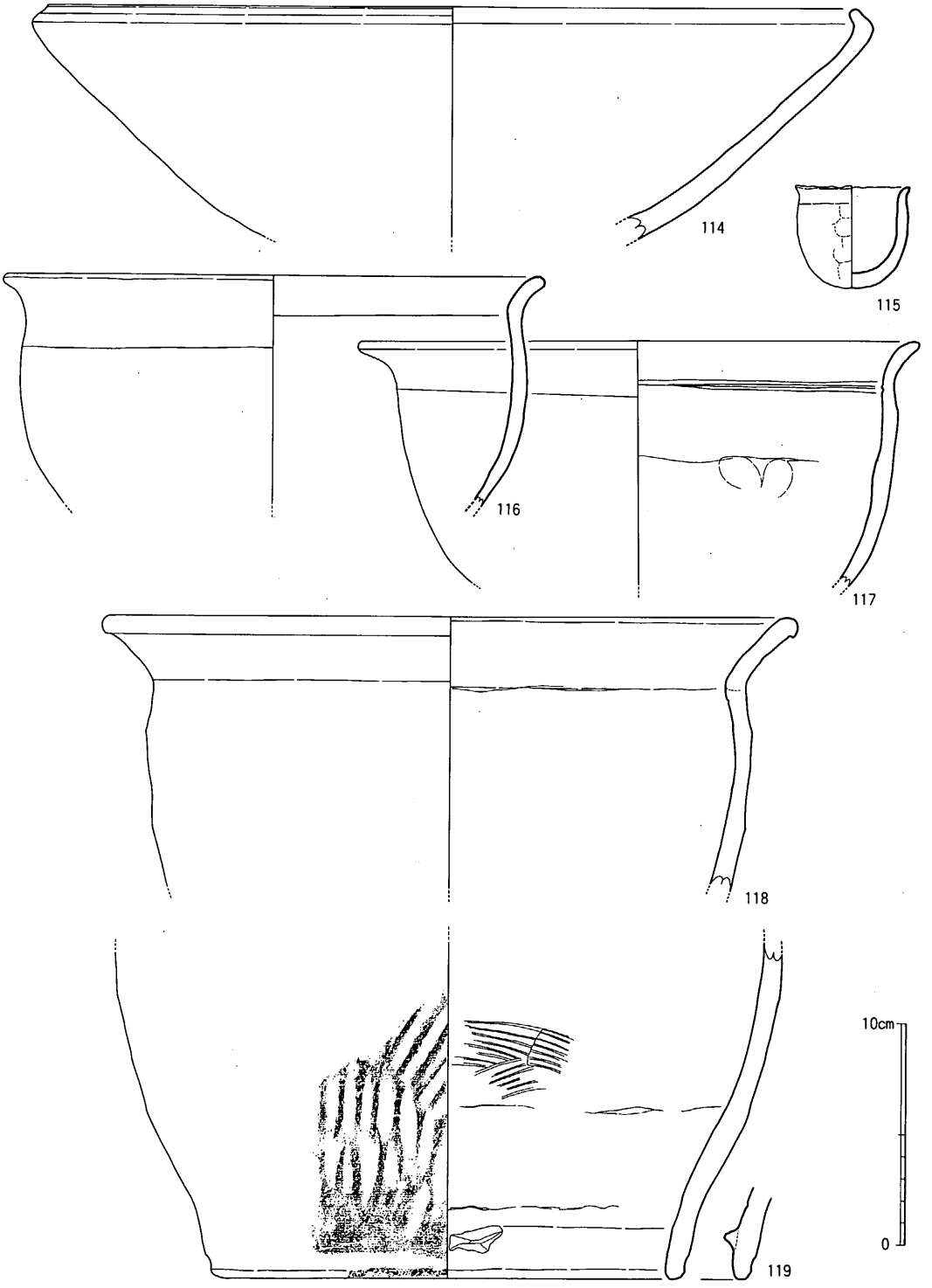


Fig.32　10SK010出土土器実測図4（1/3）

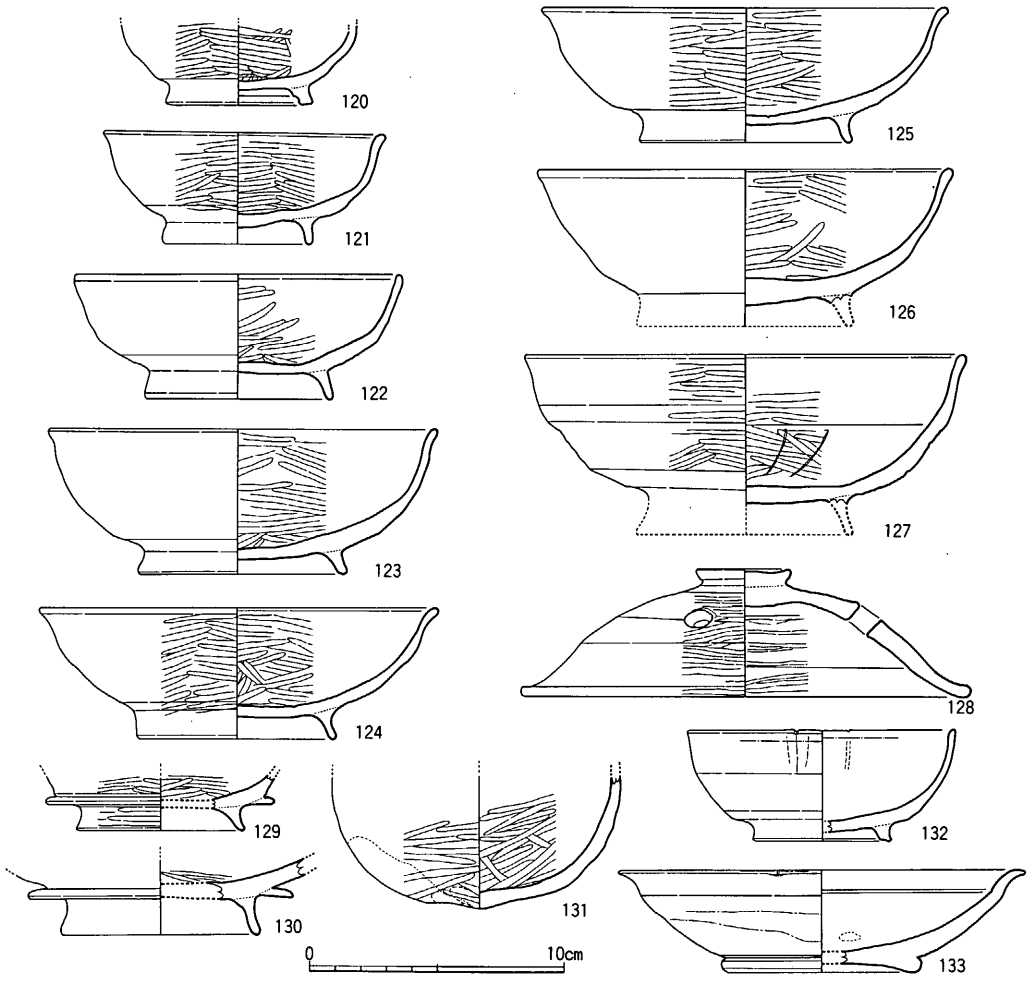


Fig.33　10SK010出土土器実測図5（1/3）

黒色土器

小椀c（120）　B類で、高台径5.7cm。

中椀c（121・122）　121はB類で、内外面のミガキcは顕著である。122はA類で、内面のミガキcはやや粗めである。いずれも体部を丸く作る。

椀c（123～127）　123・126はA類で、内面のミガキcはやや粗めである。他はB類で内外面ともミガキcは顕著である。すべて体部は丸く作られ、口縁部はわずかに外反している。

托状椀（129・130）　托部の径9.0・10.4cmを測る。129はB類、130はA類である。

蓋（128）　口径17.7cm、器高5.0cm、摘み径3.7cmを測る。B類で内外面にミガキcが顕著である。調整は外面の天井部付近がヘラケズリ（摘み周辺はその接合時に生じたヨコナデ）、内面はナデ、口縁部を含む体部の多くはヨコナデである。体部中程に3箇所の透かし（径1.1cm）がある。

小甕（131）　B類で内外面ともミガキcが認められる。

緑釉陶器

椀（132）　防長産と見られ、口径10.6cm、器高4.4cm、高台径5.4cmを測る。体部は丸く立ち上がり、口縁端部をわずかに外反させる。口縁部には少なくとも3箇所以上の輪花がある。高台は畳付けがわずかに窪み、外面は下端が外方へ小さく張り出している。調整は釉により不明瞭であるが、内面は体部がヨコナデ、底部がナデによって仕上げられる。ヘラミガキは認められない。釉は暗緑白色に発色し、部分的に銀化している。胎土は白灰色で精良であり、砂粒子はほとんど観察されない。焼成はややあまく土師質であり、釉も剥離寸前である。口縁端部から内面に0.3cm、外面に0.4cmの幅で黒褐色を呈しており、異質物を付着させたものかと思われたが、分析の結果釉の変色であることが判明した。

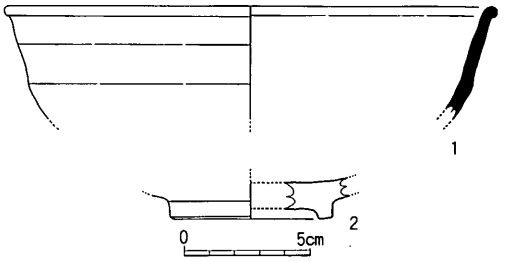


Fig.34　第10次調査
その他の出土土器実測図（1/3）

越州窯系青磁

椀（133）　口径16.0cm、器高4.0cm、底径7.8cmを測る。口縁部は大きく外反させ、屈曲部内面に細い沈線が巡る。内面見込みと高台端部に目跡が認められる。釉は黄緑色、淡黄緑色に発色（化粧土存在する部分）し体部下半にはかからず、露胎部分は暗茶褐色を呈している。胎土は暗褐色、暗灰色で黒色の小斑粒を多量に含んでいる。II-2-b類。

10SX003出土土器（Fig.34）

須恵器

鉢（1）　口径19.6cm。口縁部をわずかに外反させ、端部を丸くおさめる。調整は残存部の範囲でヨコナデである。

排土出土土器（Fig.34、Pla.）

越州窯系青磁

椀（2）　高台径6.4cm。畳付け以外は施釉され、釉は黄緑色に発色する。I-2-a類。

瓦類

10SD001出土瓦（Fig.35、Pla.21）

軒丸瓦

1は複弁（六葉）蓮華文で子葉部分は窪んでいる。中央の蓮子は1+6で、中房の周囲には芯帯が巡らされている。外区は珠文帯である。同様のものは筑前国分寺跡SK057、陣ノ尾2号

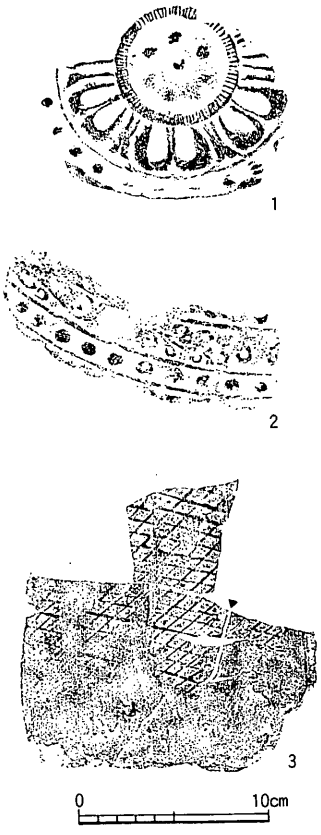


Fig.35　第10次調査
出土瓦拓影（1/4）

墳石室内、大宰府条坊跡第27-1次調査などで出土しているが、陣ノ尾遺跡のものは中房周囲の芯帯がなく、笵の彫り直しの可能性がある。

10SK010出土瓦（Fig.35、Pla.21）

軒平瓦

2は均正唐草文である。唐草は中心に向かって両端から流れている。中心飾りは存在しない。

丸瓦

3は丸瓦の破片である。外面の叩きは格子目であるが、その上から細いヘラによる沈線（▲印）がある。意味は明らかではない。

無文塼

aは平面形状が台形を呈するもので、広端部の幅12.5cm、狭端部の幅10.8cm、残存長21.0cm、厚さ5.5cmを測る。調整は狭端部小口面は未調整ながら他は縦方向のヘラケズリである。黒灰色を呈し、瓦質に焼成される。

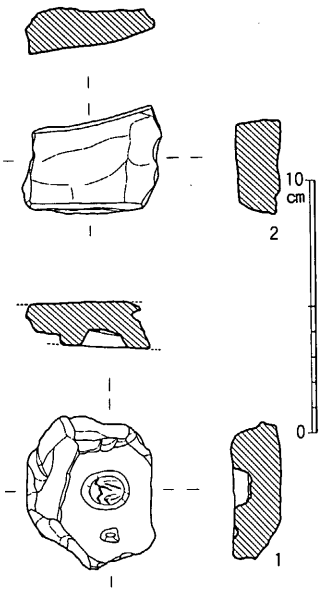


Fig.36　10SK010出土石製品実測図（1/3）

石製品

10SK010出土石製品（Fig.36）

1は滑石製石鍋の転用品である。周囲はすべて自然の割れ面で、加工された形状は明らかではない。残存部片面（鍋では内面）の中央に1.9×1.5×0.7cmで略円形の窪みと0.7×0.6×0.2cmで不整形な窪みが並んで穿たれている。2は砂岩製の砥石である。図の上下面、左面の一部及び裏面は割れ面（自然面）であるが、残る面は研磨されている。

4．小結

狭い調査区であるが、大溝、土壙などを検出できた。大溝10SD001は上面で検出された土師器から大宰府編年IX期前後に埋没したようであるが、開削は下層出土遺物の年代が8世紀後半頃を示していることからその時期あるいはそれよりもやや遡る時期に想定できそうである。つまり筑前国分寺創建の頃にまで遡る遺構の一つと認識できる。なお、国分寺中軸線から大溝の中心までの距離はおよそ113.76mで、385尺程度である。

土器を多量に出土した土壙10SK010は、土師器坏の法量からIX期頃と考えられ、10世紀中葉を前後する時期の所産とみられる。この土器群は陶磁器にやや恵まれない部分があるが、質量ともに安定した資料とみなされ、この時期の基準的な資料となり得るものである。

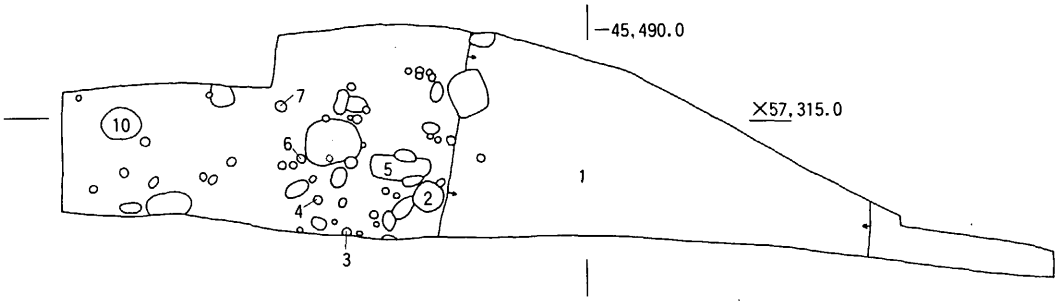


Fig.37　第10次調査検出遺構略測図

Tab.6　第10次調査遺構番号台帳

S−番号	遺構番号	種別　　古→新	地区
1	10SD001	大溝　　完掘していない	A3～7ほか
2	10SK002	土壙	B7
3	10SX003	ピット	A8
4		ピット	B8
5		ピット	B7・8
6		ピット	B8
7		ピット	C9
8		ピット	
9		ピット	
10	10SK010	土壙　　多量の土器群	BC10

Tab. 7　第10次調査出土遺物一覧表

S-1 (10SD001) 最上層

須恵器	坏、坏c、甕、皿a、猿面硯
土師器	椀a、椀c、手捏ね小鉢
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	椀；II(1)
瓦類	軒丸瓦

S-1 (10SD001)

須恵器	鉢? 坏a、坏c
土師器	鉢、皿a、坏、カマド、甕
瓦類	破片

S-1 (10SD001) 下層

須恵器	坏a、坏c、蓋3
土師器	大椀、皿a、甕a
黒色土器A	破片
金属製品	鉱滓
瓦類	無文

S-2 (10SK002)

須恵器	甕
土師器	椀c、小甕、甕a
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c

S-3 (10SX003)

土師器	椀
瓦類	破片

S-4

土師器	破片

S-5

須恵器	甕、蓋3
土師器	甕、高坏、把手
瓦類	平瓦 (縄目叩)

S-6

土師器	破片

S-7

土師器	高台片、破片

S-8

須恵器	蓋3 、破片
土師器	破片

S-9

土師器	甕、高台片

S-10 (10SK010)

須恵器	甕、坏c、破片
土師器	坏a、椀a、甕a、甕b、鉢、手捏ね小鉢、椀c2、小椀c2 大椀c　特大椀c、皿c
瓦器	椀c
黒色土器A	椀c
黒色土器B	蓋、椀c
越州窯系青磁	椀；II-2 (1)、II (2)
白磁	椀；I (1)？
緑釉陶器	椀c (輪花)
灰釉陶器	壺×甕
金属製品	鉱滓、鉄塊
土製品	フイゴ羽口片
石製品	滑石製石鍋片、加工品、砂岩製砥石

床土

須恵器	蓋3、甕、坏
越州窯系青磁	椀；I (1)
瓦類	破片 (格子叩)

排土

須恵器	蓋、甕、坏c
土師器	破片
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；I-2 (1)
瓦類	平瓦、丸瓦

Tab. 8　第10次調査出土土器計測表

A：内底のナデ　　○：有
B：板状圧痕　　×：無

10SD001上層

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・椀a	1	001	1	13.6	4.3	—		○

10SD001下層

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・蓋c3	1	006	3	17.0	1.4+	—		
	2	007	4	17.6	1.7+	—		
須・坏a	1	009	5	—	2.0+	9.9	○	
	2	008	6	15.2	2.8	10.7	○	
須・坏c	1	004	7	—	3.4+	9.0	○	
	2	005	8	—	1.9+	9.4	○	○
	3	003	9	—	1.3+	8.8	○	
土・皿a	1	002	10	12.4	1.6	8.9		

10SK002

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・椀c	1	006	1	13.8	5.5	7.7		
土・椀	1	005	2	16.4	3.7+	—		
黒A・椀	1	002	4	15.1	4.1+	—		
黒B・椀c	1	001	6	—	3.7+	8.0		

10SK010

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a（ヘラ）	1	032	1	9.0	2.2	5.6	○	
	2	031	2	10.2	2.3	6.0	○	
	3	042	3	10.1	1.7	6.1	○	○
	4	056	4	10.6	2.0	7.3	○	
	5	038	5	10.6	2.0	7.0	○	×
	6	061	6	10.6	2.2	6.7	○	○
	7	043	7	10.7	2.2	7.5	○	×
	8	064	8	10.8	1.9	6.4	○	
	9	065	9	10.8	1.9	7.5	○	○
	10	005	10	10.8	2.0	7.1	○	○
	11	076	11	10.8	2.0	7.3	○	×
	12	060	12	10.8	2.1	7.5	○	○
	13	034	13	10.8	2.1	7.1	○	○
	14	008	14	10.8	2.2	6.0	○	○
	15	018	15	10.8	2.2	6.4	○	○
	16	011	16	10.8	2.2	6.7	○	○
	17	016	17	10.8	2.2	6.9	○	○
	18	067	18	10.8	2.3	7.6	○	○
	19	049	19	10.8	2.4	6.8	○	
	20	013	20	11.0	1.9	6.6	○	○
	21	054	21	11.0	1.9	7.2	○	○
	22	033	22	11.0	1.9	7.4	○	
	23	053	23	11.0	2.5	7.6	○	
	24	026	24	11.0	2.4	7.4	○	○
	25	028	25	11.0	2.6	6.2	○	○
	26	006	26	11.0	2.6	7.1	○	○
	27	021	27	11.1	2.2	6.9	×	
	28	017	28	11.1	2.4	6.7	○	×
	29	055	29	11.2	1.8	7.6	○	
	30	007	30	11.2	1.9	6.8	○	○
	31	059	31	11.2	1.9	8.0	○	○
	32	063	32	11.2	2.0	6.4	○	○
	33	073	33	11.2	2.0	7.4	○	
	34	035	34	11.2	2.0	6.4	○	○
	35	041	35	11.2	2.0	7.7	○	
	36	004	36	11.2	2.1	7.7	○	○
	37	058	37	11.2	2.0	7.8	○	
	38	012	38	11.2	2.1	6.6	○	○
	39	046	39	11.2	2.3	8.9	○	○
	40	045	40	11.2	2.2	7.3	○	○
	41	040	41	11.2	2.2	7.4	○	○
	42	037	42	11.2	2.2	6.9	○	
	43	069	43	11.2	2.3	7.1	○	
	44	023	44	11.4	1.9	7.3	○	○
	45	025	45	11.4	1.9	9.0	○	
	46	075	46	11.2	2.4	7.3	○	○
	47	066	47	11.2	2.1	7.8	○	○
	48	047	48	11.3	2.0	7.6	○	
	49	029	49	11.4	2.2	7.7	○	
	50	010	50	11.4	2.2	6.4	○	○
	51	044	51	11.4	2.3	7.4	○	
	52	001	52	11.4	2.1	6.7	○	○
	53	015	53	11.4	2.3	8.4	○	○
	54	019	54	11.4	2.4	6.6	○	○
	55	036	55	11.4	2.3	7.8	○	○
	56	048	56	11.4	2.4	8.3	○	
	57	020	57	11.4	2.5	7.6	○	
	58	002	58	11.5	2.0	7.1	○	○
	59	024	59	11.6	2.1	7.6	○	○
	60	068	60	11.6	2.1	8.7	○	○
	61	022	61	11.6	1.7	6.7	○	
	62	057	62	11.6	2.4	7.2	○	○
	63	003	63	11.6	2.4	7.8	○	○
	64	050	64	11.7	1.9	8.4	○	○
	65	027	65	11.7	2.0	8.0	○	○
	66	062	66	11.7	2.4	7.7	○	○
	67	030	67	11.8	2.0	7.6	○	
	68	051	68	11.8	2.2	8.6	○	
	69	009	69	11.8	2.8	8.3	○	○
	70	039	70	12.0	2.0	7.8	?	○
	71	052	71	12.0	2.1	8.6	○	
	72	074	72	12.4	1.9	7.5	○	
	73	014	73	12.4	2.1	7.5	○	○
	74	077	74	10.8	3.0	7.2	○	○
土・小皿c	1	084	75	11.6	2.1	7.4	○	○
	2	086	76	11.7	2.4	7.4	○	×
	3	078	77	12.1	1.9	7.3	○	×
	4	083	78	12.1	2.4	7.6	○	○
	5	085	79	12.2	2.0	7.4	○	×
	6	079	80	12.2	2.5	8.1	?	×
	7	080	81	12.4	2.3	7.3	○	○
	8	081	82	12.6	2.3	7.5	○	×
	9	082	83	12.6	2.7	8.1	○	○

土・中椀a	1	070	84	11.8	4.3	−	○	○
	2	071	85	12.3	3.4	8.2	○	○
	3	072	86	12.7	3.7	8.4	○	○
土・大椀	1	125	87	20.4	−	−		
	2	124	88	20.4	−	−		
	3	127	89	−	−	11.1	○	
	4	126	90	−	−	10.4	?	
土・小椀c	1	121	91	7.4	3.2	4.8	○	
	2	122	92	10.4	3.6	5.8	○	
土・中椀c	1	111	93	11.2	3.6	7.4	○	○
	2	110	94	11.5	4.4	6.6	○	○
	3	118	95	11.8	4.3	6.4	○	×
	4	119	96	12.3	4.0+	−	○	
	5	106	97	12.3	4.4	6.5	○	×
	6	115	98	12.4	4.8	7.2	○	×
	7	117	99	12.4	4.6	7.6	○	○
	8	105	100	12.5	4.5	−	○	
	9	108	101	12.6	4.6	6.6		○
	10	107	102	12.6	4.0	8.0	○	×
	11	116	103	12.7	4.5	6.9	○	×
	12	109	104	12.8	4.5	7.7	○	×
	13	114	105	12.9	4.0	7.0	○	×
	14	103	106	12.9	4.4	7.7	○	○
	15	104	107	13.4	4.2	7.5	○	
	16	101	108	13.0	5.2	7.7	○	×
土・椀c	1	112	109	14.2	4.9	7.3	○	○
	2	113	110	15.4	5.5	9.3	○	
	3	120	111	15.5	5.3+	−	○	○
	4	123	112	15.5	5.8	8.6	○	
	5	102	113	15.0	6.8	9.2	○	×
黒B・小椀c	1	090	120	−	3.2+	5.7		×
黒B・中椀c	1	128	121	11.1	4.4	5.9		×
黒A・中椀c	1	091	122	12.9	4.9	7.4		
黒A・椀c	1	089	123	15.3	5.7	8.2		○
	2	088	126	16.4	5.4+	−		○
黒B・椀c	1	129	124	15.7	5.2	7.8		×
	2	087	125	16.0	5.3	8.4		○
	3	095	127	17.4	5.9+	−		

(3) 第13次調査

調査地は、太宰府市大字国分字川添621に所在する。住宅建設に先立つ事前調査として、平成3（1991）年1月28日から3月30日まで実施した。開発対象面積は996m2、調査面積は770m2で、調査は狭川真一が担当した。

調査の結果、築地状遺構、掘立柱建物、井戸等を検出した。このうち築地状遺構は国分寺の南外郭線にあたることから現状保存を地権者に申し入れた結果、計画されていた建物の建設を中止していただき、現在は旧状の畑として利用されている。ご理解いただいた地権者に対し感謝するとともに早急な史跡指定による保存措置が望まれる。

1．層位など

調査前の現状は畑であり、その耕作土（表土）を除去すると茶褐色土の包含層が顔を出す。ただしこの包含層が残存しているのは概ね南半分であり、北半分では表土直下がすぐに地山となっている。地山は暗黄灰色系の花崗岩風化土であり、輪廻による粘土化が進行しているものの拳大から人頭大の礫を多量に包含している。遺構はこの地山上面から直接穿たれるかたちで検出されている。

2．遺構

掘立柱建物

13SB020（Fig.39、Pla.34・35、Tab.9）　東西3間（7.47m）、南北2間（4.95m）の総柱形式の掘立柱建物である。一部調査区域外に延びているがこの規模で完結するものと思われる。柱間は東西列が西から2.18m・3.11m・2.18mで、中央間が1mほど広い。南北列では北から2.64m・2.31m（西端列）と北側がやや広めである。なお柱痕跡の位置からみると東端では若干数の異なる可能性がある。柱掘り方は概ね隅丸方形で、一辺の長さは1.0～1.4m程度である。深さは遺構面から0.1～0.4mで、掘り方底部の標高にもばらつきがある。柱痕跡は5箇所で確認しているが、その観察結果では直径0.3～0.4m程度である。なお、掘り方b・c・1の土層観察では柱を抜き取ったような形跡が確認されたが、掘り方の平面プランを破壊するようなものではなかった。建物主軸の振れは、西端の柱痕跡心心のデータから、N-0°52′-Eである。

13SB025　東西3間（5.4m）、南北2間（2.7m）の建物である。柱掘り方は円形で、直径は0.2～0.3m程度と小さい。掘り方の埋土は黒色土で、あまりしまっていない。柱痕跡は確認できなかった。掘り方中心間から得られる振れは、N-1°-E程度である。

築地

13SA010（Fig.40、Pla.36～38、Tab.9）　調査区南端で検出した築地遺構である。検出長24.8m、基底部の幅2.7～4.6mを測る。遺構の上面は大半が削平を受けており、東側では基底部以外はほとんど残存していなかったが、西側では1.5m程度（南側からの見かけの高さ）残存していた。また基底部の南側は後世の改変で凹凸が著しいが、北側は概ね旧状を留めているよう

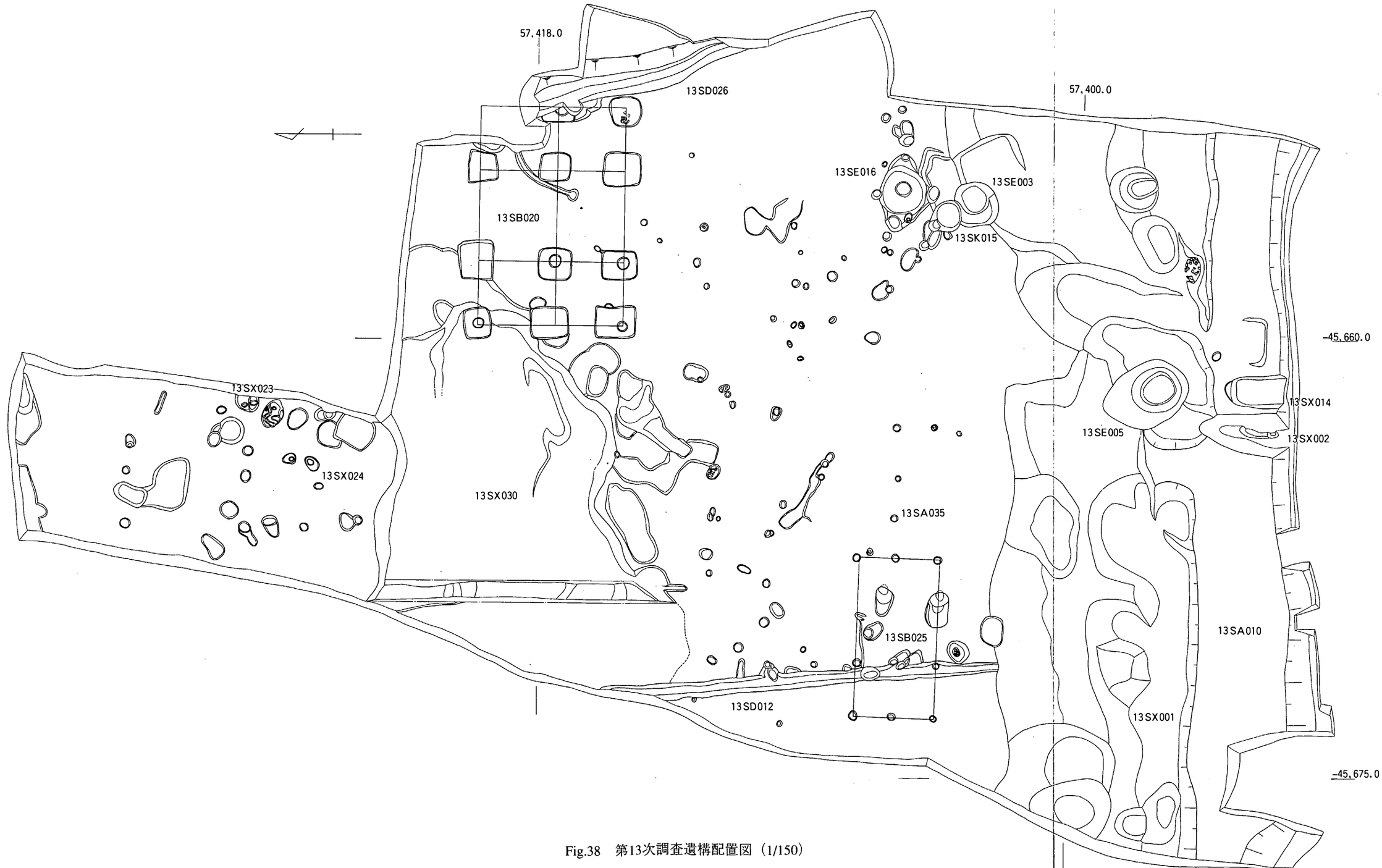


Fig.38　第13次調査遺構配置図（1/150）

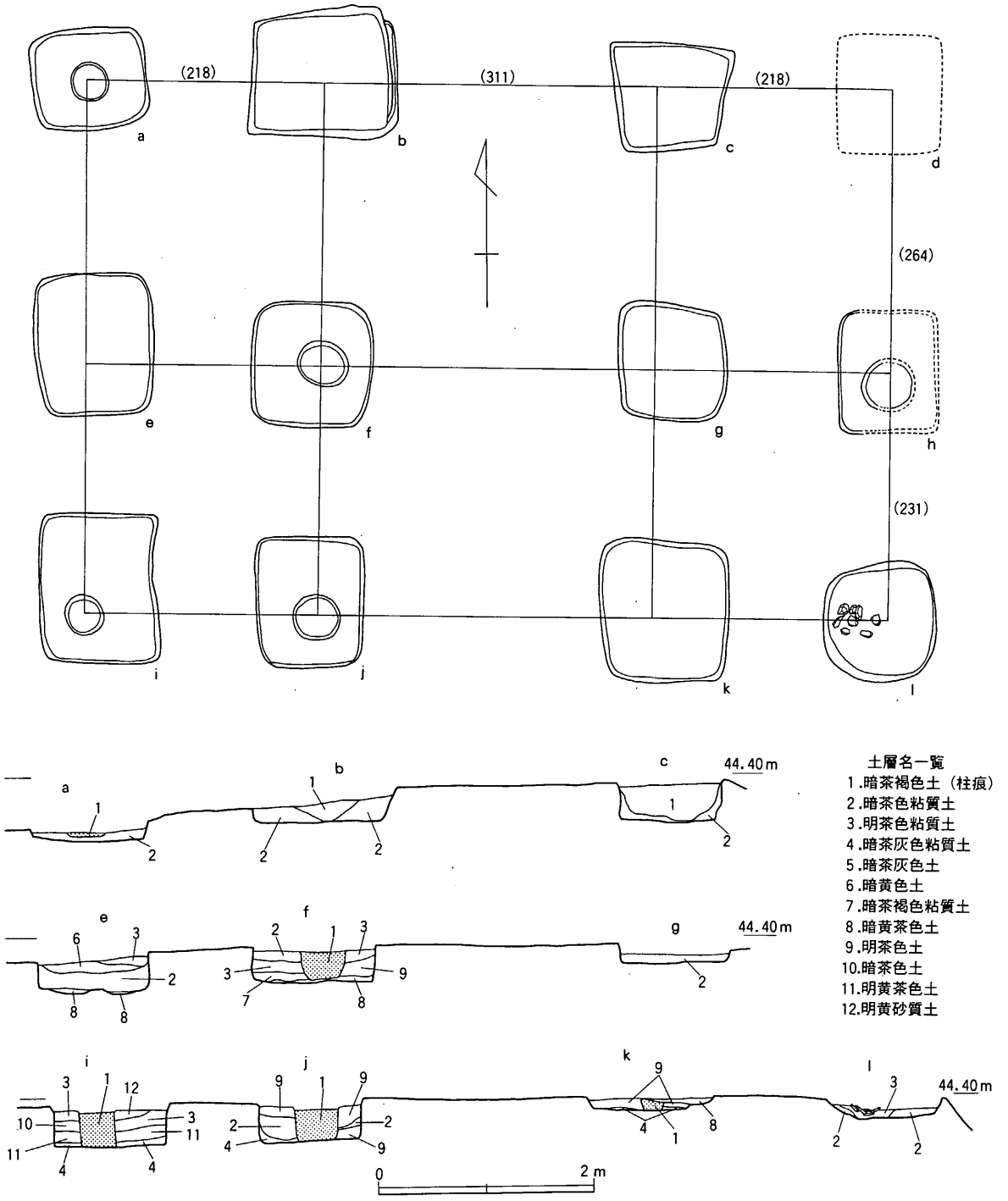


Fig.39　13SB020実測図・土層観察図（1/60）

である。北側基底部の東西端のデータから得られる振れはN-91° 59′ -Eである。

築地本体は、地山をわずかに掘り下げた（最大0.7m）のちに、粗いながらも版築状の積土によって構築されている。築地の内側は幅の広い溝状を呈している（13SX001）が、外側については調査区外であり今回の調査では確認できなかった。

Tab.9　第13次調査主要遺構座標値一覧表

遺構番号	計測位置	計測点座標		方位	講堂中心からの距離	
		X	Y		X方向（m）	Y方向（m）
13SA010	北辺東端	57,395.15	-45,652.88	91° 59′ 04″	-120.988	-53.980
	北辺西端	57,396.01	-45,677.70		-120.994	-78.815
	中央東端	57,392.90	-45,652.95	91° 57′ 24″	-123.239	-53.972
	中央西端	57,393.75	-45,677.83		-123.257	-78.866
13SB020	掘り方a	57,420.06	-45,659.46	0° 52′ 11″	-96.322	-61.426
	掘り方i	57,415.12	-45,659.54		-101.262	-61.333
	建物中心	57,417.55	-45,655.79	—	-98.703	-57.670

なお、寄柱等の痕跡が確認できていないことと、残存良好部分の北面が40°程度傾斜しており、この傾斜が旧状に近いものであることが窺える（13SX001の早い段階の埋土－9～10世紀－が本体北面の下半に被っている）こと等から、築地というよりも土塁的な形状を呈していた可能性も残される。

柵列

13SA035　13SB025の東側柱列の中央のものを共有する形で検出したもので、東端で南に1間分折れ曲がる。埋土はSB025と同じである。当初から一連のものであったかどうかは明らかではなく、SB025を含めてこのように復原し得るかどうかやや不安な点ものこる。

井戸

13SE003（Pla.40）　1.52×1.50m、深さ約1mで略円形の平面プランを有する。枠は残存していなかったが、底部付近で径がやや小さくなり、その部分には白灰色粘土と茶色粘土が混在して堆積していた。これより上位は淡茶色粘土で埋まるが、中央上部には瓦が多量に含まれていた。13 SK015を切っている。

13SE005　13SX001埋土上位から切り込む井戸で、長軸3.05m、短軸2.1mの長円形を呈している。遺構面から0.6m程度までは灰色粘土が堆積し、これを除去した段階で1.2×1.05mの略円形のプランが確認され井戸枠の痕跡とみている。枠内は腐植土が堆積していたが、周囲が不安定で危険なため完掘は断念した。

13SE016　上面は不整形なプランであったが、0.1m程度掘り下げた結果、径1.65mでほぼ円形のプランが確認された、これが本来の井戸の掘り方とみられる。検出面から深さ約0.4mのところで底に至るが、底部中央に径0.55m、深さ0.5mの曲物を据えたとみられる穴が検出された。埋土の主体は明茶色粘土である。

土壙

13SK015（Pla.40）　13SE003に切られる土壙で、径約1.0mの略円形を呈している。深さは約1.2mで井戸の可能性も残されている。埋土は大きく2層に分かれ、下半部は地山と同質の花崗岩風化土、上半部は明茶色粘土であった。

溜まり状遺構

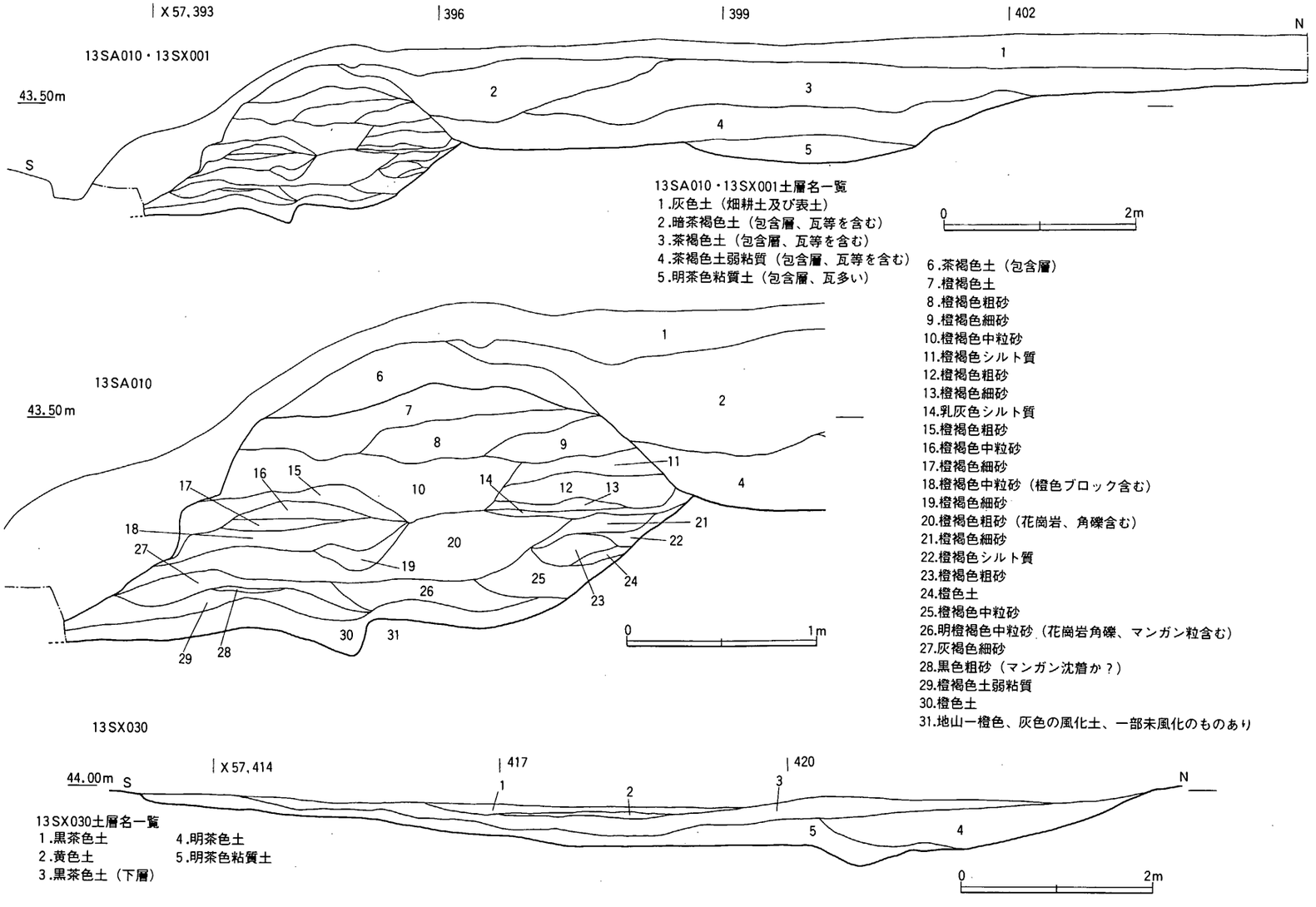


Fig.40　13SA010・13SX001・13SX030土層観察図

13SX030（Fig.40、Pla.40）　掘立柱建物13SB020の上に被るように溜まっている。検出長15.4m、最大幅約12m、深さ0.4～0.7mでさらに西側に延びている。埋土は数層に分層でき、最終埋没は11世紀後半まで下るものの堆積の開始は10世紀前半頃まで遡るものとみられる。

溝状遺構

13SX001（Fig.40、Pla.39）　築地13SA010の北側にあるもので、茶褐色粘質土を埋土の主体とする。調査区の西半分は幅6.1～7.1mでほぼ築地に並行しているが、東半分では溝の北側が大きく乱れており、この遺構がすべて人為的に構築されたものかどうか疑わしい。しかし、築地側の立ち上がりを観察するとわずかながら掘削された痕跡も認められることから、築地構築にあたって自然の緩傾斜面を必要な部分のみ造成し、最終的に築地内側を溝状に簡易に成形したものと考えられる。したがってこの空間の排水が必要となることから、暗渠状遺構13SX002が存在する意義も頷ける。

その他の遺構

13SX002（Pla.38）　長さ3.05m、幅1.54m、深さ0.25～0.60mを測る。埋土中に拳大程度の礫が多量に混入していた。

13SX014　築地廃絶後に穿たれた遺構である。長さ2.6m、幅1.1m、深さ0.45mである。

13SD012・026　調査区の東西を南北に走る溝で、今回検出した遺構中で最も新しい。近世以降まで下る可能性が強い。

13SX023・024　調査区北側に拡張した部分で検出したピットである。この地区で検出したピットはほとんどが浅く、撹乱状を呈しており13SX023・024もその中に含まれる。

3．出土遺物

土器・陶磁器

築地出土土器

13SA010出土土器（Fig. 41）

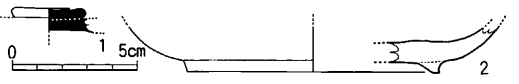


Fig.41　13SA010積土中出土土器実測図（1/3）

須恵器

蓋c（1）　ボタン状を呈する摘みで、径2.9cm。

土師器

椀c（2）　高台径10.0cm。表面が風化しているため調整は不明。色調は淡赤褐色を呈する。

井戸出土土器

13SE005灰色粘土層出土土器（Fig.42、 Pla.41）

土師器

小皿a（1）　口径9.0cm、器高1.4cm、底径7.5cm。底部は糸切りで板状圧痕が遺る。

坏a（2）　口径12.2cm、器高2.3cm、底径10.3cm。底部は糸切りで板状圧痕が遺る。

龍泉窯系青磁

椀（3～6）

3はI-2類、4はI-4類、5・6はI-5-b類。

13SE005腐食土層出土土器

(Fig.42、Pla.41)

土師器

小皿a（7・8）

口径9.4・9.6cm、器高1.1・0.9cm、底径7.5・7.4cm

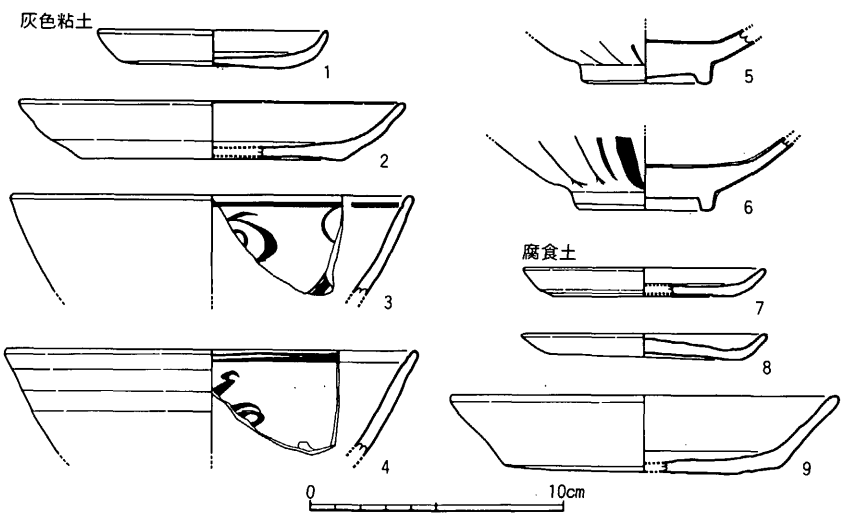


Fig.42　13SE005出土土器実測図（1/3）

を測る。両者とも底部は糸切りである。

坏a（9）　口径15.2cm、器高3.0cm、底径10.6cm。底部は糸切りで板状圧痕が遺る。

溜まり状遺構出土土器

13SX030上面出土土器（Fig.43、 Pla.42）

白磁

椀（1・2）　1はIV類の口縁部片、2はV-1類である。

高麗青磁

椀（3）　口径12.5cm。釉は淡黄茶色に発色する。初期高麗青磁のIII類とみられる。

陶器

鉢（4）　IV類とみられる。口縁部外面に目跡が観察される。

13SX030黒茶色土層出土土器（Fig. 43、Pla.42）

土師器

坏a（5）　口径12.8cm、器高2.2cm、底径8.0cmを測る。底部はヘラ切りされる。

瓦器

椀c（6）　高台径6.2cm。体部の内外面ともにミガキcを施す。

白磁

椀（7・8）　7は口径14.2cmでV-3類。8は口径16.2cmで口縁部を薄い玉縁状に作る。II-5類。

越州窯系青磁

椀（9）　II-2類。底部には施釉されない。見込み部分に目跡が観察される。

高麗青磁

椀（10）　高台径5.4cm。釉は明黄茶色に発色。畳付けの釉は概ね拭き取られており、目跡が認められる。目跡は4箇所に復原できそうである。見込みに目跡は存在しない。初期高麗青

磁のIII類とみられる。

13SX030明茶色土層出土土器（Fig.43、Pla.42）

土師器

坏a（11）　口径11.2cm、器高2.6cm、底径6.6cmを測る。底部はヘラ切りされる。

椀c（12・13）　12は口径12.6cm、器高5.1cm、高台径7.4cmを測る。体部は直線的で、底部はヘラ切りされる。13は高台径7.2cm。

越州窯系青磁

椀（14）　I類の口縁部片。

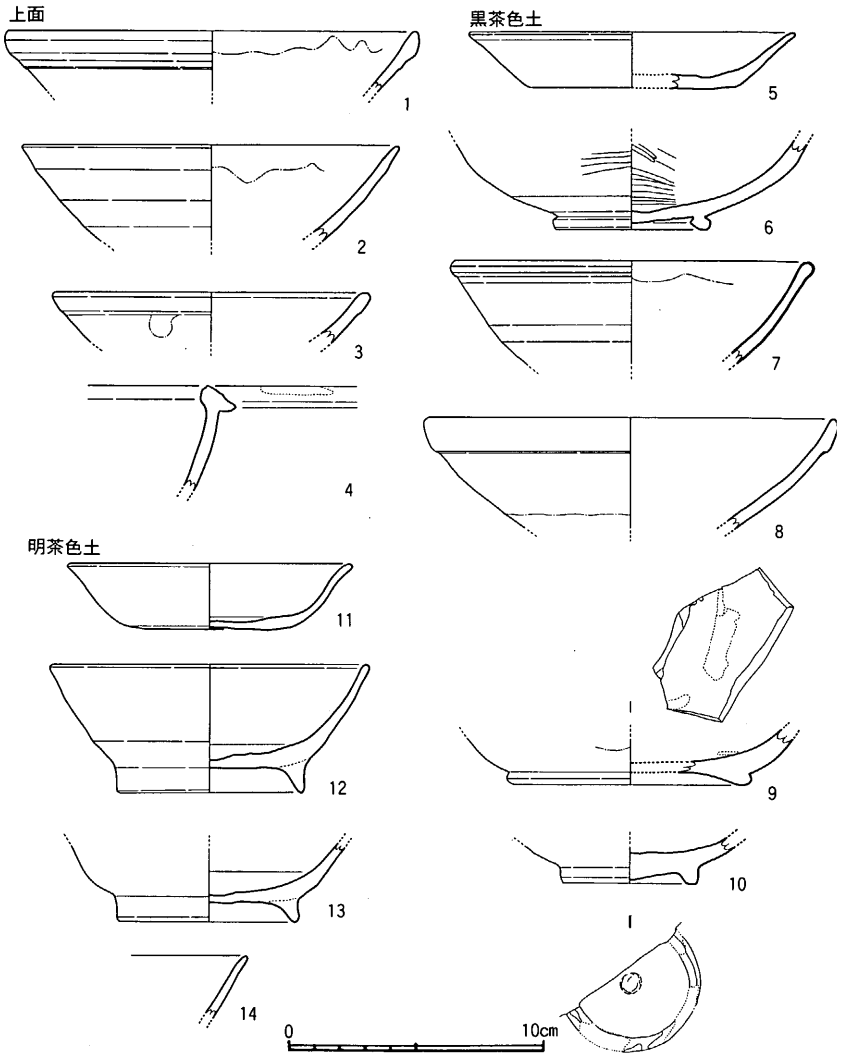


Fig.43　13SX030出土土器実測図（1/3）

溝状遺構出土土器

13SX001出土土器（Fig. 44、Pla.41）

土師器

坏a（3）　口径11.0cm、器高3.2cm、底径7.3cm。底部はヘラ切りとみられる。

越州窯系青磁

椀（4）　I-1-a類。底径5.5cmの蛇目高台で、畳付けに目跡が観察される。

その他の遺構出土土器

13SX002出土土器（Fig.44）

土師器

鍋（1）　口径23.0cm程度に復原される。内面は横方向の刷毛目調整で、外面は口縁部付近がヨコナデ、下半は指圧痕が認められる。外面には煤が付着している。

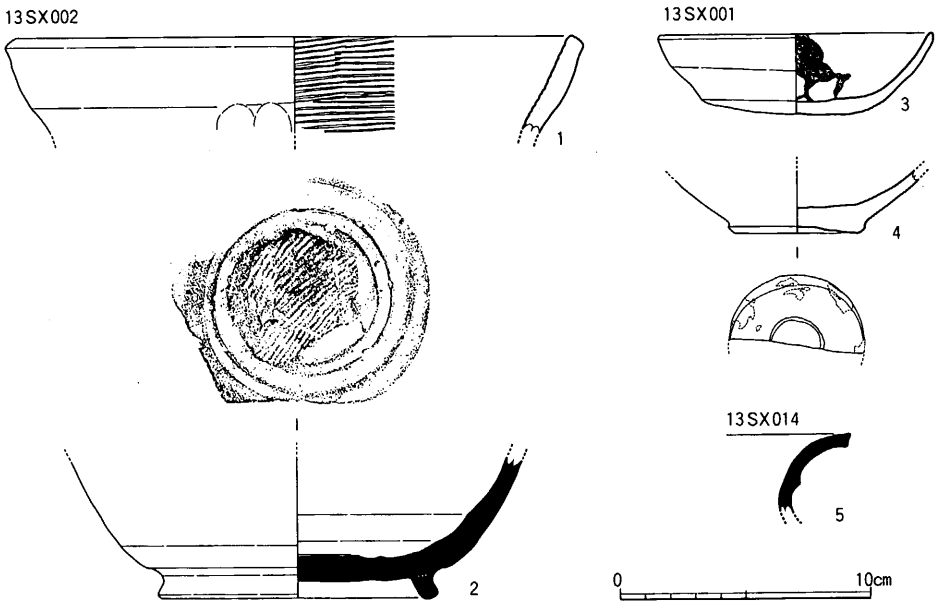


Fig.44　13SX001・002・014出土土器実測図（1/3）

須恵器

壷（2）　高台径11.1cm。外面は回転ヘラ削り、内面はヨコナデで仕上げられるが、内面底部中央には叩きとみられる痕跡が認められる。

13SX014出土土器（Fig.44、Pla.41）

須恵器

壷（5）　口縁端部のみの小片。内外面ともにヨコナデで仕上げられる。初期須恵器の範疇で捉えられる資料の可能性がある。

13SD012出土土器（Fig. 45、Pla.42）

陶器

椀（1）　高台径4.6cm。体部から高台にかけて黒褐色の釉がかかる。天目であろう。

13SD023出土土器（Fig. 45）

土師器

小皿a（3）　口径9.8cm、器高1.3cm、底径8.0cm。底部は糸切りで板状圧痕が遺る。

13SX024出土遺物（Fig.45）

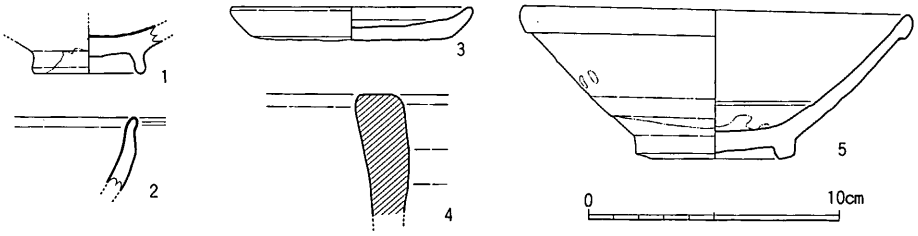


Fig.45　第13次調査その他の出土遺物実測図（1/3）

滑石製品

鍋（4）　小片資料。外面に煤が付着している。

13SD026出土土器（Fig. 45、Pla.42）

陶器

椀（2）　口縁部の小片資料。内外面ともに透明度の低い暗黒褐色の釉がかかるが、口縁部付近は暗茶色に発色する。天目であろう。

暗茶色土層出土土器（Fig. 45、Pla.42）

白磁

椀（5）　口径15.8cm、器高6.1cm、高台径6.3cmを測る。IV-2-a類。

金属製品

銅製印章（Fig.46、Pla.43）　印面の周囲をすべて失っており、鈕の先端も欠失している。現存する印面の長さは3.3cm、幅は2.7cm、残存する高さは2.6cmを測る。印面の文字は「高」一字で、文字部分の彫り込みは3mm程度と深めである。鈕は残存する部分から推定して鶏頭鈕であったとみられ、径4mm程度の穿孔がある。印台斜面部分には印の方向を示す刻印などは見当たらない。なお印

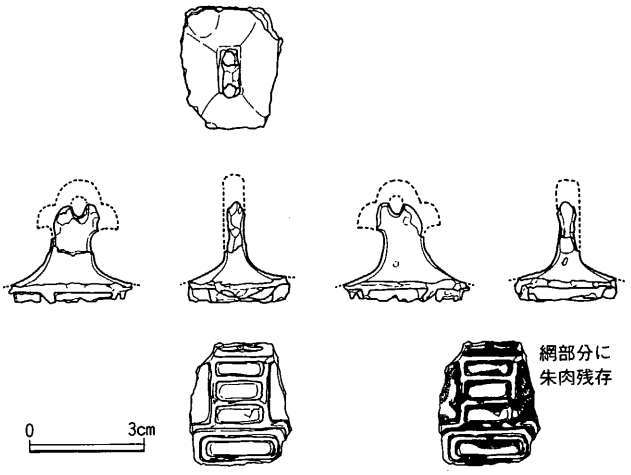


Fig.46　13SX030出土銅印実測図（1/2）

Tab.10　第13次調査 軒丸瓦出土地点一覧表

遺構名 / 図版番号	表土	暗茶色土	13SX001 茶色粘土	13SX001	13SX002	13SE003	13SE005 灰色粘土	13SE005	13SK015	13SD026	13SX030 上面	13SX030 明茶色土	13SX030 黒茶色土	小計
1				2										2
2			1	3						2		6	1	13
3					1									1
4								1						1
5												1	2	3
不明		1	2	1							1	4	1	10
小計	0	1	3	6	1	0	0	1	0	2	1	11	4	30

Tab.11　第13次調査 軒平瓦出土地点一覧表

遺構名 / 図版番号	表土	暗茶色土	13SX001 茶色粘土	13SX001	13SX002	13SE003	13SE005 灰色粘土	13SE005	13SK015	13SD026	13SX030 上面	13SX030 明茶色土	13SX030 黒茶色土	小計
6							1					1		2
7	1	1	2	3		2					1	2		12
8					1				1					2
9			1		1	1						2		5
10						1								1
11					1									1
12					1									1
13			1											1
不明	2		1	1						1	2	5	4	16
小計	3	1	5	4	4	4	1	0	1	1	3	10	4	41

面の深い部分に赤色顔料が残存している。13SX030黒茶色土層出土。国分寺に関係する人物の私印であろうか。

太宰府市内では、「御笠団印」「遠賀団印」をはじめ、御笠川南条坊遺跡から出土した「佐伯万善」印につづいて4例目の銅印で、大宰府史跡第170次調査出土の木製のものを加えると5例目の印章ということになる。

瓦類

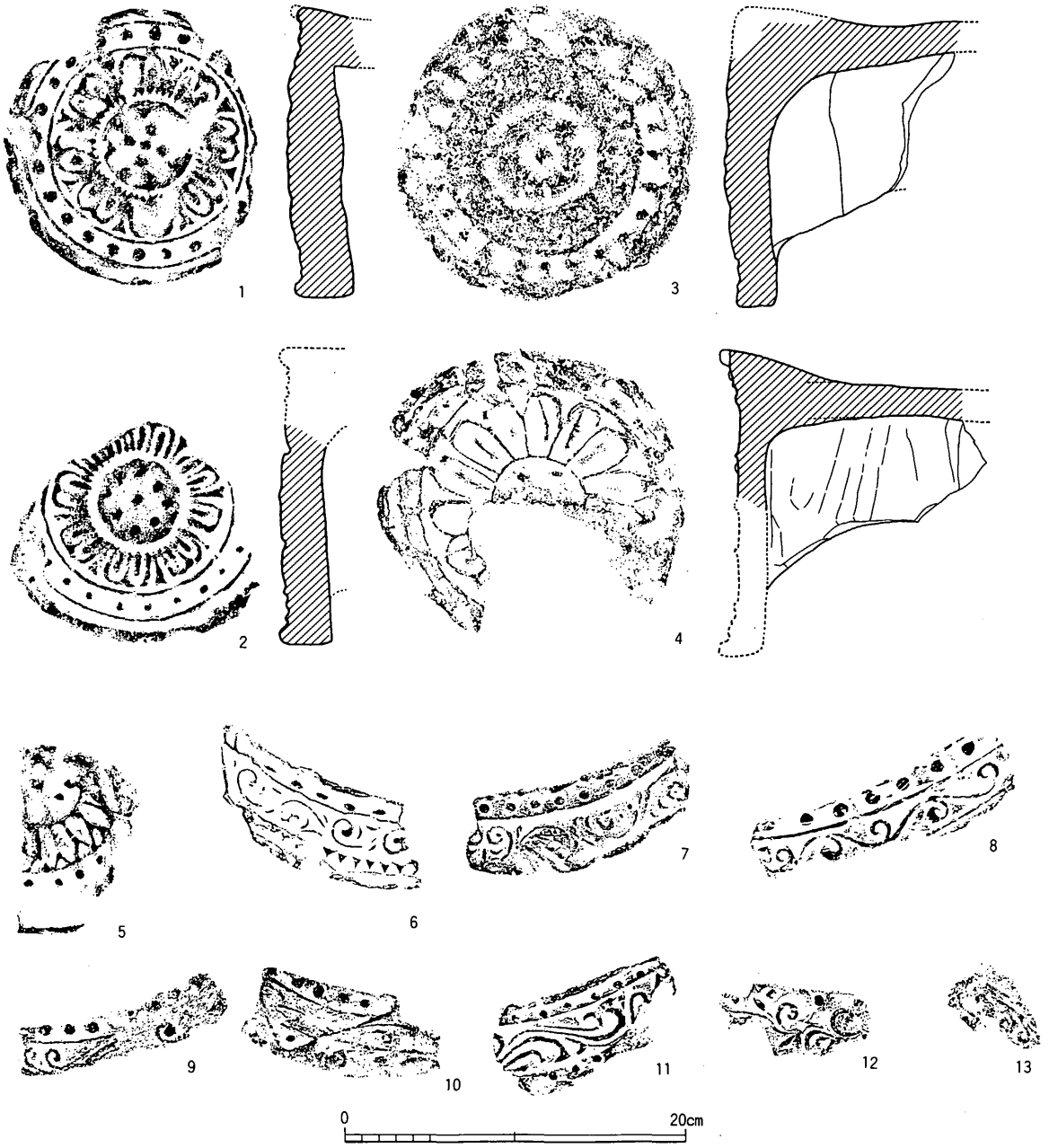


Fig.47　第13次調査出土軒瓦実測図及び拓影（1/4）

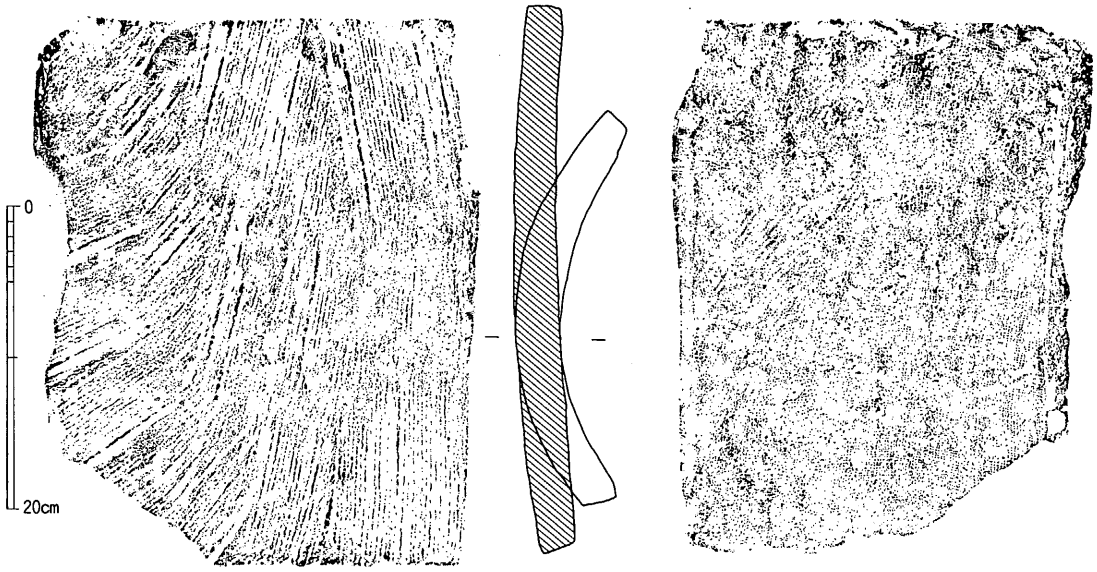


Fig.48　第13次調査出土平瓦実測図及び拓影（1/5）

軒丸瓦（Fig.47、Pla.43、Tab.10）

1は鴻臚館式である。2はその系譜上に位置づけられるもので、筑前国分寺の創建瓦と考えられている。弁の一つが単弁になるのが特徴である。3は表面が著しく風化して判別しにくいが、複弁蓮華文とみられる。4は単弁蓮華文である。5は細単弁二十一葉蓮華文である。

軒平瓦（Fig.47、Tab.11）

6は鴻臚館式、7は鴻臚館式で軒丸瓦の2に伴うものである。9は老司II式とみられる。

文字瓦（Tab.12）

Tab.12に示すとおりで、「介」が最も多い。

平瓦（Fig.48）

凸面は縄目叩き、凹面は布目が顕著に観察されるとともに、模骨痕及び粘土板の糸切り痕が

Tab.12　第13次調査出土文字瓦一覧表

出土位置／分類	I-7-b 平井	I-8-b 平井	II-6 佐	II-5 佐	II-7-a 佐	III-7 賀茂	IV-4 安	VI-4 筑	XII 介	XX 国？	不明	遺構別小計
13SD001		1	1						9	1		12
13SD001灰色粘土									1			1
13SX002								1	5			6
13SE005灰色粘土	1	1			1				2			5
13SE005腐食土						1			1			2
13SD026							1		2		1	4
茶色粘土									4			4
暗茶色土									7			7
表土	2	6	3	7					13		2	33
分類別小計	3	8	4	7	1	1	1	1	44	1	3	74
分類別割合（%）	4.05	10.81	5.41	9.46	1.35	1.35	1.35	1.35	59.46	1.35	4.06	100

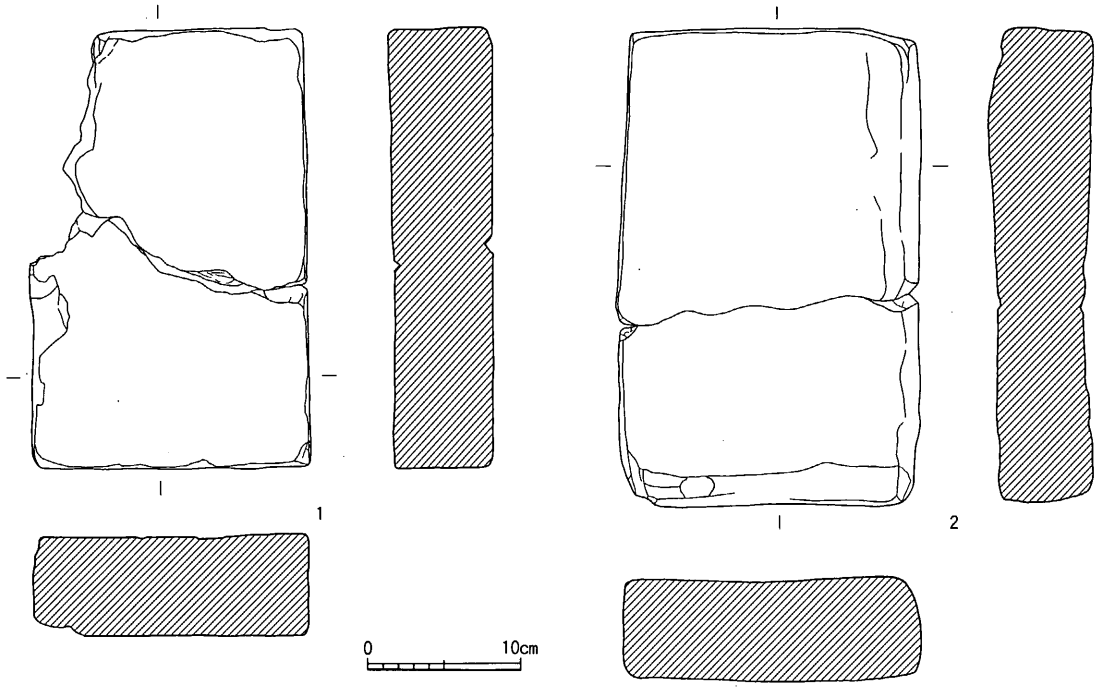


Fig.49　第13次調査出土無文塼実測図（1/5）

観察される。13SX001出土。

無文塼（Fig.49、Pla.43）

1は長さ29.0cm、幅18.5cm、厚さ6.5～6.9cm。2は長さ31.5cm、幅19.5cm、厚さ5.5～6.7cm。いずれも13SK015出土。

4．小結

主要な遺構について簡単に検討し、まとめとしたい。

掘立柱建物13SB020　3間×2間で中央間が広い建物の例は、近接した遺跡で筑前国分尼寺跡4SB001がある。この遺構は他の地点での調査成果と併せて筑前国分尼寺の南門と推定した。今回の場合、建設場所が回廊に近接した位置にあることから門の可能性はきわめて低く、他の性格の建物と考えざるを得ない。

さて、平面プランのみでみれば法隆寺西院の経蔵と鐘楼がある（沢村仁『奈良六大寺大観法隆寺一』1972　岩波書店）。両者とも中央間がやや広く門以外の建物では有力な候補である。しかし、13SB020の位置は回廊にかなり近接していることと、東西方向の軸線は塔よりも南にくる点で、これまでの日本における古代寺院の伽藍配置ではこうした性格の建物を想定するにはやや難があると言わざるを得ない。なお13SB020が東西棟であるのに対して、法隆寺例は伽藍の配置に併せて南北棟となっている点も異なっている。

また、寺院の伽藍内においてこのような近接した位置に建物を持つ例はほとんどないが、「額田寺伽藍並条里図」（8世紀中葉）では伽藍地の東に正倉が描かれている（東京大学史料編纂所『日本荘園絵図聚影三　近畿二』1996　東京大学出版会、山口英男「大和　b 額田寺伽藍

並条里図」『日本古代荘園図』1996　東京大学出版会)。主要伽藍内に正倉が位置するのは特異な在り方（服部伊久男「額田寺と条里」『条里制研究』10号　1994　条里制研究会）とされているように極めて珍しいが、このような配置は現在の唐招提寺にも見られる。主要伽藍地の東で、現在の東室の東隣接地に3×3間の総柱形式の建物が2棟認められる（鈴木嘉吉『奈良六大寺大観　唐招提寺一』1969　岩波書店)。しかしこの建物は新田部親王の旧宅にあったものを移転したとされることから、当初の伽藍配置計画に存在していたかどうかはわからないが建物自体は奈良時代のものであり、また『招提寺建立縁起』に記載される3棟の倉の2棟と考えられていることからすると、創建当初を含めた早い段階からこの位置にあったものとみられる。

こうした状況とともに、筑前国分寺では主要伽藍を形成する建物はすべて礎石建物であるのに対して13SB020は掘立柱建物であること、建物の振れが国分寺中軸線に対してわずかながら西に偏していることなどから、伽藍を形成する仏舎ではなく、正倉とは断言できないものの伽藍に付随する倉庫的建物と考えるのが現状では最も妥当かと考える。

築地13SA010　国分寺の南辺を限る築地と考えられる。構造的にみると寄柱の痕跡が認められないことや、積土の版築状況に粗さが目立つなど土塁的な形状を呈していた可能性も考えておかねばならない。

さて、建設時期を知る具体的な資料は乏しいが、積土中から出た少ない出土遺物をみると概ね8世紀後半の範囲内で捉えられそうである。この遺構の振れはN-91°59′-E（E-1°59′-S）で国分寺中軸線の振れ（N-2°-E）にきわめて近く、中枢伽藍と同一設計上に計画されたものとみられよう。また中軸線を推定するデータとして活用している国分寺講堂中心からの南北距離は、築地の推定中心で小尺（0.297m±0.001m）の415尺である。

井戸13SE005　出土遺物に龍泉窯系青磁を含んでおり、12世紀後半以降に位置づけられる。

不明遺構13SX002　検出状況から性格を検討することは極めて難しいが、敢えて行うならば、築地遺構基底部北端から緩やかに南に傾斜する底部を有して穿たれていること、埋土中に大形の礫が多量に混在すること、13SX001溝状遺構東半部がこの付近で最も低いことなどから、当初は築地の下を通過する暗渠であった可能性を考えておきたい。礫の混入は暗渠遺構の破壊によるものと想定しているが、その時期は中世まで下る。

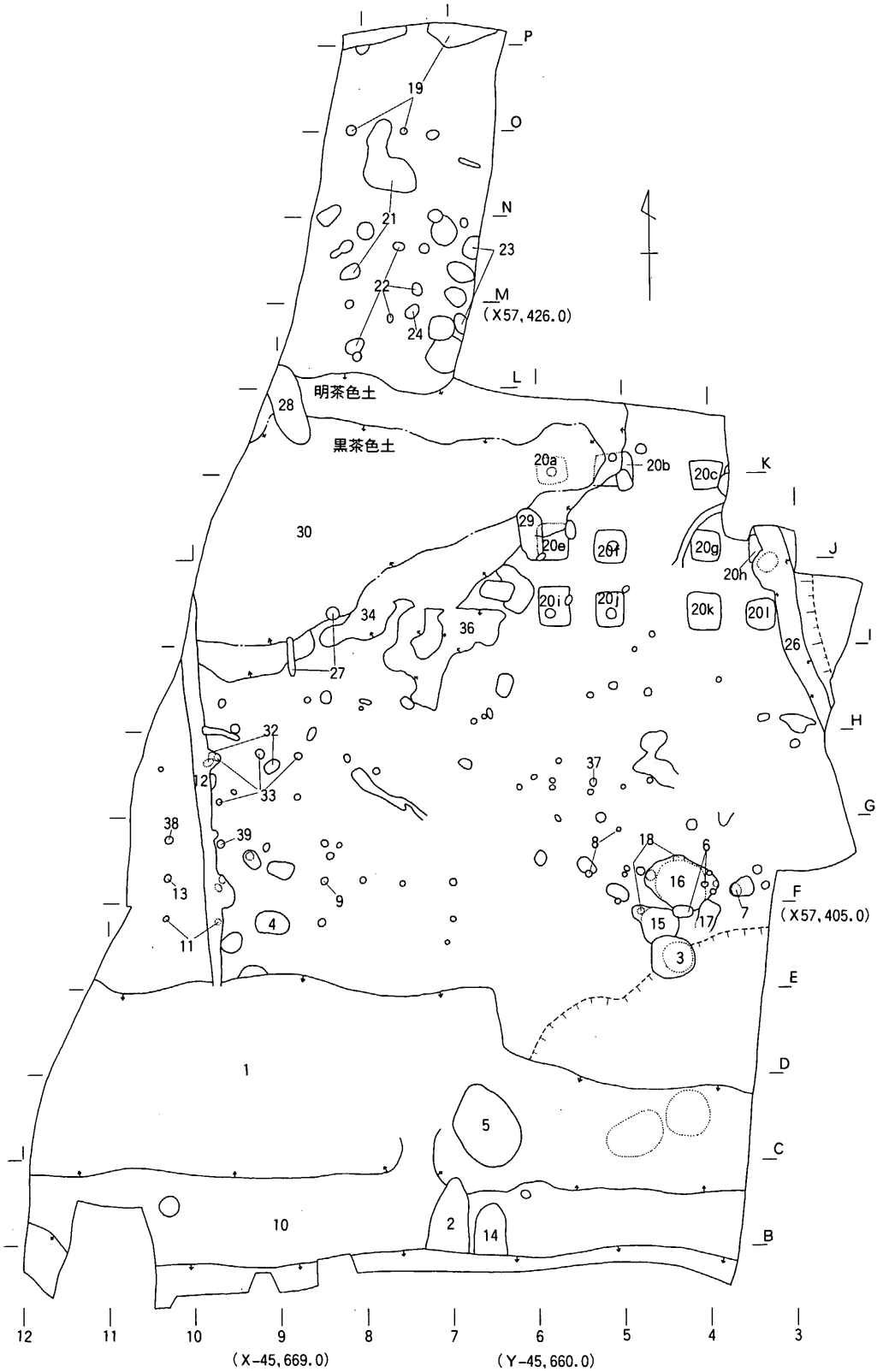


Fig.50　第13次調査検出遺構略測図

筑前国分寺跡第13次調査 遺構番号台帳

S－番号	遺構番号	種別		古→新	地区
1	13SX001	大溝（窪み）	淡茶色粘土埋土		CDライン
2	13SX002	暗渠？	上方から撹乱される。人頭大石多量混入	10→2	B7
3	13SE003	井戸	茶灰色粘土埋土		E4
4		ピット	明茶色粘土埋土。東側オーバーハング		E9
5	13SE005	井戸	灰色粘土埋土	1→5	C6
6		ピット群			EF4
7		ピット			F3
8		ピット群			F5
9		ピット	13SB025・13SA035に関連するピット		F8
10	13SA010	築地	やや粗い版築状の積み土		Bライン
11		ピット			E9.10
12	13SD012	溝	新しい		EF9
13		ピット	13SB025を形成するが、埋土軟らかい		F10
14	13SX014	ピット		10→14	B6
15	13SK015	土壙	井戸の可能性あり	15→3？	E4
16	13SE016	井戸			F4
17		窪み			E4
18		ピット群			EF4
19		ピット群			0以北
20	13SB020	掘立柱建物	南北2間×東西3間		I3ほか
21		撹乱			MN 7.8
22		ピット群	新		LM7.8
23		ピット群	新、木の根？		LM6
24		ピット	新		L7
-	13SB025	掘立柱建物	S-9・11・13・38・39他で構成される		F10ほか
26	13SD026	溝	新		HIJ2.3
27		ピット	新		H18
28		窪み？	新？、床面焼けている		K8
29		土壙	新		J6
30	13SX030	溜まり状		20→30	J9ほか
31		ピット	新		K5ほか
32		ピット群	新？		G9
33		ピット群	黒色埋土		G9
34		窪み			I 7.8
-	13SA035	柵列	13SB025以東に延びる鍵型のもの		F7
36		窪み			HI 6.7
37		ピット			G5
38		ピット			F10
39		ピット			F9

Tab.14　第13次調査出土遺物一覧表

表土

須恵器	坏c、甕、蓋c3、蓋c1、蓋2
土師器	甕、破片
白磁	椀；V (1)
灰釉陶器	壺?
国産陶器	擂鉢 (1)、椀 (唐津系) (1)
肥前系磁器	染付椀 (2)
瓦類	丸瓦、平瓦、文字瓦 (I-7、I-8、II-4、II-5、II-6 XII)

暗茶色土

須恵器	甕、蓋c1
土師器	把手、坏a (イト?)、破片
龍泉窯系青磁	椀；I-5 (1)
白磁	椀；IV-1［1］
瓦類	丸瓦、平瓦、文字瓦 XII
石製品	滑石製石鍋片

茶色粘土

土師器	坏c、破片
瓦類	文字瓦 XII

S-1 (13SX001) 茶色粘土

土師器	椀c
越州窯系青磁	椀；I-1a (1)
瓦類	文字瓦 XII

S-1 (13SX001) 上面

須恵器	甕
土師器	甕
国産陶器	破片
弥生土器	破片
瓦類	丸瓦、平瓦

S-1 (13SX001) 凹み

瓦類	破片 (縄目叩)

S-1 (13SX001)

須恵器	壺、蓋、蓋c、甕、長頸壺、坏c
土師器	高台片、坏、坏a、坏c、椀c、大皿c
越州窯系青磁	椀；I (1)
瓦類	破片 (格子叩)、文字瓦 (I-8、II-6、XII、XX)
石製品	安山岩

S-2 (13SX002)

須恵器	甕、蓋c、坏c (イト)、壺
土師器	甕、鍋、坏、破片
黒色土器B	破片
龍泉窯系青磁	椀；I-2 (1)、破片 (1)
瓦類	鬼瓦、軒平瓦、文字瓦 (VI-4、XII)、破片

S-3 (13SE003)

須恵器	壺
瓦類	無文

S-4

瓦類	破片

S-5 (13SE005) 腐食土

土師器	小皿a (イト)、坏a (イト)
白磁	椀；破片 (1)
中国陶器	盤I (鉄絵) (1)、壺IV? (1)
瓦類	文字瓦 III-7、XII

S-5 (13SE005) 灰色粘土

須恵器	甕
土師器	小皿a (イト)、坏a (イト)
龍泉窯系青磁	椀；I-5b (2)、I-4 (1)、I-2 (1)、I (1)
白磁	椀；V-1×VIII-2 (1)、破片 (2)
中国陶器	盤I (鉄絵) (2)、壺IV? (3)
瓦類	文字瓦 (I-7、I-8、II-7、XII)

S-6

瓦類	破片

S-7

土師器	破片
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片

S-8

土師器	破片
瓦類	破片

S-9

瓦類	破片 (縄目叩)

S-10 (13SA010) 積土

須恵器	甕、坏c、蓋c
土師器	甕、椀c
瓦類	破片 (縄目叩)

S-11

土師器	破片
瓦類	破片

S-12 (13SD012)

白磁	椀；IX? (1)
青白磁	合子蓋? (1)
中国陶器	椀 (黒釉) (1)
瓦類	破片 (格子叩)

S-13

瓦類	破片

S-14 (13SX014)

須恵器	坏c、壺、破片
土師器	破片
瓦類	破片

S-15 (13SK015) 上面

瓦類	平瓦 (縄目叩)

S-17

瓦類	文字瓦

S-18

瓦類	破片 (縄目叩)

S-19

土師器	破片
瓦類	破片(格子叩)

S-20 a (13SB 020a) 柱痕

土師器	破片
瓦類	破片

S-20 b (13SB 020b)

須恵器	破片

S-20 e (13SB 020e) 抜き取り穴

瓦類	破片 (格子叩)

S-20 f (13SB 020f) 柱痕

土師器	破片

S-20 f (13SB 020f)

須恵器	甕

S-20 g (13SB 020g)

須恵器	甕

S-20 i (13SB 020i)

須恵器	甕

S-20 j (13SB 020j) 柱痕

須恵器	破片
土師器	破片

S-20 k (13SB 020k)

瓦類	破片

S-20 l (13SB 020l) 抜き取り穴

瓦類	破片

S-21

土師器	破片
瓦類	破片

S-22

土師器	甕、破片
瓦類	破片

S-23

土師器	小皿a (イト)、破片
瓦類	破片

S-24

土師器	破片
石製品	滑石製石鍋

S-26 (13SD026)

土師器	破片
中国陶器	天目椀 (黒釉) (1)
	近世破片 (1)
瓦類	文字瓦(II - 4、IV - 4、XII)、軒丸瓦、軒平瓦

S-27

土師器	破片
瓦類	破片

S-28

須恵器	甕
土師器	椀c、坏a、甕

※全ての遺物はS-30からの混入らしい

S-29

瓦類	無文　　鬼瓦

S-30 (13SX030) 明茶色土

須恵器	甕、蓋3
土師器	坏、坏a、甕、椀c
越州窯系青磁	椀；I？(1)
白磁	椀；V～VIII (1)
瓦類	破片
石製品	砥石

S-30 (13SX030) 上面

須恵器	坏、甕
土師器	坏a (イト)、坏c、丸坏a、椀、甕
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀；I - 5b (1)
白磁	椀；IV (2)、V-1×VIII - 2 (2)、V～VIII (1)、破片
	皿；VI -1a (1)
中国陶器	鉢 VI (1)
石製品	滑石製石鍋

S-30 (13SX030) 黒茶色土

須恵器	坏c、甕、壺
土師器	坏、坏a (イト)、坏c
瓦器	椀c
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；II - 2 (1)
高麗青磁	椀；III? (1)
白磁	椀；II - 5 (1)、V (1)、V-3 (1)、破片 (1)
瓦類	破片
金属製品	銅印「高」 (1)

S-31

瓦類	破片

S-32

土師器	破片
白磁	椀；破片 (1)

S-33

須恵器	甕
瓦類	破片

S-34

瓦類	破片

S-36

土師器	破片
瓦類	破片

S-37

瓦類	破片

S-38

瓦類	破片

S-39

瓦類	破片

国分寺13次　土器計測表

Tab.15　第13次調査出土土器計測表

13SA010積土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・椀c	1	002	2	—	2.9+	10.0		

13SE005

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a (イト)	1	004	1	9.0	1.4+	7.5	○	○
(ヘラ)	2	001	7	9.4	1.1	7.5	○	
(イト)	3	002	8	9.6	0.9	7.4	○	○
土・坏a (イト)	1	005	2	15.2	2.3	10.3	○	○
(イト)	2	003	9	15.2	3.0	10.6	○	○

13SX001

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a (ヘラ)	1	001	3	11.0	3.2	7.3		

S-23

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a (イト)	1	001	3	11.0	3.2	7.3	○	○

黒茶色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a (ヘラ)	1	001	5	12.8	2.2	8.0	○	
瓦器・椀c (イト)	1	002	6	—	3.4+	6.2		

明茶色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a (ヘラ)	1	001	11	11.2	2.6	6.6	○	
土・中椀c (ヘラ)	1	002	12	12.6	5.1	7.4	○	
	2	004	13	—	3.0+	7.2		

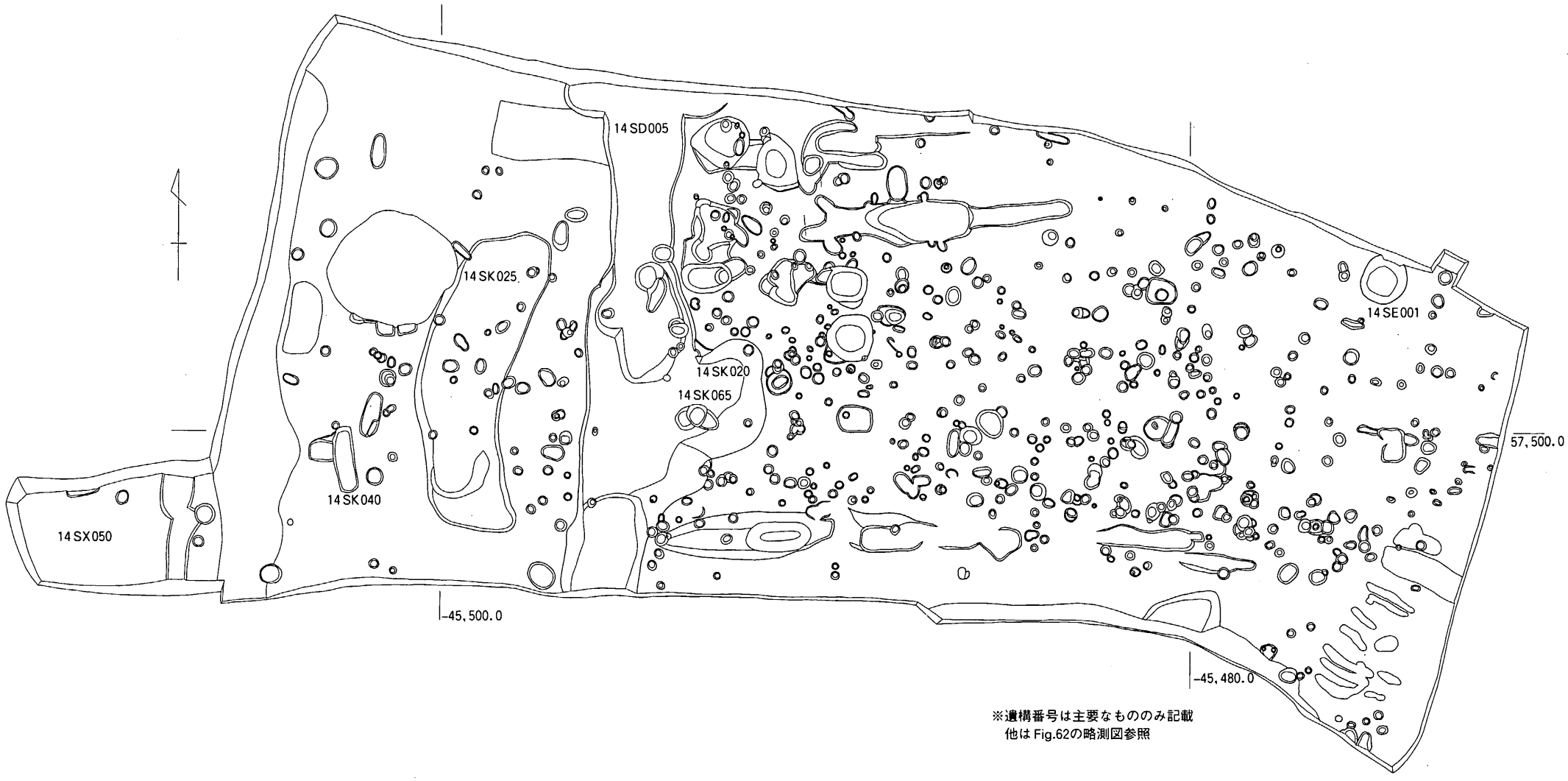


FIg.51　第14次調査上層遺構配置図（1/150）

(4) 第14次調査

調査地は、太宰府市大字国分字堀田659-2、660-2、661に所在する。住宅建築に先立つ事前調査として、平成3（1991）年5月31日から9月24日まで実施した。開発対象面積は641m²、調査面積は463m²で、調査は狭川真一・塩地潤一が担当した。

1．層位など

調査区の東半分（Y-45,490.0付近以東）では、表土を除去するとすぐに地山（明黄茶色土）が検出され、遺構のすべてはこの地山に直接穿たれるかたちで検出された。西半分では黄茶色土の整地（14SX050）が広がり、古代末から中世の遺構はこの整地の上から切り込む形で検出された。整地を除去すると地山があらわれ、これに直接穿たれる遺構も若干検出された。

調査区全体では明確な包含層は検出されなかったが、遺構面検出段階で出土した遺物群については茶色土として取り上げている。したがってこの名称の明確な層位が存在するわけではない。なお茶色土出土とした遺物は、本来は表土ないしは一部の遺構に帰属するものとみなされる一群である。

2．遺構

柵列

14SA070（Fig.53、Pla.48、Tab.16）　整地遺構14SX050を除去した下層から検出された。検

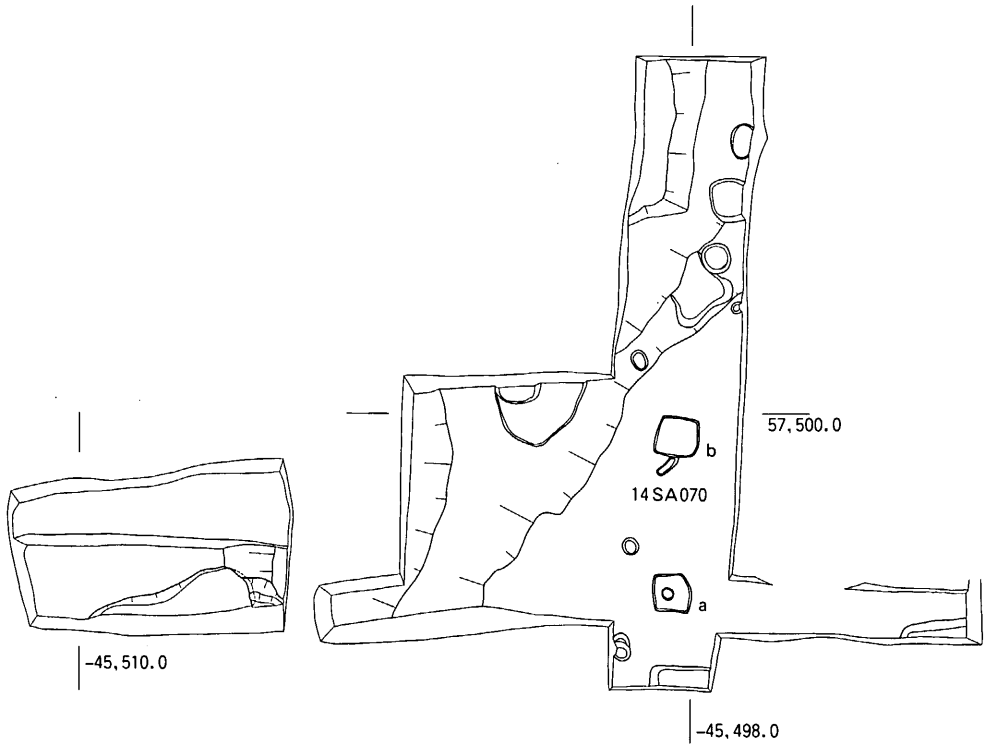


Fig.52　第14次調査下層遺構配置図（1/150）

Tab.16　14SA070座標一覧

遺構番号	計測位置	X座標	Y座標	計測資料
14SA070a	任意中心	57,499.58	-45,498.25	1/50編集図
14SA070b	柱痕中心	57,496.47	-45,498.45	1/50編集図

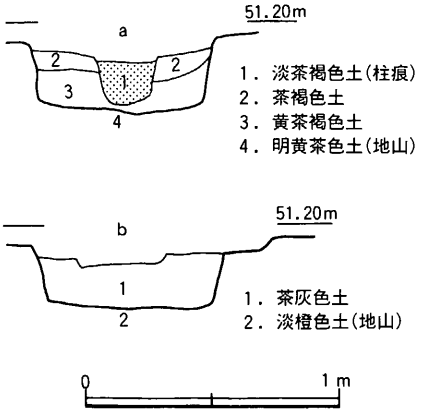


Fig.53　14SA070柱掘り方
土層観察図（1/30）

出した掘り方は2基にとどまり、全体の規模等は明らかではない。掘り方は略方形で一辺0.75～0.88m、深さ0.25～0.30m程度である。南側の掘り方（b）には柱痕跡が認められ、その径は0.24mである。北側の掘り方（a）にも検出段階では柱痕跡とみられるものが認められたが、断面観察では特定できなかった。この柱痕跡と推定する部分の心心距離は3.12mで、振れはN-3° 40′ -E程度である。なお掘り方b下面からピットを検出しているが、この掘り方に伴うかどうかは明らかではない。

溝

14SD005（Pla.46）　幅1.6～2.1m、深さは北側で0.1m、南側で0.45mを測る、北側の一部を段落ち状の遺構で失うが、長さ12.7m分を検出した。溝の大半は残りが悪く浅いが、南側2.5m分は深く明瞭である。中央付近では14SK020・065に切られている。埋土の主体は茶灰色粘土で特にきわだった堆積状況を示していない。なお溝の心心から得られる振れは、N-5° 18′ -E程度である。

井戸

14SE001　1.2×1.3mで略円形のプランを有し、深さは0.9mを測る。埋土は上面の黒灰色土を除去すると暗灰色粘土が主体となる。この層の中には礫が多量に混入している。

土壙

14SK020　14SK065に切られる。長さ3.1m、幅1.5m以上、深さ0.37m程度である。

14SK025　長さ8.1m、幅2.35m、深さ0.1m前後のやや弓なりになった形状を呈する土壙である。埋土は淡茶灰色土の単一層である。埋土除去後に複数のピットを検出しているが土壙とは無関係と判断している。

14SK040　長さ1.77m、幅0.57m、深さ0.15mで、隅丸長方形を呈する。

14SK065　14SK020及び14SD005を切っている。1.91×2.30mで不整円形を呈する。深さは0.1mに満たない。埋土は暗灰色土の単一層である。

その他の遺構

14SX010　直径0.37m内外、深さ0.13mのピットで、坩堝が出土した。

14SX016　0.21×0.26m、深さ0.25mのピットである。

14SX022　長さ2.6m、幅0.5～0.6m、深さ0.1m程度の溝状を呈する遺構である。西側のS-57

と埋土が近似する点で当初は連続する遺構であった可能性もある。

14SX024　0.3×0.45m、深さ0.25mのピットである。

14SX037　長さ7.3m、幅0.6～1.1m、深さ0.1～0.25mの溝状遺構である。埋土は茶褐色土。検出状況で浅い部分をS-54として記録しているが、一連のものである。14SX022及びS-57に並行しているようで、その心心距離はおよそ8.5mである。

14SX046　直径0.33m、深さ0.15mのピットである。

14SX050（Fig.54）　14SD005付近以西に認められる整地と考えられる。整地を構成する層は、大きく黄茶色礫層（やや北に寄った範囲に存在する）と黄茶色土からなり、前者が上に被る。いずれも多量の瓦を含んでいる。黄茶色土層の厚さは0.3～0.8mに及んでいる。西に延長したトレンチでは黄茶色土の下層にさらに厚さ0.3mの黄茶灰色土があり、これも整地の一部と考えられる。整地を除去すると地山（明黄茶色土）が検出され、柵列14SA070などの遺構はこの地山から穿たれる。

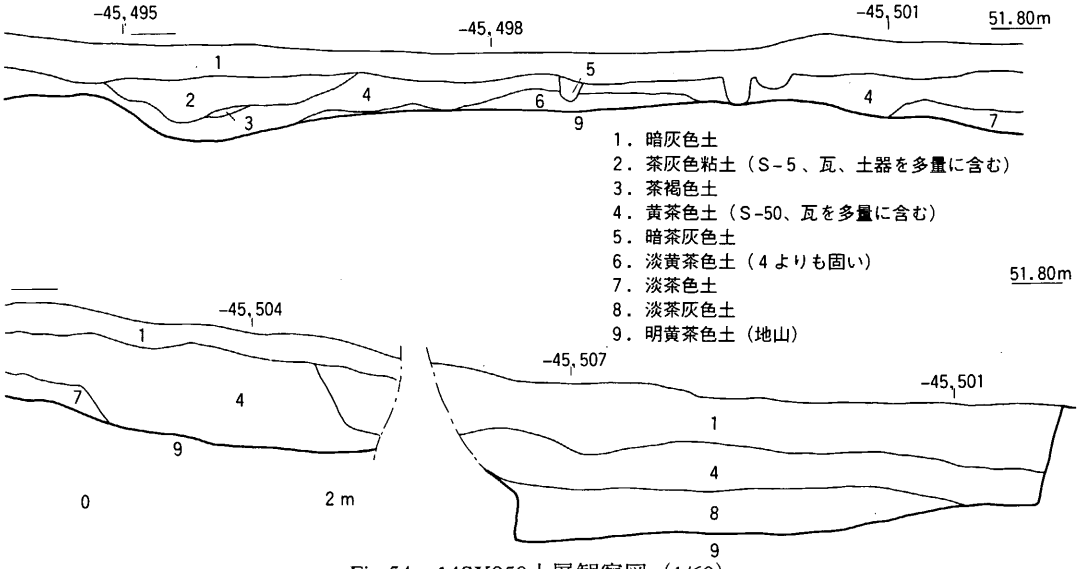


Fig.54　14SX050土層観察図（1/60）

ここに報告した以外の遺構では、調査中に認識していた掘立柱建物がある。14SE001付近に存在するS-3、S-15、S-7の一部、S-18の一部で構成されるが、整理の結果では掘立柱建物として認識すべきかどうか疑問となり、正式に報告することは見合わせた。また空中写真撮影時点で注意されたものとして、S-39・S-38などの略方形のプランを有するピットが2×3間の掘立柱建物状に確認された。整理の際に検討したが、柱掘り方が完存しないうえに各遺構の深さも一定しないので建物として報告することは見合わせた。

3．出土遺物

14SD005出土土器（Fig. 55）

土師器

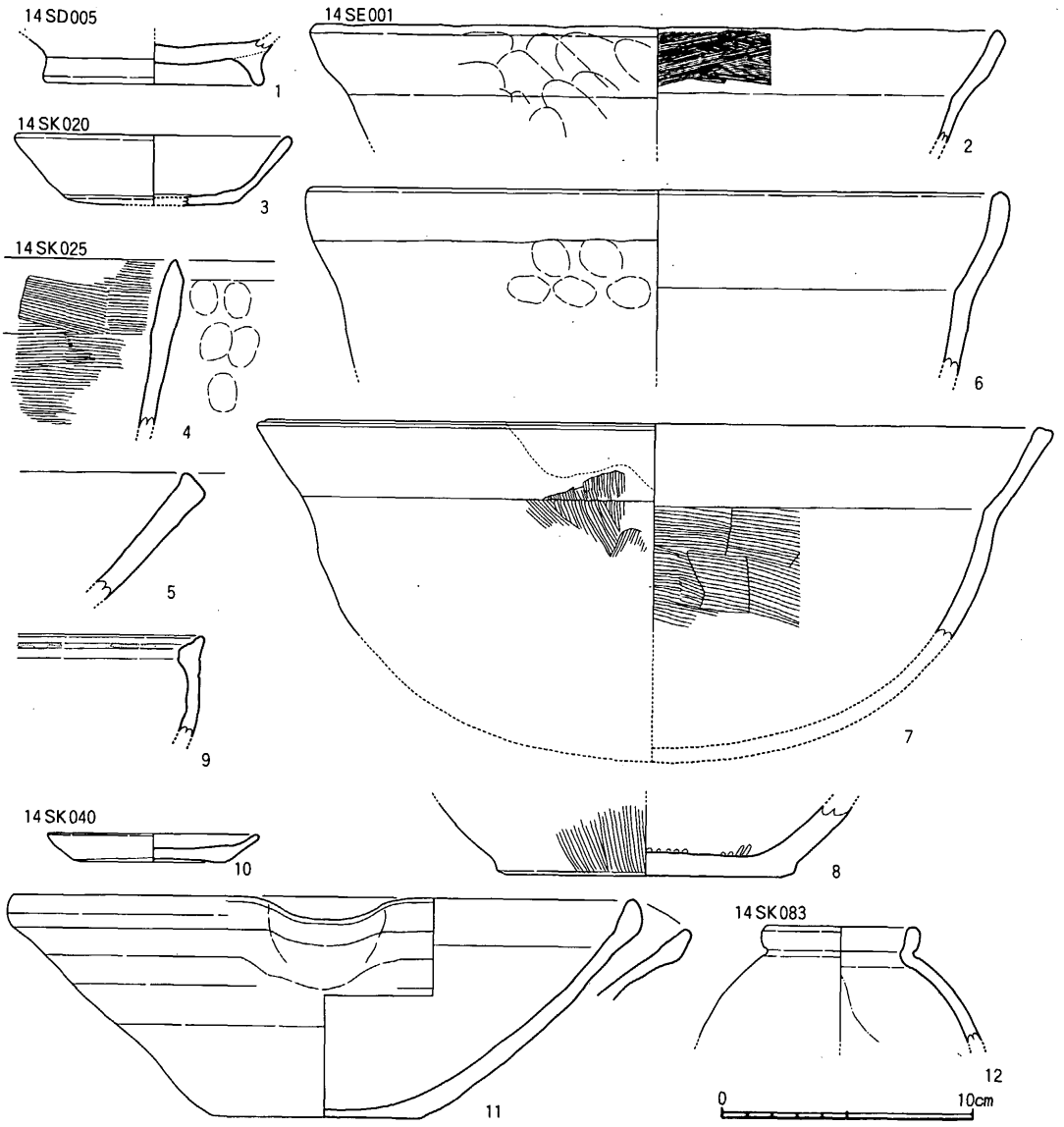


Fig.55　第14次調査各遺構出土土器実測図（1/3）

椀c（1）　高台径8.8cm。

14SE001出土土器（Fig.55）

土師器

鍋（2）　口径27.7cmに復原できる。口縁部内面は細かなハケ目調整で、外面は指圧の痕跡が明瞭である。

14SK020出土土器（Fig.55、 Pla.49）

土師器

坏a（3）　口径11.0cm、器高2.8cm、底径7.1cmを測る。

14SK025出土土器（Fig.55、 Pla.49）

土師器

鉢（4・5）　4は内面が顕著なハケ目で調整される。鍋の可能性も考えられる。5は口縁端部内側をわずかにつまみ出している。

鍋（6・7）　6は口径30.0cmに復原できる。口縁部外面から内面全体にかけてヨコナデ調整されるが、外面の屈曲部以下は指圧の痕跡が明瞭である。7は口径31.6cmを測る。口縁部内面はヨコナデ、体部内面はハケ目。外面の一部にもハケ目が認められる。

瓦質土器

擂り鉢（8）　底径12.0cm。外面は縦方向のハケ目、内面には櫛によるおろし目が施される。

陶器

鉢（9）　口縁端部は内傾し、そこに目跡が観察される。釉は口縁部内面から外面にかけて施される。III類。

14SK040出土土器（Fig.55、 Pla.49）

土師器

小皿a（10）　口径8.6cm、器高1.2cm、底径6.6cmで底部は糸切りされる。

瓦質土器

鉢（11）　口径25.8cm、器高9.0cm、底径8.7cmを測る。口縁部の一箇所を折り曲げて片口とする。

14SK083出土土器（Fig.55、 Pla.49）

陶器

壷（12）　口径6.4cm。釉は淡茶褐色に発色し、外面全体と内面の一部に施される。露胎部分は淡橙色。IV類。

14SX010出土遺物（Fig.56、 Pla.50）

生産用具

坩堝（1）　口径11.6cm、器高4.3cmを測る。口縁部の一箇所に幅1.4cm程度の注口を設ける。内面には溶解した付着物が全面に認められる。

14SX016出土土器

（Fig. 56、Pla.50）

龍泉窯系青磁

小椀（2）　口径7.7cm、器高4.0cm、高台径3.2cmを測る。外面には鎬蓮弁が施文され、高台畳付け及び底部を除いて全面に厚めの釉が施される。

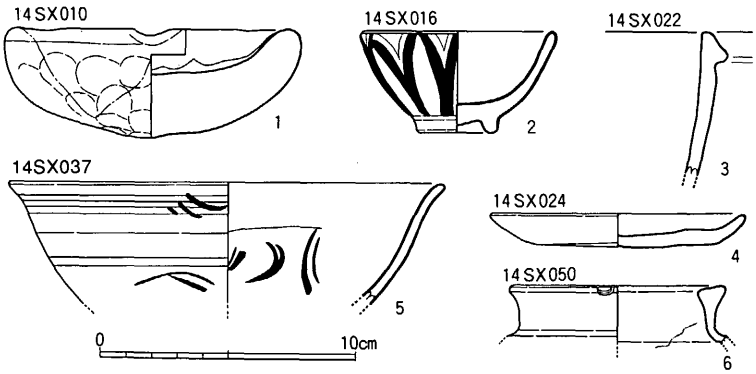


Fig.56　第14次調査その他の遺構出土土器実測図（1/3）

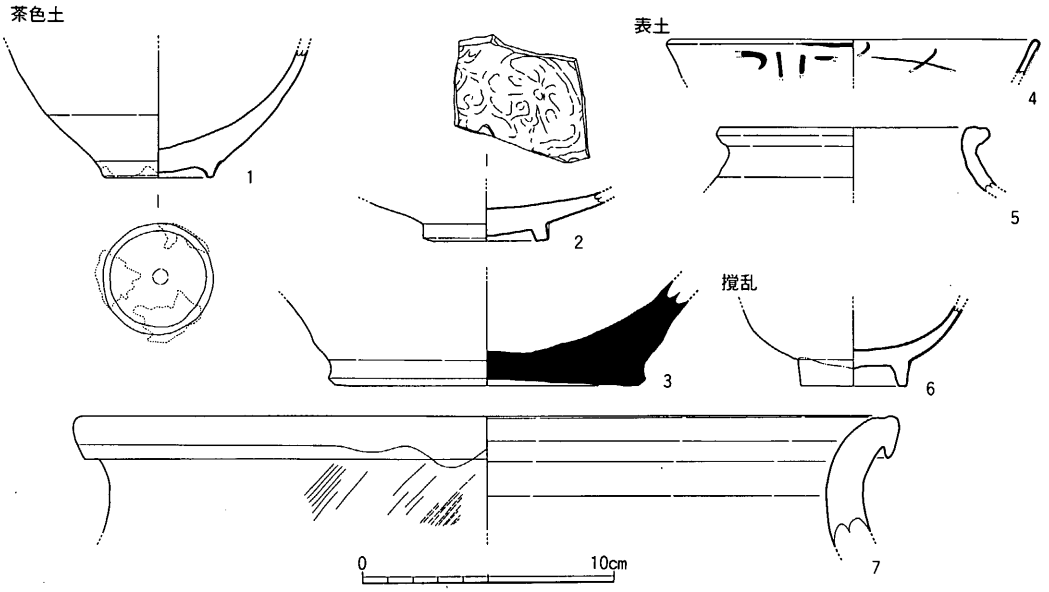


Fig.57　第14次調査各層出土土器実測図（1/3）

釉は淡緑色に発色する。

14SX022出土土器（Fig. 56）

土師器

鍋（3）　口縁端部を玉縁状につくる。

14SX024出土土器（Fig. 56、Pla.50）

土師器

小皿a（4）　口径10.3cm、器高1.3cm、底径7.0cm。底部は糸切りである。

14SX037出土土器（Fig. 56、Pla.50）

龍泉窯系青磁

椀（5）　口径7.2cm。口縁部をわずかに外反させ、体部の内外面ともにヘラによる文様が施される。釉は淡緑色に発色し、やや厚めで全体に施される。

14SX050黄茶色礫層出土土器（Fig. 56、Pla.50）

陶器

壷（6）　口径8.4cm。口縁端部に幅0.6cmほどの窪みをつくり花弁状を呈するものとみられるが、資料の残存がわるく全体を復原するまでには至らない。外面及び口縁部内面に施される釉は、くすんだ淡緑色に発色する。

なお、この資料は14SX050に調査段階で混入した資料である可能性が高い。

茶色土層出土土器（Fig. 57、Pla.50）

高麗青磁

椀（1）　底径4.4cm。畳付け付近に大きめの目跡が3箇所ある。釉は全面に施され、ふかい緑色に発色する。

枢府系白磁

皿（2）　高台径5.0cm。内面に陽刻（型による）の文様があるが、凹凸が少ないうえに釉が厚いため、きわめて不明瞭である。釉は乳白色に発色する。

須恵器

鉢（3）　底径12.6cm。底部は糸切りされる。

表土出土土器（Fig.57、Pla.50）

龍泉窯系青磁

椀（4）　口径14.8cm程度に復原される。内外面ともにヘラによる文様が認められる。

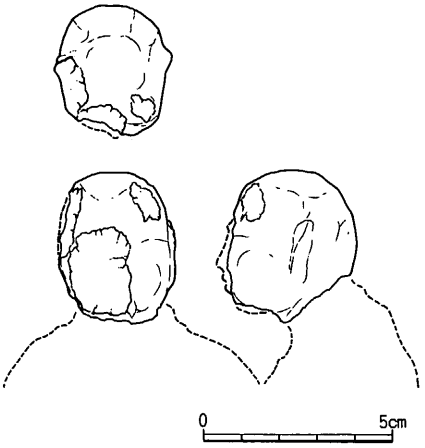


Fig.58　土製仏像実測図（1/2）

陶器

壷（5）　口径10.8cm。残存資料の範囲内では全面に施釉され、暗緑茶色に発色する。

撹乱出土土器（Fig.57）

磁器

椀（6）　高台径4.2cm。釉は内面が淡乳白色、外面が濃緑灰色に発色する。高台及び底部には施釉されない。

陶器

甕（7）　口径32.8cm。口縁部外面にわずかながら叩き痕跡が認められる。常滑産。

その他の出土遺物

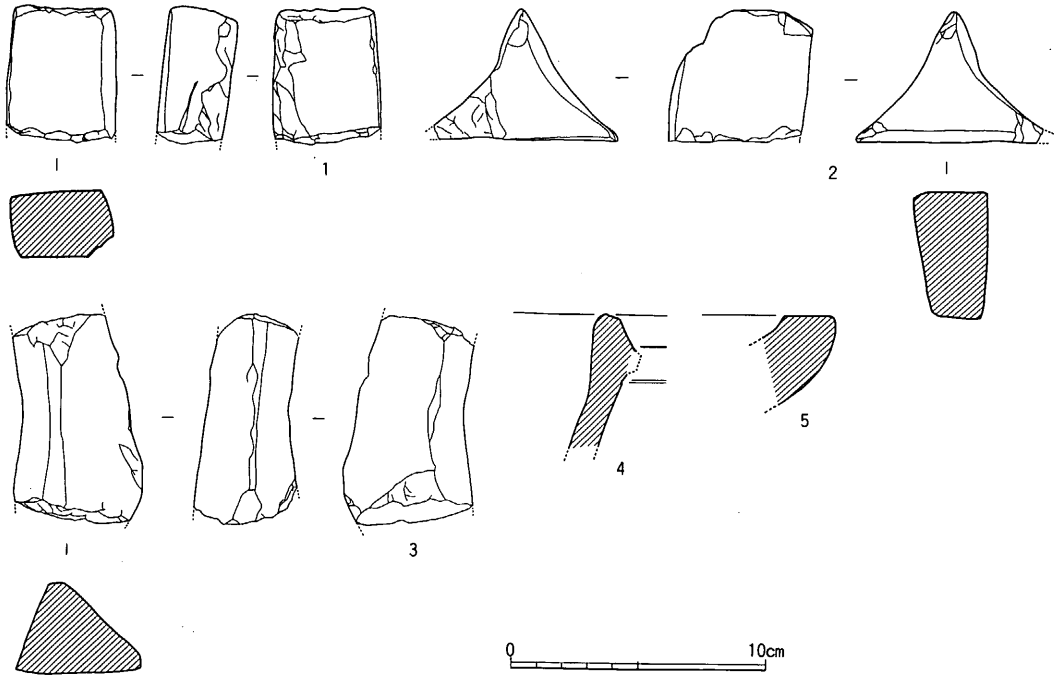


Fig.59　第14次調査出土石製品実測図（1/3）

土製品（Fig.58、Pla.50）

仏像　頭部の残欠でしかも面部が欠損しており詳細は不明であるが、右側面に型合わせの痕跡がみられ、型により製作されたことがわかる。同一の製品とみられるものが大宰府史跡67次、同130次等で出土しており、この製品が地蔵菩薩座像であったことがわかる。茶色土層出土。

石製品（Fig.59）

砥石（1～3）　1は長さ5.3cm、幅4.3cm、厚さ2.7cm。図の上下端は欠失するが他の4面には使用痕が認められる。茶色土層出土。2は長さ5.2cm、幅7.3cm、厚さ2.9cm。平面の形状は三角形を呈しているが、すべての面が使用されている。撹乱（S-9）出土。3は長さ8.3cm、幅5.1cm、厚さ4.0cm。図の上下端は欠失するが他の面には使用痕が認められる。14SX027出土。

石鍋（4）　滑石製。鍔の部分を欠失する。撹乱（S-9）出土。

臼（5）　石臼の残欠とみられる。14SX027出土。

瓦類（Fig.60・61、Pla.51）

軒丸瓦（1～5）　1は老司II式、3は周縁を凸鋸歯文にする複弁蓮華文、4は鴻臚館式、5は単弁蓮華文である。

軒平瓦（6～9）　6・7は鴻臚館式、8は老司II式、9は老司I式である。

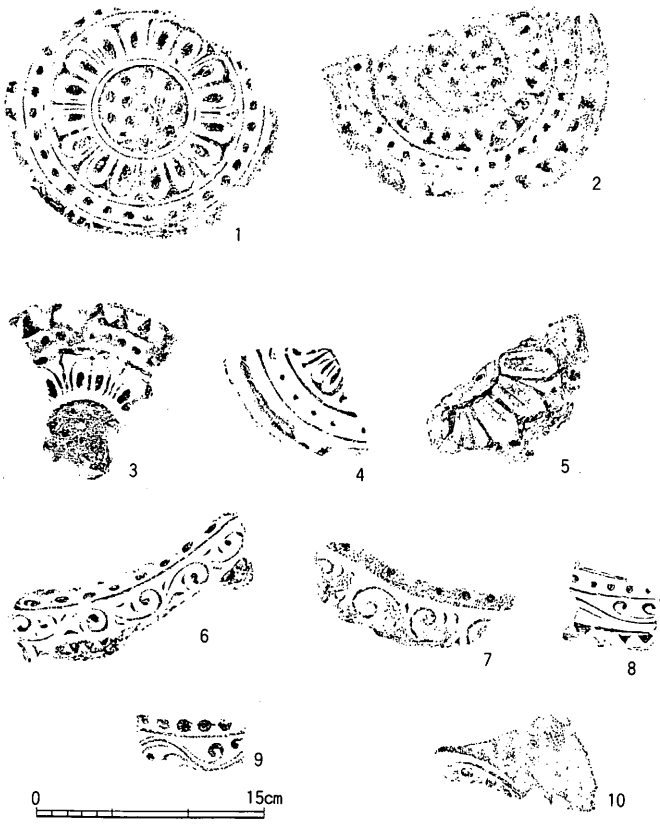


Fig.60　第14次調査出土軒瓦拓影（1/5）

平瓦（10）　平瓦の凸面に軒丸瓦の瓦当文様を押印したもので、過去の調査及び陣ノ尾遺跡で発見例がある。11は凸面が縄目叩きの資料である。凹面には模骨痕及び粘土板切り離し時の糸切り痕が確認される。側縁端はヘラ削りで調整される。

鬼瓦（a）　大宰府系鬼面文鬼瓦で顔面の左下半部の残欠である。14SD005出土。

その他瓦質の製品としてはb・cがある。いずれも隅丸方柱状の製品で、幅7.6・8.3cm、厚さ5.8・4.5cmである。用途は明らかではない。bは14SX050黄茶色土、cは14SX046出土。

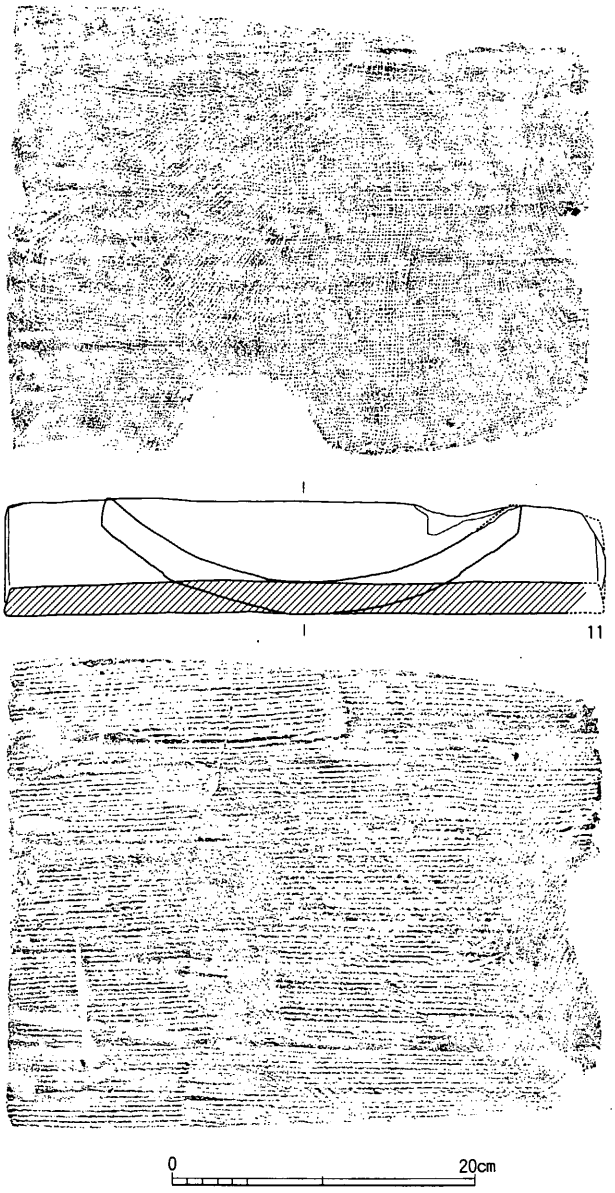


Fig.61　第14次調査出土平瓦実測図及び拓影（1/5）

4．小結

まとまった出土遺物がなく、遺構個別に年代決定を行うのが難しいが、今回検出した遺構の大半が中世（13世紀以降）に属するものである。ただし14SA070は整地層の下層から検出されており、もっとも古期に位置づけられる。

整地層の年代は、その出土遺物において瓦が大半を占めると同時に調査中の混入と推定される資料がごく微量ながら存在し、年代決定を困難にしている。しかしその上面から切り込む14SD005に含まれる土器は10世紀を下らないとみられることと、実際に整地層中から出土した資料の大半が古代に属するものであることから、それ以前に位置づけてよいものと考えている。このことから柵列は国分寺に伴う遺構と考えることができそうである。

ところで、柵列柱痕跡の中心と講堂中心との間の距離は、中軸線の振れを考慮して計算すると96.82mとなる。天平尺（0.297m／尺）に換算すると325尺ということになる。この距離は第6次調査で検出された南北方向の溝までの距離に近似しており、この溝が寺の外郭線を形成すると推定されているところから、今回検出した柵列もそれに関連する遺構であるとも考えられる。ただし、柵列の振れと中軸線の振れが異なることや第6次調査で柵列の検出がないことなど相違点もあることは踏まえておきたい。

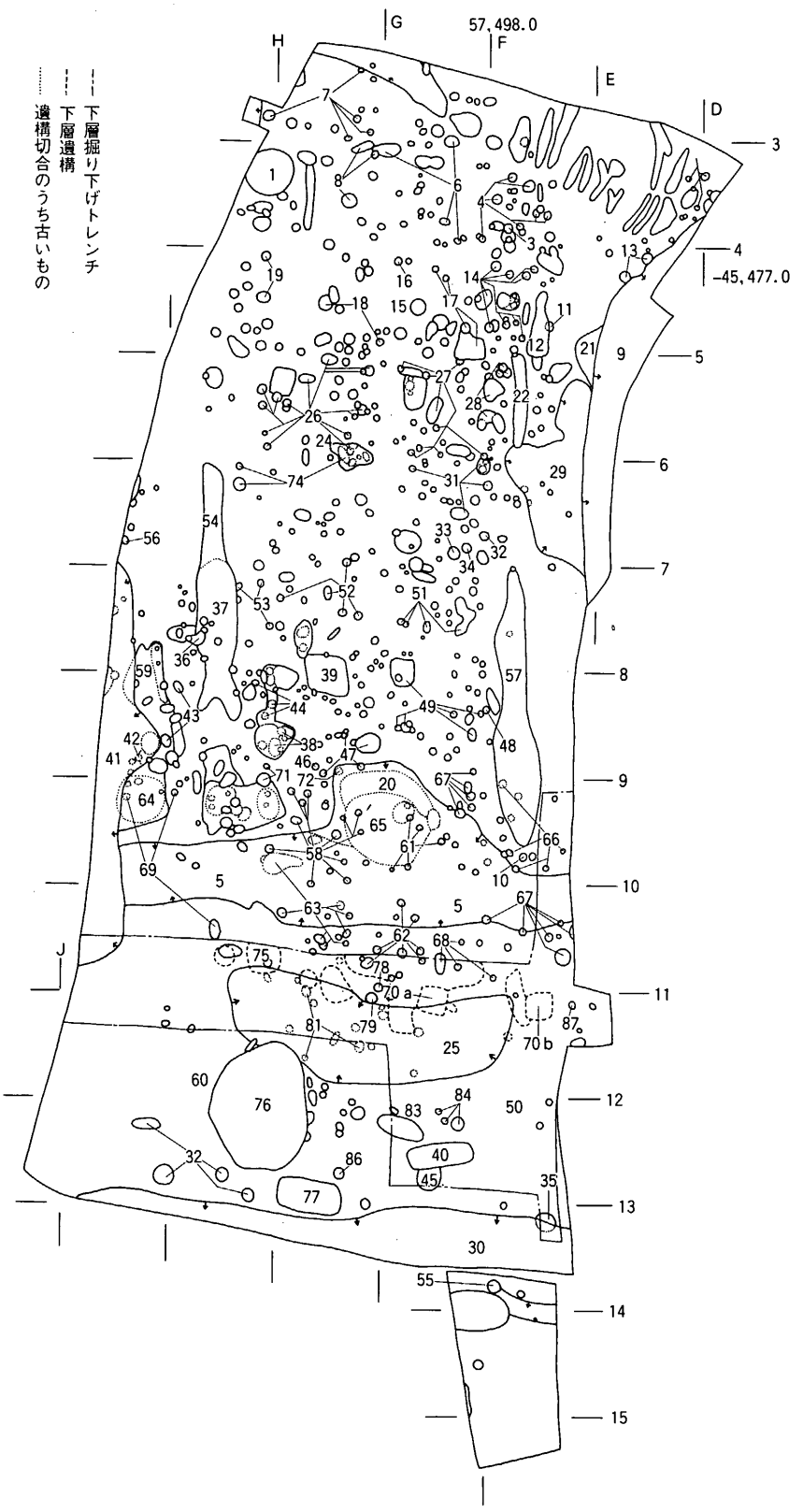


Fig.62　第14次調査検出遺構略測図

Tab.16-1　第14次調査遺構番号台帳（1）

S-番号	遺構番号	種別		古→新	地区
1	14SE001	井戸？	埋土中に礫多数混在	中世？	H3
2		ピット群		平安	C3
3		ピット	焼土検出	13c後～	E3
4		ピット群		中世	E3
5	14SD005	溝	最上層（茶灰色土）はS-65の遺物を含む		10ライン
6		ピット群		中世	F3
7		ピット群		中世	G2
8		ピット群		中世	G3
9	-	撹乱（水路跡）		現代	Dライン
10	14SX010	ピット		中世	E9
11		ピット	瓦を一括廃棄か？　11→12		E4
12		溝			E4
13		ピット群		中世	D4
14		ピット群		中世	E4
15		ピット	焼土塊	中世	F4
16	14SX016	ピット		中世	F4
17		ピット群		中世	F4
18		ピット群		中世	G4
19		ピット群		中世	H4
20	14SK020	土壙			G9
21		溜まり状			E5
22	14SX022	溝状	5→20→65、S-57と関連か？		E5
23		ピット		中世	F5
24	14SX024	ピット		中世	G5
25	14SX025	土壙			F11
26		ピット群		中世	G5
27		ピット群		中世	F5
28		ピット群		中世	E5
29		溜まり状			E6
30	-	撹乱	土管埋設	現代	F13
31		ピット群		中世	F6
32		ピット		15C～	F6
33		ピット			F6
34		ピット			F6
35		ピット			F13
36		ピット		中世	H7
37	14SX037	溝状	S-54とは一連のもの、茶褐色土埋土	中世？	H7
38		ピット			G8
39		土壙？	茶色粘土／茶褐色粘土		G7
40	14SK040	土壙	45→40	14C？	F12
41		溝	撹乱？		I7
42		ピット群			I8
43		ピット群		中世	H8
44		ピット群		中世	H8

Tab.16-2　第14次調査遺構番号台帳（2）

S－番号	遺構番号	種別	古→新	地区
45		土壙？		F12
46	14SX046	ピット		G8
47		ピット群		G8
48		ピット	中世	F8
49		ピット群	中世	F8
50	14SX050	整地　トレンチのため他の遺物混入の可能性あり 主体は黄茶色土、縄目瓦のみ出土		9以西
51		ピット群	中世	F7
52		ピット群	中世	G7
53		ピット群	中世	H7
54	(14SX037)	溝状		H6
55		ピット		F13
56		ピット	中世	I6
57		溝	中世	E8
58		ピット群	中世	G9
59		溝状		I8・9
60	(14SX050)	整地　S-50と同一、黄茶色礫埋土		9以西
61		ピット群	中世	F9
62		ピット群	中世	F10
63		ピット群	中世	G10
64		土壙？　64→59		I9
65		土壙　焼土を含む　5→65		G9
66		ピット群	中世	E9
67		ピット群	中世	E10
68		ピット群	中世	F10
69		ピット群	中世	H9
70	14SA070	柵列？　（下層遺構）		11ライン
71		ピット群	中世？	G9
72		ピット　S-71内のピット		G9
73		ピット	中世	F9
74		ピット群	中世	HG6
75		ピット　（下層遺構）		H10
76		植木跡	現代	I12
77		撹乱		H13
78		ピット群	中世	G10
79		ピット	中世	H11
	欠番			
81		ピット群		H11
82		ピット群	中世	J12
83		土壙	中世	G12
84		ピット群	中世	G12
	欠番			
86		ピット	中世	H12
87		ピット	中世	D11

Tab.17　第14次調査出土遺物一覧表

表土

土師器	小皿a
龍泉窯系青磁	椀；I - 4b (1)、IV (1)
同安窯系青磁	椀；I (1)、II (1)
白磁	椀；VIII (2) 、破片 (3)
	その他；水注 (3)
国産陶器	褐釉 (1)、破片 (1)
中国陶器	四耳壺V (1)
瓦類	破片 (格子叩、縄目叩)
石製品	滑石製石鍋

茶色土

須恵器	坏、甕、鉢、擂鉢、東播系鉢
土師器	坏a、坏、小皿 a (イト)、椀a、椀c、大坏 (イト)、甕
	鍋
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I - 2 (2)、I (1)
	その他；壺×水注 (1)
龍泉窯系青磁	椀；I (4) 、I - 2？ (1) 、I - 5b (3) 、I - 5 (1) 、IV (1) 、
	IV ～(1) 、明代 (1)
同安窯系青磁	椀；I (1)
高麗青磁	椀；III？ [1]
白磁	椀；IV - 1a (1) 、V - 4×VIII -3 (1) 、V～VIII (1)
	V-1×VIII-2 (1) 、V(1) 、破片 (4)
	皿；枢府 (1)
	その他；八角坏 (1)
土師質土器	鉢、擂鉢
瓦質土器	擂鉢
肥前系磁器	染付椀 (1)
中国陶器	壺×水注 (1)、破片 A′ (2)
金属製品	銅、鉄
土製品	焼土塊、人形頭部
瓦類	軒丸瓦 (老司 I 式) 、軒平瓦 (老司 II 式、鴻臚館系)
	破片 (格子叩、縄目叩)
石製品	砥石 (砂岩) 、黒曜石片、滑石片

黄茶色土上層

土師器	破片
瓦類	平瓦、丸瓦 (縄目叩)

茶褐色土

須恵器	坏c、蓋c、蓋3、甕
土師器	坏c
	製塩土器
瓦器	椀
中国陶器	黄釉破片
弥生土器	壺、小壺 (ミニチュア穿孔)、複合口縁壺、甕
	壺 (板付 I 式)、甕 (板付 I 式)
土製品	焼土塊
石製品	滑石製品

茶灰色土

須恵器	甕
土師器	椀c、甕b
黒色土器A	椀
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦 (縄目叩、格子叩)、丸瓦 (縄目叩、格子叩)

S-1 (14SE001) 茶褐色土

土師器	坏 (イト)
瓦類	破片

S-1 (14SE001) 暗灰色粘土

土師器	坏
瓦類	丸瓦 (格子叩)

S-1 (14SE001) 黒灰色土

須恵器	甕
土師器	坏a (イト)、鍋
瓦類	破片

S-1 (14SE001) 礫層

土師器	破片

S-2

土師器	坏、小皿
瓦質土器	脚
瓦類	破片

S-3

土師器	坏 (イト)、小皿 (イト)
白磁	皿；IX (1)
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦、破片 (縄目叩)

S-4

土師器	坏a、坏
瓦類	破片

S-5 (14SD005) 茶灰色土

須恵器	壺、坏、甕
土師器	椀c、坏
黒色土器A	椀c
瓦類	軒丸瓦 (鴻臚館系)、破片 (縄目叩)

S-5 (14SD005)

須恵器	壺、坏a、坏c
土師器	椀c、坏
金属製品	鉄釘
瓦類	丸瓦、平瓦 (格子叩)、鬼瓦

S-6

須恵器	甕
土師器	坏a (イト)、鍋

S-7

土師器	坏a (イト)、小皿、甕
土製品	焼土塊
瓦類	破片

S-8

土師器	鍋、坏

S-9

須恵器	壺、甕、鉢
土師器	小皿、坏、大坏a、鍋、把手
龍泉窯系青磁	椀；I (1)
白磁	椀；V (1)、破片 (3)
肥前系磁器	椀 (1)
青花	破片
瓦類	平瓦 (格子叩)、軒平瓦、軒丸瓦、破片
石製品	石鍋、砥石、石臼？

S-10 (14SX010)

土製品	坩堝
瓦類	破片 (格子叩)

S-11

瓦類	平瓦 (格子叩、縄目叩)

S-12

土師器	破片
瓦類	平瓦

S-13

土師器	破片
瓦類	破片 (格子叩)

S-14

土師器	破片
瓦器	破片
瓦類	破片

S-15

龍泉窯系青磁	椀；破片 (1)
土製品	焼土塊
瓦類	破片 (縄目叩)

S-16 (14SX016)

土師器	小皿
龍泉窯系青磁	小椀；I - 5b [1]

S-17

土師器	坏a
瓦類	破片

S-18

土師器	破片
土製品	焼土塊

S-19

土師器	鍋、坏

S-20 (14SK020)

土師器	坏a、椀c
瓦類	破片 (縄目叩、格子叩)

S-21

土師器	破片
瓦類	平瓦

S-22 (14SX022)

土師器	鍋、坏a、小皿a
瓦類	破片

S-23

土師器	破片
同安窯系青磁	椀；破片 (1)
金属製品	銅塊、鉱滓
土製品	焼土塊

S-24 (14SX024)

土師器	小皿a (イト)
瓦類	破片 (格子叩)

S-25 (14SX025)

須恵器	甕
土師器	鍋、坏
同安窯系青磁	椀；I (1)
白磁	椀；II (1)、破片 (2)
	皿；II×III (1)
土師質土器	擂鉢
瓦質土器	擂鉢、破片
国産陶器	鉢 (1)、破片 (1)
木製品	木炭
土製品	焼土塊
瓦類	軒平瓦 (老司II式)、平瓦、丸瓦

S-26

土師器	坏a、坏、鍋
瓦類	破片

S-27

土師器	破片
瓦類	破片
石製品	砥石

S-28

土師器	坏、鍋
白磁	椀；破片 (1)
瓦質土器	擂鉢
金属製品	鉄器
木製品	木炭
瓦類	破片

S-29

土師器	破片
瓦類	破片 (縄目叩)

S-30

瓦類	丸瓦、平瓦 (格子叩、縄目叩)、軒丸瓦

S-31

土師器	坏 (イト)、鍋
瓦類	破片 (格子叩)

S-32

土師質土器	火捨

S-33

龍泉窯系青磁	椀 ; I - 5 (1)

S-34

土師器	坏a、鍋
土製品	焼土塊

S-35

瓦類	破片 (格子叩)

S-37 (14SX037) 茶褐色土

須恵器	甕
土師器	坏a
瓦類	平瓦 (格子叩、縄目叩)

S-37 (14SX037)

龍泉窯系青磁	椀 ; IV (新安タイプ) (1)
肥前系磁器	染付 (1)
瓦類	平瓦 (縄目叩)

S-38

瓦類	破片 (縄目叩、格子叩?)

S-39 茶色粘土

土師器	小皿a、鍋?

S-39 茶褐色粘土

石製品	黒曜石片

S-40 (14SK040)

須恵器	甕
土師器	坏a (イト)、小皿a (イト)
白磁	椀 ; IV-1a (1)、破片 (1)
瓦質土器	鉢
瓦類	縄目叩、格子叩

S-41

須恵器	鉢 (東播系)
土師器	坏、鍋
龍泉窯系青磁	椀 ; I - 5 (2)、IV ～ (2)
瓦類	破片

S-42

土師器	坏a (イト)
瓦類	破片

S-44

土師器	坏 (イト)
土製品	焼土塊
瓦類	破片

S-45

土師器	坏a
瓦類	破片

S-46 (14SX046)

土師器	坏
瓦類	不明瓦、破片

S-47

土師器	坏a、甕
中国陶器	破片 A´ (1)

S-48

土師器	破片
土製品	焼土塊
瓦類	破片 (格子叩、縄目叩)

S-49

須恵器	坏
土師器	坏、鍋?
緑釉陶器	椀 (1)
瓦類	破片

S-50 (14SX050) 黄茶色土

須恵器	蓋c、蓋3、壺、甕
土師器	坏a、坏c、坏d?、皿a 、小皿 (イト)
龍泉窯系青磁	皿 ; 混入?
同安窯系青磁	皿 ; I-1 (1)
瓦類	平瓦 (格子叩、縄目叩)、道具瓦、不明瓦製品、軒平瓦、軒丸瓦、丸瓦 (縄目叩 、格子叩)
石製品	安山岩片

S-51

土師器	坏a (イト)
同安窯系青磁	椀 ; 破片 (1)
瓦類	格子叩

S-52

須恵器	甕
土師器	坏、甕
白磁	椀 ; 破片 (1)
瓦類	破片

S-53

土師器	椀c、甕
瓦類	破片

S-54 (14SX037)

瓦　類	破片 (格子叩)
石　製　品	安山岩片

S-55

須　恵　器	甕
金　属　製　品	鉄器

S-56

瓦　類	破片

S-57

土　師　器	坏、鍋
白　磁	椀；破片 (2)
	皿；II×III (1)
瓦　質　土　器	火舎
中　国　陶　器	盤 (1)
瓦　類	丸瓦、平瓦、破片 (格子叩、縄目叩)

S-58

土　師　器	坏a (イト)、坏、椀c
瓦　類	破片 (格子叩、縄目叩)

S-59

瓦　類	破片

S-60 (14SX050)黄茶色礫土

須　恵　器	坏c
土　師　器	椀c、椀、甕
白　磁	皿？；破片 (1)
中　国　陶　器	壺 I - 2 (1)、茶入れ (1)
瓦　類	平瓦 (格子叩、縄目叩)

S-61

土　師　器	坏
中　国　陶　器	茶入れ？ (1)
瓦　類	破片

S-62

須　恵　器	鉢 (東播系？)
土　師　器	坏a、坏、小皿b
瓦　類	平瓦 (格子叩、縄目叩)

S-63

土　師　器	坏a (イト？)、坏
白　磁	椀；破片 (1)
瓦　類	破片

S-64

瓦　類	破片 (格子叩)

S-65暗灰色土

土　師　器	坏a (ヘラ)、椀c
黒　色　土　器　A	椀
土　製　品	焼土塊
瓦　類	無文塼　、破片 (格子叩、縄目叩)

S-66

土　師　器	小皿
瓦　類	破片

S-67

土　師　器	坏a (イト)、破片
土　製　品	焼土塊
瓦　類	破片 (縄目叩)

S-68

土　師　器	小皿a (イト)、破片
瓦　類	平瓦、丸瓦

S-69

瓦　類	平瓦 (縄目叩)

S-71

土　師　器	椀c
瓦　類	軒丸瓦

S-72

土　師　器	破片
瓦　類	軒丸瓦

S-73

土　師　器	坏a

S-74

土　師　器	小皿
瓦　器	椀c
瓦　類	丸瓦 (格子叩)

S-76

白　磁	椀；破片 (1)
瓦　類	破片 (格子叩、縄目叩)

S-77

瓦　類	平瓦、丸瓦 (縄目叩)、軒平瓦 (鴻臚館系)

S-78

土　師　器	坏 (イト)
白　磁	椀；破片 (1)
瓦　類	破片 (縄目叩)

S-79

同安窯系青磁	皿；I (1)
瓦　類	破片

S-81

土師器	小皿(イト)
瓦類	破片

S-82

土師器	坏
瓦類	破片(格子叩、縄目叩)

S-83

土師器	坏a(イト)、小皿、片口鉢
中国陶器	壺IV(1)
金属製品	鉄器片
瓦類	平瓦、丸瓦(縄目叩)、破片

S-84

須恵器	破片
土師器	坏、小皿
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-86

土師器	破片
瓦類	破片

Tab.18 第14次調査出土土器計測表

14SD005

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・椀c	1	001	1	−	17+	8.8	○?	×

14SK020

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a	1	001	3	11.0	2.8	7.1		

14SK040

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a(イト)	1	001	10	8.6	1.2	6.6		×

14SX024

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a	1	001	4	10.0	1.3	7.0		

(5) 第15次調査

調査地は太宰府市国分4丁目738-1で、宅地分譲に先立ち発掘調査を実施した。調査に至る経緯は次の通りである。平成2（1990）年10月15日に（株）関屋商事より住宅建築に先立ち、埋蔵文化財取り扱いの問い合わせがなされた。開発対象地（地権者：松嶋利太郎氏）は、現存する筑前国分寺のほぼ南へ約200mの位置にあり、推定筑前国分寺跡寺域の外側にあたり、寺域外における歴史的な土地利用状況を考えるうえで極めて重要と考えられたため、平成3年1月25日に試掘調査を実施し埋蔵文化財の状況を確認した。試掘調査の結果、南北で高低差があり遺構の密度についても南北で差があるものの、開発対象地全域にわたって、奈良時代から平安時代に至る遺構が確認された。その後、平成3年4月16日に（株）上村建設より2戸の宅地分譲の計画が出され、平成4年7月から8月の予定で発掘調査を実施し、かつ調査費用についても原因者負担金による調査で合意をみた。

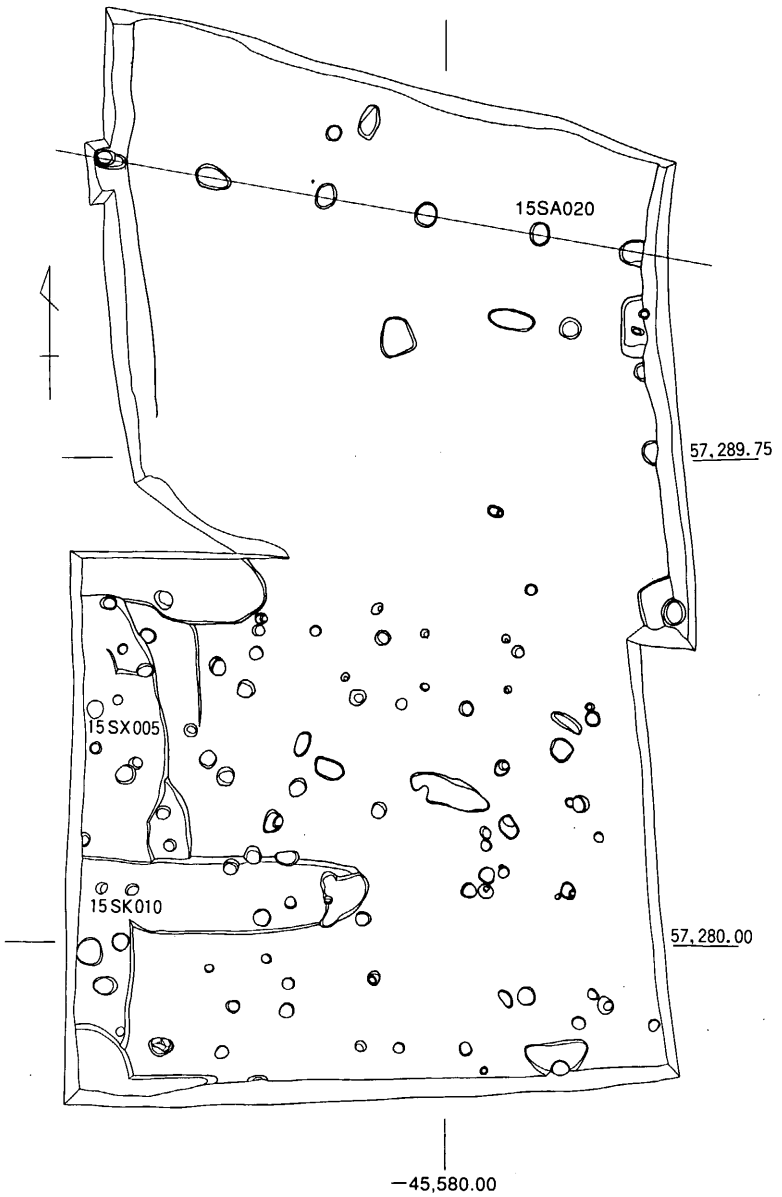


Fig.63　第15次調査上層遺構配置図（1/150）

発掘調査は、平成4（1992）年7月15日から8月31日まで実施し、試掘調査は山本信夫、発掘調査は中島恒次郎が担当した。なお、開発対象面積は381m²、調査面積は300m²である。

1、層位（Fig.64）

現況の耕作土および床土を除去すると、前代の耕作土および床土

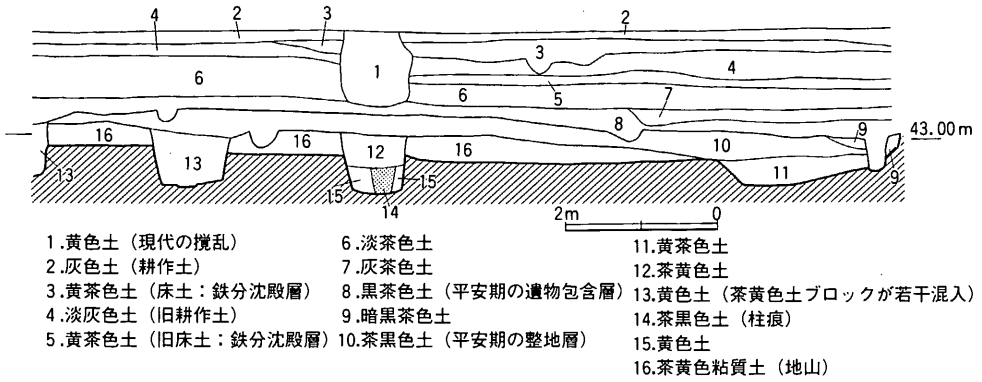


Fig.64　第15次調査南壁土層観察図（1/100）

が確認でき、さらに下げることによって淡茶色土層（60cm～30cm）、灰茶色土層（10cm）が堆積しており、これら堆積層の下位に黒茶色土層（20cm）の平安時代中頃の包含層を形成している。この包含層下位の暗茶黒色土整地層を切り込むかたちで平安時代中頃の遺構が残存し、生活面を形成している。暗茶黒色土整地層を除去すると黄茶色基盤土層があり、基盤土層を切り込むかたちで奈良時代の遺構が残存し、生活面を形成している。

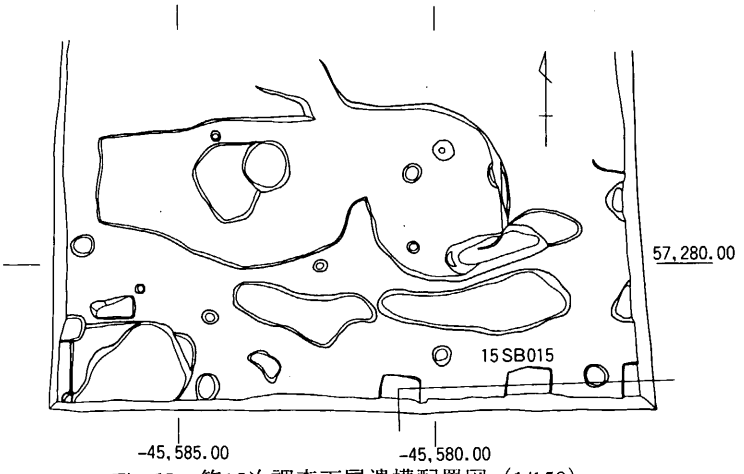


Fig.65　第15次調査下層遺構配置図（1/150）

2、遺構（Fig.63・65、Pla.52・53）

主要な遺構は、上層遺構として調査区北側に柵列を想定できるピット列が検出できた。また下層遺構としては調査区南東端において掘立柱建物跡１棟を検出した。他の遺構としては調査区西端部分に南北に延びる落ち状の遺構を検出しており、西側の立ち上がりを調査区内において検出できなかったため、南北に延びる溝とは確定できなかった。他に小穴を多数検出した。

掘立柱建物

15SB015（Fig.66）　調査区南東隅で下層遺構として検出した掘立柱建物跡で、調査区の関係で規模については不明である。柱間は約2.4m（8尺）で、柱掘り方は0.8mを測る。

柵列

15SA020（Fig.67）　2m～2.2mの間隔で、直径約0.4m、深さ0.2mの小穴が調査区北側において６基検出でき、方向はおよそN-80°-W振れる。

土壙

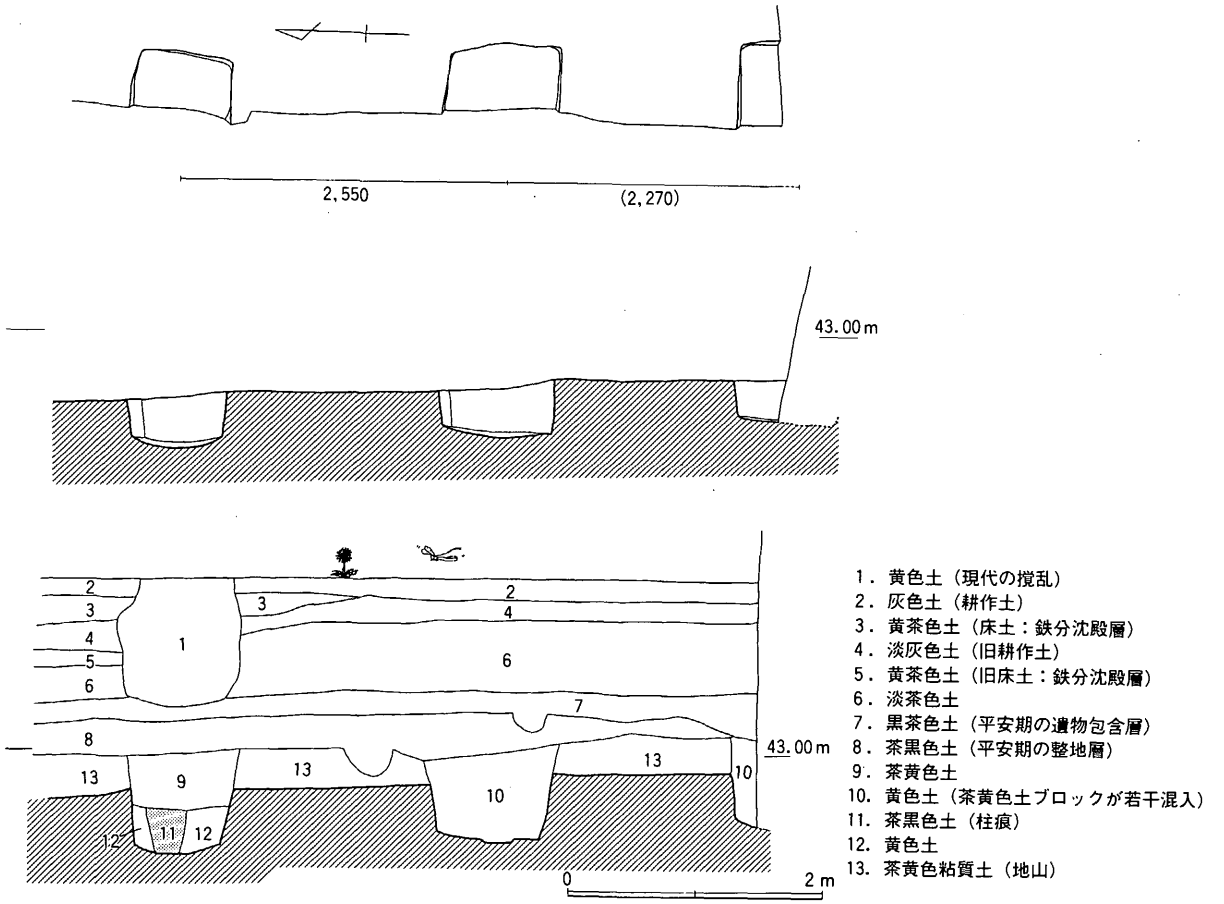


Fig.66　15SB015実測図及び土層観察図（1/60）

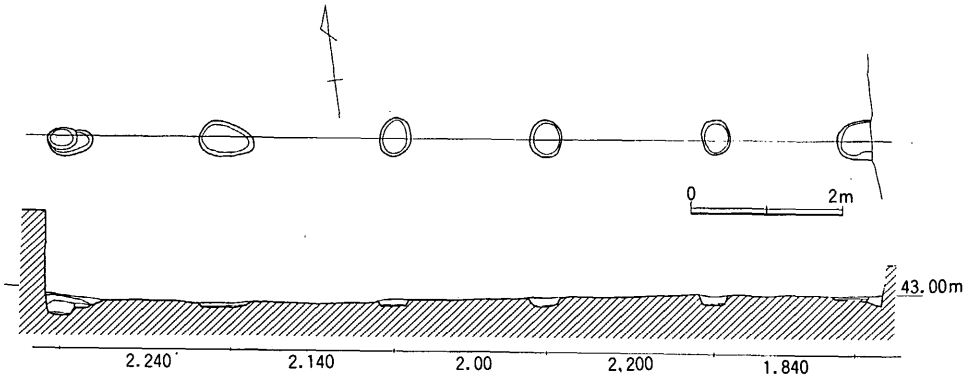


Fig.67　15SA020実測図（1/80）

15SK010　上層にて検出した径1mほどの不整円形の土壙で、深さ0.2mの浅い窪み状を呈していた。

その他の遺構

15SX005　調査区西側に南北に延びる溝状の遺構を検出した。深さ約0.2mを測るが、調査

区の関係で西側の立ち上がりを検出できなかった。したがって今次調査では、遺構の深さから包含層の残存部分である可能性もあり、溝であるかどうかの結論は出し得ていない。

他は、全て奈良時代から平安時代の小穴である。

3、遺物

掘立柱建物出土遺物

15SB015出土遺物（Fig.68）

須恵器

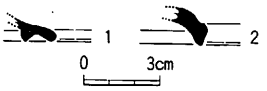


Fig.68　15SB015出土土器実測図（1/3）

蓋1（1）　口縁端部のみの破片で、かえりを有する。内外面ともにヨコナデ。

蓋3（2）　口縁端部のみの破片で、断面三角形に折り曲げる。内外面ともにヨコナデ。

土壙出土遺物

15SK010出土遺物（Fig.69、Pla.53）

土師器

坏a（1）　底部のみ残存している破片で、形状から直線的に口縁部へ延びる形態のものと考えられる。推定底径7.0cmを測り、回転ヘラ切りによって切り離し処理を行い、内面にはヨコナデののち不定方向のナデによって仕上げている。

黒色土器

椀c2（2～4）　いずれも高台部分のみ残存するもので、やや外方に踏ん張る高台形状を呈している。体部立ち上がりから丸い体部形態を有するものと考えられる。内面はいずれも磨耗しているため、調整痕跡等の観察はやや困難だが、手持ちによるヘラミガキによって仕上げている。高台径は、7.4～8.1cmを測る。A類。

甕（5）　口縁端部において外方へ「く」の字状に屈曲するもので、小破片であるため復原はできなかった。内面のみ手持ちによる横方向のヘラミガキによって仕上げているが、外面については器表面磨耗のため不明確である。A類。

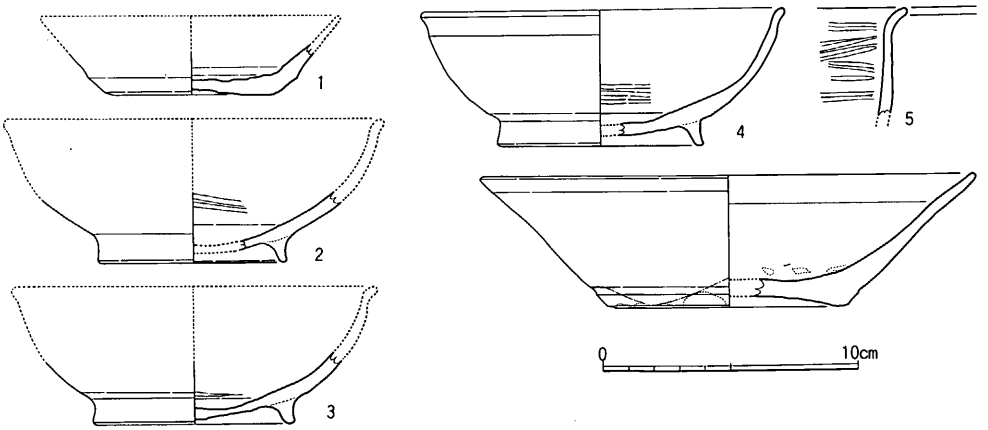


Fig.69　15SK010出土土器実測図（1/3）

越州窯系青磁

椀（6）　推定口径19.4cm、器高5.2cm、底径9.45cmをそれぞれ測る。形状は、底部をくぼませるように削り込むもので、直線的に口縁部へ立ち上がる。高台外面付近まで淡黄緑色の釉を施釉し、見込み部および高台から体部への境界部分の屈曲部に目跡が残存している。素地は灰白色のきめ細かい素地土であるが、黒色の微粒子ならびに微小な気泡を極少量混入している。II-3類。

その他遺構出土遺物

15SX005茶黒色土層（Fig.70）

土師器

甕a（2）　口縁部から体部上位まで残存する破片で、推定口径19.6cmを測る。頸部の屈曲はあまり極端ではないが「く」の字状に外方に屈曲する形態をとる。体部外面は縦方向に掻き上げるハケ調整をし、口縁部内外面ともにヨコナデによって仕上げる。体部内面は縦方向に削る手持ちヘラ削りによって仕上げる。

黒色土器

椀c1（1）　高台のみ残存する破片で、残存高台径は8.1cmを測る。内面の調整は、器表面剥離が著しく不明だが、外面は回転ヘラ切りの痕跡をとどめている。A類。

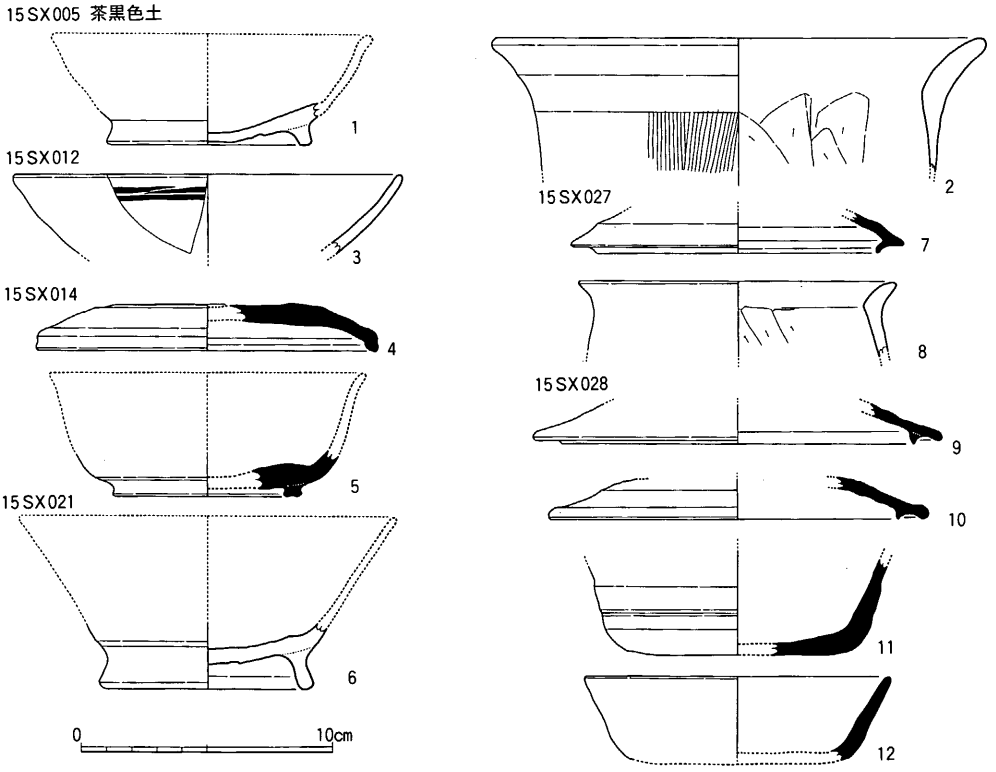


Fig.70　第15次調査その他の遺構出土土器実測図（1/3）

15SX012出土遺物（Fig.70）

龍泉窯系青磁

椀 (3)　口縁部のみ残存する破片で、推定口径15.4cmを測る。内外面ともに淡暗黄緑色の釉を掛け、素地は明青灰色の素地土で、黒色の微粒子を極少量混入する。口縁部外面にヘラによる文様を作り出している。

15SX014出土遺物（Fig.70）

須恵器

蓋3 (4)　推定口径13.6cmを測り、口縁端部を断面三角形に折り曲げる。天井部外面は回転ヘラ切り未調整で、天井部と体部の境界にヘラ挿入痕跡としての削り痕跡が残る。また天井部内面はヨコナデの後、不定方向のナデによって仕上げている。

坏c (5)　高台部分のみ残存するもので、推定高台径7.5cmを測る。内外面ともにヨコナデを行い、内面見込み部分に不定方向のナデ痕跡をとどめる。

15SX021出土遺物（Fig.70）

土師器

坏c1 (6)　高台部分の破片で、推定高台径8.4cmを測る。高台より直線的に口縁部へ立ち上がるものと考えられ、内外面ともにヨコナデによって仕上げている。底部外面は回転ヘラ切り未調整。

15SX027出土遺物（Fig.70）

須恵器

蓋1 (7)　口縁部のみの破片で、かえりを有する。内外面ともにヨコナデ。還元不良。

土師器

甕 (8)　口縁部の破片で、やや強く「く」の字状に頸部が屈曲する。外面は器面磨耗のため不明。体部内面は縦方向のヘラ削り。推定口径12.65cmを測る。

15SX028出土遺物（Fig.70）

須恵器

蓋1 (9・10)　口縁部のみの破片で、かえりを有する。内外面ともにヨコナデ。

坏a (11・12)　(11) は底部のみ、(12) は口縁部の破片で、(11) は底部切り放し処理は切り放し後粗いナデによって仕上げているため不明確。推定底径8.6cmを測る。(12) は、内外面ともにヨコナデによって仕上げている。推定口径12.1cmを測る。

各土層出土遺物

茶色土層出土遺物（Fig.71）

須恵器

蓋 (1)　推定口径12.6cmを測り、内外面ともにヨコナデによって仕上げる。

蓋a1 (2)　かえりを有する蓋で、天井部外面は回転ヘラ切り後未調整。推定口径14.0cm、

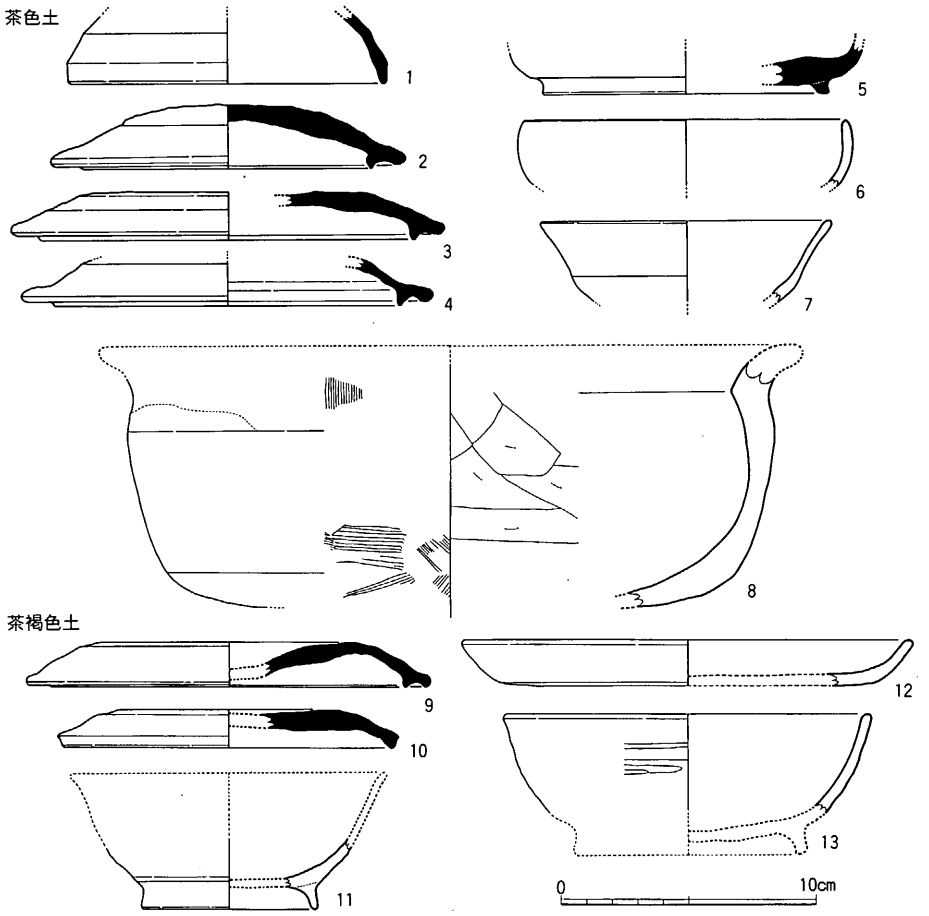


Fig.70　第15次調査各層出土土器実測図（1/3）

かえり端部の推定口径11.35cm、器高2.5cmを測る。天井部と口縁部の境界は明確ではないが、境界付近と考えられる部分にヘラ切りのための挿入痕跡が残る。天井部内面にはヨコナデ後不定方向のナデによって仕上げている。

蓋1（3・4）　口縁部のみの破片で、かえりを有する。内外面ともにヨコナデ。

坏c（5）　高台部分のみ残存する破片で、推定高台径11.1cmを測る。高台から丸みを持ちつつ口縁部へ至る形状を呈するものと考えられる。

土師器

坏（6・7）　(6）は推定口径12.6cmを測り、丸い体部形態をしているが、器面調整は磨耗が著しいため不明確。(7）は推定口径11.4cmを測り、直線的に立ち上がる体部形状を示す。調整は器面磨耗のため不明確。

甕a（8）　体部のみ残存する破片で、内面は横方向ならびに左上方へのヘラ削り、外面は体部下位は横方向、口縁部付近は縦方向のハケによって仕上げる。

茶褐色土層出土遺物（Fig.71）

須恵器

蓋1（9）　かえりを有する蓋で、推定口径15.7cm、かえり端部の推定口径13.9cm、残存器高1.8cmを測る。天井部外面は回転ヘラ切り後回転ヘラ削りによって仕上げている。天井部内面にはヨコナデ後不定方向のナデによって仕上げている。

蓋3（10）　口縁端部のみの破片で、断面三角形に折り曲げる。内外面ともにヨコナデ、天井部外面は回転ヘラ削りによって仕上げる。

土師器

皿a（12）　推定口径17.8cm、残存器高1.8cm、推定底径14.7cmを測り、器面調整は、磨耗のため不明。

黒色土器

椀2（13）　推定口径14.2cmを測り、丸い体部形状を示す。内外面ともに器面磨耗のため、調整痕跡は不明確だが、外面にミガキが僅かに残存する。A類。

灰釉陶器

椀（11）高台部分のみ残存する破片で、内面は明灰白色、外面は暗青灰色を呈し、内面に暗灰色の灰釉が掛かる。推定高台径6.9cmを測る。

4、小結

今回の調査は、筑前国分寺の寺域外にあたり、寺域外における土地利用状況がある程度推定できるのではないかという目的で調査を実施した。調査の結果、平安時代においては、小穴群の検出が物語るように、生活空間としての土地利用がなされていたようであり、性格が不明ながら何らかの境界を示す柵列状の遺構も検出している。また奈良時代における遺構は明確に検出し得なかったが、、おそらく国分寺以前に建築されたと考えられる掘立柱建物が1棟検出できていることから、同様に国分寺建立以前より何らかの空間としての土地利用がなされていたと考えられよう。しかし、出土遺物の稀少さから、各遺構の性格に関しては未解決な部分が多々あり、筑前国分寺ならびに隣接する諸遺跡を含めた、周辺での調査成果等の総合的視野に立脚した解釈が必要であろう。

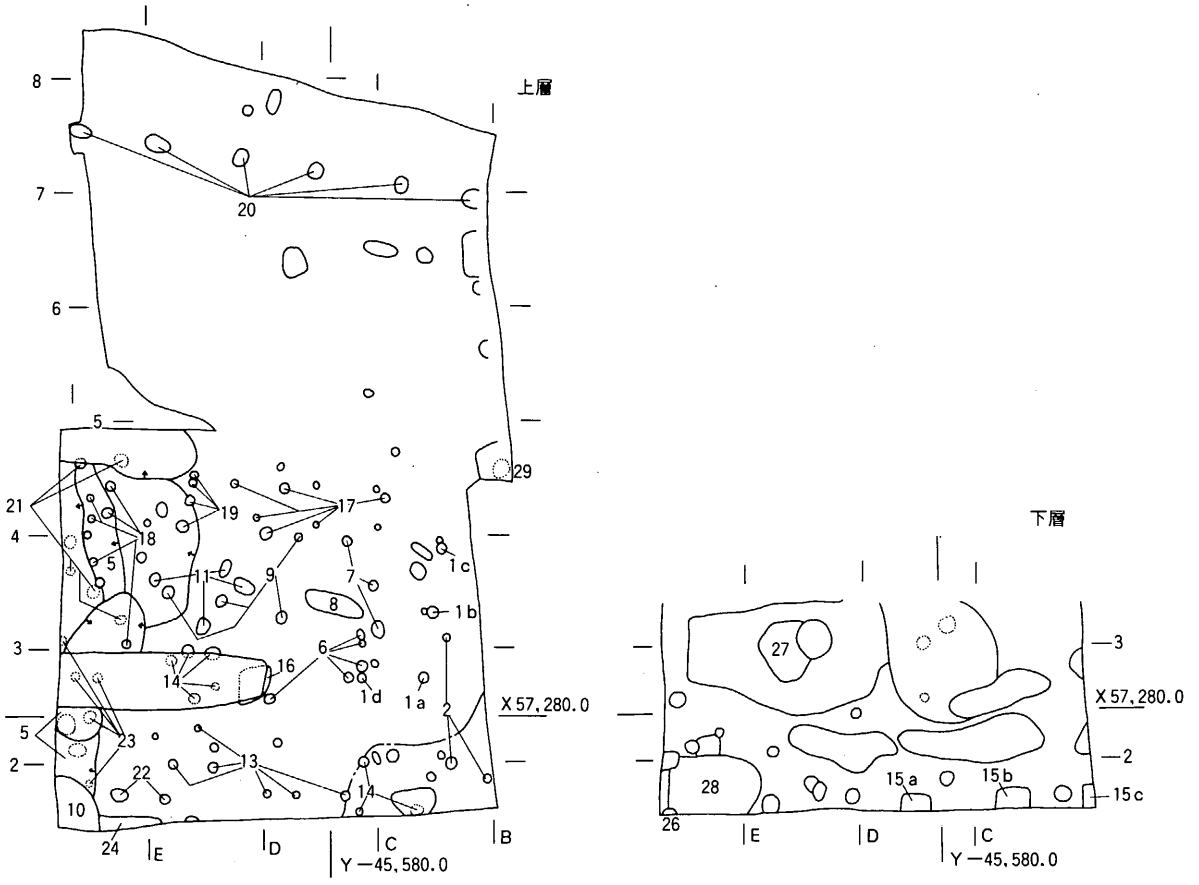


Fig.72　第15次調査検出遺構略測図

Tab.19　第15次調査遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	古→新	地区
1		ピット		C3・4他
2		ピット群		C3
3		凹み　黄茶色土		C2
4		ピット群	S-4→S-3	D2
5	15SX005	溝？		Eライン
6		ピット群　茶黒色土		D3
7		ピット群　茶黒色土		D4
8		凹み　茶黒色土		D4
9		ピット群		D4
10	15SK010	土壙　S-5と同一の可能性あり。		F2
11		ピット群		E4
12	15SX012	ピット群　茶黒色土		E4
13		ピット群　茶黒色土		E2
14	15SX014	ピット群		E3
15	15SB015	掘立柱建物		B1他
16		凹み　茶黒色土		E3
17		ピット群　茶黒色土		D5
18		ピット群　茶黒色土		F4
19		ピット群　茶黒色土		E5
20	15SA020	柵？		7ライン
21	15SX021	ピット群　茶黒色土		F4
22		ピット群　茶黒色土		E2
23		ピット群　茶黒色土		F2
24		凹み　茶黒色土		F2
		(欠番)		
26		ピット　茶黒色土		E1
27	15SX027	凹み　茶色土	下層遺構	D3
28	15SX028	凹み　茶色土	下層遺構	E1

Tab.20　第20次調査出土遺物一覧表

S-1 b

須恵器	甕
土師器	破片

S-1 c

土師器	破片
瓦類	破片

S-1d

土師器	坏a、甕、椀c2

S-2

須恵器	蓋c、蓋4、坏a
土師器	甕
瓦類	平瓦破片 (格子叩)

S-3

須恵器	坏、蓋1、甕
土師器	甕、坏、皿c

S-4

土師器	甕、坏

S-5 茶黒色土

須恵器	蓋c、蓋3、甕、坏、坏c
土師器	甕
越州窯系青磁	椀；II (1)
瓦類	平瓦 (縄目叩)
石製品	焼石

S-5 茶色土

須恵器	坏a、坏c、蓋1、蓋3
土師器	甕、把手
金属製品	鉱滓
瓦類	破片 (縄目叩)

S-6

須恵器	破片
土師器	甕a、坏a
黒色土器A	椀c2
瓦類	平瓦 (縄目叩、格子叩)

S-7

須恵器	高坏
土師器	甕
黒色土器A	椀c2、破片

S-8

須恵器	坏
土師器	甕、坏c、椀c
瓦類	平瓦 (縄目叩)

S-9

須恵器	坏、坏c
土師器	皿a、坏
越州窯系青磁	椀；I (1)

S-10

須恵器	壺、蓋3、蓋c、皿a
土師器	甕、坏a
黒色土器A	甕、椀c2
越州窯系青磁	椀；I - 5 [1]
瓦類	平瓦 (縄目叩)

S-11

須恵器	甕
土師器	坏a、甕
土製品	焼土

S-12

須恵器	坏
土師器	坏、甕
越州窯系青磁	椀；I (1)
瓦類	破片 (縄目叩)

S-13

須恵器	坏c
土師器	甕、甕a
瓦類	破片 (縄目叩)

S-14

須恵器	坏c、蓋3、甕、壺
土師器	甕、坏
越州窯系青磁	椀；I (1)
緑釉陶器	破片

S-15

須恵器	坏c、蓋1
土師器	甕

S-15 a

須恵器	蓋1
土師器	甕、坏c

S-15 a 柱痕

須恵器	坏c
土師器	破片

S-15 a 掘り方

須恵器	破片
土師器	甕

S-15 c

須恵器	甕

S-16

須恵器	甕
土師器	坏

S-17

須恵器	甕、坏
土師器	坏c
黒色土器A	破片

S-18

須恵器	甕、坏
土師器	椀c2、甕、坏

S-19

須恵器	蓋3、坏
土師器	甕、坏、坏c

S-21

須恵器	坏
土師器	椀c1、坏、甕

S-22

須恵器	蓋1、蓋3、甕
土師器	坏、甕

S-23

須恵器	破片
土師器	坏

S-24

須恵器	坏c、蓋1、甕
土師器	坏
越州窯系青磁	坏I(1)
瓦類	破片(縄目叩)

S-26

須恵器	破片
土師器	甕b(煎熬土器?)
黒色土器A	破片

S-27

須恵器	蓋1
土師器	甕

S-28

須恵器	坏a、蓋1、甕、高脚坏c
土師器	甕

茶褐色土

須恵器	坏、坏c、高坏、小蓋、小蓋a3、蓋c、蓋c3、蓋1、壺
	小壺、壺b、甕、甕a、平瓶
土師器	甕、把手、坏、小坏c、坏a、皿a、椀c
黒色土器A	椀c2
越州窯系青磁	椀;I(2)
灰釉陶器	椀
土製品	フイゴ羽口
瓦類	軒平瓦(格子叩)、平瓦(格子叩、縄目叩)
石製品	砥石

茶色土

須恵器	蓋a1、蓋3、蓋c、坏c、平瓶、甕、甕a、壺
土師器	甕a、皿b、坏
金属製品	鉄滓
瓦類	破片(縄目叩)

灰色土

須恵器	蓋、甕、壺
土師器	坏、椀c2、甕
黒色土器B	椀c2
染付	破片(近世)
瓦類	破片(縄目叩)

表土

須恵器	甕、坏c、壺、椀c2
土師器	椀a、破片
瓦類	平瓦(縄目叩)

Z

須恵器	甕、坏c、壺b?
土師器	甕
瓦類	破片(縄目叩)

Tab.21　第15次調査出土土器計測表

15SK010

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a（ヘラ）	1	004	1	−	1.7+	7.0	○	
黒A・椀c2	1	006	2	−	2.5+	7.4		
	2	002	3	−	2.5+	7.9		
	3	005	4	−	2.2+	8.1		

15SX005 茶黒色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
黒A・椀c2	1	001	1	−	1.3+	8.1		

15SX014

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・蓋a	1	001	4	13.6	1.8	−		
須・坏c	1	002	5	−	1.7+	7.5		

15SX021

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏c	1	001	6	−	2.7	8.4		

15SX027

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・蓋1	1	001	7	13.2	1.6+	−		

15SX028

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・蓋1	1	001	9	16.2	1.7+	−		
	2	002	10	15.0	1.6+	−		
須・坏a	1	004	11	−	4.2+	8.6	○	
	2	003	12	12.1	3.3	−		

茶色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・蓋	1	006	1	12.6	2.7+	−		
須・蓋a	1	005	2	14.0	2.5	−		
須・蓋1	1	001	3	17.0	1.9+	−		
	2	003	4	16.2	1.6+	−		
須・坏c	1	002	5	−	1.7+	11.2		
土・坏	1	007	6	12.8	2.6+	−		
	2	004	7	11.4	3.2+	−		

茶褐色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・蓋1	1	004	9	15.8	1.8	−		
	2	001	10	13.4	1.5	−		
土・皿a	1	005	12	17.8	1.8	14.7		
黒A・椀	1	003	13	14.4	3.9+	−		

(6) 第17次調査

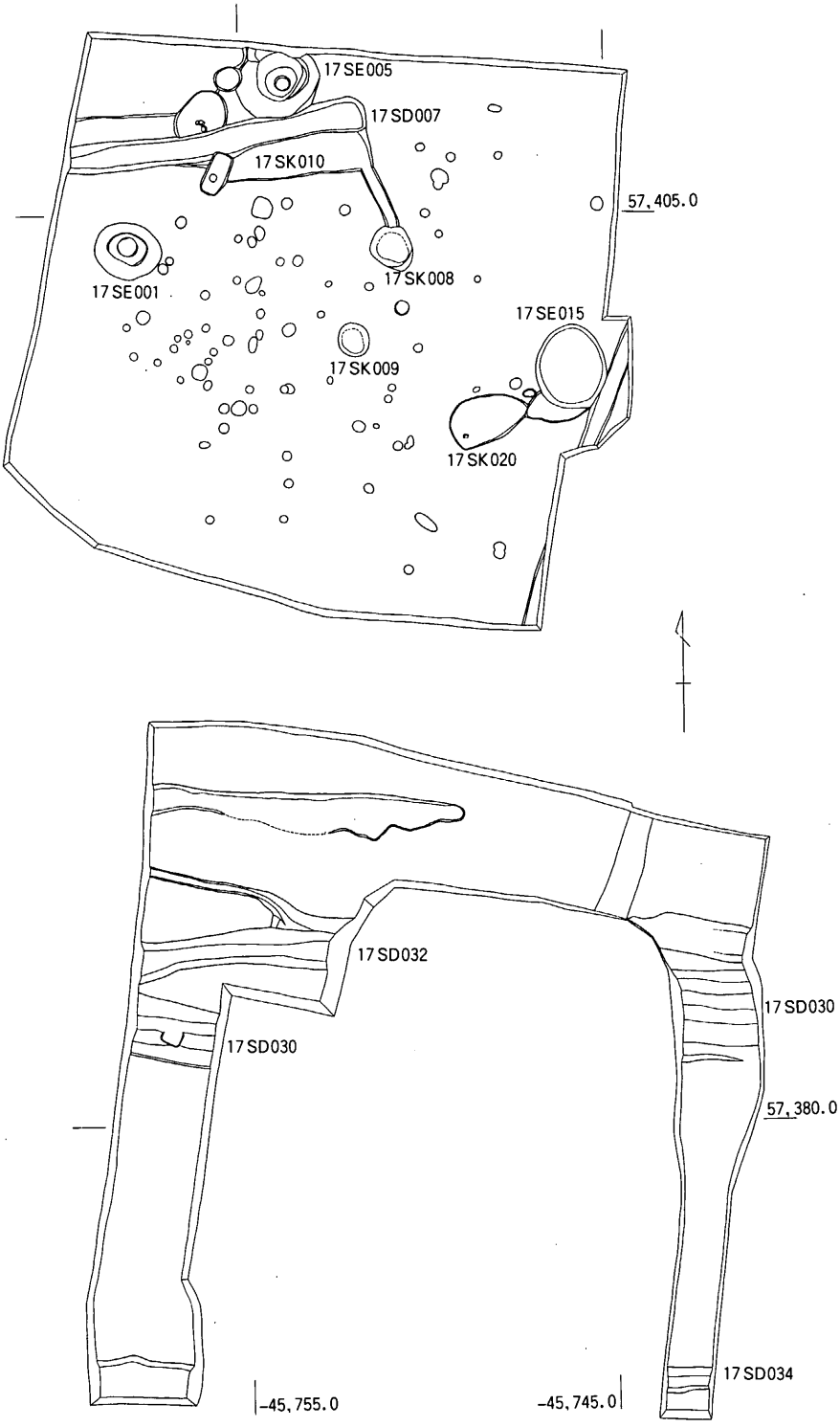


Fig.73　第17次調査遺構配置図（1/200）

調査地は、太宰府市大字国分626外に所在する。共同住宅建設に先立つ事前の試掘調査として、平成4年11月16日から21日まで実施した。調査面積は361m²で、調査は狭川真一が担当した。調査は遺構の存在及び分布状況を確認することを主たる目的としたことから、大半の遺構は掘り下げず、プランの確認に止めた。ここでは掘り下げた一部の遺構について報告する。

1．層位など

水田の表土を除去するとすぐに地山（花崗岩風化土）が現れ、遺構はすべて地山から穿たれるかたちで検出された。ただし、北側の調査区では南西部分にわずかに包含層がみとめられた。

2．遺構

井戸

17SE001　掘り方の形状は略円形で、1.85×1.55m、深さ1.35mを測る。底部には0.53×0.58m、深さ0.30mの曲物を据えた痕跡を確認したが、枠の痕跡は確認できなかった。埋土は上位から茶褐色土、茶色粘土が堆積し、曲物痕跡の部分は灰色粘土が堆積していた。

17SE005　一部調査区域の外に出ているが、掘り方の形状は略円形で、2.30×2.00m、深さ1.08mを測る。底部には直径0.43m、深さ0.1mの曲物を据えた痕跡を確認した。埋土は上位から暗茶色土、茶色粘土の堆積である。

17SE015　完掘していないので全容は明らかではない。掘り方の形状は略楕円形を呈し、2.30×1.95mを測る。埋土は上位から茶褐色土、暗灰色土、黒灰色土、茶灰色粘土、灰色粘土の順で盆状に堆積する。このうち茶褐色土は、遺構埋没に伴い上面にあった包含層が沈み込んだものと考えられる。また黒灰色土は多量の灰が堆積して形成されたものである。

溝

17SD007　17SK010の埋土を除去すると遺構の延長部分が確認され、検出長8.3m、幅0.62～0.85m、深さ0.15～0.20mを測る。上位の埋土は17SK010と連続する黒灰色土であるが、下層は茶褐色土である。

17SD030　幅1.65m、深さ0.25m。トレンチでの検出長は2.25mである。ただし東側に開けたトレンチのS-35（幅2.48m、深さ0.55m）が同一遺構と判断されることから、今回の調査における検出長は17.2mと言える。埋土は茶白色砂で比較的よく締まっていた。両トレンチで検出した溝の任意中心点間から得られた溝の振れは、N-88°45′-Eである。

17SD032　17SD030の北側にある溝でわずかに蛇行する。検出長5.2m、幅0.78～1.05m、深さ0.2～0.4mを測る。埋土は暗茶灰色砂で比較的よく締まっていた。この遺構の東側延長部はおそらくS-36になるものとみられ、それを含めると検出長14.6mということになる。

17SD034　南側調査区の最南端で検出したもので、東側トレンチでは両肩を確認したが、西側トレンチでは北側肩を検出したにとどまる。溝の幅は0.7m、深さ0.1m程度で、埋土はよく締まった茶色砂である。

土壙

17SK008　略円形を呈するプランを有し、1.32×1.15m、深さ0.52mを測る。埋土は茶黒色土の単一層である。遺構の南半分を完掘したのみである。遺物は埋土上位で集中して検出された。

17SK009　略円形を呈するプランを有し、0.85×0.88m、深さ0.17mを測る。埋土は茶黒色土の単一層である。遺構の南半分を完掘したのみである。遺物は埋土上位で集中して検出された。

17SK010　長方形を呈する浅い土壙で、長さ4.7m、幅1.95m、深さ0.1mを測る。埋土は黒灰色土の単一層で、この土は西に延びる17SD007上面の埋土と連続している。17SD007の東延長部がこの土壙内に収まることから両者は一連のものと考えられる。

17SK020　長さ2.2m、幅1.2m、深さ0.1mで不整楕円形を呈する。

3．出土遺物

土器・陶磁器

17SE001茶褐色土層出土土器（Fig.74、Pla.57）

越州窯系青磁

椀（1・2）　1は高台径6.5cm。見込み及び高台畳付けに大きめの目跡がある。畳付けを除いて施される釉は、淡緑灰色に発色する。2は高台径8.7cm。見込み及び高台畳付けに細かな目跡が観察される。畳付けを除いて施される釉は、淡黄灰色に発色する。両者ともI-2類に分類される。

17SE001茶色粘土層出土土器（Fig.74、Pla.57）

土師器

椀c（3）　口径12.7cm、器高4.6cm、高台径7.4cmを測る。体部は丸みを帯び、口縁部をわずかに外反させる。調整は風化が進み判別できない。

甕（5）　口径24.0cm。体部外面下半に叩きの痕跡が確認される。内面は指圧痕跡が目立ち、口縁部から体部上位の内外面はヨコナデである。

越州窯系青磁

椀（4）　高台径6.3cm。見込みの目跡は4箇所に復原できる。釉は内面全面と外面の体部上位にかけられ、内面は明黄緑色、外面は暗緑色に発色する。II-2類。

17SE005暗茶色土層出土土器（Fig.74、Pla.57）

土師器

大椀c（6）　直線的に立ち上がる体部を有する。高台接合に先立ち、底部に深い条痕を付けている。

黒色土器

椀c（7・8）　7はA類。口径16.4cm、器高6.4cm、底径7.2cmを測る。8はA類で、見込みに「十」のヘラ書きがある。

越州窯系青磁

椀（9～11）　9はI類で、口径14.0cm。釉は淡黄緑色に発色する。10は蛇目高台でI-1類。高

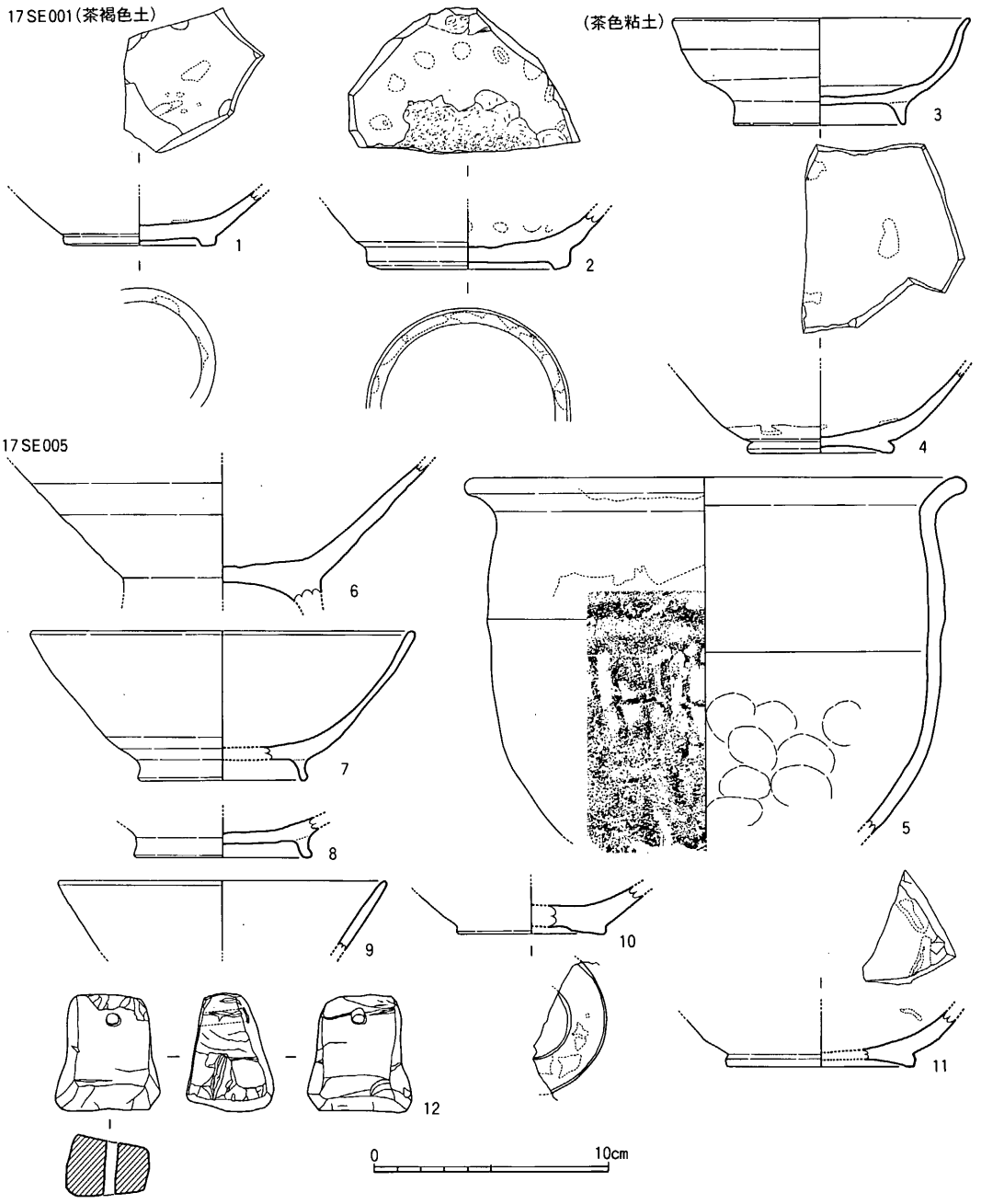


Fig.74　17SE001・005出土遺物実測図（1/3）

台径6.4cm。畳付けに目跡が確認される。釉は全面に施され、淡黄緑色に発色する。11はII-2類で、見込みに目跡がある。残存部分の範囲では外面には施釉されない。内面の釉は淡黄緑色に発色する。

滑石製品

錘（12）　長さ5.0cm、最大幅4.5cm、最大厚3.7cm。下半を広げた撥形を呈し、上位に直径5mm内外の穴を貫通させる。

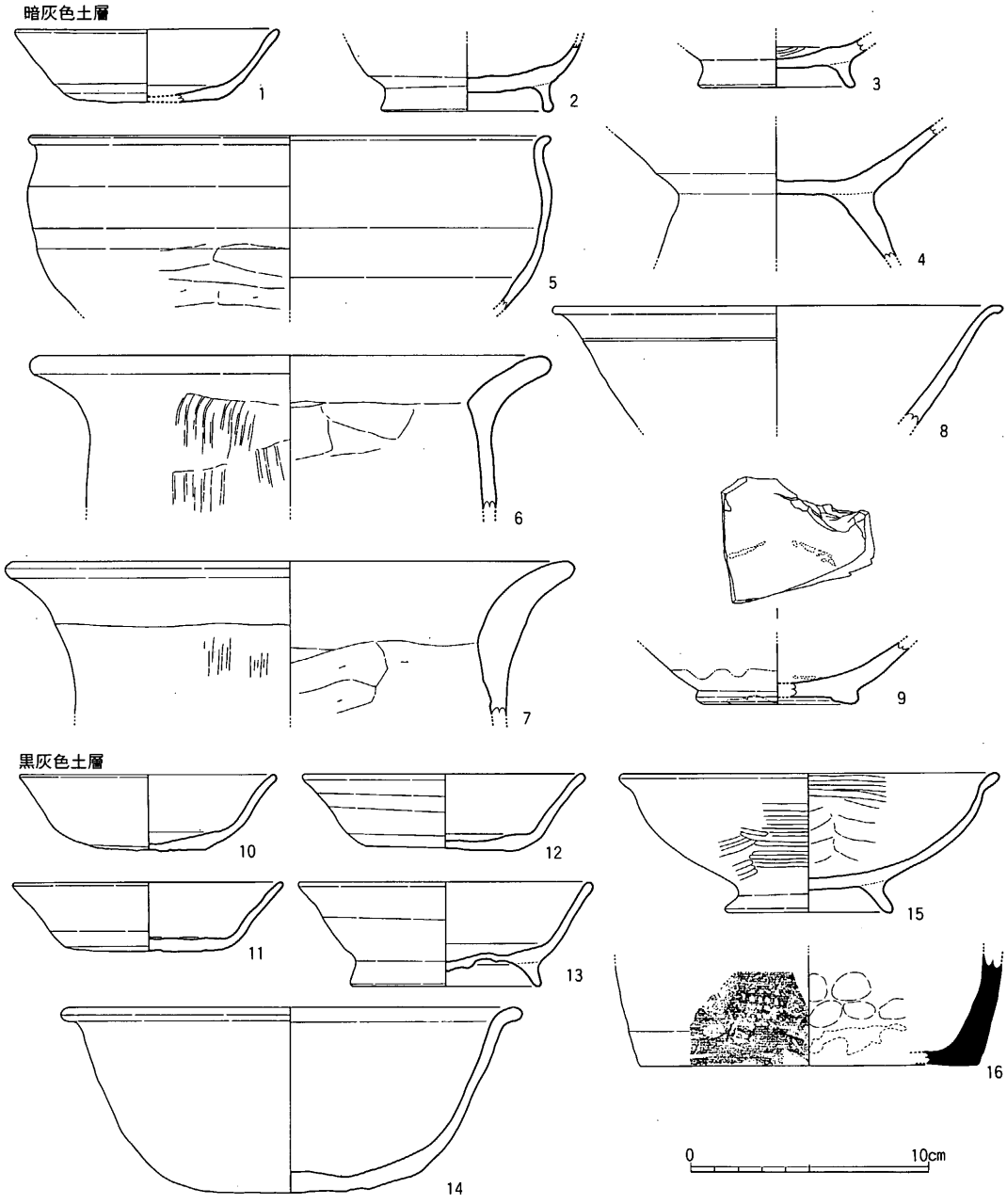


Fig.75　17SE015出土遺物実測図（1/3）

17SE015暗灰色土層出土土器（Fig.75、Pla.58）

土師器

坏a（1）　口径11.2cm、器高3.1cm、底径5.9cm。底部はヘラ切りされる。

椀c（2）　高台径7.2cm。

大椀c（4）　高い高台の付くもので、体部は直線的に立ち上がる。

鉢（5）　口径22.0cm。口縁端部をわずかに外反させる。体部外面下半はヘラ削り、他はヨ

コナデ調整される。外面には煤が多量に付着している。

甕a（6・7）　口径22.0・24.0cmで体部外面は縦方向のハケ目、内面は下方から斜め上に掻き上げるヘラ削り、口縁部周辺はヨコナデである。

黒色土器

椀c（3）　A類。高台径6.6cm。

越州窯系青磁

椀（8・9）　8は口径19.0cmに復原できる。口縁部を外反させる。釉は残存部の全面にかけられ、淡緑色に発色する。I類。9は輪状高台を有するII類で、高台径6.8cm。見込みに目跡がある。釉は内面及び外面の上位に施され、淡黄緑色に発色する。

17SE015黒灰色土層出土土器（Fig.75、Pla.58）

土師器

坏a（10～12）　口径10.8～11.9cm、器高2.9～4.1cm、底径5.0～8.1cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕を残すものもある。

椀c1（13）　口径12.4cm、器高4.4cm、高台径8.0cm。体部は直線的に立ち上がる。

鉢（14）　口径19.4cm、器高7.8cm、底径11.1cm。平底に近い底部を有し、ほぼ直線的に立ち上がる体部の先端を折り曲げて口縁とする。体部はヘラ切りされる。体部外面及び内面の上位にかけてはヨコナデ、内面中位以下はナデである。

黒色土器

椀c（15）　B類。口径16.0cm、器高5.9cm、高台径7.0cm。体部は丸みを帯び、口縁端部をわずかに外反させる。内外面ともにミガキcを施す。

須恵器

壷（16）　底部の小片。底径14.2cm程度に復原できる。外面は格子状の叩きが残り、内面には漆？状の付着物が認められる。

17SD007出土土器（Fig.76、Pla.58）

土師器

皿（5・6）　口径12.7・14.1cm。資料の残存率が悪いので口径の復原には多少の難がある。

椀c（7・8）　7は口径14.0cm、器高5.9cm、高台径5.8cm。丸みを帯びた体部を有する。8は口径17.6cm、器高7.1cm、高台径9.0cm。体部は直線的に立ち上がる。外面下半は回転ヘラ削り調整を施す。

17SD032出土土器（Fig.76）

越州窯系青磁

椀（9）　II-2類。見込みに目跡がある。内面にかかる釉は黄茶色に発色する。

17SK008出土土器（Fig.76）

土師器

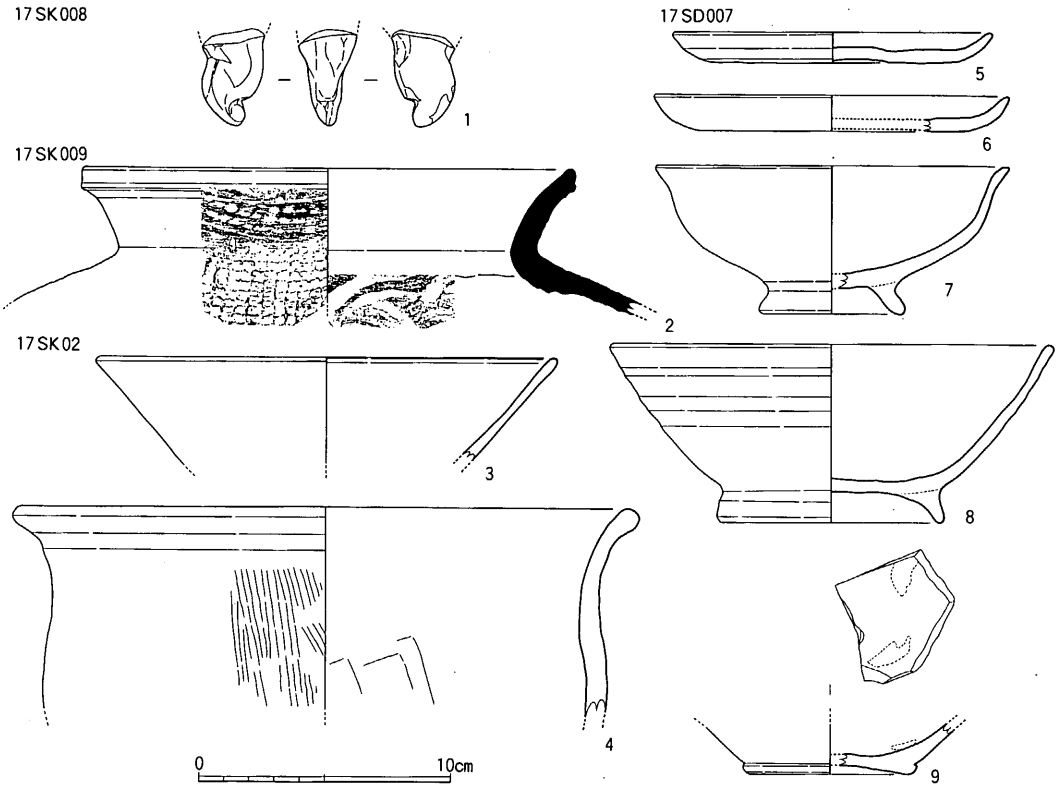


Fig.76　第17次調査土壙・溝出土土器実測図（1/3）

脚（1）　高さ3.5cm程度。指ナデにより調整される。

17SK009出土土器（Fig.76）

須恵器

甕（2）　口径19.6cm。体部外面は格子叩き、内面には同心円の当て具痕跡が明瞭である。口縁部はヨコナデされるが、外面に叩きの痕跡が認められる。

17SK020出土土器（Fig.76）

土師器

甕（4）　口径24.9cm。外面はハケ目、内面はヘラ削り。外面には煤が付着している。

越州窯系青磁

椀（3）　II類。口径18.3cm。釉は淡灰白色に発色する。

瓦類（Fig.77、Pla.58）

1は細単弁十九葉蓮華文軒丸瓦で、17SK020出土。2は鴻臚館式軒平瓦で、

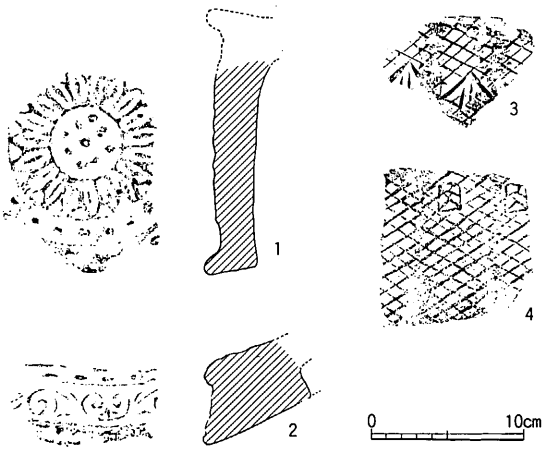


Fig.77　第17次調査出土瓦実測図及び拓影（1/5）

17SE015黒灰色土層出土。3は「介」の文字瓦で、17SE005暗茶色土層から2点出土した。4は方形枠内に「丈」とみられる文字を入れたもので、17SE005暗茶色土層、同茶色粘土層から各1点出土した。

4．小結

北側の調査区で検出した井戸や土壙は9～10世紀の範囲におさまるものである。また南側の調査区で検出した溝は出土遺物が少なく年代を特定できないものの、平安時代のあまり遅くない時期には埋没していたようである。

この溝は隣接した敷地での試掘調査でも確認されており、２条以上の溝が並行して流れていることが判明している。今回の調査ではその具体的なデータを得ることにつとめたが、調査区が狭いこともあり下記の情報にとどまる（Tab.25）。

17SD030と17SD034は、その位置から国分寺の南外郭線の南側を通る東西道路の側溝と考えられる。北側の溝17SD030南肩と南側の溝17SD034北肩に挟まれた空間は路面と想定でき、路面幅はほぼ8.5mを測る。推定路面の東西端間の心々から得られる振れは、N-91° 21′ -E程度であるがより長い距離によるデータの確保が望まれる。因みに17SD030の振れは、N-88° 45′ -E程度、17SD034は南肩に未検出の部分があり今回はデータを提示するまでには至らなかった。

なおこの道路の延長部分は辻遺跡第1次調査で検出されており、東側へは約400m程度延びていることが判明しているが、西側では未確認である。しかし、周辺で検出される遺跡・遺構の状況から推定すると、筑前国分尼寺南門のやや南側を通過し、水城東門を通過する官道に接続していたものと考えられる。この道路の成果については、辻遺跡の報告書（太宰府市の文化財第33集）で検討しているので詳細はそちらを参照されたい。

Tab.22　第17次調査検出溝・道路座標一覧

遺構番号	計測位置	X座標	Y座標	計測資料
17SD030	東端任意中心	57,382.85	-45,742.00	1/50編集図
17SD030	西端任意中心	57,382.52	-45,757.00	1/50編集図
17SD034	東端任意中心	57,372.90	-45,743.00	1/50編集図
17SF050	東端任意中心	57,377.42	-45,742.64	1/50編集図
17SF050	西端任意中心	57,377.80	-45,758.80	1/50編集図

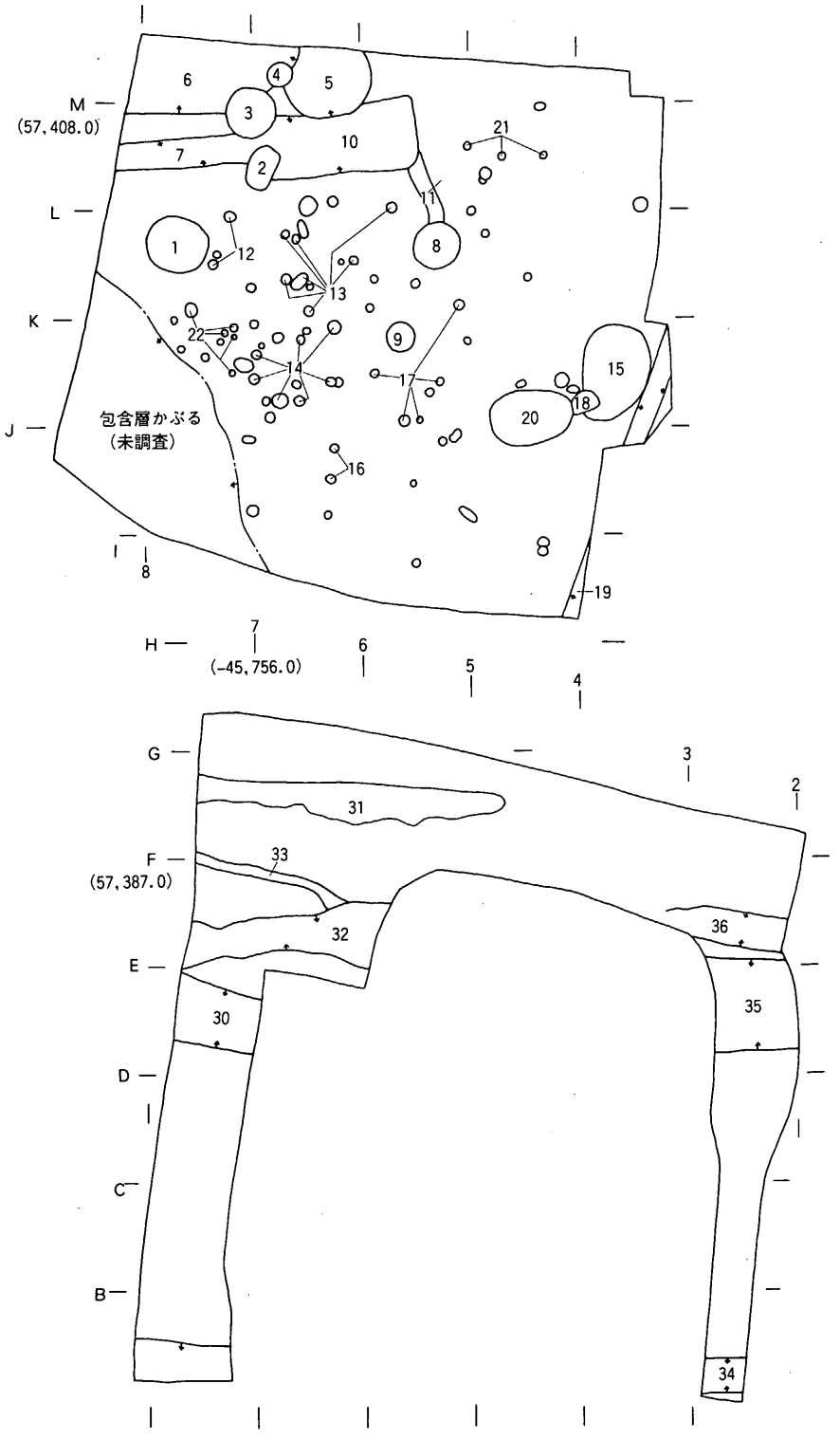


Fig.78　第17次調査検出遺構略測図

Tab.23 第17次調査遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別		古→新	地区
1	17SE001	井戸			K7
2		撹乱			L6
3		窪み	浅い		L6
4		ピット	浅い		M6
5	17SE005	井戸			M6
6		窪み			M6・7
7	17SD007	溝	上面の黒灰色土はS-10と連続する		L7
8	17SK008	土壙	上面に遺物が集中する		K5
9	17SK009	土壙	上面に遺物が集中する		J5
10	17SK010	土壙	炭化物、焼土ブロック混入		L5・6
11		溝		8・10←11	L5
12		ピット群		平安	K7
13		ピット群		平安	K6
14		ピット群		平安	J6
15	17SE015	井戸			J3
16		ピット群		平安	I6
17		ピット群		平安	J5
18		ピット		平安	J3
19		落ち		新	H4
20	17SK020	土壙			J4
21		ピット群			L4
22		ピット群			J7
23～29欠番					
30	17SD030	溝	茶白色砂質土埋土		D7
31		溝	旧畦畔の落ちに形成される溝か	新	F4～7
32	17SD032	溝	暗茶灰色砂埋土	32←33	E6・7
33		溝	茶灰色土埋土		E6・7
34	17SD034	溝	茶色砂埋土		A2
35	17SD030	溝	30と同一遺構か		D2
36		溝			E2

Tab.24　第17次調査出土遺物一覧表

北区表土

須恵器	甕
土師器	椀、椀c、坏a、甕
黒色土器A	破片
瓦類	破片 (縄目叩、格子叩)

南区表土

須恵器	坏、甕
瓦類	破片 (格子叩)

S-1 (17SE001) 茶褐色土

須恵器	蓋c、甕、壺
土師器	坏a 、甕、椀c
黒色土器A	椀、椀c
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀；I (2)、I - 2 (2)、II (1)
瓦類	破片 (縄目叩、格子叩)

S-1 (17SE001) 茶色粘土

須恵器	甕
土師器	椀c、坏a、甕、甕b
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；II -2 (1)
瓦類	破片 (縄目叩、格子叩)

S-1 (17SE001) 灰色粘土

須恵器	甕
土師器	椀c
瓦類	平瓦 (格子叩)

S-2

須恵器	甕
土師器	坏
瓦類	破片

S-3

須恵器	甕
土師器	坏、椀c
黒色土器B	椀；破片
瓦類	破片 (縄目叩)

S-4

須恵器	甕
土師器	椀c、坏、甕
越州窯系青磁	椀；II (1)
	坏?；II (1)
瓦類	破片 (格子叩)

S-5 (17SE005) 暗茶色土

須恵器	甕、壺 (耳付)
土師器	椀c、坏a、甕、鉢
黒色土器A	椀c、破片
越州窯系青磁	椀；I (2)、I -1 (1)、II - 2 (1)
瓦類	文字瓦 (XII)、破片 (縄目叩、格子叩)

S-5 (17SE005) 茶色粘土

須恵器	甕
瓦類	破片 (縄目叩、格子叩)

S-5 (17SE005) 茶灰色粘土

須恵器	甕、壺
土師器	椀c、甕、皿c
黒色土器A	椀c
瓦類	破片 (縄目叩、格子叩)

S-7 (17SD007)

須恵器	甕
土師器	椀c
黒色土器B	椀c
瓦類	軒平瓦 (鴻臚館系)

S-7 (17SD007) 茶褐色土

須恵器	甕、壺
土師器	坏a
黒色土器A	破片
瓦類	破片 (縄目叩)

S-8 (17SK008)

須恵器	甕
土師器	脚、椀c
瓦類	破片 (格子叩)

S-9 (17SK009)

須恵器	甕、壺
土師器	坏
瓦類	破片 (格子叩、縄目叩)

S-10 (17SK010)

須恵器	甕
土師器	椀c、坏a
瓦類	破片 (縄目叩)

S-11

須恵器	甕
土師器	坏

S-12

土師器	破片
瓦類	破片

S-13

土師器	甕、椀c
瓦類	破片 (縄目叩)

S-14

須恵器	甕
土師器	椀c、甕
瓦類	破片

S-15 (17SE015) 黒灰色土

須恵器	甕
土師器	椀c、甕、鉢、坏a、大椀
越州窯系青磁	椀；I (1)
瓦類	破片 (縄目叩、格子叩)

S-15 (17SE015) 暗灰色土

須恵器	坏、壺、破片
土師器	椀c、甕a、甕b、坏、坏a、大椀c、小甕
黒色土器A	椀、椀c
越州窯系青磁	椀；I (1)、II - 2 (1)
白磁	椀；破片 (1)

S-15 (17SE015) 上面

須恵器	甕
瓦類	破片 (格子叩)

S-16

須恵器	甕
瓦類	破片

S-17

土師器	甕、坏
瓦類	破片

S-18

土師器	坏a、椀c、甕
黒色土器A	椀c
瓦類	破片

S-19

瓦類	破片

S-20 (17SK020) 上面

瓦類	軒丸瓦、平瓦、丸瓦 (縄目叩、格子叩)

S-20 (17SK020)

須恵器	甕
土師器	甕、椀c
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀
瓦類	鬼瓦、破片 (格子叩)

S-21

土師器	破片
黒色土器A	椀

S-22

須恵器	甕
土師器	椀
瓦類	破片

S-30 (17SD030) 上面

須恵器	甕
瓦類	破片

S-30 (17SD030)

須恵器	甕
瓦類	破片 (格子叩)

S-31

須恵器	甕
国産陶器	小片(唐津)
瓦類	破片

S-32 (17SD032)

須恵器	甕
土師器	椀c
越州窯系青磁	椀；II (1)、II - 2 (1)
瓦類	破片 (格子叩、縄目叩)

S-34 (17SD034)

須恵器	甕、坏c
瓦類	破片

S-35 (17SD030) 上面

土師器	坏
瓦類	破片 (格子叩、縄目叩)

S-35 (17SD030)

須恵器	坏c、甕、破片
土師器	坏a
瓦類	軒丸瓦、破片 (格子叩)

Tab.25 第17次調査出土土器計測表

17SE001 茶色粘土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・椀c	1	002	3	12.7	4.6	7.4		

17SE005

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
黒A・椀c	1	005	7	16.4	6.4	7.2		
	2	004	8	−	1.8+	7.6		

17SE005 暗灰色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a	1	005	1	11.2	3.1	5.9		
土・椀c	1	003	2	−	2.9+	7.2		
黒A・椀c	1	002	3	−	2.1+	6.6		

17SE005 黒灰色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a (ヘラ)	1	001	10	10.8	3.2	5.0	○	
(ヘラ)	2	002	11	11.4	2.9	7.0	○	○
(ヘラ)	3	003	12	11.9	4.1	8.1	○	○
土・椀c	1	004	13	12.4	4.4	8.0	○	○
黒B・椀c	1	005	15	16.0	5.9	7.0		

17SD007

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・皿a (ヘラ)	1	001	5	12.7	1.2	10.6		
	2	002	6	14.1	1.5	10.3		
土・椀c	1	001	7	14.0	5.9	5.8		
	2	002	8	17.6	7.1	9.0		

(7) 第19次調査

調査地は、太宰府市大字国分字堀田663で、個人住宅の建築に先だって発掘調査を実施した。筑前国分寺跡の東隣接地に位置し、四王寺山から派生した丘陵の尾根上にあたる。標高は約52mである。調査対象地は尾根筋に沿って東西に長く、東から西へ低くなっている。現状は東半部が著しく削平され、遺構は残存していなかった。そのため調査区を西半部に設定した。調査面積は300m²である。現地での調査は、平成6（1994）年4月1日から5月30日までおこない、城戸康利が担当した。

1、層位

地表面は、西から東へ高くなっている尾根上を削平し、平坦面を作っている。調査区東側は、表土層を除くと直ぐに軟らかい黒茶色土に拳大から人頭大の花崗岩円礫を含む地山を検出した。この地山面には遺構が散漫であるが展開している。西側は表土下に暗茶色土の遺物包含層を挟み赤茶色粘質土の遺構面に達する。赤茶色粘質土（Pla.61）は整地層と考えられ、調査区西端で20～30cmの厚さがあり、その下は黄色粘質土の基盤層である。西側の黄色粘質土層は東側の黒茶色土地山の下に潜り込んでいる。

2、遺構

土壙

19SK001（Fig.80、Pla.61）　調査区西側で赤茶色粘質土に切り込んでいる不整形の土壙である。長辺約3.5m、短辺約2.8m、深さ約0.4mを測る。埋土は上層が暗灰褐色土で、下層は20cm以下の花崗岩円礫の間に灰褐色土がつまっている。19SX005を切っている。

19SK009　調査区西端で検出した遺構である。調査区外に拡がり、形状は不明である。深さは約0.1mである。赤茶色粘質土に切り込み、19SK011に切られている。

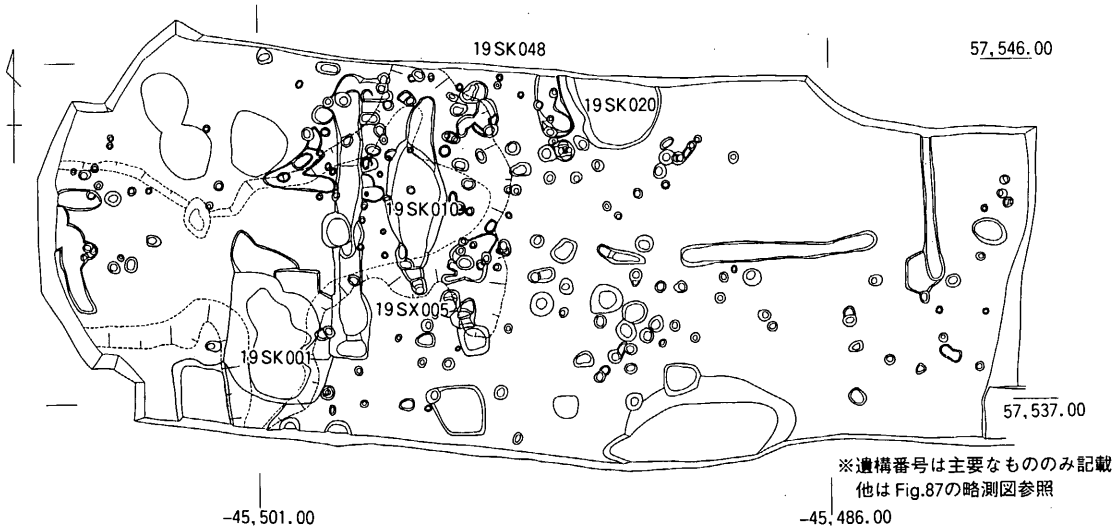


Fig.79　第19次調査遺構配置図（1/200）

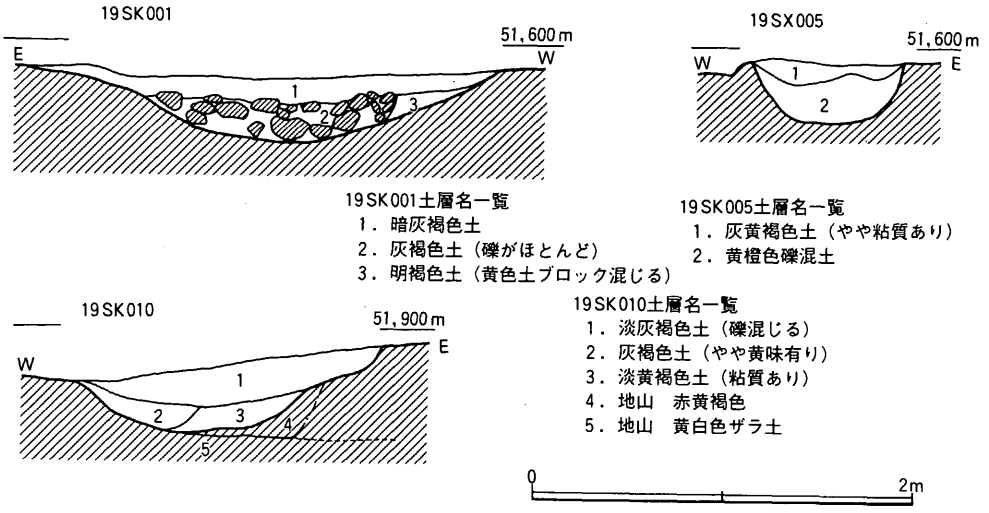


Fig.80　第19次調査各遺構土層観察図（1/40）

19SK010（Fig.80、Pla.61）　19SX005の東側にほぼ平行してある不正形の遺構である。長辺約5.4m、短辺約0.7～1.6m、深さ約0.4mを測る。埋土は褐色を主体とする粘質土で構成されている。赤茶色粘質土に切り込んでいる。

19SK011　調査区西端で検出した。西側は調査区外に延びている。東西に長い楕円形の遺構と考えられる。長辺約1.2m、短辺約0.5m、深さ約0.15mを測る。赤茶色粘質土の上面から切り込んでいる。

19SK020　調査区北側で壁にかかって検出した土壙である。形状は隅丸方形か楕円形と思われる。長辺2m以上、短辺約2.2m、深さ約0.2mを測る。埋土は暗茶褐色土に焼土をわずかに含む単一層である。埋土中南端から坏aが集中的に出土した。

19SK048　19SK020の西側で、19SK020に沿うようにある遺構である。長辺1.6m以上、短辺約0.7m、深さ約0.1mを測る。

その他の遺構

19SX005　赤茶色粘質土の東端付近にある、南北に長い溝状の遺構である。長辺約7.4m、短辺約0.7m、深さ約0.2～0.4mを測り、南に深くなっている。埋土は上層が灰黄褐色の粘質土、下層が拳大の花崗岩円礫を含む黄橙色土である。水流があった痕跡は確認できない。

19SX015（Fig.81、Pla.61）　19SX005を切ってい



Fig.81　19SX015実測図（1/20）

る、径0.45mほどの略円形のピットである。ピット内を瓦片で方形に囲っている。底には平瓦片を敷いている。埋納のためのものか、柱の固定に使用したのか、判別できなかった。

19SX017　19SX005の西側にある、直径0.3mほどの円形のピットである。

19SX046　19SK020を切っている、径0.35mほどの円形のピットである。

19SX053　調査区南側にある、径0.35m程の円形のピットである。埋土は灰茶色土である。

19SX054　径0.6m程の略円形をしたピットである。埋土は灰茶色土である。

3、遺物

19SK001出土遺物（Fig.82、Pla.63）

土師器

坏a（1）　底径8.7cmを測る。口縁端部を欠く。底部の調整は磨耗が激しく不明である。

鍋（2）　口径26.4cmを測る。体部が緩やかにたちあがり、口縁の境で屈曲を持ち、口縁端部は上方にひらいている。体部の傾きから、底の浅いものと推定される。内面を横方向のハケ目、外面を横ナデ調整をおこなう。口縁屈曲部の外面には指頭圧痕が残る。

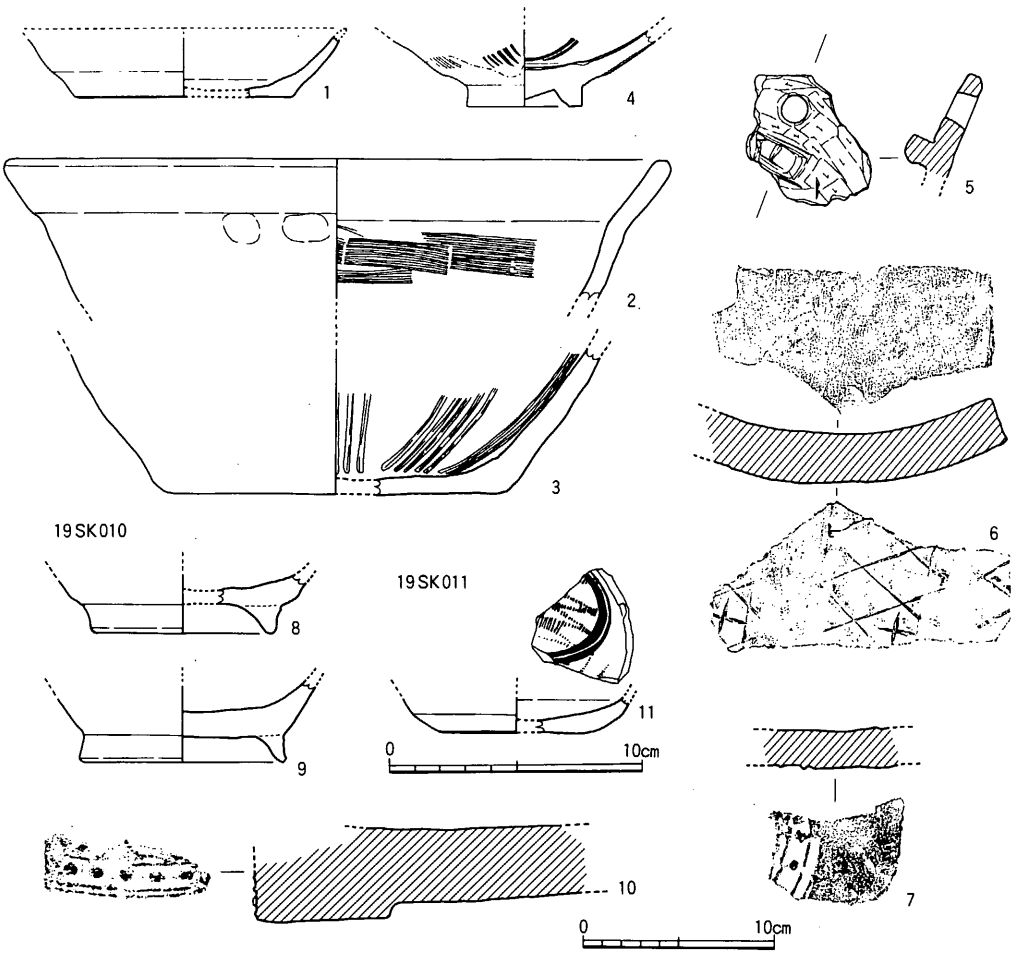


Fig.82　第19次調査土壙出土遺物実測図1（1/3・1/4）

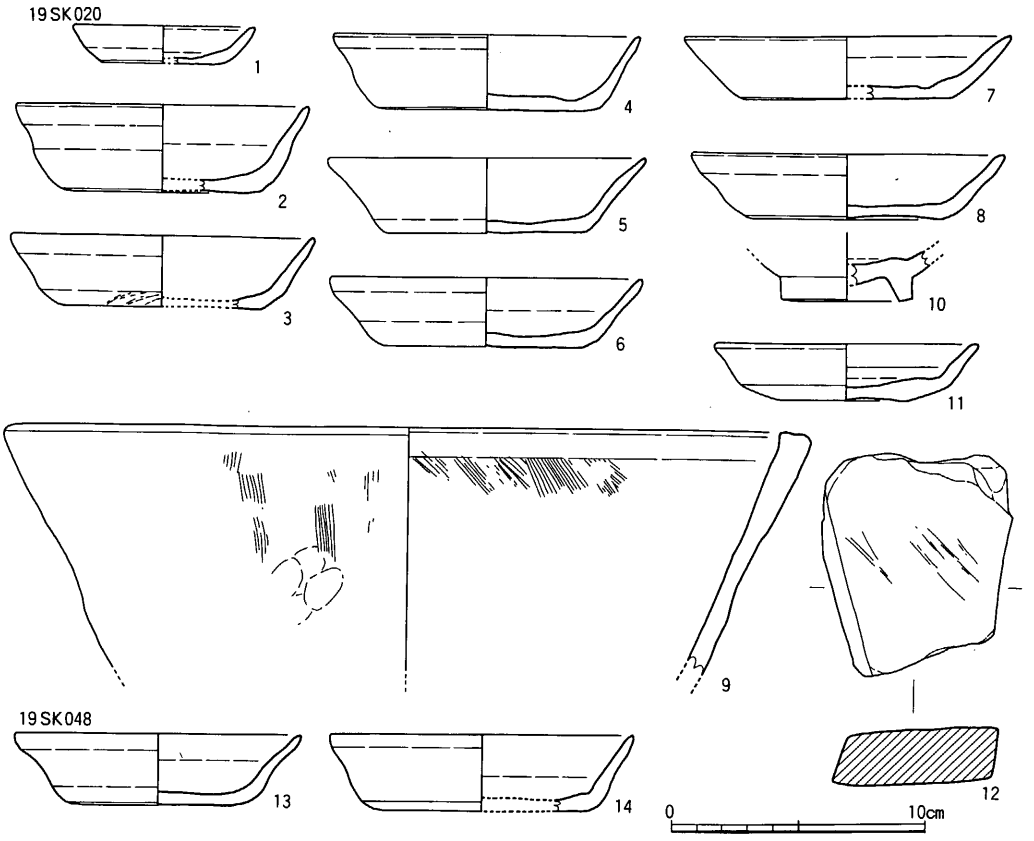


Fig.83　第19次調査土壙出土遺物実測図2（1/3）

鉢（３）　底径13.6cmを測る。内面には５本を１単位として間隔をおいて擂り目がはいる。その他はナデ調整である。

同安窯系青磁

椀（４）　底径4.5cmを測る。I-1-b類。胎土は灰色で黒色粒を少し含んでいる。釉はやや厚めで、灰色味を帯びた緑色を呈する。

石製品

５は滑石製の鍋片を再加工したものである。上面端部は煤が付着し、鍋の口縁部だったことがわかる。その直下に口径1cmの穴を穿っている。さらに1cmほど下に長方形の耳様のものがあり、さらにこれに口径約0.4cmの穴をあけている。用途は不明である。

19SK009出土遺物（Fig.82）

瓦類

平瓦（６・７）　６は桶巻作りで、分割の際の切れ込みを内側からいれている。表面は布目と大きな斜格子に十字がはいっている。I－C類。７は軒丸瓦の瓦当文様がある。

19SK010出土遺物（Fig.82）

土師器

椀c（8・9）　いずれも底部の破片である。高台径は8が7.3cm、9が8.2cmを測る。いづれも体部は直線的にひらき、高台は断面三角形状を呈する。

瓦類

軒平瓦（10）　瓦当は外区の連珠文が一部残るのみである。顎の部分に縄目の叩き痕がのこる。凹面には布目が残る。

19SK011出土遺物（Fig.82、Pla.63）

同安窯系青磁

皿（11）　I-b類の底部片である。底径は6.2cmを測る。胎土は明灰色で肌理はやや粗い。釉は淡緑色を呈し、透明にちかい。

19SK020出土遺物（Fig.83、Pla.62）

土師器

小皿b（1）　口径7.2cm、底径5.0cm、器高1.5cm。底部の調整は磨耗して不明である。

坏a（2～8）　口径11.7～13.4cm、器高2.5～3.4cmを測る。底部は全て糸切りである。2～4は口径が小さく器高が高い。5～8は口径の割に器高が低く、体部が直線的に外へひらく。

鉢（9）　口径32.0cmを測る。内外面ともにハケ目調整を施し、口縁付近は横ナデをおこなっている。外面は黒灰色にこげている。

同安窯系青磁

椀（10）　底径5.2cmの底部片である。I類と考えられる。胎土は灰白色を呈し、肌理は細かい。青味を帯びた透明な釉がかかっている。

龍泉窯系青磁

皿（11）　I-2類である。口径は10.4cmを測る。胎土は明灰色で、釉は青緑色の不透明を呈し、白濁している。

石製品

砥石（12）　4面を使用したものである。よく使用されたらしく、かなり磨耗しており、中心に近い方で折れている。石材は細粒の砂岩である。

19SK048出土遺物（Fig.83、Pla.62）

土師器

坏a（13・14）　口径11.4～12.0cm、器高2.8～3.0cmを測る。底部はどちらも糸切りである。

19SX015出土遺物（Fig.84）

瓦類

平瓦（5～7）　5は凸面に斜格子（I-B類）をもつ。ピットの底に敷いてあった。6は凸面をナデているが、縄目の叩き痕を残している。凹面は布目である。7は凸面斜格子（I-B類）、凹面布目が残る。

丸瓦（8・9）　凸面は8が縄目叩き後ナデ、9はナデだけがみえる。凹面はどちらも布目

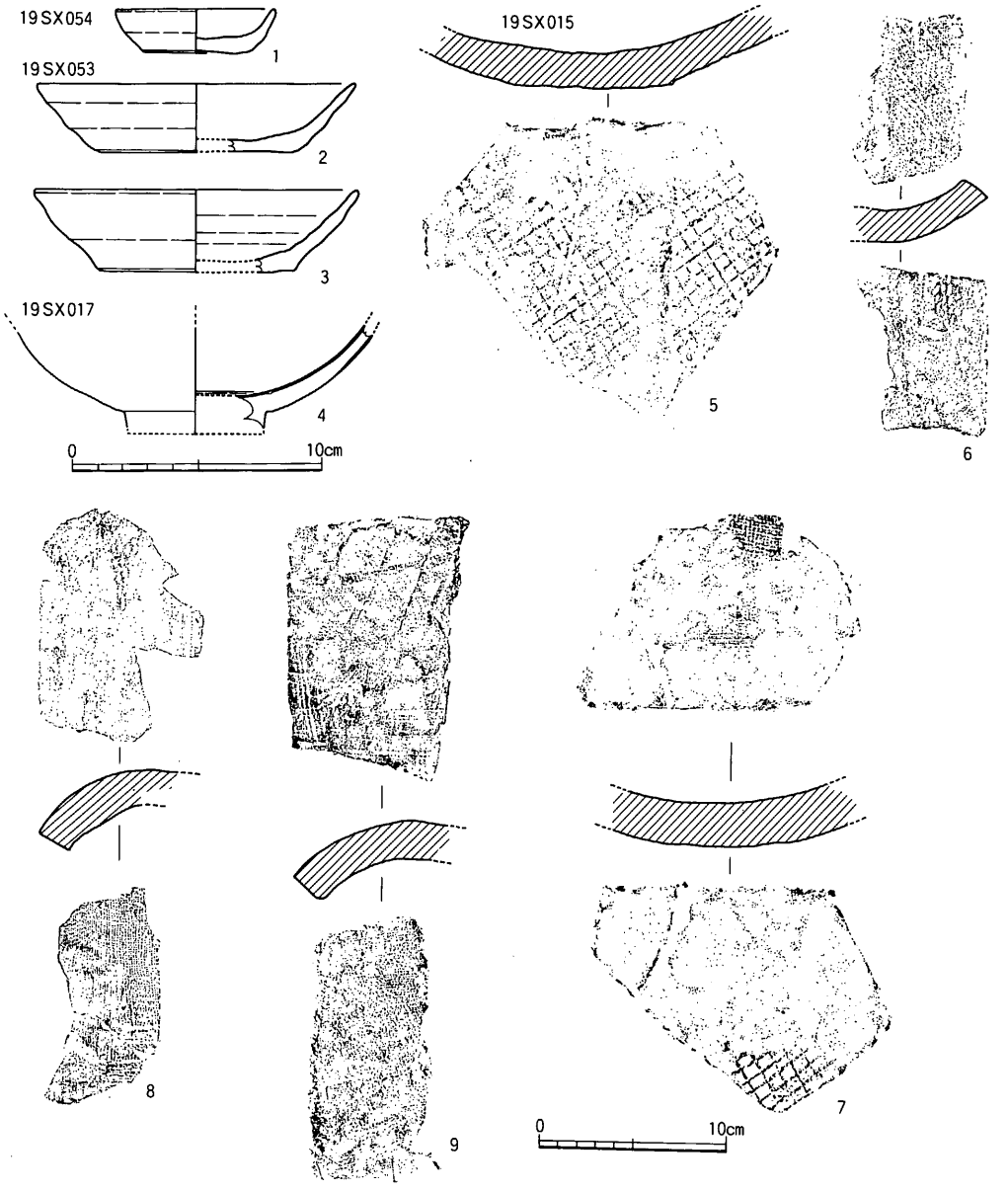


Fig.84　19SX015・017・053・054出土遺物実測図（1/3・1/4）

を残す。

19SX017出土遺物（Fig.84）

白磁

椀（４）　体部から底部にかけての破片である。体部は丸みを持ってたちあがる。内底部にはスタンプによる文様が一部見られるが、何を表現しているかは不明である。また内底部と体部の境に一条の沈線が巡る。外面はヘラ削りで調整され、体部下半は露胎である。胎土は黄白色である。釉は灰色を帯びた透明を呈する。

19SX053出土遺物（Fig.84）

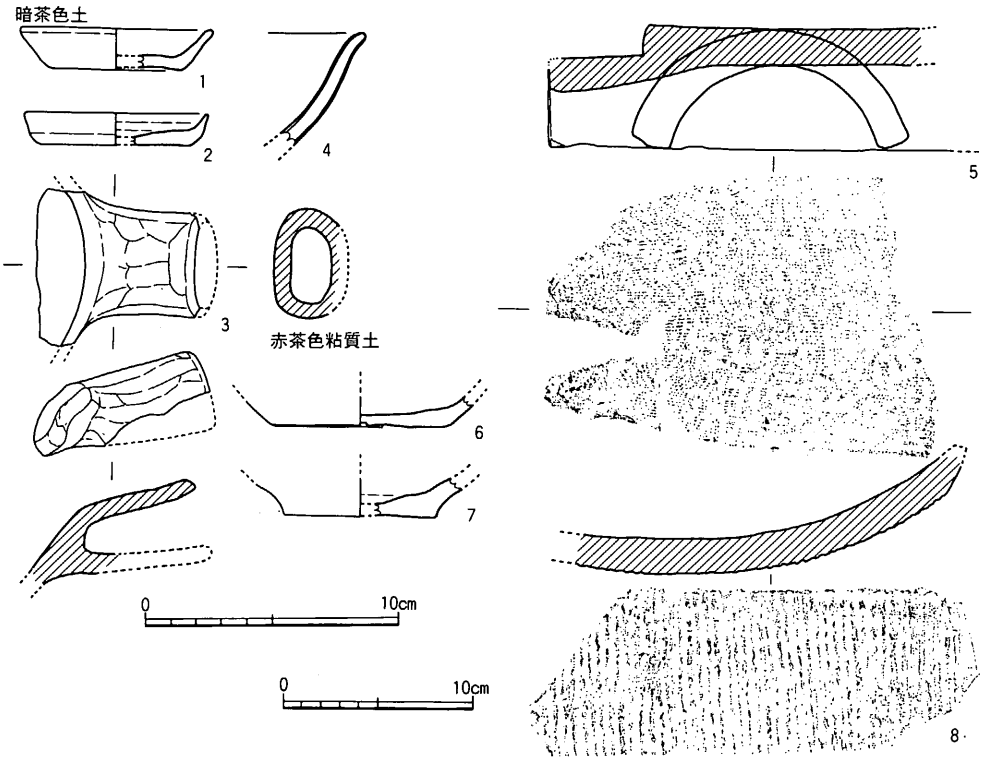


Fig.85　第19次調査暗茶色土層・赤茶色粘質土層出土遺物実測図（1/3・1/4）

土師器

坏a（２）　口径12.8cm、器高2.7cmを測る。底部調整は糸切り後板状圧痕がつく。

19SX054出土遺物（Fig.84、Pla.63）

土師器

小皿b（１）　口径6.5cm、器高1.8cmを測る。底部は糸切り。

坏a（３）　口径13.1cm、器高3.3cmを測る。底部は糸切り。

暗茶色土出土遺物（Fig.85、Pla.63）

土師器

小皿a（２）　口径7.3cm、器高1.3cmを測る。底部は糸切り。

小皿b（１）　口径7.6cm、器高1.6cmを測る。底部は糸切り。

把手（３）　断面楕円形の鉢または鍋の柄部分である。中空になっており、本体と鈍角で接続する。長さ4.6cm、幅4.1cm、厚さ約3cmである。下面から側面にかけて煤が付着している。

龍泉窯系青磁

椀（４）　Ⅳ類の口縁部の破片である。釉は厚く黄色味をおびた淡緑色である。胎土は灰白色を呈しきめが粗い。

瓦類

丸瓦（５）　凸面にはナデの間から縄目の叩き痕、凹面には布目が残る。端面はヘラケズリ

坏a（6）　底径7.1cmを測る。底部はナデを施す。赤褐色の色調を呈する。

須恵質土器

椀（7）　底部の破片である。底径6.1cmを測る。糸切り。東播系か。

瓦類

平瓦（8）　凸面は縄目の叩き痕、凹面は布目。端面はヘラケズリされている。

また、図示しなかったが須恵器鉢a3がある。

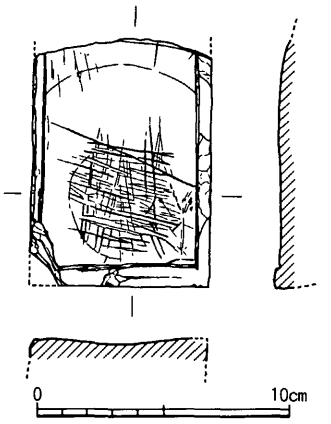


Fig.86　第19次調査出土石硯実測図（1/3）

その他の遺物（Fig.86）

石硯　長方形のものである。現存長9.7cm、幅7.1cm、現存高0.85cmを測る。下半と硯頭部分を欠損する。破損後も使用するために、陸に削りをいれて凹みを作っている。粘板岩製である。19SX046出土。

4、小結

今回の調査では遺構群は散漫に検出され、遺物も土師器を中心として陶磁器、瓦類が少量出土した。遺物は古代からのものが出土しているが、遺構としては古代のものは検出し得なかった。したがって国分寺に直接関連する遺構も検出できなかった。一方で中世（14世紀代以降）の遺構群が展開していることが注目される。19SX005は国分寺東外郭線と近い位置にあるが、国分寺が存在した時期と時代が大きく違い、現状では偶然と考えざるをえない。

Tab.26-1　第19次調査遺構番号台帳（1）

S-番号	遺構番号	種別			地区
1	19SK001	土壙		中世	8ライン
2		土壙	暗茶色土砂礫混じり		B8
3		ピット	埋土は明茶色粘質土		B8
4		土壙		古代	C9
5	19SX005	溝	茶褐色粘質土	中世	7ライン
6		ピット	こげ茶色土		C9
7		ピット群	こげ茶色粘質土		D9
8		ピット群	8→4		C9
9	19SK009	土壙	暗茶色土礫混じり	古代	C10
10	19SK010	土壙			C6
11		ピット		中世	C9
12		ピット群			C9
13		ピット群			B7
14		土壙		中世	C7
15	19SX015	ピット	瓦敷き	中世	D7
16		溜まり		中世	D7
17	19SX017	ピット		14c～	D7
18		ピット群			D7
19		ピット群			D7
20	19SK020	土壙		中世	D4
21		ピット		中世	D7
22		ピット群			C6
23		ピット群	黒茶色土礫混じり		C6
24		ピット群		中世	C6
欠番					
26		ピット	黒茶色土	中世	C6
27		ピット群	黒茶色土		B6
28		ピット群		中世	B6
29		ピット群			D6
欠番					
31		ピット		中世	D6
32		ピット			D6
33		ピット群		中世	D6
34		ピット群		中世	D6
欠番					
36		ピット			B7
37		ピット		中世	B5
38		ピット群		中世	C5
39		ピット群		中世	C5
欠番					
41		ピット群		中世	C5
42		ピット		中世	B6
43		溜まり		中世	C6

Tab.26-2　第19次調査遺構番号台帳（2）

S-番号	遺構番号	種別		地区
44		ピット群		C5
欠番				
46	19SX046	ピット	中世	D5
47		ピット群	中世	D5
48	19SK048	土壙	中世	D5
49		ピット群		D5
欠番				
51		ピット	中世	D5
52		ピット	中世	C4
53	19SX053	ピット	中世	B4
54	19SX054	ピット	中世	B4
欠番				
56		ピット群	中世	B4
57		ピット群		B4
58		ピット	中世	D3
59		ピット群		C9
欠番				
61		ピット		C6
62		ピット		D5
63		ピット群		B3
64		ピット群		B2
欠番				
66		ピット群		D4
暗茶色土		遺物包含層		
赤茶色粘質土		遺物包含層　　西側遺構群の下、下層に遺構有り12c		

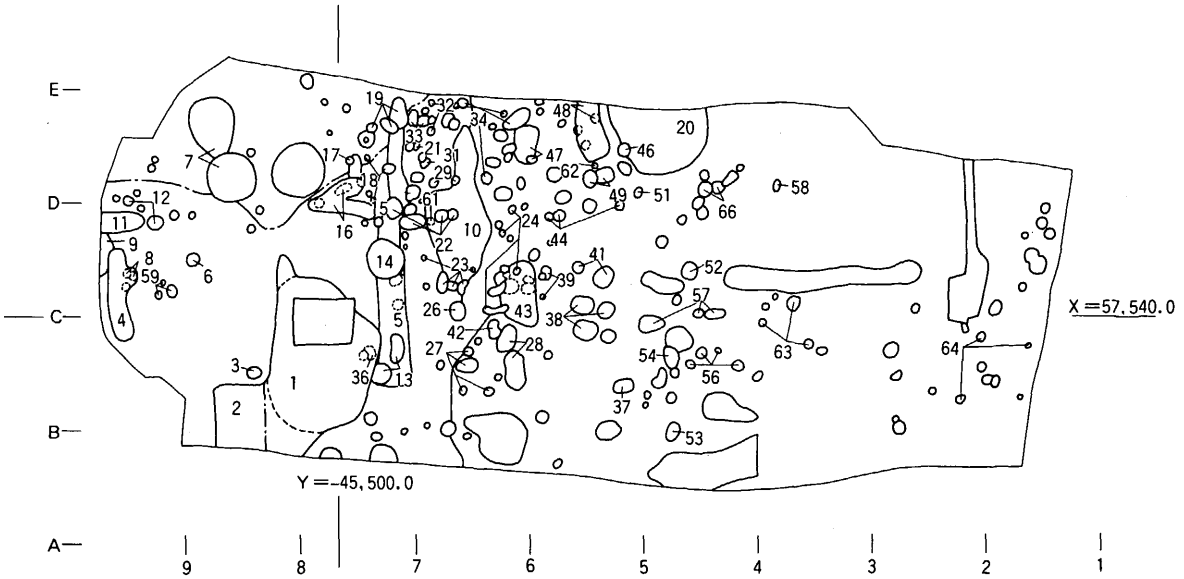


Fig.87　第19次調査検出遺構略測図

Tab.27　第19次調査出土遺物一覧表

S-1 (19SK001)

須恵器	蓋、甕
土師器	坏a (ヘラ、イト)、甕、鍋×鉢、片口擂鉢、破片
龍泉窯系青磁	椀；破片 (1)
同安窯系青磁	椀；I - 1b (1)
高麗青磁	その他；高麗末×李朝？　壺 (1)
白磁	その他；壺II系 (1)、破片 (3)
瓦類	平瓦 (格子叩、縄目叩)
石製品	滑石製品、砥石

S-2

瓦類	平瓦

S-3

瓦類	破片

S-4

土師器	坏c×椀c
瓦類	平瓦 (縄目叩)、丸瓦

S-5 (19SX005)

須恵器	壺、破片
土師器	擂鉢 (1)、破片
黒色土器A	椀c
瓦類	平瓦 (格子叩)

S-6

須恵器	坏×蓋
瓦類	平瓦

S-7

土師器	破片
瓦類	平瓦 (縄目叩、格子叩)

S-8

瓦類	平瓦 (縄目叩、格子叩)

S-9 (19SX005)

土師器	破片
須恵質土器	破片
瓦類	平瓦 (縄目叩、格子叩、瓦当文)、文字？

S-10 (19SK010)

須恵器	蓋、破片
土師器	坏a、椀c、移動式カマド、破片
瓦類	平瓦 (縄目叩、格子叩)、丸瓦、軒平瓦

S-11

土師器	破片
同安窯系青磁	皿；I - 1b (1)
瓦類	破片

S-12

土師器	破片
瓦類	丸瓦(瓦当文) (1)、平瓦(縄目叩)

S-13

土師器	破片
瓦類	平瓦 (縄目叩)、破片

S-14

土師器	破片 (中世)
瓦類	平瓦 (縄目叩)

S-15 (19SX015)

土師器	破片
瓦類	平瓦 (縄目叩、格子叩) (4)、丸瓦 (縄目叩) (2)、破片 (3)

S-16

須恵器	蓋×甕
土師器	破片
瓦類	平瓦 (縄目叩)、破片

S-17 (19SX017)

土師器	破片
白磁	椀；破片 (新しい？) (1)
瓦類	破片 (1)

S-18

須恵器	破片
土師器	小皿a (イト)、鉢、片口、破片
瓦類	破片

S-20 (19SK020)

土師器	坏a (イト、不明)、小皿a？、鉢、擂鉢、片口
龍泉窯系青磁	皿；I - 2 (1)
同安窯系青磁	椀；I?(1)
白磁	椀；V - 4×VIII (1)
瓦類	丸瓦 (斜格子叩)、平瓦(格子叩、縄目叩)
石製品	砥石、平石 (緑色片岩)

S-21

土師器	坏a、破片
龍泉窯系青磁	椀；I - 5b (1)
朝鮮無釉陶器	破片 (1)
瓦類	破片

S-22

土師器	破片
瓦類	平瓦 (格子叩、縄目叩)、丸瓦 (スリ消し)

S-23

須恵器	鉢
土師器	坏×小皿
瓦器	破片
瓦類	丸瓦、平瓦(格子叩、縄目叩)
土製品	焼土塊

S-24

須恵器	甕
土師器	小皿a(イト)、椀c、甕

S-26

土師器	小皿a(ヘラ)
瓦類	平瓦

S-27

土師器	破片
瓦類	平瓦(格子叩)

S-28

土師器	甕、小皿(イト)、破片
瓦類	平瓦(格子叩、縄目叩)

S-29

土師器	坏a、小皿、破片
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-31

土師器	小皿a(イト)

S-32

瓦類	平瓦(格子叩?、縄目叩)

S-33

土師器	小皿、破片
瓦類	破片

S-34

土師器	坏a(イト)、小皿a、鉢、破片
瓦類	平瓦(格子叩)

S-37

土師器	坏a、小皿a(イト)
青白磁	破片(I)

S-38

土師器	坏a(イト)、鉢、破片
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-39

須恵器	甕
土師器	鉢、破片

S-41

須恵器	甕?
土師器	小皿a
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-42

土師器	坏a、鉢×鍋
瓦類	平瓦(斜格子叩)

S-43

土師器	坏a(イト)、甕、破片
越州窯系青磁	破片?(I)
土製品	瓦玉
瓦類	破片

S-44

須恵器	蓋3、破片
土師器	坏a(イト)、破片

S-46 (19SX046)

須恵器	破片
土師器	小皿a(イト)
石製品	砚

S-47

土師器	小皿a(イト)、破片
瓦類	破片

S-48 (19SK048)

須恵器	蓋?、破片
土師器	坏a、鉢
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦
石製品	平石(緑色片岩)

S-49

土師器	破片
瓦類	破片

S-51

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、鉢、擂鉢、破片
龍泉窯系青磁	椀;I(1)

S-52

土師器	坏×椀c、破片
須恵質土器	破片
朝鮮無釉陶器	破片(1)

S-53 (19SX053)

土師器	坏a、破片

S-54 (19SX054)

土師器	坏a、小皿b、破片
瓦類	平瓦(格子叩)

S-56

土　師　器	坏a(イト)、高台、破片
瓦　　類	破片(縄目叩)

S-57

須　恵　器	破片
土　師　器	坏a(イト)、鉢×鍋

S-58

土　師　器	破片
龍泉窯系青磁	その他；I(1)

S-59

土　師　器	坏a、甕
瓦　　類	平瓦(格子叩、縄目叩)

S-61

土　師　器	破片
青　白　磁	その他；破片(I、II、XI以外)
瓦　　類	平瓦(縄目叩)

S-62

土　師　器	破片
瓦　　類	破片(1)

S-63

土　師　器	破片
瓦　　類	破片

S-64

土　師　器	小皿a、破片
瓦　　類	破片

S-66

土　師　器	鉢？、破片

カクラン

土　師　器	破片
瓦　　類	平瓦(格子叩、縄目叩)

暗茶色土

須　恵　器	坏c(1)、鉢a、蓋、甕、破片
土　師　器	坏a(2)、椀c(1)、皿a？(1)、小皿a(イト)(1)、小皿a×b(1)、蓋3、鉢？(2)、破片
龍泉窯系青磁	椀；IV(1)
瓦　　類	平瓦(格子叩)(1)、(縄目叩)(1)、丸瓦(縄目叩)[1]
石　製　品	破片？(1)

赤茶色粘土

須　恵　器	坏(1)、壺×鉄鉢型(1)、壺？、甕、椀(播磨？)(1)
土　師　器	坏(1)、坏a(1)
金属製品	鉱滓
瓦　　類	平瓦(格子叩、縄目叩)(1)、丸瓦

Tab.28　第19次調査出土土器計測表

19SK001

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a	1	002	1	—	2.4+	8.7		

19SK010

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・椀c	1	003	8	—	2.3+	7.3		
	2	002	9	—	3.1+	8.2	○	

19SK020

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a	1	009	1	7.2	1.5	5.6		
土・坏a(イト)	1	002	2	11.7	3.4	7.9		
(イト)	2	008	3	12.0	2.8	7.9		
(イト)	3	003	4	12.2	2.9	8.7		
(イト?)	4	007	5	12.6	2.9	8.0		
	5	004	6	12.4	2.7	8.0		
(イト?)	6	006	7	13.0	2.5	8.4		
	7	005	8	13.4	2.5	8.2		

19SK048

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a(イト?)	1	001	13	11.4	2.8	7.2		
	2	002	14	12.0	3.0	8.4		

19SX053

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a(イト)	1	002	2	12.8	2.7	8.1	○	○

19SX054

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a	1	002	1	6.5	1.8	4.4	○	
土・坏a(イト?)	1	001	3	13.1	3.3	8.1		

暗茶色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a(イト)	1	001	1	7.6	1.6	5.2		
(イト)	2	002	2	7.3	1.3	6.0		

赤茶色粘土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a	1	001	6	—	1.2+	7.1	○	

(8) 第20次調査

調査地は太宰府市国分3丁目624-1他であり、共同住宅建築に先立ち発掘調査を実施した。

平成5（1993）年10月26日に（株）大東建託より共同住宅建築に先立ち、埋蔵文化財取り扱いに関する問い合わせがなされた。開発対象地（地権者：河波キヌエ・河波久隆 両氏）は、現存する筑前国分寺の西約50mほどに位置し、推定筑前国分寺跡寺域の西を隔する遺構の検出が期待される地域であったため、平成5年11月25日に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の状況を確認した。その結果、極めて希薄な状況ではあったが、平安期の小穴数基を確認したため、（株）大東建託ならびに八尋孝一事務所を介し、地権者である河波久隆氏と発掘調査の必要性について説明し協議を行ったところ、平成6年度において発掘調査を実施することで合意を得た。

発掘調査は、原因者負担金によるもので、平成6（1994）年9月27日から10月24日まで実施した。試掘調査および発掘調査は中島恒次郎が担当した。なお開発対象面積は116.65m²、調査面積は110m²である。

1、層位

現況の地表土（盛土のためのマサ土約40cm）を除去すると、明茶色土層（30cm）が堆積しており、この堆積層の下位に明赤褐色土を切り込む状況で平安期の遺構が残存し、生活面を形成していた。なお赤褐色土層は、遺構検出時の土層である。

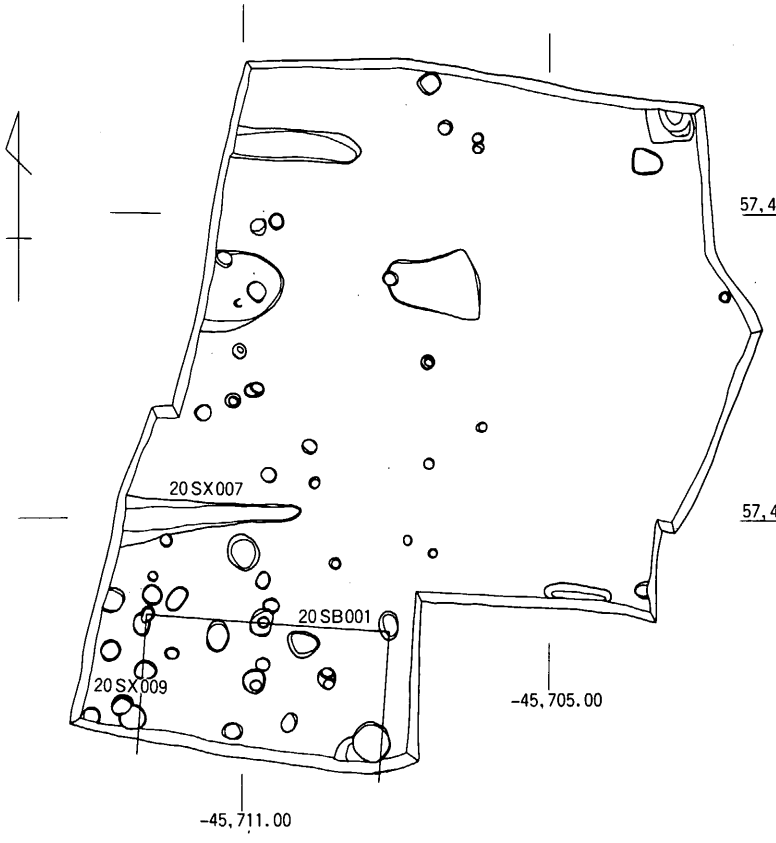


Fig.88　第20次調査遺構配置図（1/150）

2、遺構

主要な遺構としては、調査区南端部分において掘立柱建物1棟を検出した他、小穴を数基検出したにとどまり、調査区の北東へ向かって基盤層の隆起が確認で

き、遺構が後世における造成によってカットされたのではないかと思わせるように、残存遺構が次第に希薄になっていた（Fig.88）。

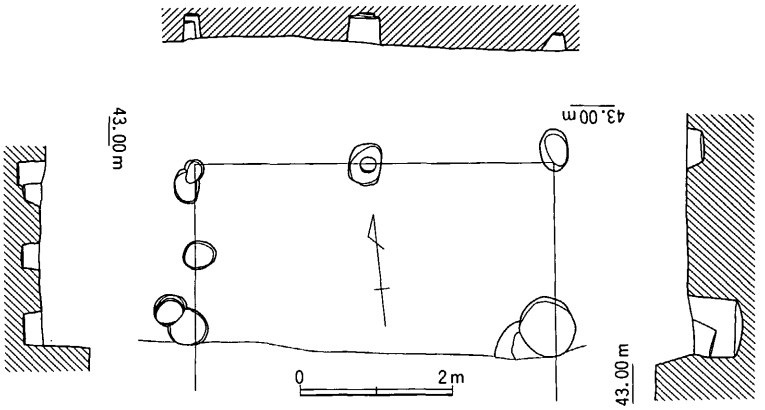


Fig.89　20SB010実測図（1/100）

掘立柱建物

20SB001（Fig.89）

調査区南側へ延びるようで、規模については不明確であるが、２間×？間の南北棟であろうと推定される。柱間は2.3m～2.4mを測り、柱掘り方は0.6m～0.4mを測る。方向は、N-3°-Eである。

３、出土遺物

掘立柱建物出土遺物

20SB001（Fig.90、Pla.65）

黒色土器

椀c2（1・2）　2は高台のみの資料で、推定高台径は、7.65cmを測る。1は口縁部をわずかに欠損する個体で、推定口径15.3cm、器高6.55cm、高台径8.6cmを測る。内面には、ミガキbの後ていねいなミガキcによって仕上げられている。口縁部外面までわずかに黒色化している。A類。柱掘り方a出土。

石製品

砥石（3・4）　3は、やや褐色味を帯びる暗黒灰色を呈する細粒砂岩製で、部分的に欠損し

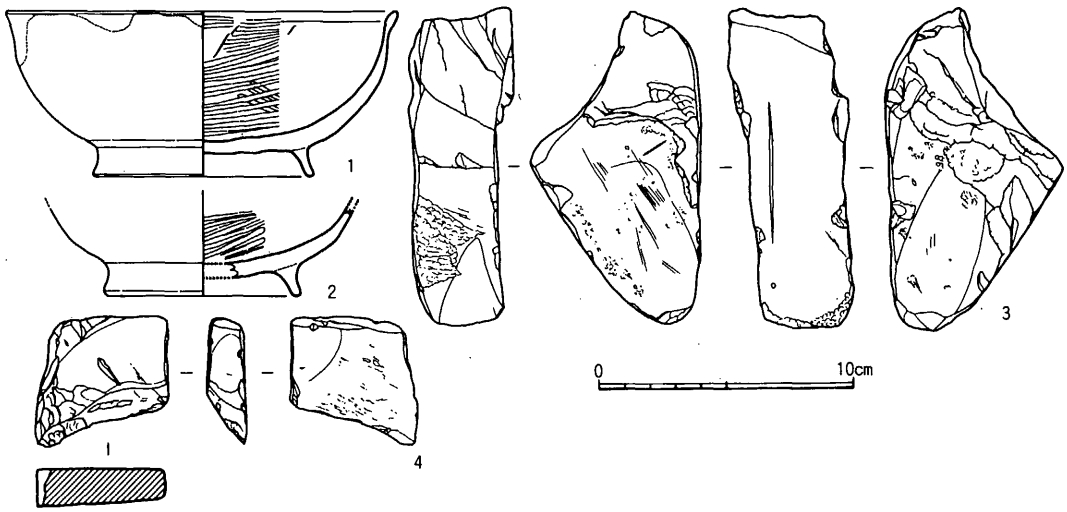


Fig.90　20SB010出土遺物実測図（1/3）

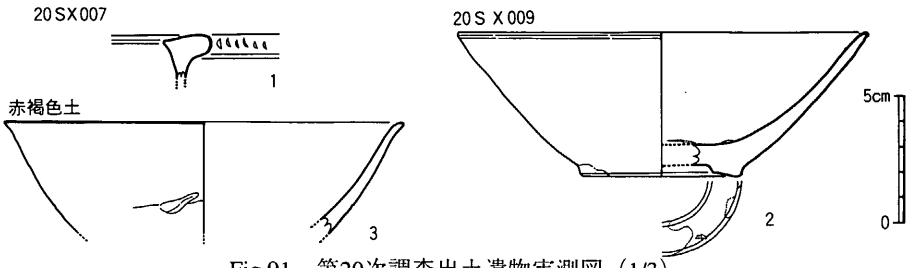


Fig.91　第20次調査出土遺物実測図（1/3）

ているが、四面を砥石面として使用しているのが確認できる。柱掘り方a出土。4は、淡暗緑色を呈する細粒砂岩製で、部分的に欠損しているが、四面を砥石面として使用しているのが確認できる。特に斜めに掻けている部分についても、砥石面として利用している。柱掘り方b出土。

その他遺構出土遺物

20SX007出土遺物（Fig.91）

弥生土器

甕（1）　口縁部の小破片資料で、傾きに関しては類例より推定した。口縁端部に刻み目を残す以外は器面磨耗のため定かではない。

20SX009出土遺物（Fig.91、Pla.65）

越州窯系青磁

椀（2）　I-1・b類で、暗茶灰色を呈し、よく精選された素地特徴を有する。高台付近は明赤褐色を呈している。また釉調は内外面ともに淡黄緑色で濁り気味の色調を有し、細かい気泡が多数入っている。推定口径16.2cm、器高5.7cm、推定高台径6.4cmを測る。破片資料のため、目跡痕跡が何箇所付着しているのかは不明。

赤褐色土層出土遺物（Fig.91、Pla.65）

越州窯系青磁

椀（3）　II-2類で、淡黄茶色の精選された素地特徴を有し、気泡が細かく入る。釉調は内外面ともに淡暗黄緑色の釉で、貫入が細かく入る。推定口径15.8cmを測る。なお体部外面に製作時に付けられた凹みがあるが、状況からみて、意図的に付けられたものではないと考えられる。

4、小結

推定筑前国分寺の寺域の西外郭線に近接し、何らかの施設が検出される可能性があったため、試掘調査の際、遺構希薄であったが発掘調査を実施した。その結果、平安中期に機能していたと考えられる掘立柱建物跡1棟を検出したほかは、小穴をわずかに検出したにすぎず、国分寺が建立された時期の遺構は残念ながら検出できていない。また設定した調査区のレベルが東側へゆくにつれて上がっており、その関係から検出できる遺構の密度も低くなっている。したがって、現況の掘削によって、遺構が削平されている可能性がある。いずれにしても、今回の調査によって、西外郭線は調査区の東側に接して敷設されている現況道路の下か、さらに東側に存在している可能性が強くなった。また、平安中期には、寺域外における土地利用の一端とし

て、掘立柱建物が営まれていることが分かった。なお調査区の狭小さから、この掘立柱建物の性格が十分に把握できていない。今後はこれら寺域外の建物群の性格の検討が必要となろう。

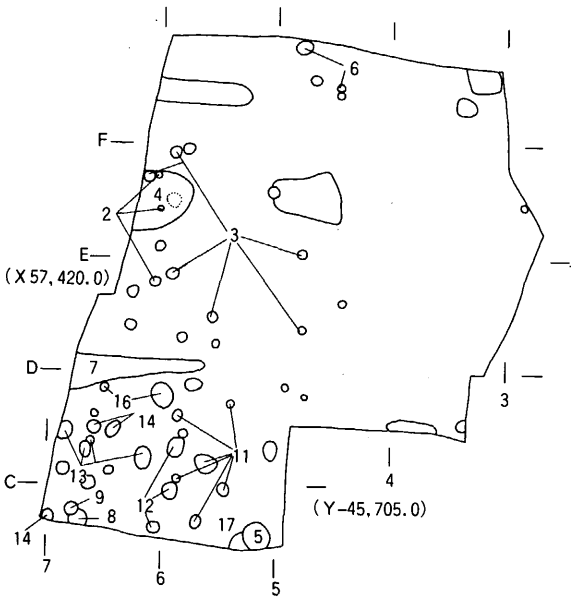


Fig.92　第20次調査検出遺構略測図

Tab.29　第20次調査遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別　古→新	地区
1	20SB001	掘立柱建物	B5他
2		ピット群	E5
3		ピット群　茶黒色土	E5
4		凹み	E6
5		ピット　(20SB001の柱穴であることが判明。)	B5
6		ピット群	F4
7		溝？	D6
8		ピット	B6
9		ピット	B6
		(欠番)	
11		ピット群	B5
12		ピット群	B6
13		ピット	C6
14		ピット	C6
		(欠番)	
16		ピット	C6
17		ピット　S-17→S-5	B5

Tab.30　第20次調査出土遺物一覧表

S-2

土師器	破片
金属製品	釘
木製品	炭化物片

S-3

土師器	坏、甕、椀c
黒色土器A	破片
黒色土器B	椀
瓦類	破片

S-4

須恵器	破片
黒色土器A	椀
弥生土器	甕？(底部)

S-5

須恵器	甕、蓋
土師器	甕、坏
黒色土器A	椀c2
黒色土器B	椀c2
瓦類	平瓦(縄目叩、格子叩)、丸瓦(縄目叩、格子叩)
石製品	砥石、珪化木

S-6

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-7

土師器	破片
弥生土器	甕(中期)(混入か?)

S-8

土師器	椀c
瓦類	破片(縄目叩)
石製品	砥石

S-9

土師器	坏a
越州窯系青磁	椀；I-1b [1]

S-11

須恵器	坏c
土師器	甕、坏a
瓦類	破片

S-12

須恵器	甕、坏a、破片
黒色土器A	椀
瓦類	破片

S-13

須恵器	蓋、小壺
土師器	坏a(褐色系)、甕

S-16

土師器	坏
土製品	焼土塊

S-17

須恵器	甕
土師器	椀c
黒色土器A	椀
瓦類	平瓦(縄目叩、格子叩)

赤褐色土

須恵器	甕、蓋3、坏c
土師器	椀c、坏a、甕
越州窯系青磁	椀；II(1)
瓦類	破片(縄目叩、格子叩)

国分寺20次　土器計測表

20SB005

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
黒A・椀c2	1	001	1	15.3	6.6	8.6		
	2	002	2	−	3.4+	7.7		

(9) 国分瓦窯跡

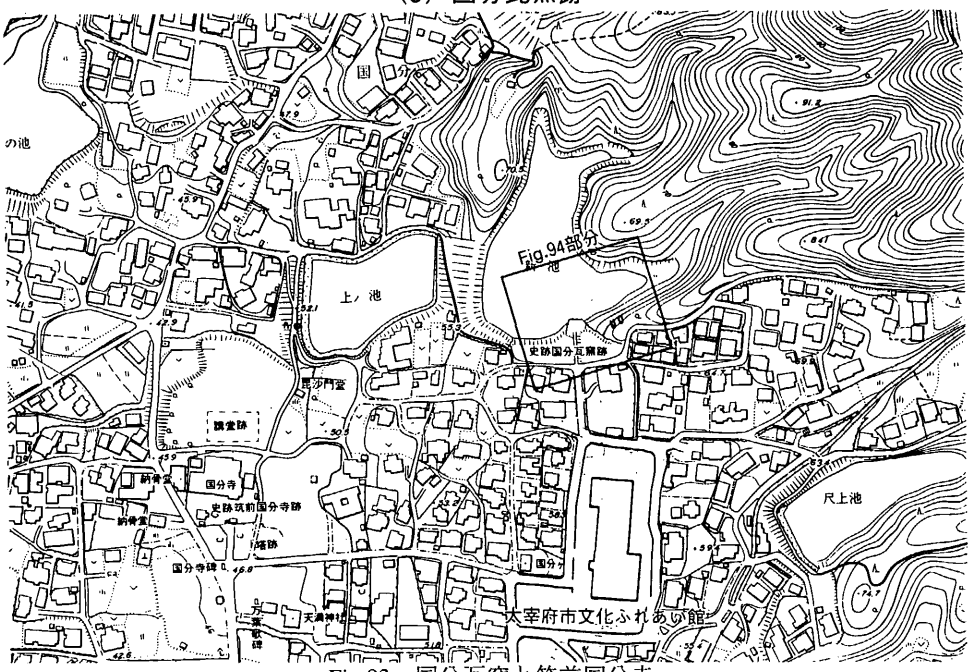


Fig.93　国分瓦窯と筑前国分寺

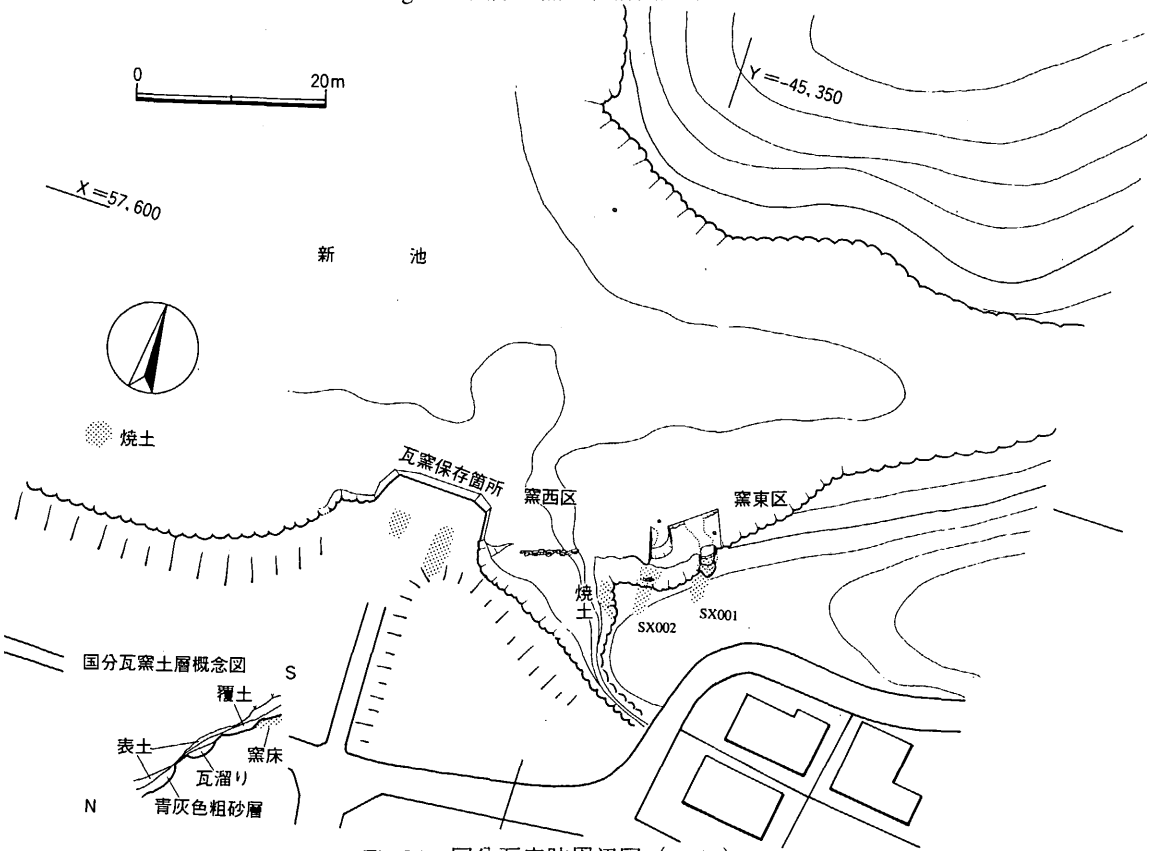


Fig.94　国分瓦窯跡周辺図（1/800）

調査地は太宰府市大字国分786番地で国指定史跡国分瓦窯跡（大正12年10月12日指定）の指定地内にある。調査範囲は約72m2。調査期間は平成7（1995）年2月6日から2月14日である。

今回の調査の経緯は、先年の史跡指定地巡回の際にすでに擁壁によって保護措置がとられている窯跡周辺に多くの瓦が散布している状況が見られ、再度の巡回で池の畔の法面に窯の壁体が露頭している箇所が発見されていた。平成6（1994）年になってその箇所について池の浸食によって崩壊が進んでいるのが確認された。調査はこの遺構の崩壊が進行するのを防ぐために仮の埋め戻しを行うのに先立ち、現状変更許可申請の指導に基づいて限定的な調査を行ったものである。

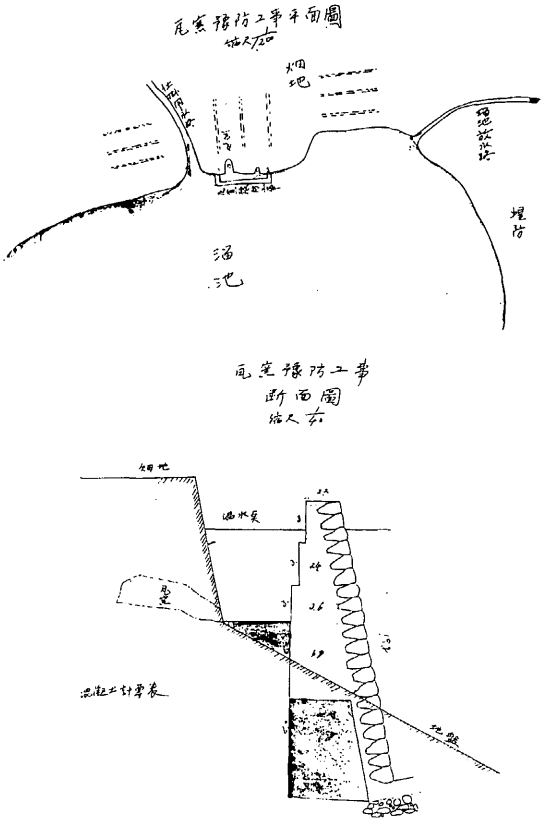


Fig.95　国分瓦窯跡
昭和2年保存工事図（1/4）

1、保存・調査略史

国分瓦窯跡は本市に残されている「国分瓦窯保存ノ件」なる資料によれば、すでに大正12年に国の史跡名勝天然記念物に指定された時点でため池の浸食により「滅却スル」可能性がある状況にあり、昭和2（1927）年に内務省より補助金を受け2基の窯を囲うように石垣で護岸を施す工事がなされた（Fig.95）。昭和27（1952）年に至り再度窯内に溜まった泥土の除去と覆い屋の建設がおこなわれた（Fig.96）が、翌昭和28（1953）年の大水害で「窯は水の中に没して土質が軟弱となり水が引き始めると、ボロボロと土が

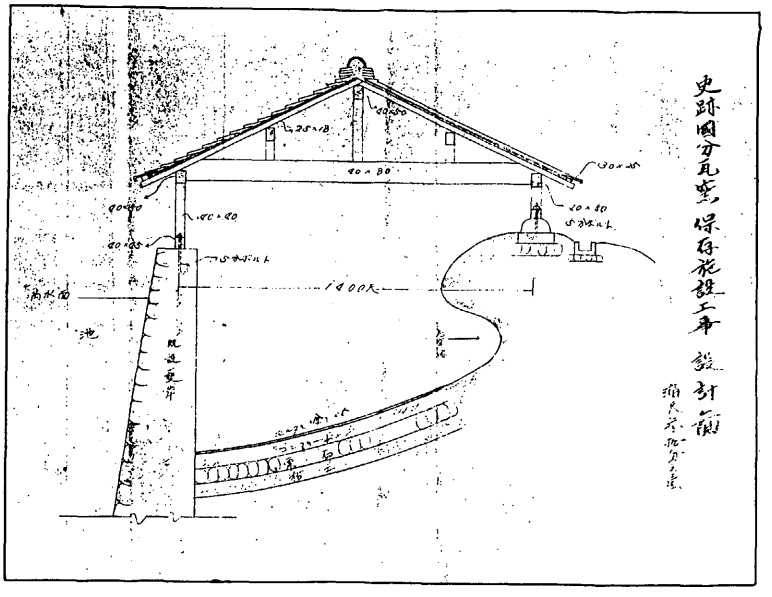


Fig.96　国分瓦窯跡昭和27年工事図（1/3）

落ち始め窯外は大部分が崩壊し、窯内の左側の窯は中の右半分が墜落し原形を失」う状態にまでなり、恐らくはこの後に埋め戻しをして現在に至ったものと考えられる。その間に九州大学の鏡山猛によって1基の窯が実測調査され、複数の人間によって瓦や窯体が採取され、一部が報告されている（鏡山猛「筑前国分寺」『国分寺の研究』考古学研究会　1938年）。

しかし、窯は先に保存された2基以外にも存在し、本市所蔵の「史跡筑前国分瓦窯跡関係綴」という昭和44（1969）年のメモによればさらに7基の所在が確認されている（以下に原文を掲載する）。

国分瓦窯跡44.10.3（1969年）

現状（指定地内）

786番地　現存4基

No.1　窯壁は露出しておらず。窯壁構築材片も認められないが、灰原と思われるものが斜面に認められるので窯本体はなお上部にあるものと思われる。

No.2、3　窯尻及び側壁の一部が残存。付近には瓦窯壁構築材が散乱している。

No.4　木の体の下となっている。窯尻と側壁が一部残存し、補強用に使用された完形の丸石が認められる。

これらの5基はいづれも満水時には水没する。

790-2、783-2番地　現存3基

No.5　水路の近くに存在する。窯尻の一部が残存。塼*の散乱が著しい。

No.6、7 現在崩壊を防ぐため土砂を充填している。

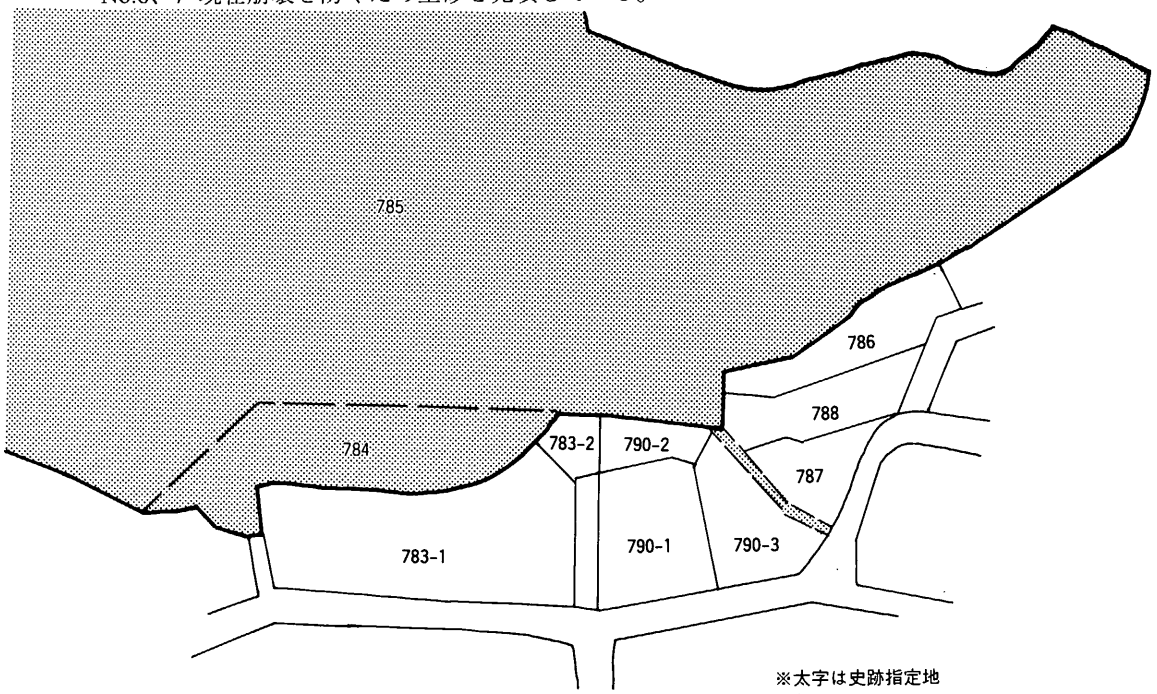


Fig.97　史跡国分瓦窯跡周辺地籍図（1/1000）

（指定地外）

784番地　2基

No.8　窯尻と思われる部分が僅かに確認されている。

No.9　窯尻と側壁（現存2m）が残存している。壁の周囲も幅約2～20cm程に赤くなっており、数回の焼成を思わせる。

現状に対するとすべきと思われる対策

1　付近一帯の精密なる全体図の作成を行う。併せて1～5号、8、9号の記録をとる。特に写真撮影を近日中に早急に実施すべきである。

2　上記作業の成果を基にして説明版の内容を検討する。

3　現状の指定地の解除は認めない

4　未指定地である784についても指定地に含める。」

※この文中の塼とは本報告の窯体煉瓦のことと思われる。

2、遺構

調査は「新池」の南側の法面に焼成によって形成されたと考えられる赤く地山面が変色していた部分の前面の堆積土を除去する作業をおこなった。掘り下げによって約6mの間隔で並ぶ2基の窯跡と思われる遺構とその前庭部を確認した。東をSX001、西をSX002としている。

遺物の採集は遺構内の他は、表土下で遺構全体を覆っている「青灰色粗砂」、前庭部周辺の

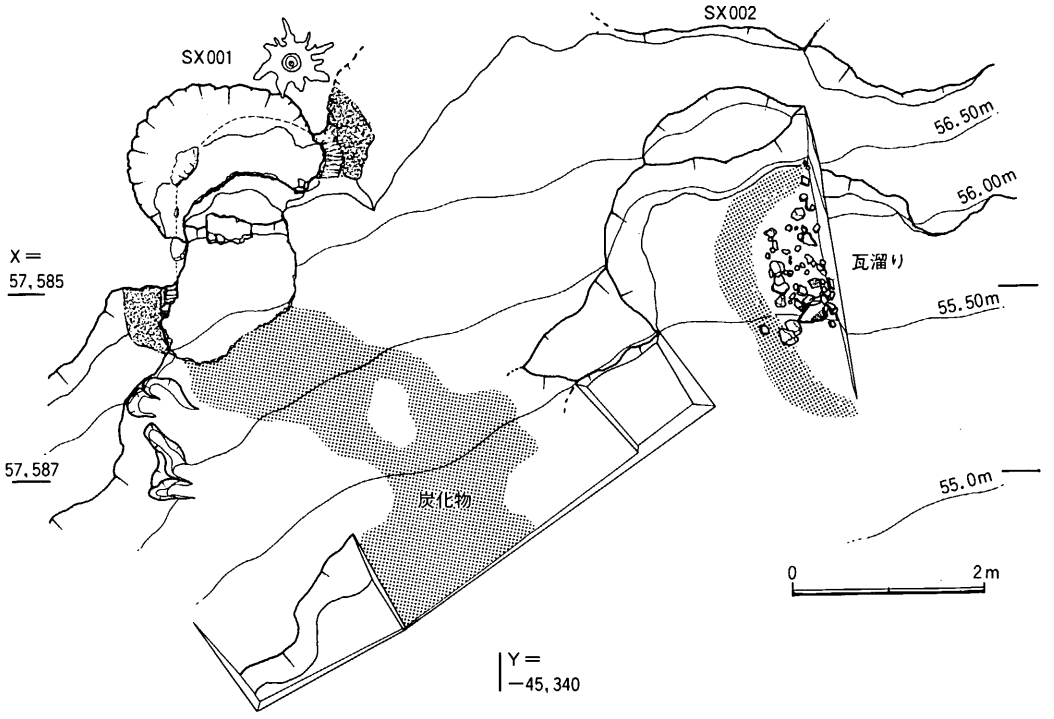


Fig.98　国分瓦窯跡実測図（1/80）

表土中及び表面散布状態の「表採」、この西側の「窯西区表採」、東側の「窯東区表採」に分けられる。

調査終了後に調査範囲全体を砂で埋め、窯の壁体部分には池の満水時のレベル上まで土嚢積みをおこない仮の保護処置をおこなった。

窯跡

SX001（Fig.98、Pla.67・68）

浸食によって焚き口、燃焼部が半壊している状況と見られ、長方形の日干し煉瓦を横積みにして窯の内側に張り土をした窯体が観察できる。床面は焼成によって硬化している。窯体の左右には幅約40cmの赤色化した掘り方埋土が窯体に沿うようにある。燃焼部と焼成部の境は70cmほどの段差がある。焼成部前面の天井は崩壊落下している。日干し煉瓦による壁体は多少膨らみを持ち、上方で多少持ち送り気味に内傾している。

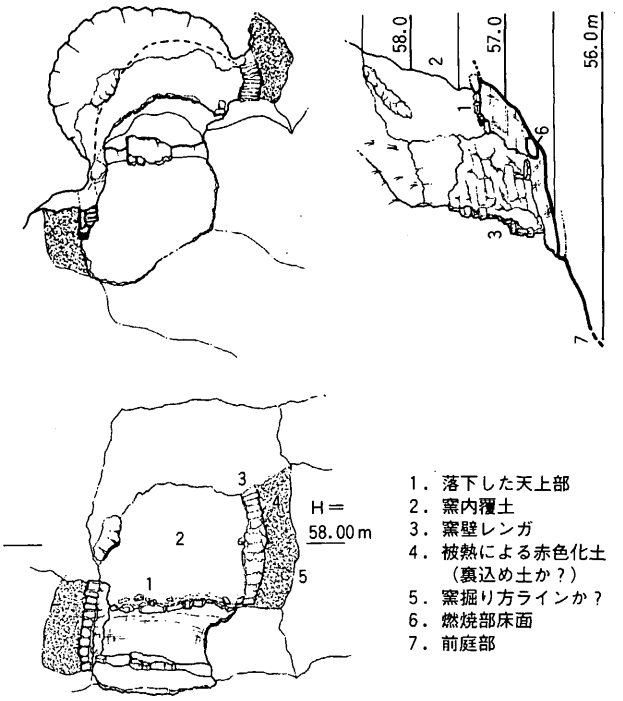


Fig.99　SX001実測図（1/80）

SX002（Fig.98・99、Pla.68）

壁面の一部に日干し煉瓦による壁体が認められたが、窯体検出までの土量が多く、今回は前庭部のみの調査をおこなった。ここでは縄目を持つ平瓦の破片が窪みに集積した状態で検出された。この窪みには焼け土や瓦の他、窯の壁体や焼き台と思われる焼成を受けた土塊が見られた。調査は東半分のみを遺物が検出されるレベルまで下げたところで止め、遺物は最も大きい平瓦のみを採集し、図面作成後にそのまま埋め戻している。

窯はSX001以東には現在のところ観察されず、残りの窯はSX002以西の現在小河川のある位置の浸食で消滅した部分にあった可能性がある。この河川の浸食作用は現在も続いており、池の浸食と併せて今後の保存措置を考慮する必要がある。

3、出土遺物

遺物の観察の表記中に使用する「須恵質」はいわゆる須恵器の硬質な焼きの状態で、さわって粉が手につかない状態のものを指し、「瓦質」は白～灰～黒色を呈し触れるとザラザラと粉が手につくものを、「土師質」は白～赤褐色を呈すものを示している。

SX001出土遺物（Fig.100、Pla.69・70）

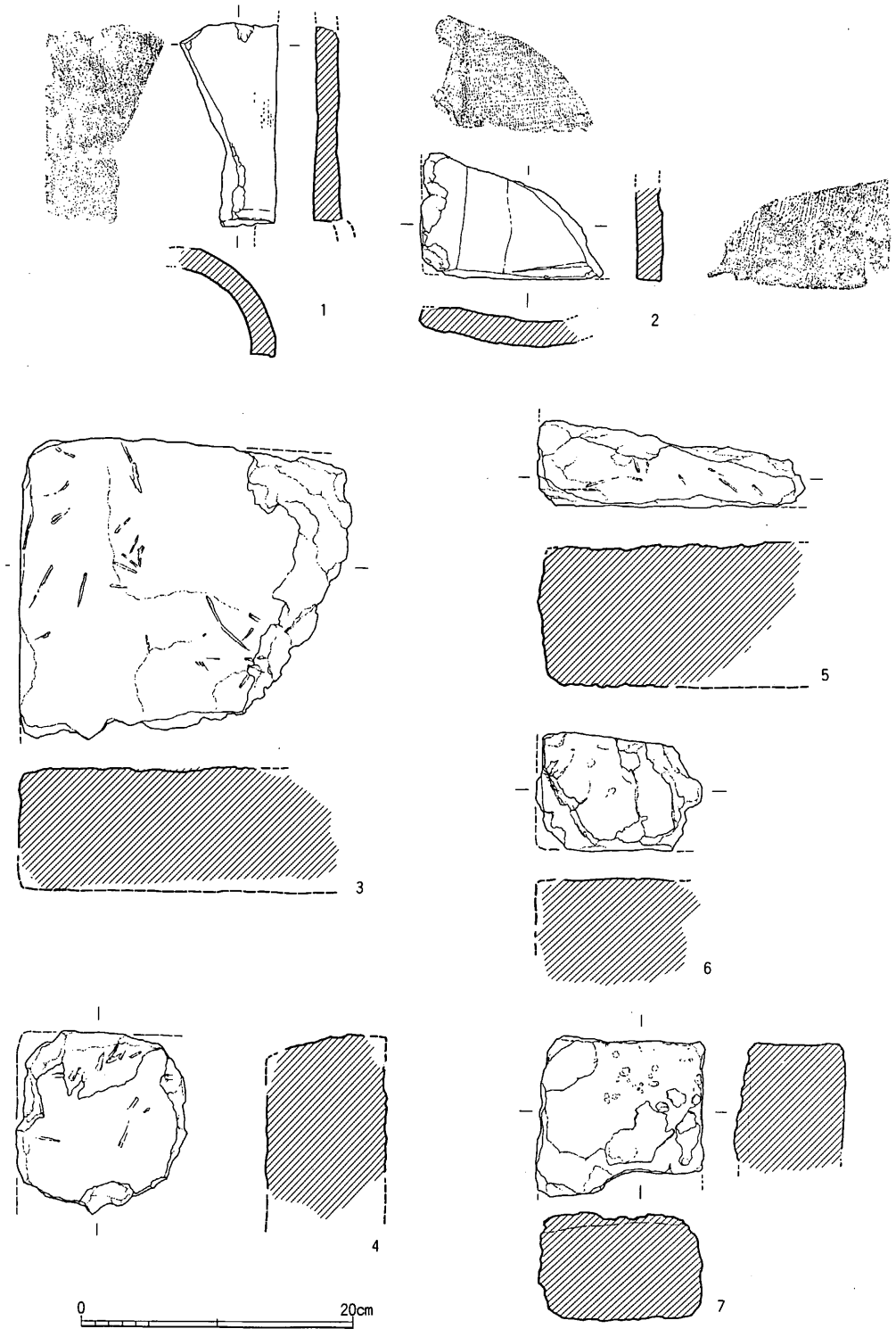


Fig.100　国分瓦窯跡SX001出土瓦・煉瓦実測図（1/5）

焚き口付近の堆積層中からの遺物である。

瓦

丸瓦（1）　外面は縄目の叩き後になでを施す。厚みは約2cmで、焼成は須恵質。

平瓦（2）　外面は縄目の叩きを施す。内面は布目が残され、かすかに幅約4cmの模骨の痕跡が見られる。側端部はへら削りによる調整が見られる。厚みは約2cmで、焼成は表面が黒色、芯が淡褐色を呈す瓦質である。

煉瓦（3～7）　藁のような植物繊維を練り込んだいわゆる「スサ」入りの煉瓦で、大半のものが焼けているが、焼成が及んでいない部位を持つものが多く見られ、窯築造時点では日干し状態の煉瓦であったと考えられる。焼けの状態はそれこそ同一個体の中でも異なり、5は図の上面が灰色（還元）、下面は赤褐色（酸化）、6は上面黄褐色、下面赤褐色、4は上面が黒色、灰色、赤色が漸移しながら変化している。質感は全般的にもろい土師質であるが6は石並の堅さがあり、表面は気泡が吹いている。

SX001青灰色粗砂層出土遺物（Fig.107、Pla.77）

陶器

45は、淡黄褐色の色調を持つ須恵質の胎土に黒褐色の鉄絵が見込みに描かれ、透明系の釉が施される、いわゆる京風焼である。

磁器

46は、白磁に青色の呉須で絵が描かれる肥前系磁器の丸椀である。畳付けは釉が拭き取られている。

SX002瓦溜まり出土遺物（Fig.101、Pla.70）

瓦

平瓦（8）　外面は縄目の叩きを施し、小口は幅約12cmの間は条線を残すなでが施される。内面は布目が残され、かすかに幅約4cmの模骨の痕跡が見られる。所々に円弧条の条線が残り、粘土塊から粘土板を切り離した際の糸切りの痕跡と考えられる。側端部はへら削りによる調整が見られる。厚みは約2cmで、焼成は須恵質である。幅は約30cmに復元される。

SX002青灰色粗砂層出土遺物（Fig.101、Pla.70）

土師器

47は、乳褐色系の色調を持つ胎土を持ち、底部には断面形状が三角の高台を持つ。内面は平滑になでられる。丸坏cに該当しよう。

磁器

48は、肥前系の染付磁器で内面には施釉がなく徳利の胴部であると考えられる。内面にはロクロ目の跡が見られる。呉須の施文は梅花。

瓦

面戸瓦（9）　白灰色を呈す瓦質の製品で、縁はへらによって面取りが施される。

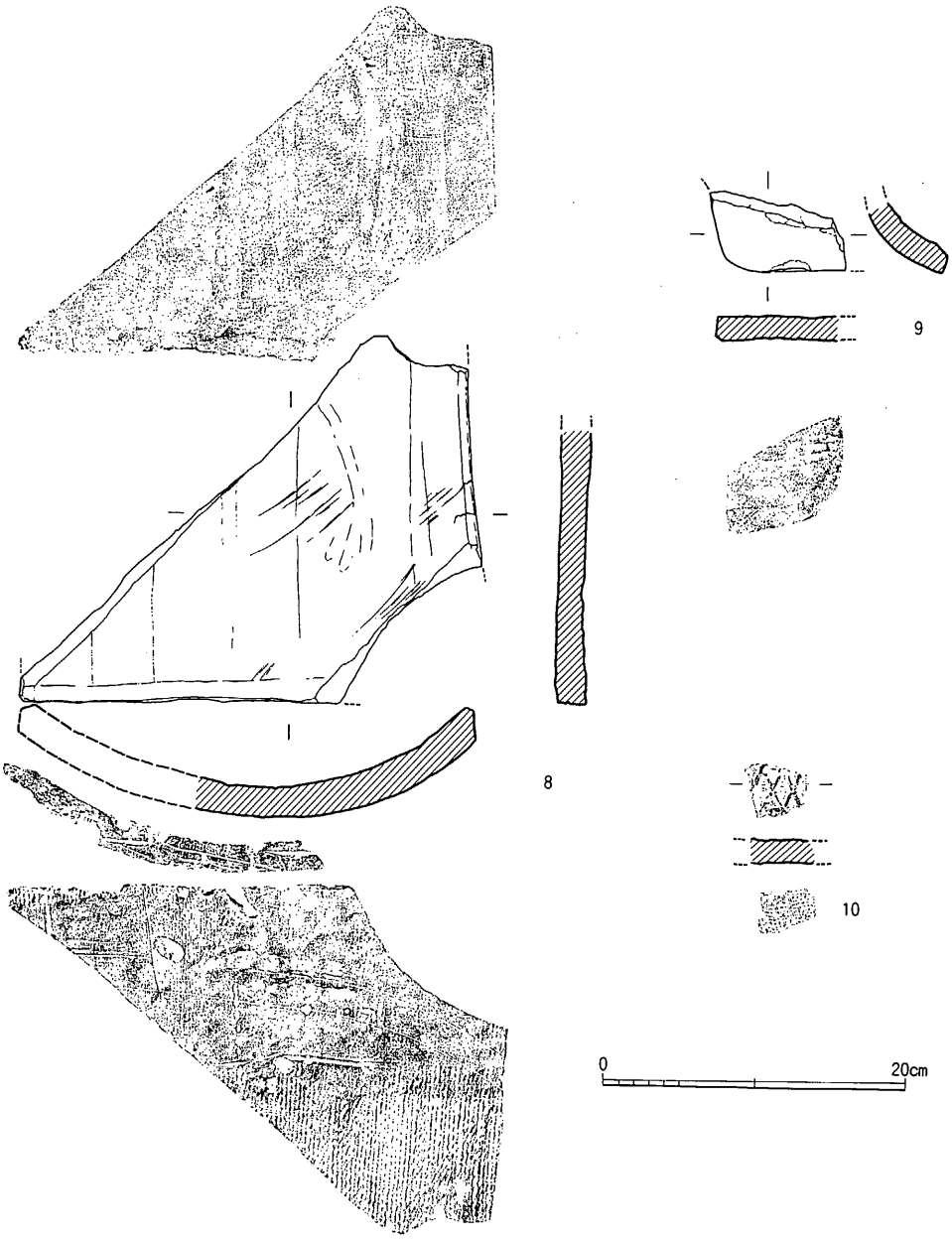


Fig.101　国分瓦窯跡SX002瓦溜まり出土瓦実測図（1/5）

瓦片（10）　厚み約1.6cmで淡灰色を呈す須恵質の瓦片。斜格子の叩きを持つ。

SX002覆土出土遺物（Fig.102、Pla.71）

瓦

平瓦（11）　内面は縄目の叩きを施す。外面は布目が残され、かすかに幅約2cmの模骨の痕跡が見られる。側端部はへら削りによる調整が見られる。厚みは約2cmで、焼成は表面が黒色、芯が白灰色を呈す瓦質である。

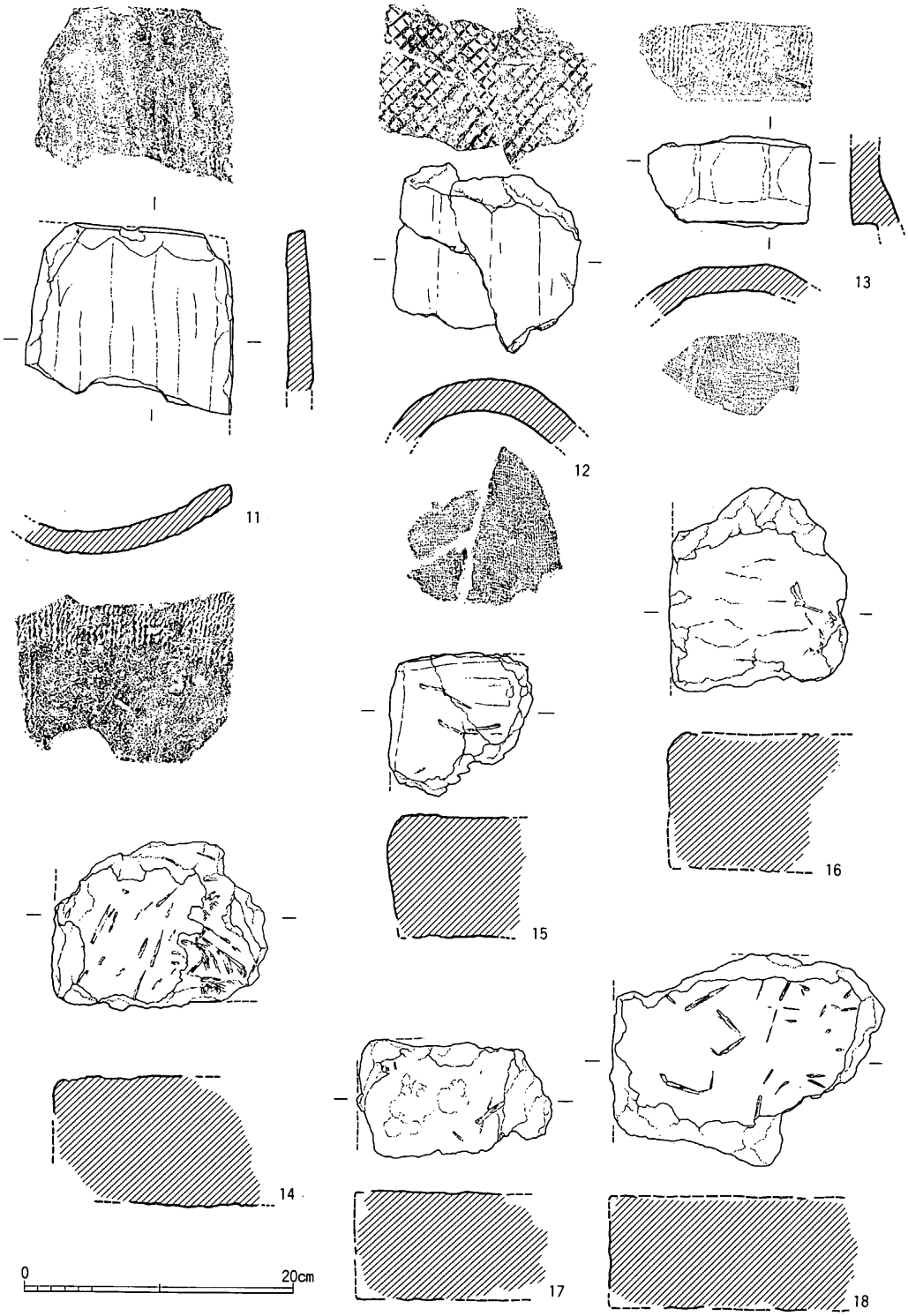


Fig.102　国分瓦窯跡SX002覆土出土瓦・煉瓦実測図及び拓影（1/5）

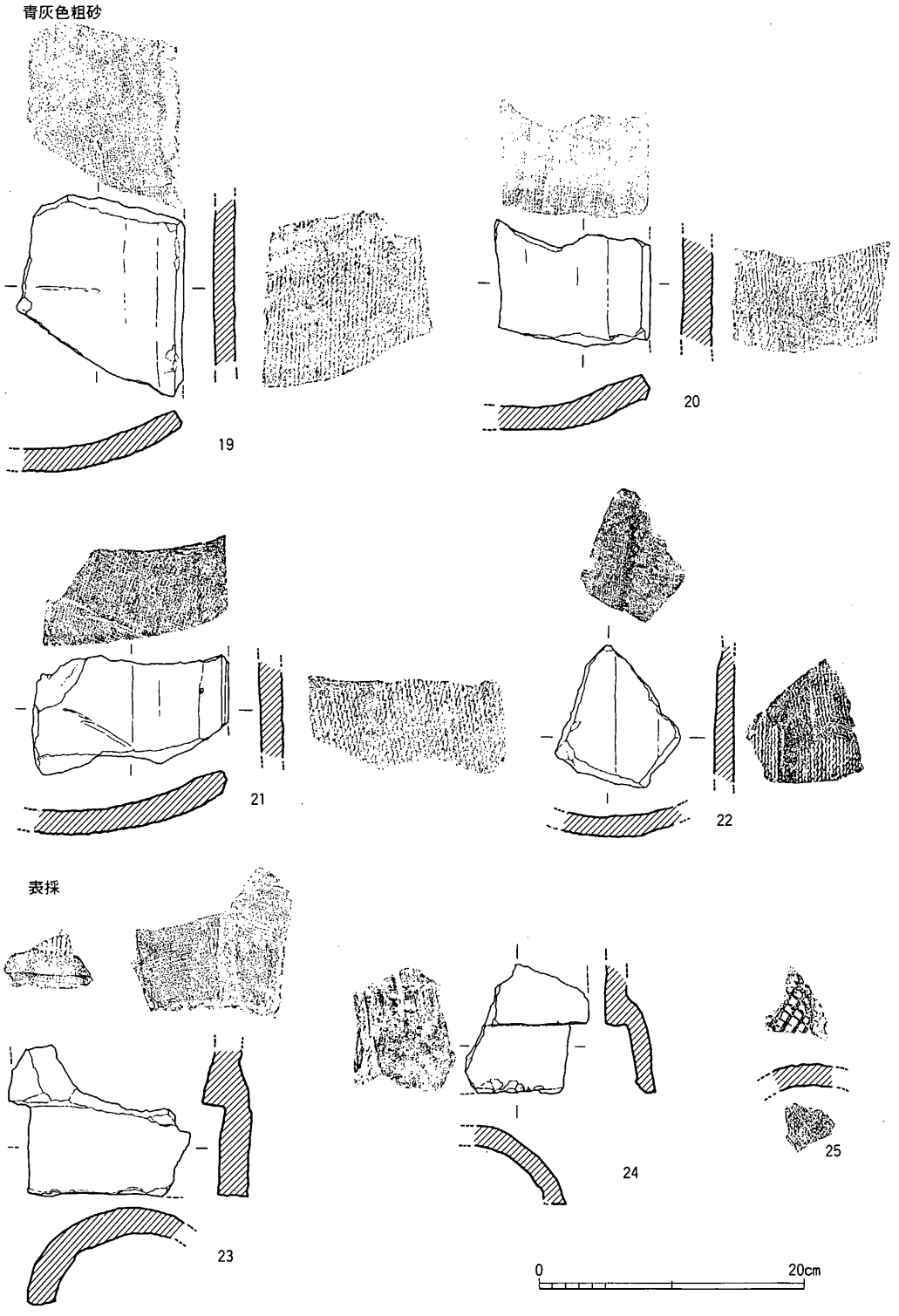


Fig.103　国分瓦窯跡青灰色粗砂・表採出土瓦実測図及び拓影（1/5）

丸瓦（12～13）　12の外面は一辺約0.8cmの正格子の叩きを施す。長軸方向に4回の叩きが観察されるが、格子の斜線の筋が連続したように見える。内面は布目が残される。厚みは約2.6cmで、焼成は瓦質である。13の外面は縄目の叩きを施す。玉縁への段はかなりシャープ。内面は布目が残される。厚みは約2cmで、焼成は硬い須恵質である。

煉瓦（14～18）　「スサ」入りの煉瓦で、大半のものが焼けているが脆い土師質をなす。厚みは14が約10cm、15が9cm、16が10.4cm、17と18が8.4cm。

青灰色粗砂層出土遺物（Fig.103・107、Pla.71・72・77）

須恵器

49は、灰色で焼きしまった胎土を持つ。器形から坏cに比定される。

磁器

50は、肥前系染付の椀で器壁やや薄目で端反り口縁を持つ可能性がある。

陶器

51は、須恵質の胎土に暗緑灰色の釉がかかる椀で、釉には細かな貫入がはいる。

瓦

平瓦（19～22）　内面は縄目の叩きを施す。外面は布目が残され、かすかに幅約2～2.8cmの模骨の痕跡が見られる。側端部はへら削りによる調整が見られる。厚みは約2cmで、焼成は表面が黒色、芯が白灰色を呈す瓦質である。

表採遺物（Fig.103～105・107、Pla.72～77）

土師器

52は口径cm、高さcmに復元され、乳褐色系の硬質の胎土を持つ。底部はかすかに回転糸切りの痕跡があり、その上を板状圧痕が覆っている。

須恵器

壷（53、54）　叩きを残す甕ないし壷の破片であり、53は淡赤色系の酸化焼成である。54は暗灰色の硬質である。

磁器

55～57の3者とも肥前系の染付で、55は丸椀、56は皿、57は筒椀である。55と56は釉が透明でなく白色系で呉須も白色がかりくすんだ感じで、胎土も特に畳付けの部位は薄いピンク色に酸化している。57には見込みの外側に呉須絵付けによる二重の圏線がある。

瓦質土器

甕（58）　外面黒色、内面白色系の瓦質焼成の大甕の口縁部で、はけによる器面の調整が施されている。

瓦

丸瓦（23～25）　外面の叩きは不明、玉縁にはなでを施す。玉縁内側の端部に紐の痕跡らしきものが残される。厚みは約2cmで、復元できる幅は約15cm。焼成は須恵質。24は瓦質焼成で

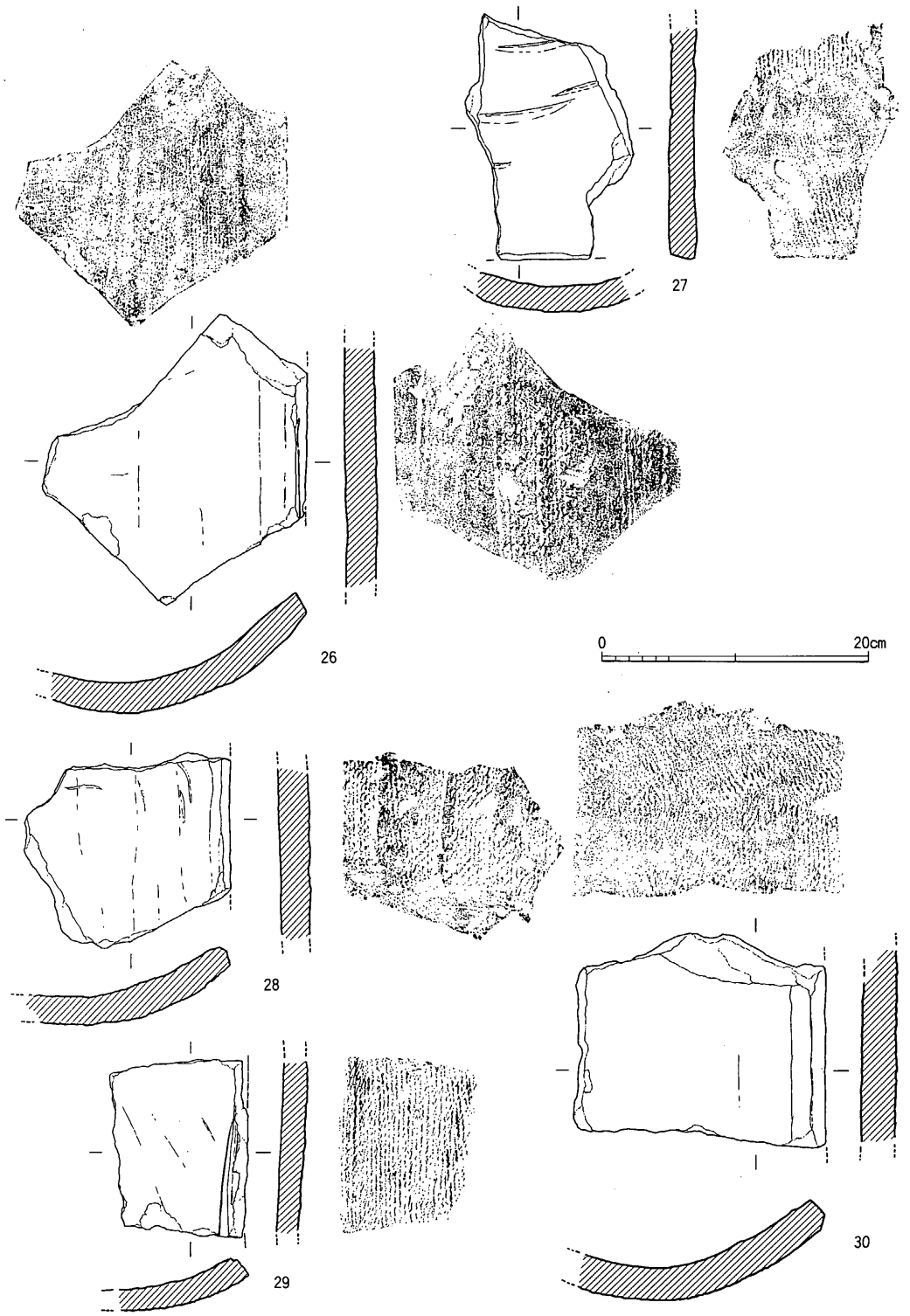


Fig.104　国分瓦窯跡表採瓦実測図及び拓影（1/5）

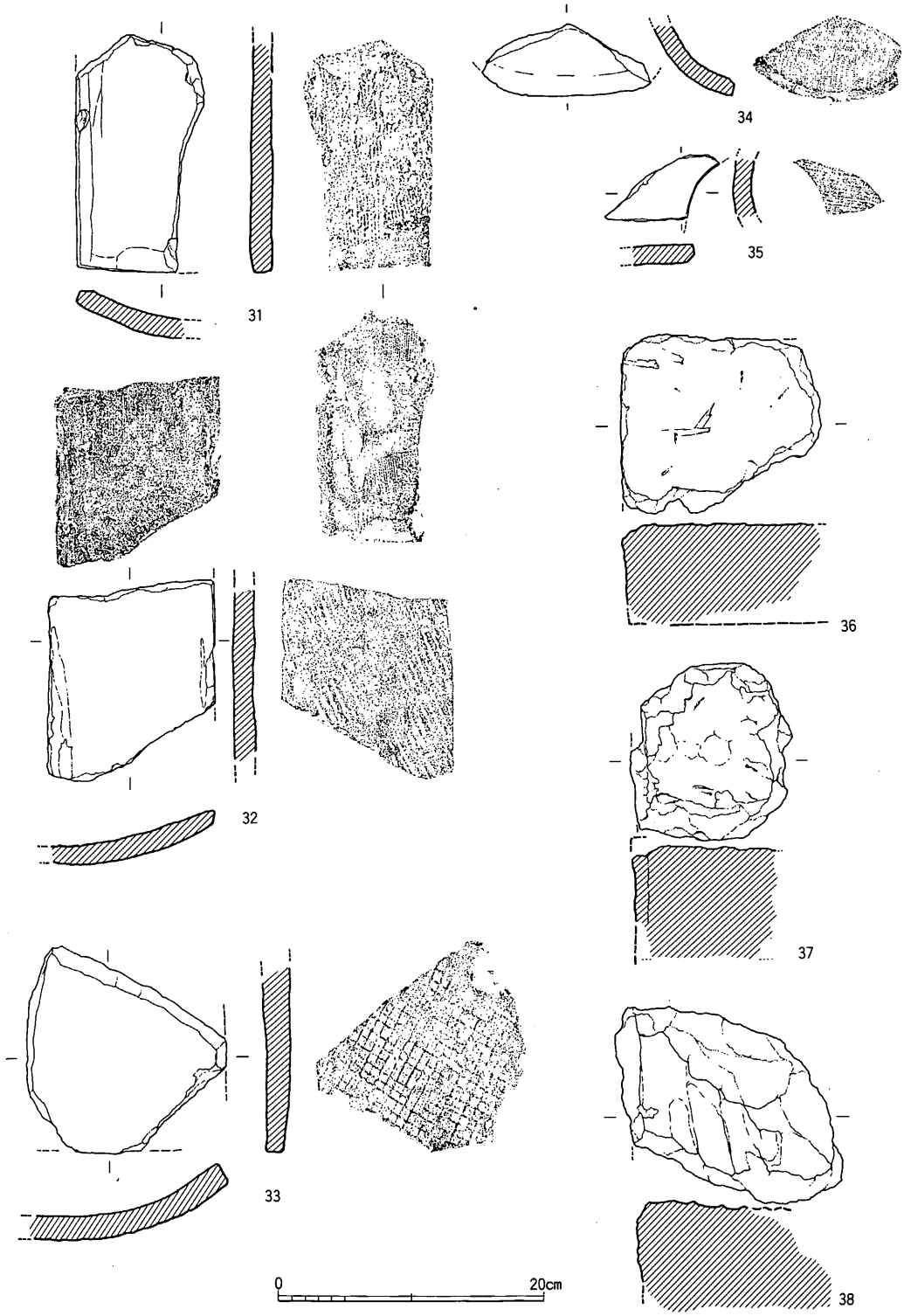


Fig.105　国分瓦窯跡表採瓦・煉瓦実測図及び拓影（1/5）

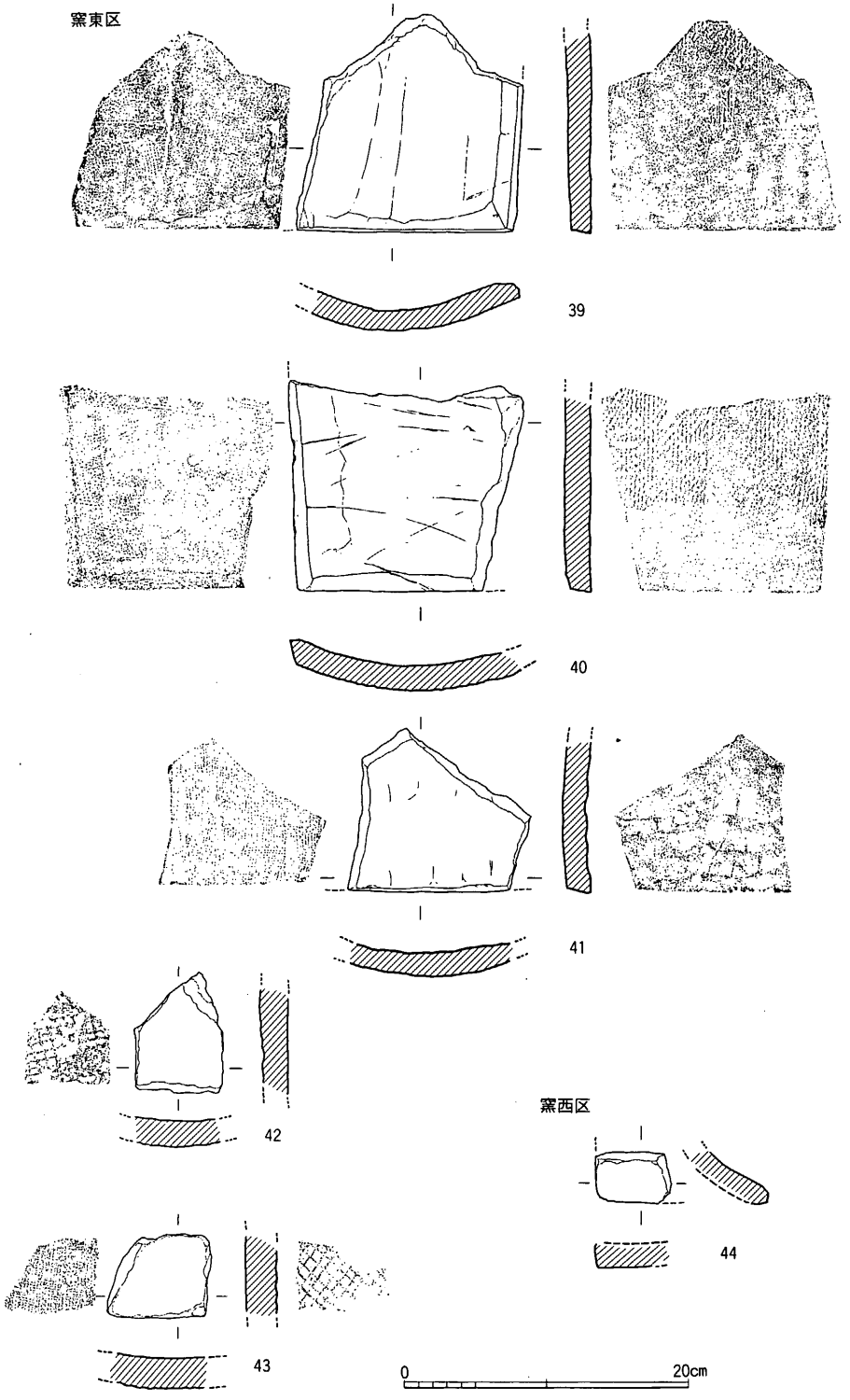


Fig.106　国分瓦窯跡窯東区・西区表採瓦実測図及び拓影（1/5）

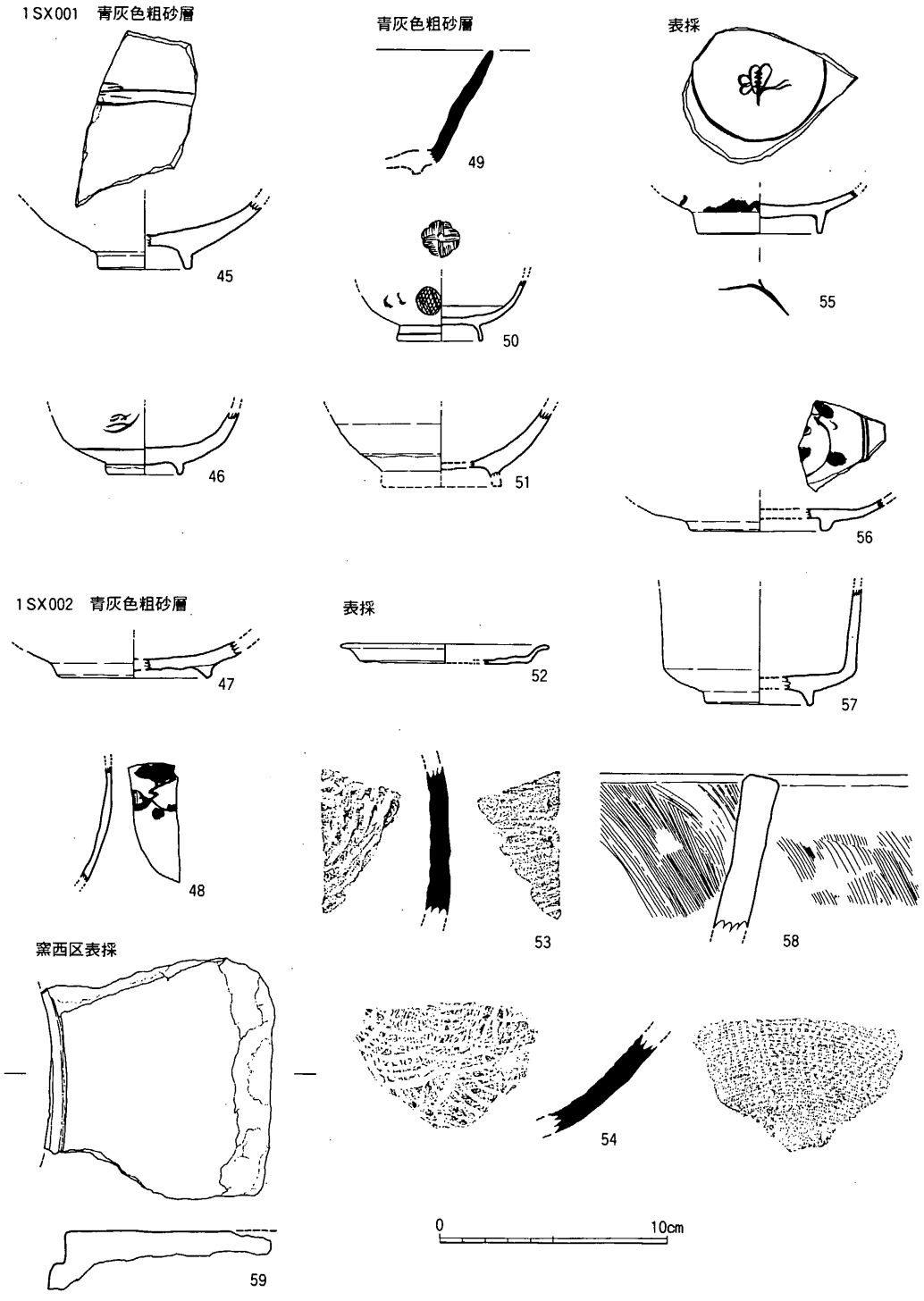


Fig.107　国分瓦窯跡出土土器実測図（1/3）

厚みは約1.6cmとやや薄目。25の外面は一辺約0.8cmの正格子の叩きを施す。

平瓦（26～33）　26～32の内面は縄目の叩きを施す。33は一辺約0.8cmの正格子の叩きを施す。32の縄は他に比べ太め。外面はかすかに布目が残されるが、大半のものになでないし削り仕上げが施される。28にはかすかに幅約2cm前後の模骨の痕跡が見られる。側端部はへら削りによる調整が見られるが、26と29には筋状の分割界線と切り込みが残されている。厚みは約2～2.8cmで、焼成は31と33は土師質のほかは瓦質である。

面戸瓦（34、35）　厚みが約1.5cmの瓦質のもので、外面はなでないし削りが施される。

煉瓦（36～38）　「スサ」入りの煉瓦で、36、37は焼けているが脆い土師質をなす。38は硬く一部が還元化している。厚みは36が約7.6cm、37が8.4cm、38が8cm。しかし、37は表面に粗い土が厚さ約1cmの層状に付着する部分があり、窯構築時に泥を上塗りした痕跡を残している。38の表面には強く指でなでた痕跡が残されている。

窯東区表採（Fig.106・107、Pla.75・76）

瓦

平瓦（39～43）　39～41の内面は縄目の叩きを施す。42、43は一辺約0.8cmの正格子の叩きを施す。41には四条の横方向の指押さえの痕跡が見られる。外面はかすかに布目が残されるが、大半のものになでないし削り仕上げが施される。39、41にはかすかに幅約2cm前後の模骨の痕跡が見られる。40には糸切りの痕跡らしい弧状の条線が見られる。側端部はへら削りによる調整が見られる。厚みは約2～2.8cmで、焼成は39と41は土師質のほかは瓦質である。

窯西区表採（Fig.106、Pla.76）

瓦

面戸瓦（44）　表面が剥離しているが外面黒色、内面白灰色の瓦質の製品。厚さ約2cmに復元される。

土師質土器

59は、淡褐色系の色調を持ち、円形にあけられた部分には煤が付着している。くどのかけ口の部分と考えられる。

4、小結

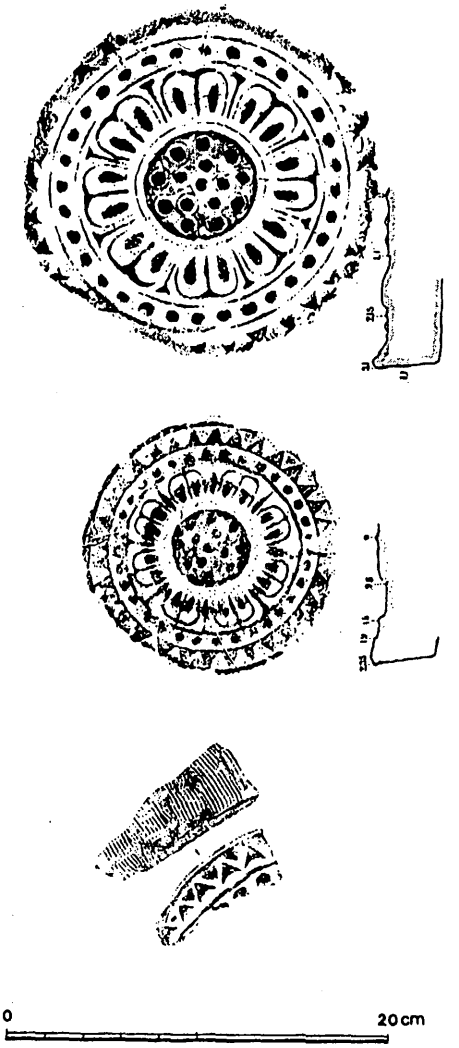


Fig.108　過去に採集された軒丸瓦（1/4）

瓦・土器について

今回の調査では軒先の瓦は1点も出土しておらず、大宰府に於いて細かな検討が進んでいる瓦の形式や年代的位置づけに近づける資料はない。過去に報告されている軒瓦には３個体の老司系軒丸瓦があり（Fig.108)、特に瓦頭側面にはけ目を残す手法と同じものは大宰府政庁前面域や観世音寺周辺で出土しており、その供給先の一端を示唆しているとされる（『大宰府史跡平成4年度発掘調査概報』1993年　九州歴史資料館　p127)。瓦の制作手法の属性からみた所見では、今回出土した瓦片をトータルすると平瓦と丸瓦の比は7.6対1で圧倒的に平瓦が多く、破片としての表面積が比較上大きい平瓦に限って言えば、叩きの手法は縄目と格子の2種類があり、その比は61.8対1で圧倒的に縄目が多い。今回出土している格子叩き目は桝目の大きさからほぼ一種類の所産と考えられ、時期的には平安時代まで下る可能性がある。

提示した資料は表面採取や包含層からの遺物であって複数あったとされる瓦窯の特定のものへの帰属性には不確定のものがあるが、出土した遺物の主体は粘土板を板状模骨に巻いて縄の叩きを施した平瓦であり、遺物群の主体的な時期は過去に老司系軒丸瓦が出土しているものの制作技法から、観世音寺の創建に遅れる国分寺創建段階のものとの位置づけが可能である（『大宰府史跡　平成6年度発掘調査概報』1995年　九州歴史資料館　p19)。

また、8世紀に位置付けられる須恵器の破片が出土し、従前から指摘のある瓦陶兼業の可能性もないではないが、量的には瓦とは比較にならない量と言わざるを得ない。窯経営時に工人によって持ち込まれた可能性も否定できない。

窯構造について

今回の調査ではSX001についてはほぼ燃焼部に相当する部位を調査したことになると考えている。この部位においては幅約2.5mの掘り方の内に法量が不揃いの未焼成の日干し煉瓦を積み、裏に土を込め表面にスサ入りの泥を塗って窯壁を構築している専築地下式登り窯である。1938年に鏡山猛氏が公表した窯（現在石垣中にて埋土保存分の内の一基）の構造では（Fig.109）天井に向かって煉瓦が逆階段状に持ち送りされている様子が見られるが、今回の調査では天井部は崩落しその構造については追認し得なかった。

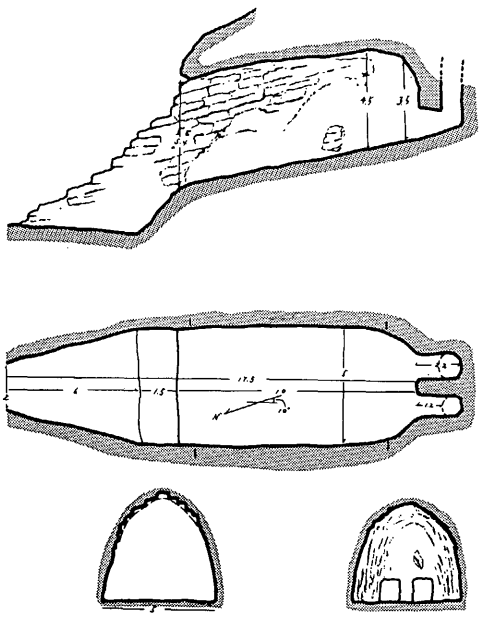


Fig.109　1939年鏡山猛氏報告の国分瓦窯（再トレース）

構造的には現段階に於いて西海道内では同様の例を知らず、今回出土した瓦の時期

的位置づけからも従前から指摘されるごとく国分寺造営にあたって中央から導入された技法によって築かれたものであったと考えられる（小田富士雄「九州の古代瓦窯とその系譜」『古文化談叢』第36集 1996）。

近世の遺物について

今回の調査では断片的ではあるが19世紀前半頃に相当する肥前系染付磁器等が出土している。本遺跡は通称「新池」内にあり同地名は明治前半期に編まれた『福岡県地理全誌』には記載があり（築堤年は不詳と記載）、新の文字が冠されることからこれら一連の陶磁器群がこの池の築堤時期に関連する可能性も考えられる。

Tab.32　国分瓦窯跡出土遺物一覧表

表採

須恵器		甕(1)、鉢(2)、破片(1)
土師器		丸底坏(2)、皿?［ヘラ、板状圧痕］(3)
土師質土器		火ちりん?(1)
肥前系磁器		染付(4)
弥生土器		破片(1)
丸瓦		縄目(3)、無文(7)、その他(7)
平瓦		縄目(147)、格子目(3)、ナデ消(7)、無文(25)
		その他(65)
道具瓦		面戸瓦(2)
その他の瓦		破片(22)
煉瓦		破片(160)
ガラス製品		蓋［近代?］(1)

窯東区表採

丸瓦		ナデ消(2)、無文(2)
平瓦		縄目(23)、格子目(2)、ナデ消(12)、その他(5)
その他の瓦		破片(11)

窯西区表採

須恵器		甕片(1)
土師質土器		火ちりん?(1)
丸瓦		ナデ消(15)、その他(2)
平瓦		縄目(34)、ナデ消(7)、その他(17)
道具瓦		面戸瓦(1)
その他の瓦		破片(17)

青灰色粗砂

須恵器		坏(1)、甕片(2)、破片(1)
国産陶器		雑釉椀［近世］(1)
肥前系磁器		染付椀(1)
丸瓦		縄目(1)、ナデ消(19)
平瓦		縄目(90)、ナデ消(26)
その他の瓦		破片(93)
煉瓦		破片(7)

SX 001

丸瓦		縄目(1)、ナデ消(4)
平瓦		縄目(14)、ナデ消(5)、その他(4)
煉瓦		破片(143)

SX 001 青灰色粗砂

須恵器		破片(2)
国産陶器		椀［京風焼］(1)
肥前系磁器		染付椀(1)
丸瓦		縄目(1)、その他(3)
平瓦		縄目(17)、格子目(25)、その他(11)
その他の瓦		破片(13)

SX 002 青灰色粗砂

土師器		丸底坏c(1)
肥前系磁器		染付瓶(1)
平瓦		格子目(1)
道具瓦		面戸瓦(1)

SX 002 覆土

須恵器		破片［坏?］(2)
丸瓦		縄目(1)、格子目(1)、ナデ消(10)
平瓦		縄目(46)、ナデ消(9)、その他(10)
煉瓦		破片(78)

IV. 総　括

1） 筑前国分寺跡発掘調査暦

今回報告した地点を総合的に考察する前段階として、過去に調査された地点の概略をまとめておくこととする（Fig.110）。

昭和35（1960）年1月、仏像の収蔵庫を建設するのに際して伽藍の一部が調査されている。調査は九州大学太田静六・鏡山猛両先生である。この時の調査では金堂、講堂、塔などに小規模なトレンチを入れるにとどまっているが、建物の規模を想定する程度の成果はあったようである。

昭和46（1971）年には民間の住宅建設に伴って、金堂西側の回廊推定地について九州歴史資料館が調査を行っている。調査は大宰府史跡第10次調査として実施されたが、公的な組織によるはじめての伽藍地内の調査で、実質的な国分寺の第1次調査として捉えられている。調査の成果は国分寺を解明する手がかりに乏しいが、後世の土地利用のあり方を示唆するものと言える。

第2次調査は昭和48（1973）年に本堂改築に伴って調査されたものである。調査では西側の基壇石積み基底部を確認し、建て替え段階のものと考えられているが、西辺を決める重要な所見と言え、東西はおよそ30mと推定されるに至った。また南北方向では南側の側石が検出されたことから南辺はほぼ確定できるが、北側は明らかにはできていない。しかし、現在の本堂敷地を北の限界とすると概ね20mの規模が想定されている。

第3次調査は昭和51（1976）年3月に行われ、整備事業に伴って中門想定地及び回廊東南隅の解明に力点が置かれた。中門部分では良好な成果は得られなかったようであるが、回廊隅の確認はできたようで、塔心礎から南へ29.3mの位置に南回廊南辺が、また（仮想）中軸線から東へ54.6mの位置に東回廊東辺がくることを確認した。これによって回廊が金堂に取り付くものとし、中枢伽藍の大凡の規模は確認された。

第4次調査は昭和51（1976）年10月に行われた。対象地は塔跡。調査の結果、礎石柱間は10尺等間で、基壇幅は58尺を測り、上下二段からなる二重基壇であることが判明した。礎石の周りには環状に礫を巡らせているが、礎石据え付け前の積土中であり祭祀的要素も考えられる。また創建当初は西側に階段が付設されただけであるが、後に南側と北側にも追加されたようである。なお塔の廃絶は、基壇の一部を破壊する土壙が10世紀中葉であることからそのころに求められている。

第5次調査は昭和52（1977）年に民間の開発に先行して行われた。調査地は南門推定地のさらに南側で、南北溝と東西溝を検出している。南北溝は南門前面にあたり参道の側溝の可能性がある。

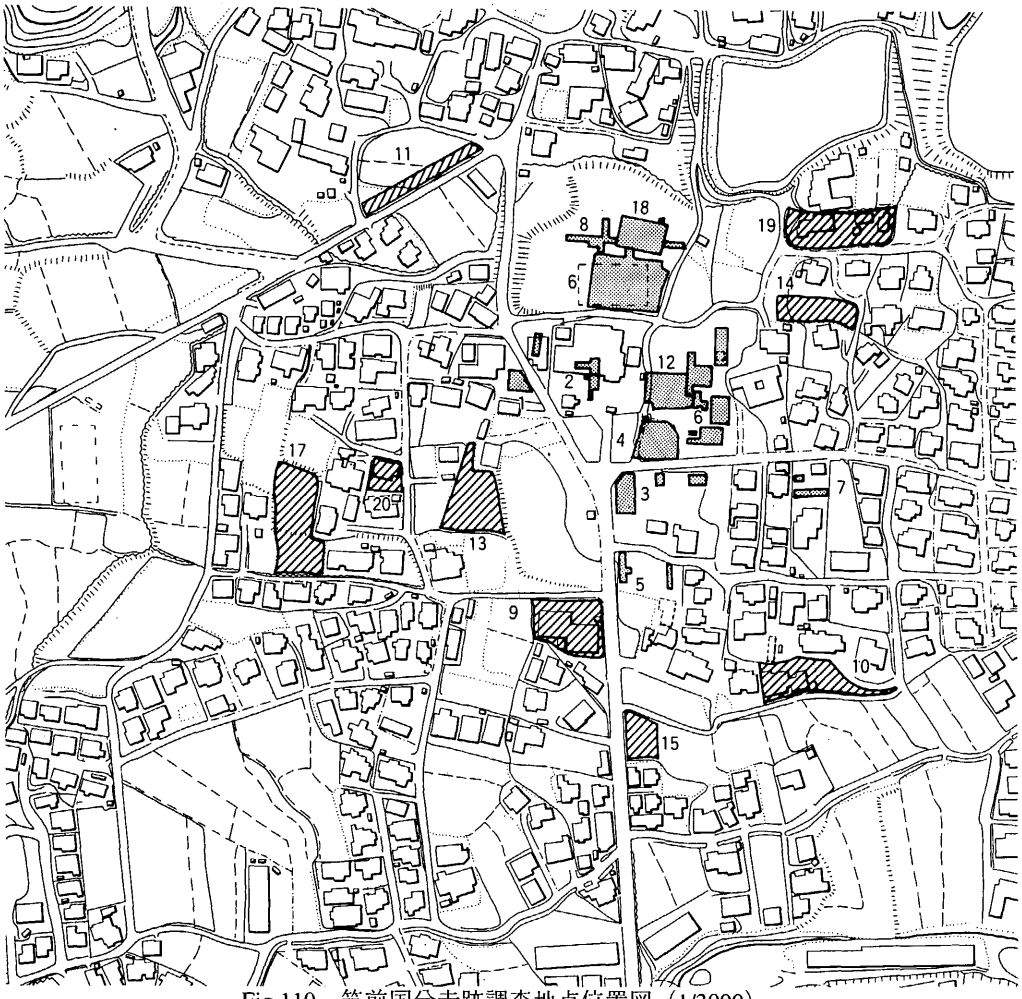


Fig.110　筑前国分寺跡調査地点位置図（1/3000）

第6次調査は講堂と東回廊の解明が中心となった。講堂は西半分程度が失われていたが、南面に3箇所、北面に1箇所の階段が確認され、基壇は瓦積みで南北20.1m、東西34.0mを測る。塔同様に礎石付近に環状の列石が認められ、その位置から7×4間四面庇建物と考えられている。

東回廊は、外周とみられる雨落ち溝と内側に推定できる雨落ち溝が確認され、北回廊は金堂に取り付くことが明らかとなった。

第7次調査は昭和52（1977）年に民間の宅地開発に先行して行われた。寺の東側外郭線を確認できるのではないかという視点で調査が行われた。調査の結果、奈良時代の南北溝が確認され、これが寺の中軸線から96.0mの位置に当たることから、外郭線と考えられるに至った。これをちょうど西側に折り返すと南北の小道が現存しており、この付近に西外郭線を求めることが可能と考えられ、国分寺の東西規模はおよそ192mと判断されている。

第8次調査は僧房跡検出を目的として講堂跡北側の空閑地で実施された。調査の結果、僧房の痕跡は確認できなかった。

第2次から第8次までは福岡県教育委員会及び九州歴史資料館が調査を実施している。

第11次調査は市道田中・松本線拡幅工事に伴って平成2（1990）年に太宰府市教育委員会が実施したもので、西外郭線検出の可能性がある場所である。調査の結果、それに該当する遺構はなく、他の遺構も年代的に国分寺より下るものが中心であった。

第12次調査は塔跡及び回廊の整備等に伴うもので、平成2（1990）年に福岡県教育委員会が実施した。北回廊の調査では金堂と回廊の取り付き部分に積み土が確認され、取り付け部分は金堂基壇に向けてわずかにせり上げているものと考えられた。

第18次調査は講堂北側の僧坊推定地区の環境整備に伴うもので、平成4（1992）年に福岡県教育委員会が実施した。調査区は第8次調査のトレンチと重複する部分もあるが、第8次調査以上の成果は得られず、僧坊跡は確認できなかった。

以上のように筑前国分寺跡の調査は、中枢伽藍の多くでその規模や成立・廃絶の時期が明らかとなり、環境整備も成されてきている。しかし、伽藍を構成する主要建造物のうち僧坊・鐘楼・経蔵・中門・南門等が未解明であるとともに、外郭線も東側の一部と今回報告した南側を除いて推定の域を出ないのが現状である。

（関係文献）

鏡山猛『大宰府都城の研究』1968　風間書房　……　昭和35年の調査

九州歴史資料館『大宰府史跡　昭和46年度発掘調査略報』1972　……　第1次調査

藤井功・亀井明徳『西都大宰府』1977　NHKブックス　……　第2・3次調査

亀井明徳『九州歴史資料館年報　昭和50年度』1976　九州歴史資料館　……　第3次調査

森田勉『筑前国分寺　昭和51年度発掘調査概報』1977　福岡県教育委員会　……　第4次調査

森田勉『筑前国分寺　昭和52年度発掘調査概報』1978　福岡県教育委員会　……　第5・6・7次調査

『史跡筑前国分寺跡　発掘調査及び環境整備事業実施報告書』　……　第8次調査

緒方俊輔「筑前国分寺跡第11次調査」『筑前国分尼寺跡II』1991　太宰府市教育委員会　……　第11次調査

川述昭人『史跡筑前国分寺跡　発掘調査及び環境整備事業実施報告書II』1994　福岡県教育委員会　……　第12・18次調査

2）筑前国分寺の寺域

筑前国分寺の伽藍配置及び外郭線の位置は、過去の調査において一応の結論が出されている。今回はそれに加えて南側外郭線が検出されたことと、東側外郭線で柵列とみられる遺構が確認されたことなどから、再度詳細に検討し、筑前国分寺の寺域を見直してみたい。なおここで用いる数値のうち、1尺は0.297m±0.001m（小尺／天平尺）で換算したものである。また計測の基準点は、図面の公表されている講堂中心点（X=57,514.18 Y=-45,594.18）を利用し、中軸線の

測り出し、振れを考慮して計算するという方法を採った（拙稿「大宰府条坊跡の調査（1）」『都府楼』5号　1988　古都大宰府を守る会）。なお計算にはパソコン（Apple PowerMacintosh 7200／90）を用い、計算結果が各点毎にカードとして残るようカード型データーベースソフト（CLARIS ファイルメーカーPro Ver.2）を利用した。

さて各遺構の計測点はTab.33に示したとおりである。また各遺構間の距離はFig.111にその概念図を提示した。昭和52年度概報の数値と若干異なる部分もあるが、今回再整理した数値に基づいて記述してゆく。

今回報告した調査で得た所見から外郭線の位置を検討することから始めたい。そこでまず東外郭線を見てみる。これまで東外郭線とみられていた溝SD090の東側ほぼ10尺のところに南北の柵列が存在することがわかった。この柵列はSD090を調査した第7次段階では確認されておらず南側へどの程度延長できるかは明らかではない（トレンチの幅が狭小なため偶然外れていた可能性もある）。しかし柵列心と溝心の距離がちょうど10尺になることから、溝は柵列内側に存在していた側溝の可能性も考えておかなければならないであろう。中軸線と柵列の距離は96.82mを前後する数値が得られることから、当初は325尺で計画されたとみられ、左右対称の寺域を想定するならば東西650尺の規模であったと考えられる。ただし柵列を外郭線の一部と認めず従来の意見のとおり溝を外郭線とした場合は、東西630尺の寺域ということになる。

南外郭線は築地状遺構があり、その中心は講堂から415尺の位置にあることがわかる。金堂と講堂の中心間距離は現状では明らかではないが、北回廊北辺ラインが金堂の中心を通過するとすれば講堂と金堂の心心間は155尺、したがって金堂中心と南辺築地心は260尺ということになる。また塔中心を通過する東西線と中軸線が交差する地点を伽藍の中心と仮想すると、その点から築地心までは約160尺の計画であったことが推定できる。

さて外郭線を想定できる遺構を3箇所で検出した成果を概観したが、東西の幅については東外郭線となる遺構を中軸線で折り返した位置に南北の小路が残存していることに着目し、これを西外郭線と想定した前報告での検討を否定する材料はなく、逆に推定西外郭線より外に位置する第17次調査、第20次調査の所見で両地点が寺域内と考えるには困難な要素が強いこと（後項参照）を加味すると、やはり左右対称で東西幅を考えるのが妥当であり、東西については630尺または650尺の幅を想定できよう。

南北については南辺が確定したものの北辺については地形による大きな段差（僧坊推定位置から2～7m程度の比高差）が存在し、そこを北辺とするしか現状では方法がない。その段差と南辺築地の距離は最も広くみても180m（最も狭い所では120m程度）であり、南北600尺以上の寺域を想定するのは困難である。段差の形成がいつの時期かは特定できないが、段差の下に位置し且つ従来の推定寺域内を調査した第11次調査の所見では、段の下の開発が10世紀後半から11世紀前半頃に始まるとみられることから、後項で検討した寺域周辺の開発時期に近似していることが理解でき、この段階では住宅が寺域に侵入していないことを考えると、この段下は当

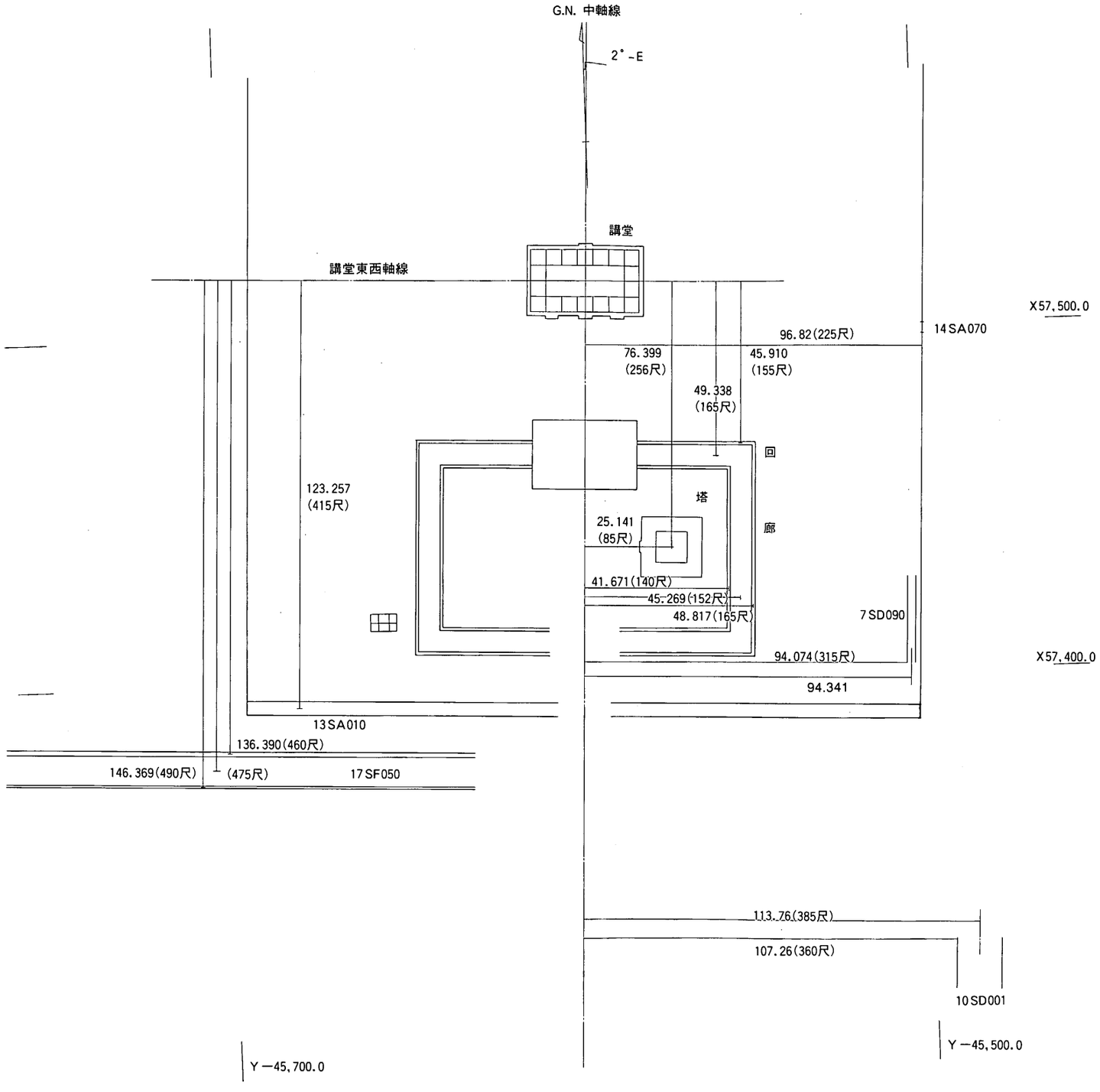


Fig.111　筑前国分寺跡主要遺構間距離概念図

Tab.33　筑前国分寺跡主要遺構距離計測表（すべて講堂中点から計測）

調査次数	遺構番号	遺構種別	計測点	遺構X座標	遺構Y座標	X距離	Y距離	X距離／0.296m	X距離／0.297m	X距離／0.298m	Y距離／0.296m	Y距離／0.297m	Y距離／0.298m	計測資料
4		塔	心礎中心	57,436.95	-45,572.25	-76.39911087	25.14160611	-258.1051043	-257.2360636	-256.3728553	84.93785846	84.65187241	84.36780572	1/50編集図
5	SD050	南北溝	検出中央任意中心	57,374.20	-45,590.75	-139.756526	8.842819223	-472.1504255	-470.5606935	-468.9816307	29.87438927	29.7738021	29.67389001	1/50編集図
5		東西溝（最大）	検出中央任意中心	57,365.08	-45,567.00	-148.0421073	32.89663478	-500.1422542	-498.4582736	-496.7855948	111.1372796	110.7630801	110.3913919	1/50編集図
5	SD046	東西溝	任意中心	57,369.38	-45,588.00	-144.4776161	11.75935957	-488.1000545	-486.45662	-484.8242152	39.72756612	39.59380327	39.46093816	1/50編集図
5	SK045	土坑	任意中心	57,378.60	-45,589.15	-135.3033671	10.28828676	-457.10597	-455.5668927	-454.0381447	34.75772554	34.64069617	34.52445222	1/50編集図
6		北回廊北雨落溝	任意中心	57,466.96	-45,558.00	-45.91007433	38.33559149	-155.1016025	-154.5793748	-154.0606521	129.5121334	129.0760656	128.6429245	1/50編集図
6		北回廊	任意中心	57,463.53	-45,558.00	-49.33798486	38.45529677	-166.6823813	-166.1211612	-165.5637076	129.9165431	129.4791137	129.04462	1/50編集図
6		東回廊	任意中心	57,453.00	-45,551.55	-59.63646852	45.2688593	-201.4745558	-200.7961903	-200.1223776	152.9353355	152.4204017	151.9089238	1/50編集図
6		東回廊東雨落溝	任意中心	57,453.00	-45,548.00	-59.51257531	48.81669674	-201.0559977	-200.3790414	-199.7066285	164.9212728	164.3659823	163.8144186	1/50編集図
6		東回廊西雨落溝	任意中心	57,453.00	-45,555.15	-59.76210671	41.67105233	-201.8990091	-201.2192145	-200.5439822	140.7805822	140.3065735	139.8357461	1/50編集図
7	SD090	南北溝	北端任意中心	57,418.50	-45,503.92	-92.45318902	94.07387703	-312.3418548	-311.2901987	-310.2456008	317.8171521	316.7470607	315.6841511	1/50編集図
7	SD090	南北溝	南端任意中心	57,408.74	-45,504.02	-102.2107334	94.31455703	-345.3065319	-344.1438837	-342.9890384	318.6302603	317.5574311	316.4918021	1/50編集図
13	13SA010	築地	中心東端	57,392.90	-45,652.95	-123.2386662	-53.97191081	-416.3468452	-414.945004	-413.5525711	-182.3375365	-181.7236054	-181.1137946	1/100編集図
13	13SA010	築地	北辺東端	57,395.15	-45,652.88	-120.9875939	-53.98047732	-408.7418712	-407.3656359	-405.9986371	-182.3664774	-181.7524489	-181.1425413	1/100編集図
13	13SA010	築地	中心西端	57,393.75	-45,677.83	-123.2574835	-78.86641915	-416.4104171	-415.0083618	-413.6157163	-266.4406052	-265.5434988	-264.6524133	1/100編集図
13	13SA010	築地	北辺西端	57,396.01	-45,677.70	-120.9943233	-78.81537121	-408.7646056	-407.3882938	-406.021219	-266.268146	-265.3716202	-264.4811114	1/100編集図
13	13SB020	掘立柱建物	柱掘り方a	57,420.06	-45,659.46	-96.32240705	-61.42581542	-325.4135373	-324.3178689	-323.2295539	-207.5196467	-206.8209273	-206.1268974	1/20原図
13	13SB020	掘立柱建物	柱掘り方i	57,415.12	-45,659.54	-101.2621897	-61.33336317	-342.1019922	-340.9501337	-339.8060057	-207.207308	-206.5096403	-205.8166549	1/20原図
13	13SB020	掘立柱建物	建物中心	57,417.55	-45,655.79	-98.70279687	-57.67045335	-333.4553948	-332.3326494	-331.2174392	-194.8326127	-194.1766106	-193.5250112	1/20原図
14	14SA070a	柵列	柱痕中心	57,496.47	-45,498.45	-14.33978599	96.8194311	-48.44522295	-48.28210772	-48.12008723	327.0926726	325.9913505	324.8974198	1/50編集図
17	17SD030	東西溝	中心東端	57,382.85	-45,742.00	-136.3903442	-142.616924	-460.7781898	-459.2267481	-457.6857187	-481.8139325	-480.1916633	-478.5802819	1/50編集図
17	17SD030	東西溝	中心西端	57,382.52	-45,757.00	-137.2436356	-157.5962696	-463.6609311	-462.0997832	-460.5491128	-532.4198297	-530.6271703	-528.8465422	1/50編集図
17	17SD034	東西溝	中心東端	57,372.90	-45,743.00	-146.3691824	-143.2690648	-494.4904811	-492.82553	-491.171753	-484.017111	-482.3874237	-480.768674	1/50編集図
17	17SF050	道路	中心東端	57,377.42	-45,742.64	-141.8393721	-143.0670299	-479.1870677	-477.5736433	-475.9710471	-483.3345604	-481.7071713	-480.0907043	1/50編集図
17	17SF050	道路	中心西端	57,377.80	-45,758.80	-142.0235794	-159.2304474	-479.8093899	-478.19387	-476.5891926	-537.9407008	-536.1294527	-534.3303606	1/50編集図

振れは講堂の一辺が示す数値からN-2°-Eとする。計測したい点は図面から直接国土座標値を初から寺域ではなかった可能性が高い。このことから北辺については自然地形が寺域の北限を示しているものと推定し、東西南の3面は直線的な外郭線を想定できるものの、北面は直線では理解しないほうが実際の寺域の形状を示しているものと考えられる。ただ金堂を中心として東西と南北が各々ほぼ対称になるように想定するなら南北約520尺となり台地上に北外郭線の多くは設定可能となる。この場合講堂北側に70尺程度の空間しか持てなくなり、僧坊や食堂は配置できなくなる。第8次調査でこれらの遺構が検出できなかったのは、削平乃至は中世以降の遺構による撹乱もあろうがこうした理由によるものとも想定でき、僧坊や食堂を中枢伽藍の東西に置くならば未だこの案は消滅したとは言い切れない。ここでは北限を段差に求める立場を採るものの、現況地表面が第8次調査地点よりも高く遺構の残存が期待される講堂跡北東隣接地の調査を待って最終的な結論とすべきであろう。

次に寺域の南側を通過する東西道路（17SF050）についてみておく。この道路は官道から進入する参道の一部とみられるものである（詳細は『辻遺跡』報告書参照）が、築地の位置関係は道路心と築地心で60尺乃至は65尺、北側溝心と築地心では45尺の開きがあり、推定される築地南辺と北側溝北肩は35尺弱（約10m）程度の開きしかない。このことから推定すると南門南端が築地南端からいくらかは南へ張り出す（南門が南北2間として1間を10尺としても基壇を考えると20尺近くは築地心から張り出す）ことは確実であり、門の規模にもよるがこの東西道路は直接南門の前面を通過していた可能性がきわめて高いと言える。また第5次調査で検出したSD046はその中心位置が講堂から485尺の位置にあり同時代の産物とすれば東西道路の南側溝である可能性も考えられる。逆に同時代のものでない場合、南門前には確実な道路痕跡を認められないことになり、広場的な土地利用も考慮に入れる必要があろう。また南門前面に存在するSD050は出土遺物から最終埋没が11世紀後半に考えられるが、開削は10世紀段階とみられ、このころに南門前面における土地利用の形態に変化があったものと思われる（後項参照）。なお、国分寺中軸線からSD050中心までの距離は8.84mを測り、これを南北道路の側溝と仮定して中軸線で折り返した位置にさらなる南北溝を考えることができるならば、南門前面に幅約60尺の道路が通っていた時期があったと想定できる。この道路と東西道路（17SF050）との関係は明確ではないが、東から進入していたものがある時期に南から進入する状況に変化したことを物語るのではなかろうか。

以上簡単ながら筑前国分寺の外郭線及び外郭を示す事物について検討を加えた。未発見の遺構もあるが概ね寺域は確定したものと信じたい。しかし推定される寺域のうち中枢伽藍を形成する地域は国指定史跡として保存、整備が図られているものの、東側と西側では未指定のエリアが残存している。現状では宅地が密集している状況であるが、老朽化による立て替えや永久構造物への変更も目立っている。地下遺構保全のためにも指定地域を拡大する必要を痛感する。

3）筑前国分寺の衰退過程

筑前国分寺における堂塔の廃絶は、各遺構の調査において明らかにされたものもある。例えば塔の場合、基壇の一部を破壊する土坑がありその出土遺物が10世紀中葉と考えられることから、その頃に終焉の時期が設定されている。講堂ではこの調査において遺物が激減するのが11世紀後半頃であり、『水左記』の検討から承暦四（1080）年段階ですでに講堂は存在していなかったと考える意見と合致する。したがってこの頃には廃絶していたと考えておくのが妥当であろう。他の建物については明らかでないが管理が手薄になるのがこうした時期であり、概ね平安時代後期には主要建物は廃絶し、管理されなくなっていたものと推定される。

ただ金堂跡の上に現在の国分寺本堂が建てられており、この寺が連綿と国分寺の法燈を伝えているとすると現在も完全に廃絶したとは言えないが、絵図では「大宰府旧蹟全図」（1806年）以前に遡り得ず、記録も『筑前国続風土記』（1709年）以前は前記の『水左記』まで空白があり、平安時代後期から江戸時代中頃までの間が全くの空白になる。また現在の国分寺本堂に安置される本尊の薬師仏も客仏と考えられていることから、ここでは国分寺は過去に一度、完全に廃絶したという立場で検討したい。

さて各調査地点を見てみると、まず寺の南側では国分寺南隣接地の第9次調査で9世紀中頃以降から11世紀前半頃までの遺構が認められる。小規模な建物、井戸等であり、一般の住宅域とみるのが妥当であろう。これに隣接する第5次調査では10～11世紀代の南北溝が確認され、それを中軸線で折り返すと幅約60尺の道路遺構が南門前面に存在したようである。第20次調査では方形の掘り方を有する掘立柱建物があるが、これは国分寺創建以前とみられ、国分千足町遺跡や御笠軍団印出土地周辺遺跡との関連も含めて検討を要する遺構である。その東側の第10次調査では、奈良時代とみられる大溝10SD001も平安時代には埋没しているようである。このことから寺の南側では概ね平安時代の範囲で開発が進行するものの、寺院を考える上では直接関連しない遺構群が展開するものと考えられる。ところが南辺の築地遺構を検出した第13次調査をみると、倉庫と考えた掘立柱建物はそれを覆う13SX030の埋没時期である11世紀には遅くとも廃絶していたとみられ、それ以外には古代の範囲で考えられる井戸や土坑を除いて顕著な遺構は形成されていない。また築地内側の溝状遺構13SD001も10世紀段階には埋没していたようであり南外郭線が不明瞭になりつつあったことが窺われる。しかし、やや離れて13世紀段階に至ると築地ラインよりも内側に井戸が作られるようになるなど新たな動きが看取される。

次に寺の東側の様相をみてみると、第14次調査では東外郭線と推定できる柵列を埋めている整地14SX050が10世紀代以前で位置づけられ、その頃には寺域を確定する標識が不明瞭になりつつあったことが分かる。その整地上に展開する遺構の多くは13・14世紀に属するものであり、この時期の遺構は当初の寺東外郭線を飛び越えて、寺域の内側にも侵入している。遺構の性格を特定するのは難しいが、土坑中から鍋などの日常雑器が出土していることから、一般の住宅

と考えておきたい。この北側で行った第19次調査でも赤茶色粘質土層とした整地層が確認され、旧寺域内の範囲と考えられる調査区の西半分に存在しており、年代を決定する要素に乏しいが平安時代の範疇で捉えられるものであろう。また中世の遺構群も第14次調査と同様の所見が得られている。

寺の北側では、講堂東側に墳墓（土壙墓）が作られるのが13世紀、僧坊推定地の第8次、第18次調査の所見をみると中世に属する遺物が多く出土している。また円形周溝墓と推定する遺構や小規模な柵列が検出されるが、いずれも中世とみられる。したがって中世段階では伽藍中枢部分にまで寺とは無関係の遺構が侵入していることが分かる。

寺の西側では、第20次調査で平安時代中期の掘立柱建物、さらにその西の第17次調査ではやはり平安時代中期の井戸、土坑等が検出されている。しかし、国分寺創建時の遺構及び中世に下る遺構は未検出である。

寺の北側を調査した例はないが、北西隅とみられる地点を調査した第11次調査では、寺に直接関わる遺構は検出されず、井戸などの生活痕跡を示すものに限られる。その開発の時期は10世紀後半から11世紀前半を最初とし、遺物では中世に下る資料までが確認される。

これらのことを総合して考えると、寺の成立を8世紀中葉から後半に設定したとして、寺に近接する位置に宅地が迫るのが9世紀から10世紀あたりであり、しかも寺の南側と西側に顕著であることが知られる。これに呼応するように寺の南側を東西方向に通過する道路に代わって（または追加されて）、南北の道路が10世紀頃に敷設される。これによって寺の南側地域の開発に拍車がかかったのではなかろうか。

そこで寺域内の様子をみると、第14次調査の整地や第13次調査の築地北側の溝遺構の埋没時期が概ね10世紀の範囲に考えられ、塔の基壇が壊されるのも10世紀中葉、講堂付近では11世紀後半には遺物が激減する状況を呈することからすれば、このあたりの時期に筑前国分寺全体が大きく姿を変えた（廃絶したと断言できないがきわめてその可能性は高い）ものと考えられるが、寺域の観念は残されていたためか生活遺構の侵入は認められない。

このことを間接的ながら語っているのが『水左記』にみられるわずかな記事である。

承暦四年八月十四日甲辰、（中略）

前筑前守章家申國分寺講堂造進事、仰、令新［　］　後項（以下略）

これにみるとおり1080年には講堂の再建に対して申請が出されている。つまり申請を受け取り、許可を出すことのできる寺院（土地）の管理者が1080年段階（11世紀後半）には存在していたことになる。したがって10世紀前後に目立ち始める周辺の集落（民家）が寺域内に侵入できなかった理由はここにあると思われ、寺院としての境界が不明確になってもその範囲は何者かに管理されていたと考えられる。この管理は遅くとも13世紀には見られなくなることは中世遺構の侵入で説明できるが、ちょうどこの期間（11後半～13世紀）に大宰府が廃絶していることが注意されるところである。おそらく国分寺の土地を管理していたのは大宰府であり、その

大宰府が衰退するとともに旧官寺であった国分寺の土地も管理が手薄となったのではないかと推定される。

そして13世紀には管理者不在という現実の中、寺域という観念が薄れたためか築地内側に井戸が新たに作られたり、講堂周辺には集落の一部とも考えられる遺構群が展開するようになる。おそらくこの段階では寺院の管理は全くなされないような状況になっていたと推定されるとともに、主要建造物はもちろんのこと、寺域を示すような構築物はすべて失われてしまっていたと予想される。このような経過の中で13世紀には名実ともに筑前国分寺は廃絶していたものと考えておきたい。

なお寺院境内に侵入してくる中世の集落は、現状ではその具体像を把握できないが、国分寺の東側で調査した辻遺跡においても中世の遺構が確認されていることから、寺の東側一帯に中世の集落が広がっていたものと予想され、国分寺の調査における副産物として評価するとともに、今後の周辺部の調査によって集落の規模や構造が解明されることを期待したい。

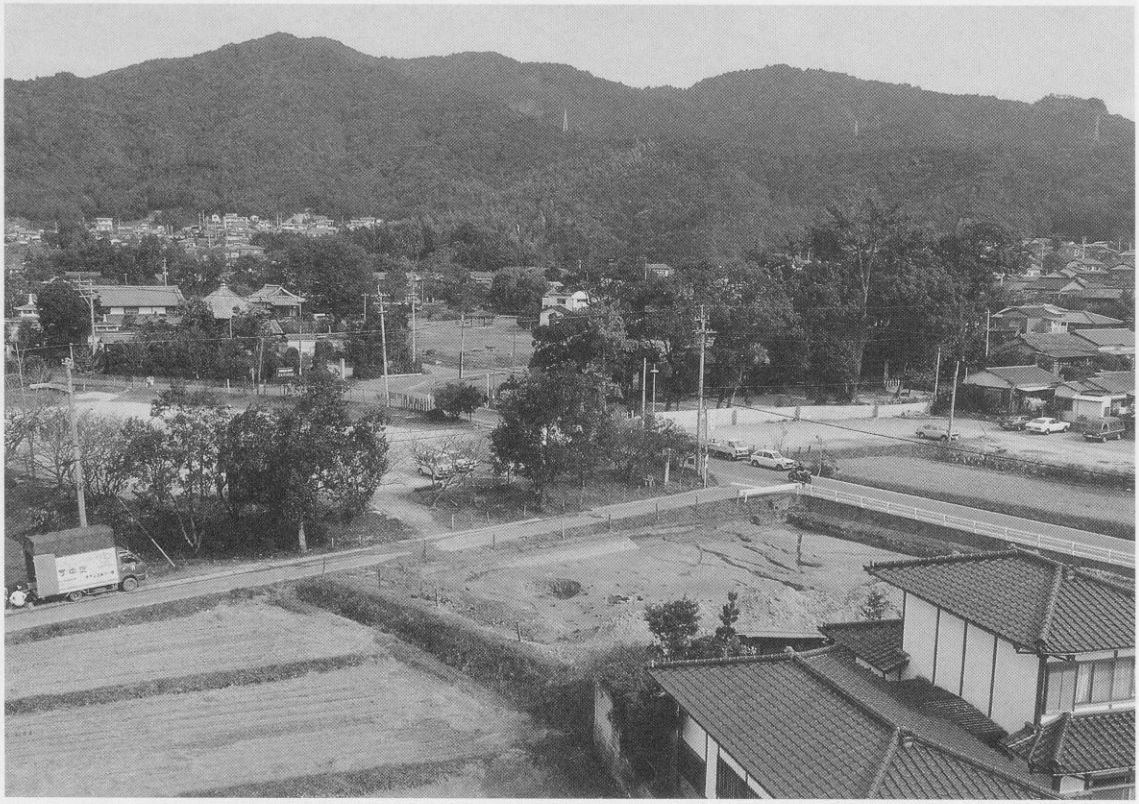
写真図版

遺物写真右下に表示した番号は、
図版番号―遺物番号である。

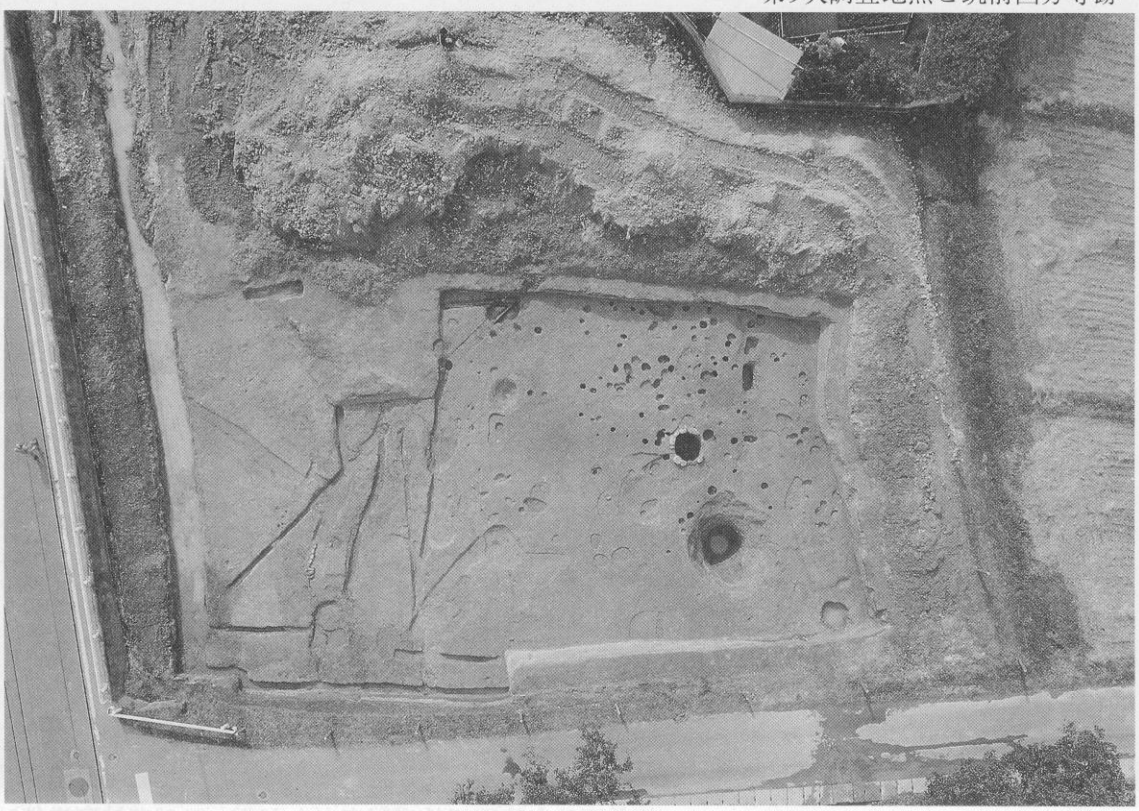


筑前国分寺跡周辺航空写真（上が北・アジア航測提供）

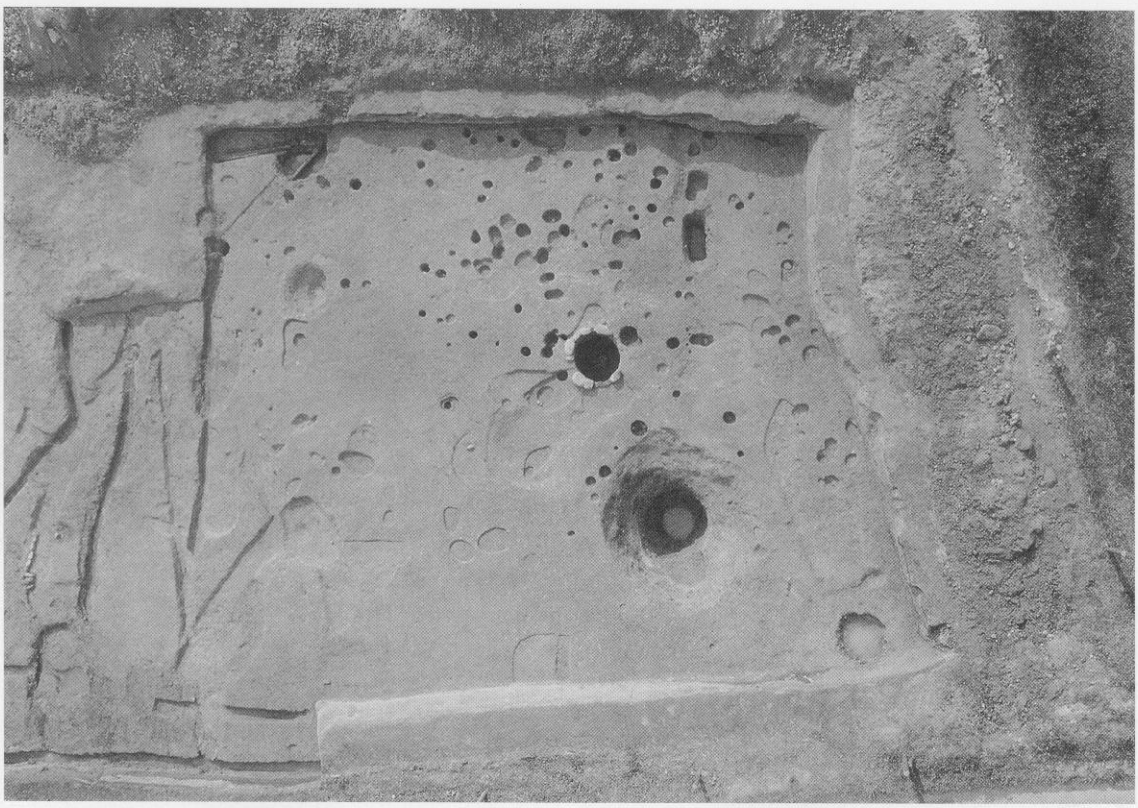
Pla.2



第9次調査地点と筑前国分寺跡



第9次調査全景（上が南・空中写真）

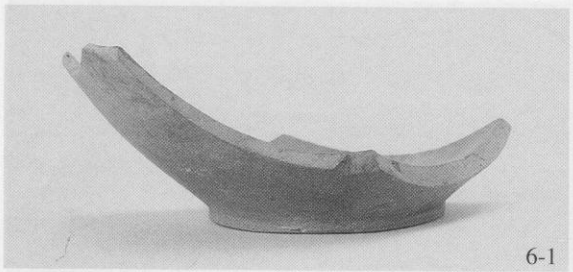


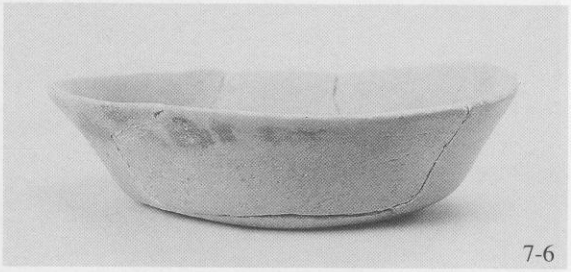
第9次調査の遺構集中部分（上が南・空中写真）

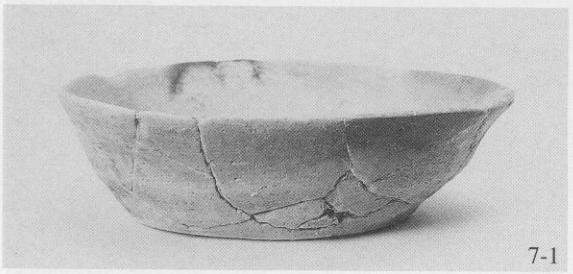


9SE020枠材検出状況

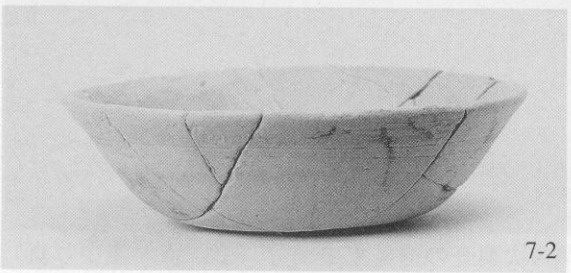
Pla.4


6-1


7-6


7-1


7-7

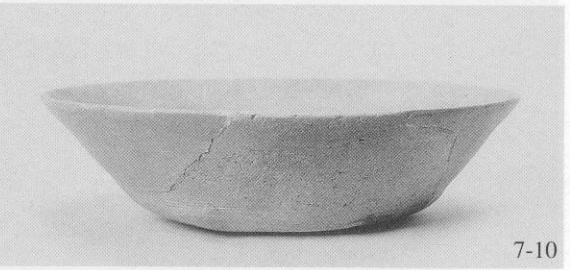

7-2

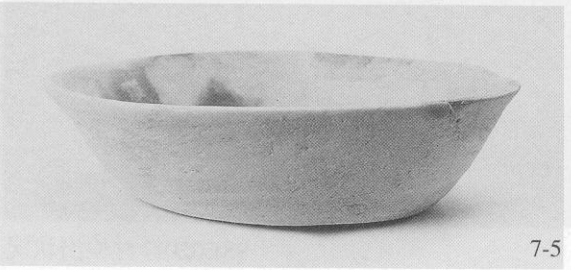

7-8

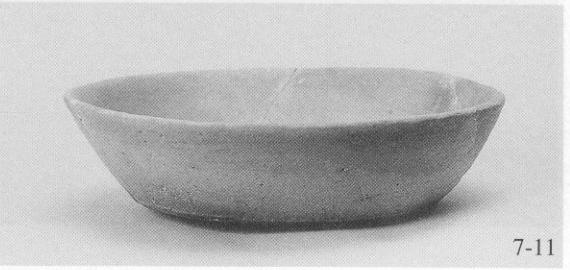

7-3


7-9


7-4


7-10

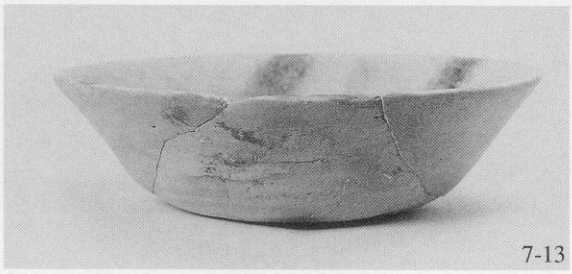

7-5


7-11

9SB100・9SK120出土土器


7-12

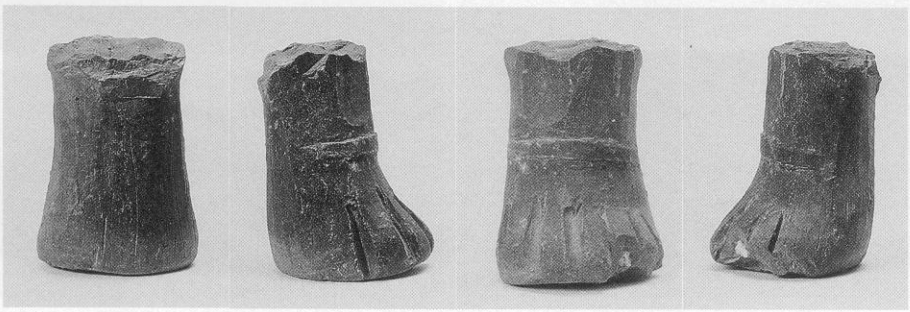

7-15

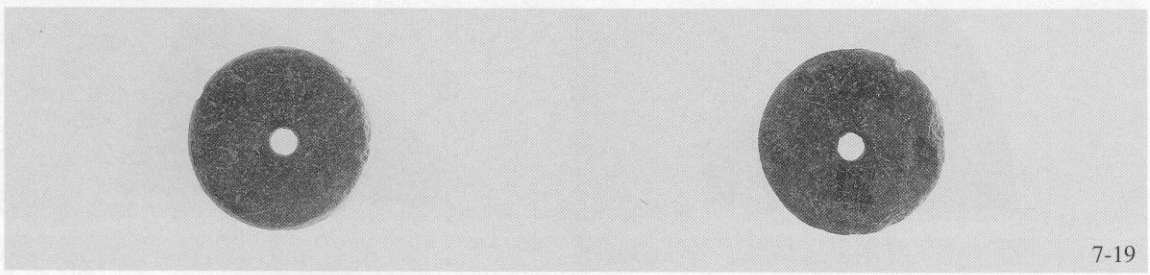

7-13


7-16


7-14

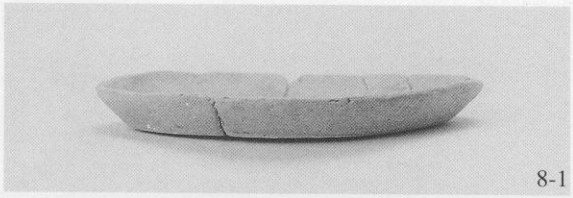

7-17


7-18


7-19

9SK120出土土器

Pla.6


8-1


8-3

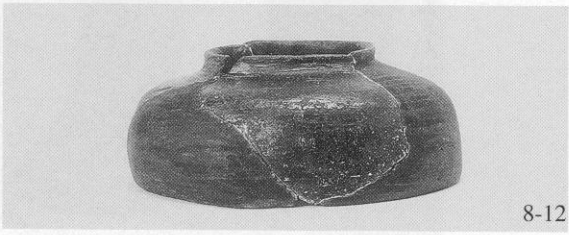

8-4

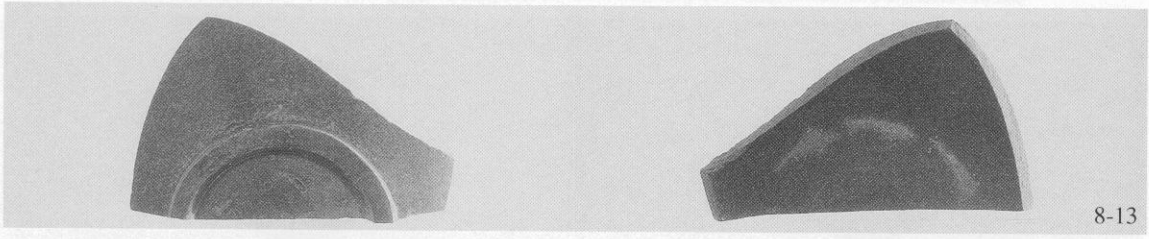

8-7

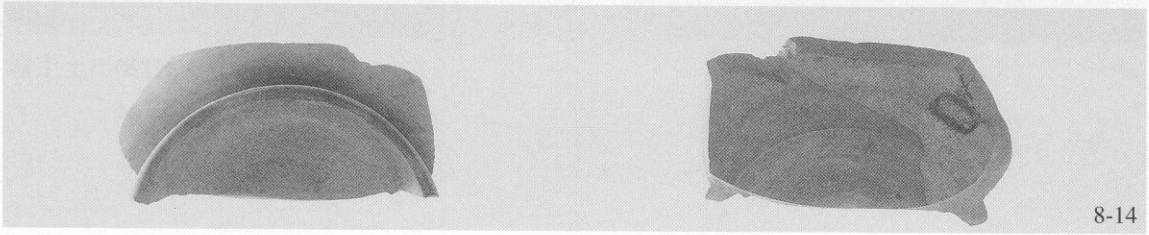

8-6


8-5


8-11

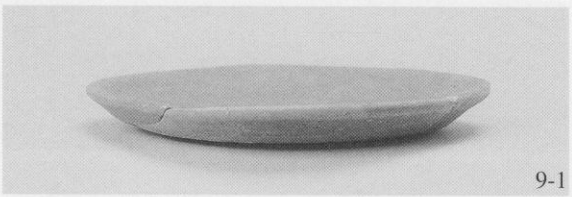

8-12

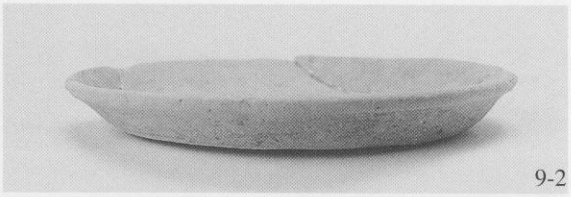

8-13

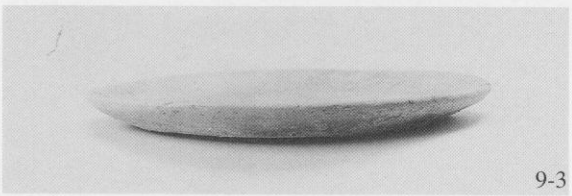

8-14

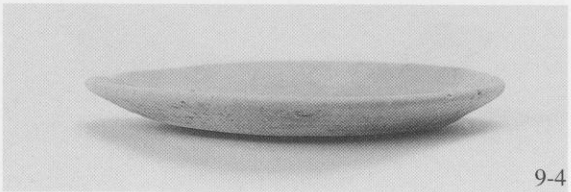
9SE020出土土器

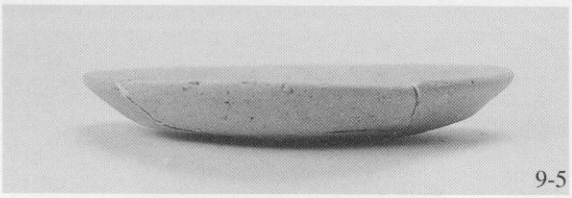
Pla.7

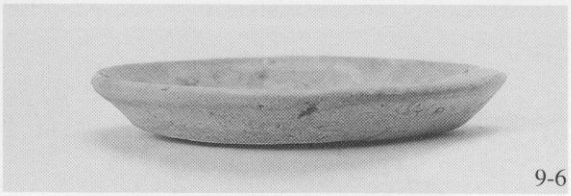

9-1

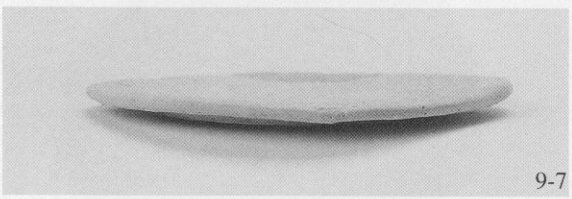

9-2


9-3

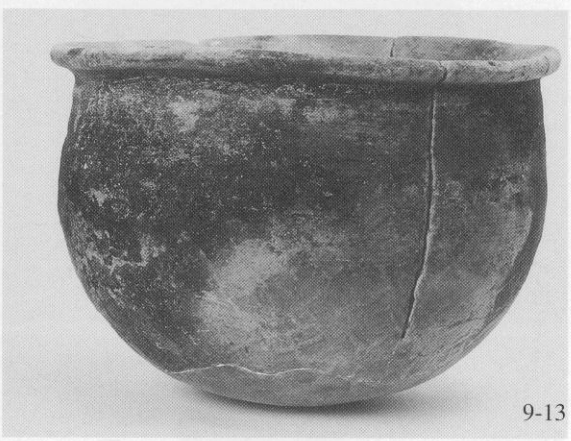

9-4

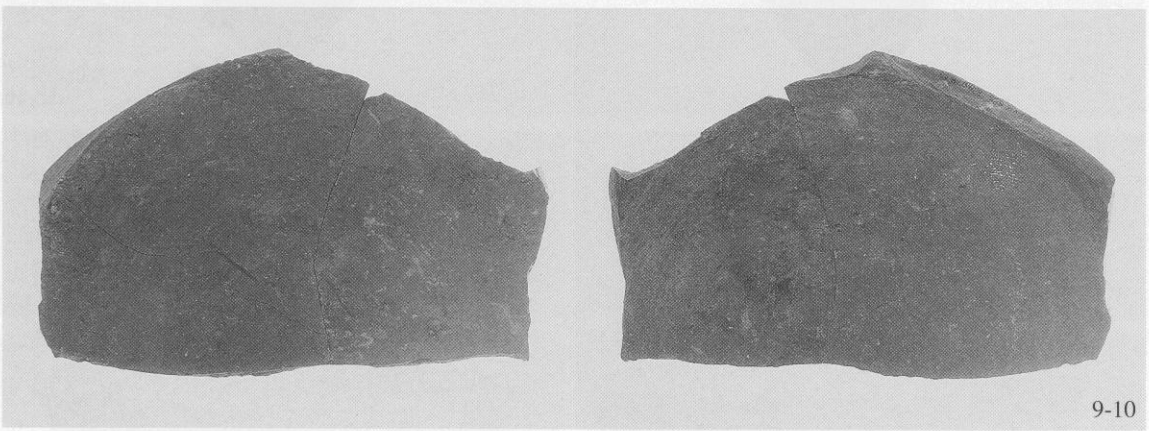

9-5


9-6


9-7

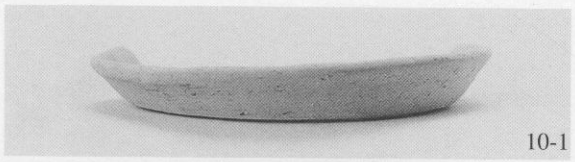

9-8

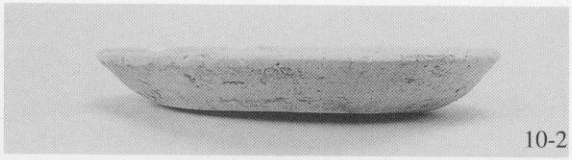

9-13


9-10

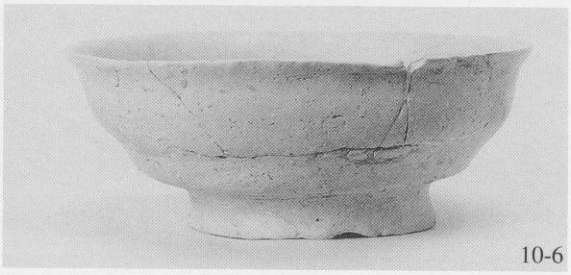
9SE025出土土器

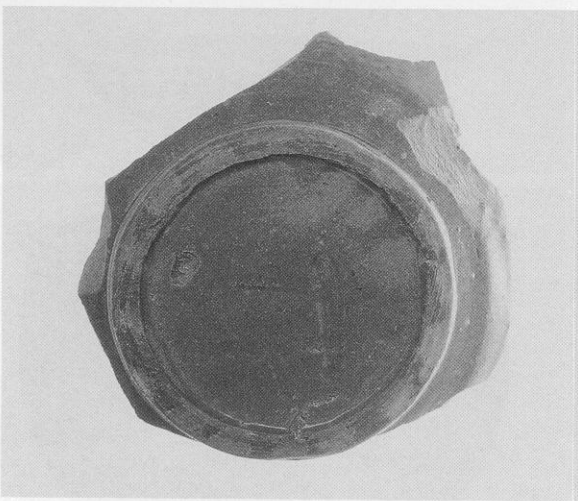
Pla.8

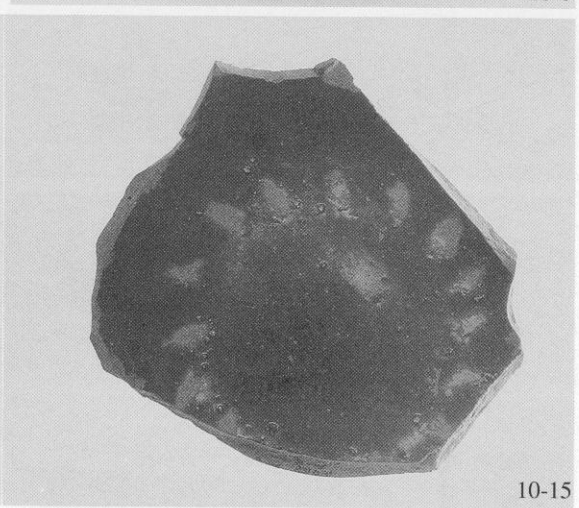

10-1

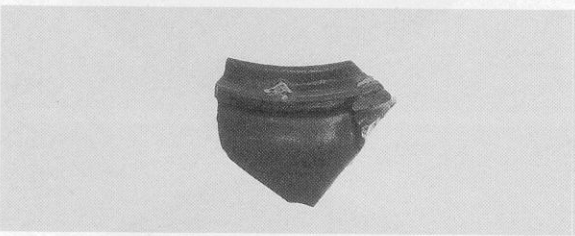

10-2

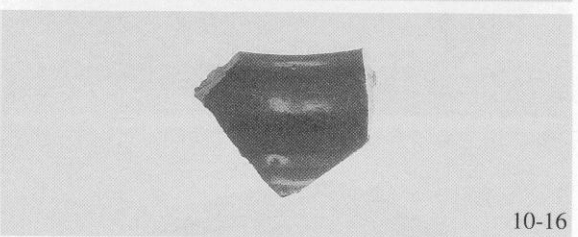

10-5


10-6

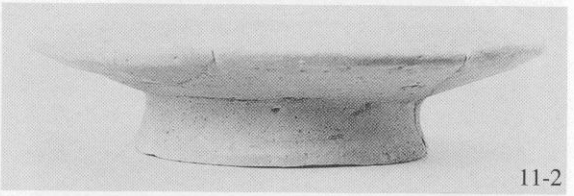



10-15




10-16


11-1


11-2


11-3


11-4

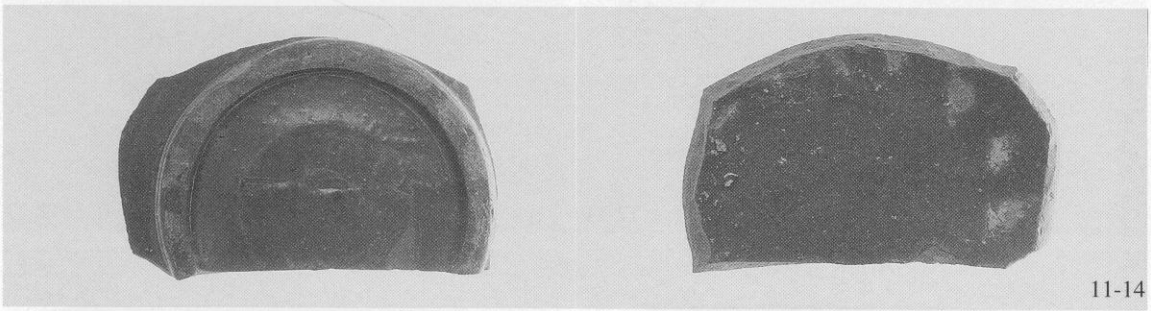
9SE030出土土器

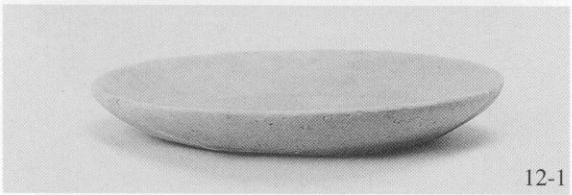

11-6


11-11

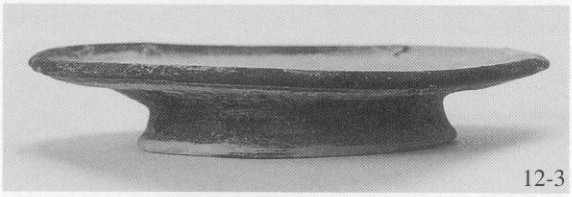

11-12

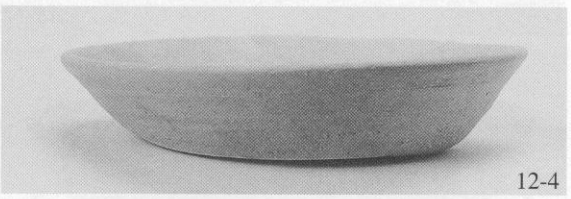

11-13


11-14

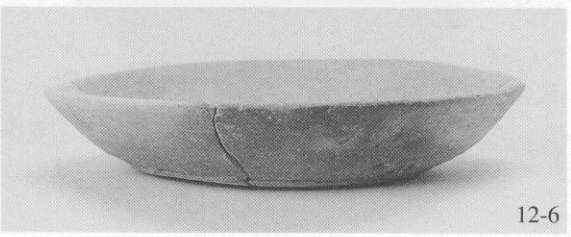

12-1


12-2


12-3


12-4

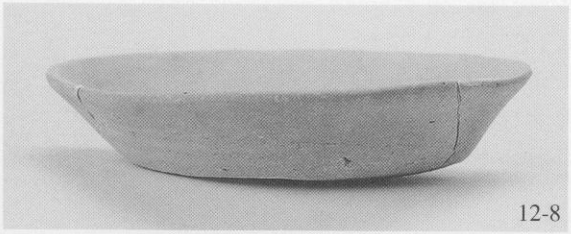

12-5


12-6

9SE030出土土器

Pla.10


12-7


12-8


12-9


12-10


12-11


12-13

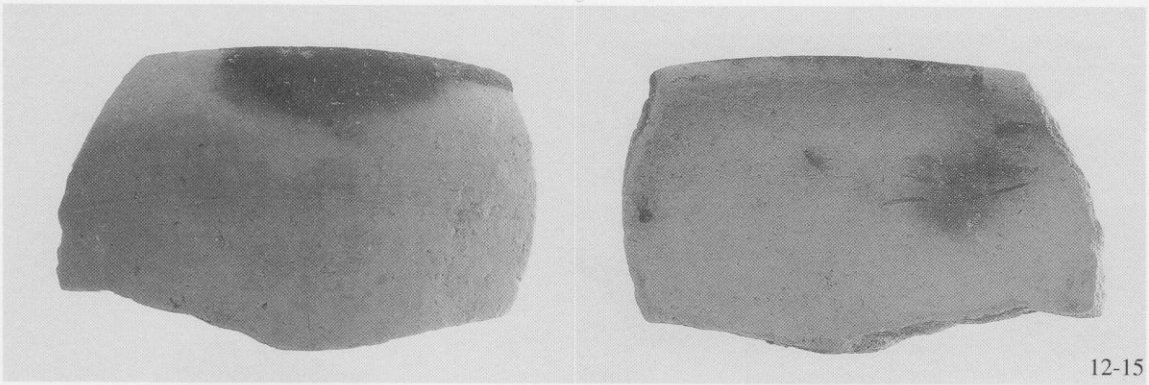

12-17


12-18

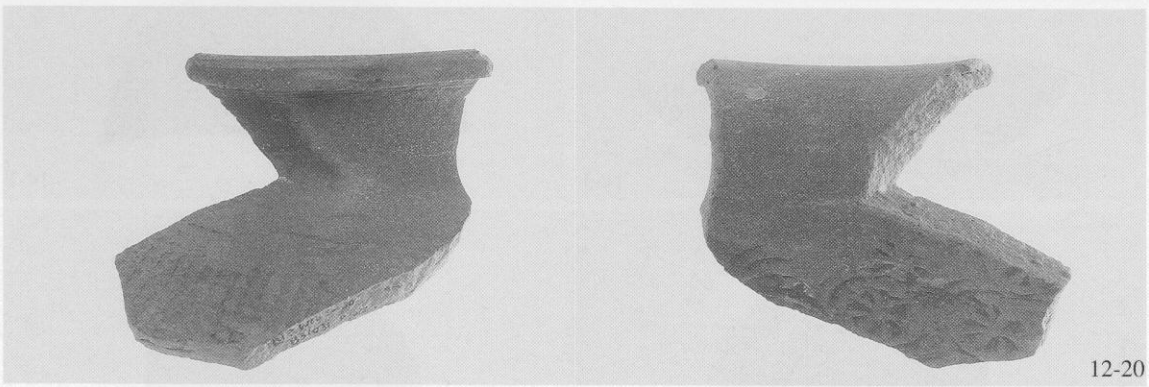

12-19


12-21

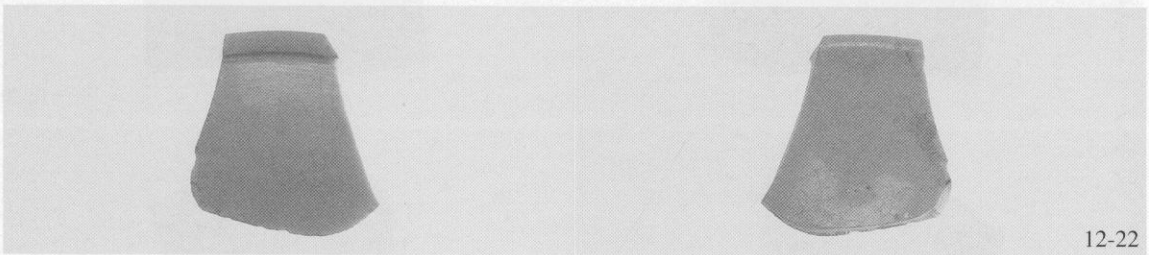
9SE030出土土器



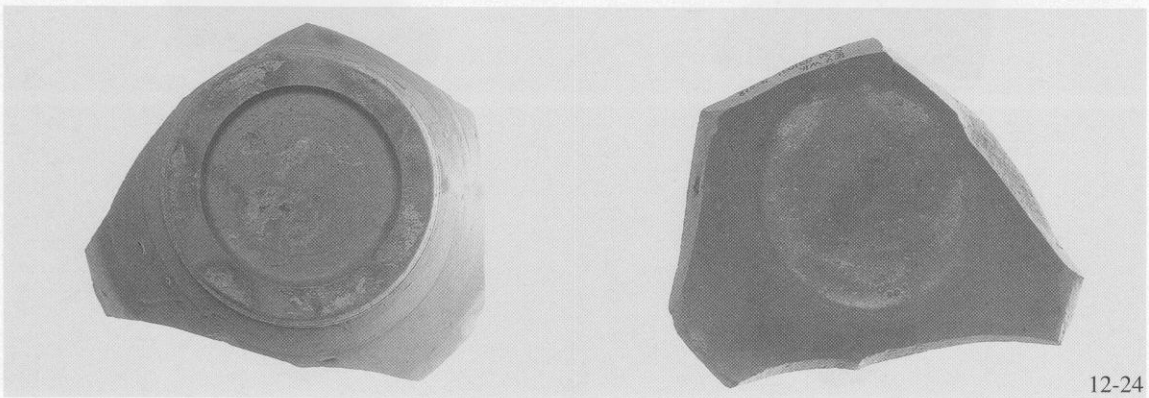
12-15



12-20



12-22

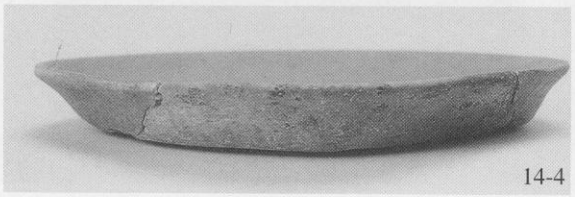


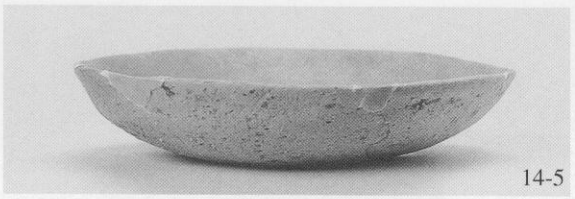
12-24

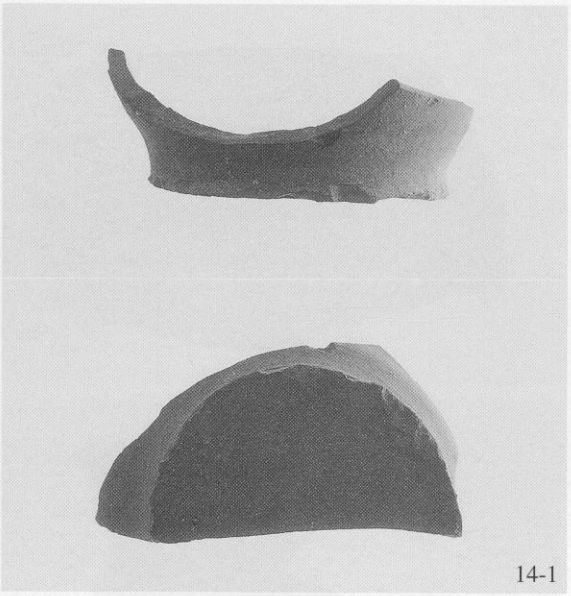
9SE030出土土器

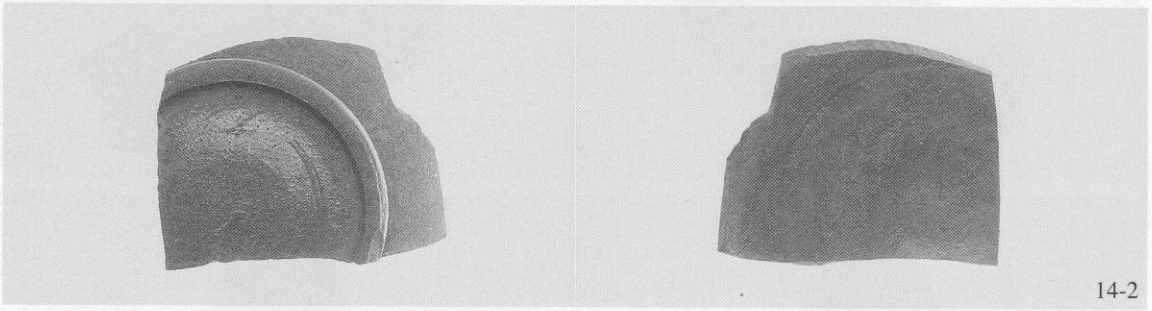
Pla.12

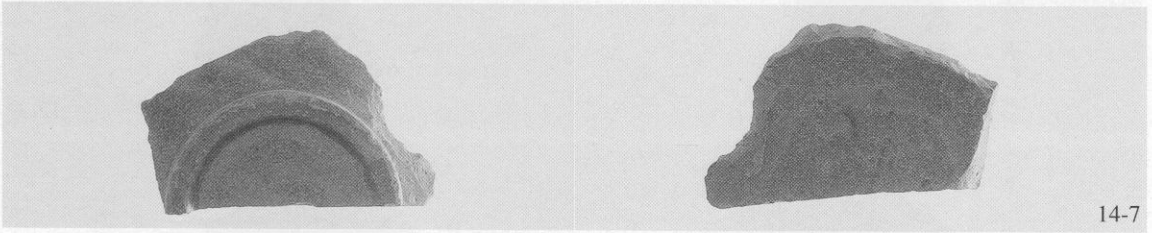

14-3

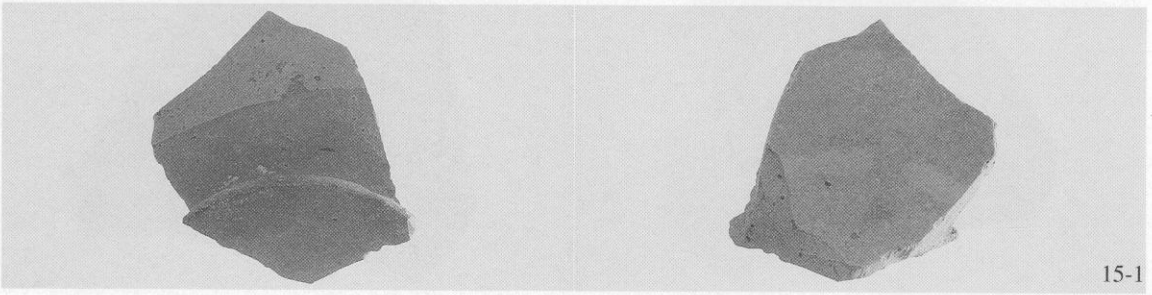

14-4

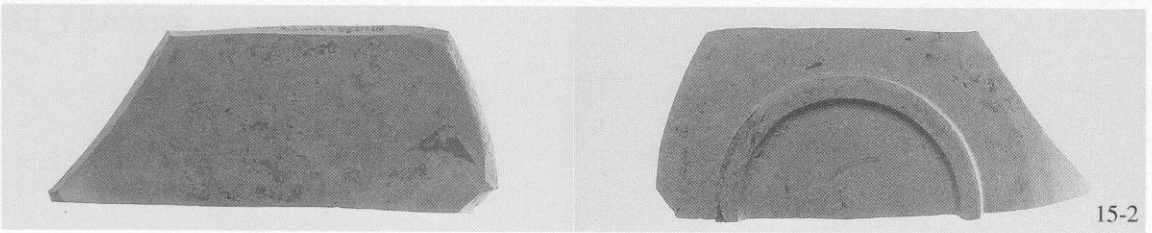

14-5


14-1

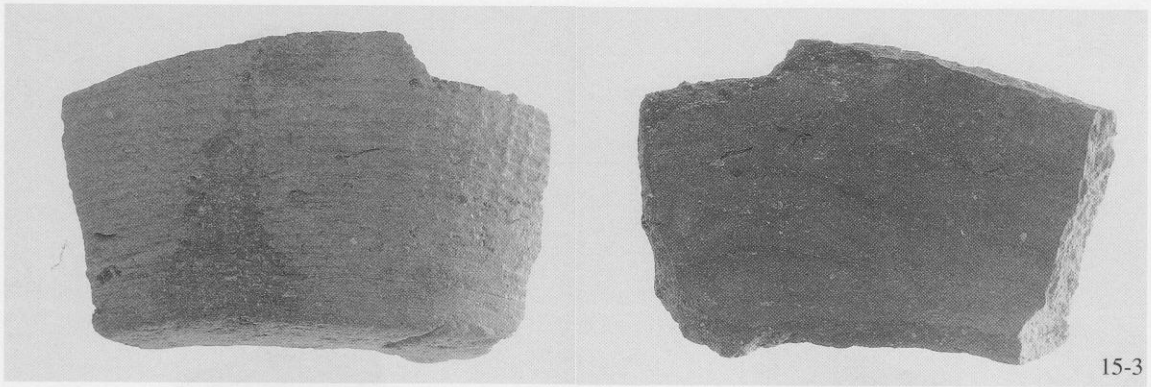

14-2


14-7

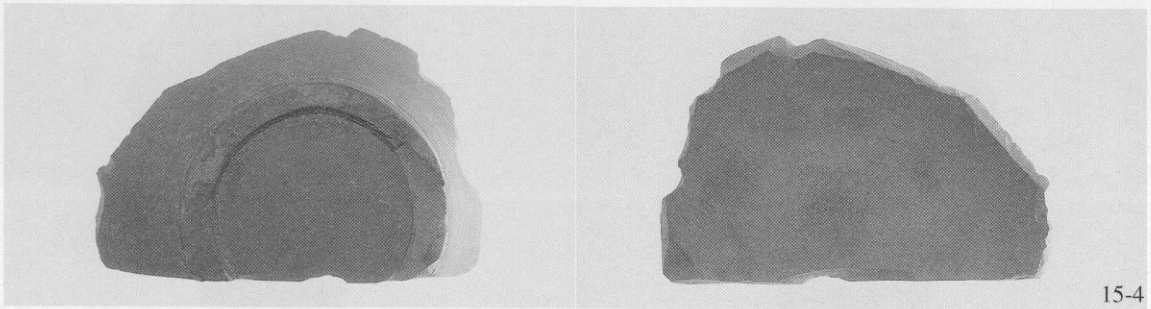

15-1


15-2

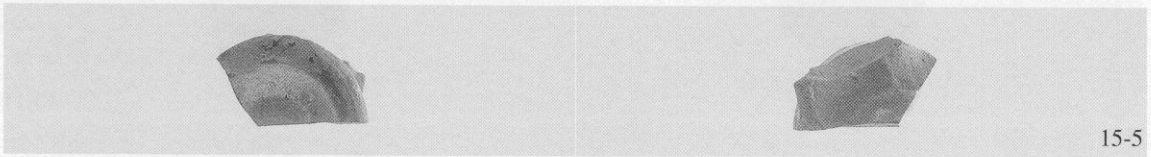
9SD002・9SX037・095・102・茶灰色土層出土土器



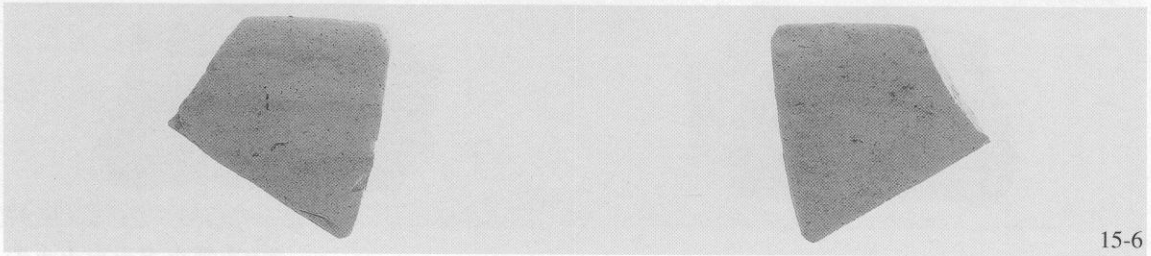
15-3



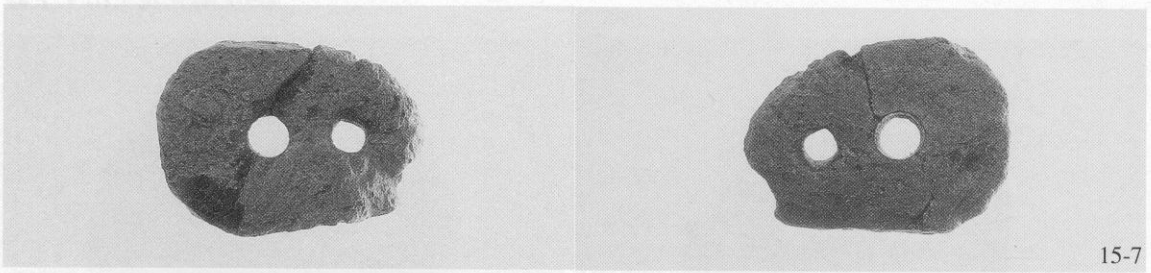
15-4



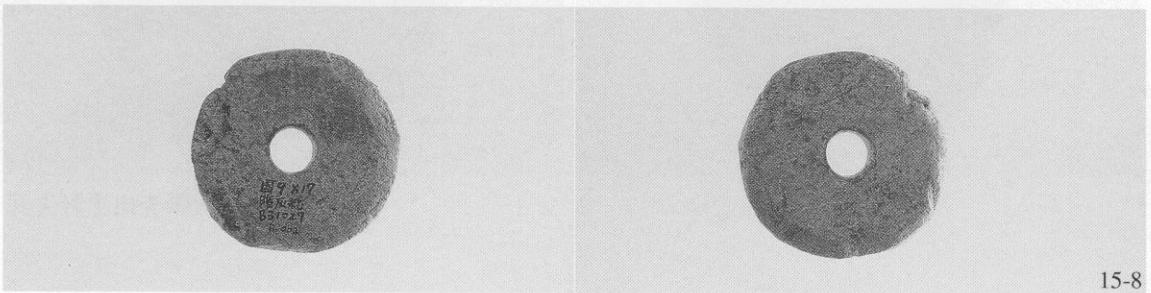
15-5



15-6



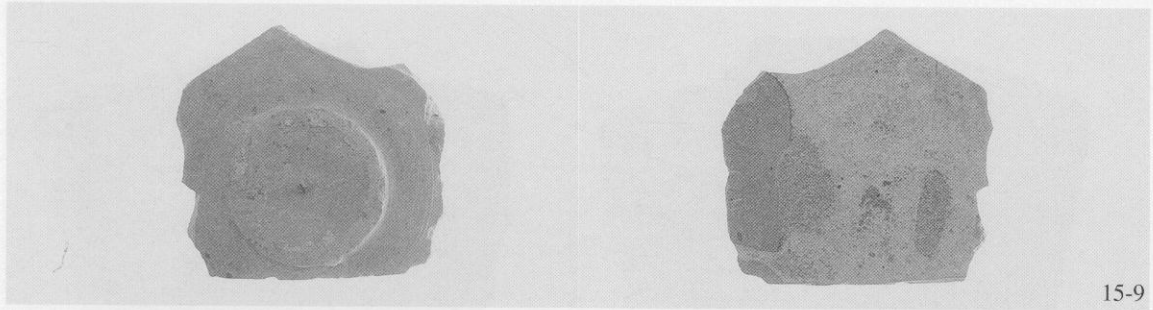
15-7

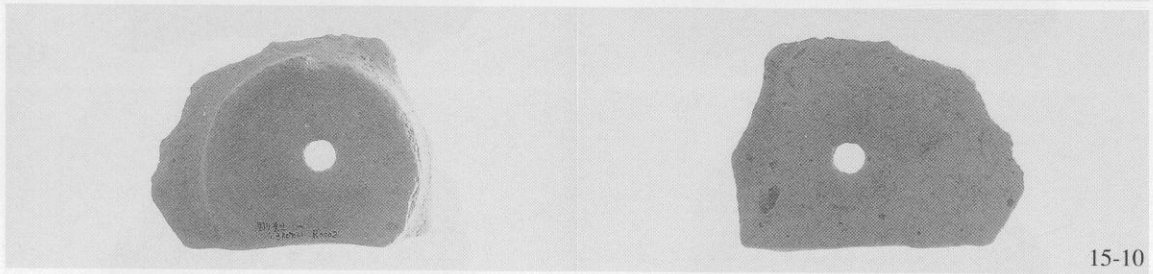


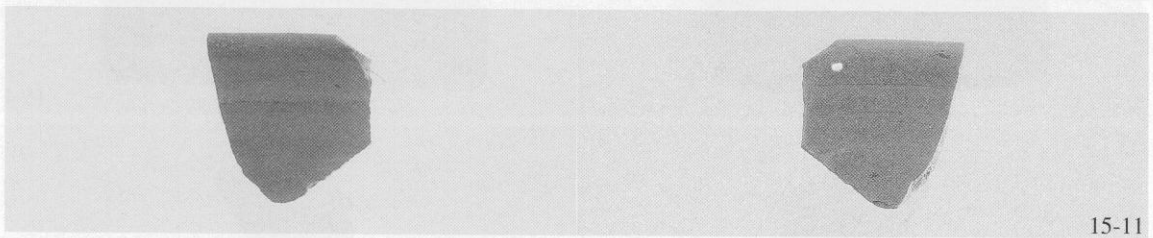
15-8

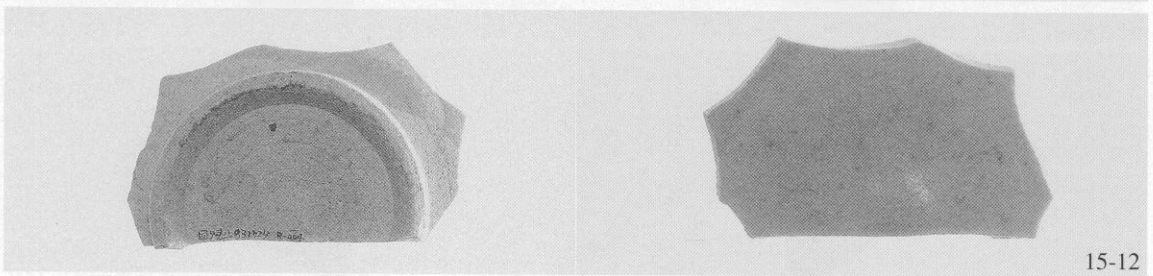
茶灰色土層・暗灰色粘土層出土遺物

Pla.14


15-9


15-10


15-11


15-12

第9次調査表土出土土器


19-1

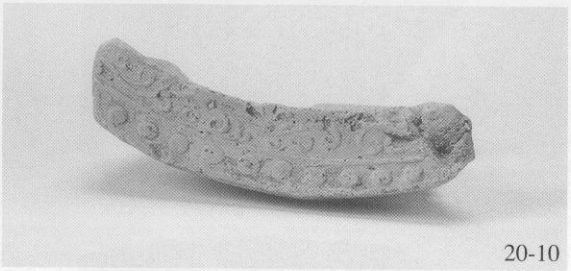

19-4

第9次調査出土軒丸瓦


20-5


20-8

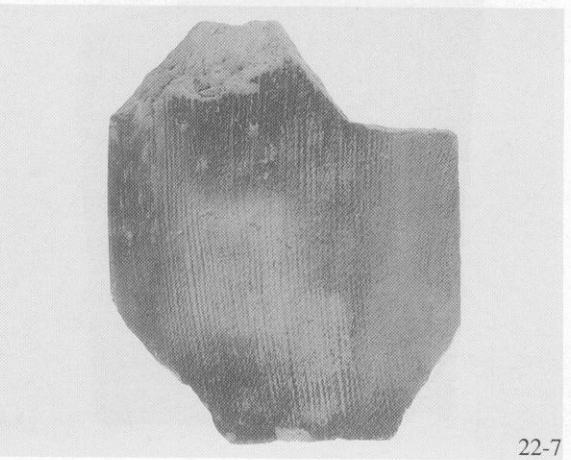

20-9


20-10


21-1

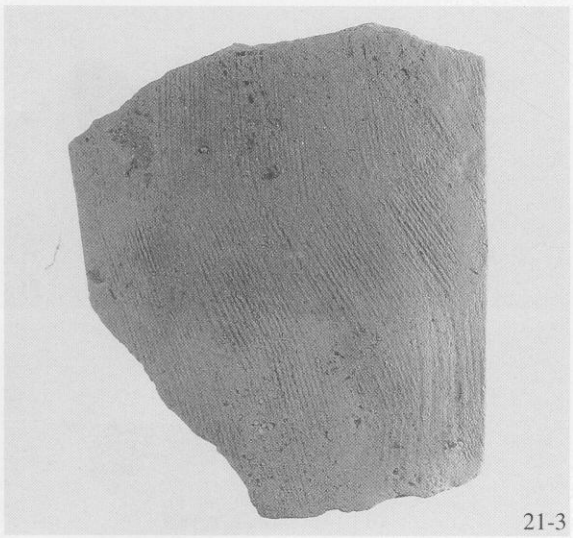

21-2

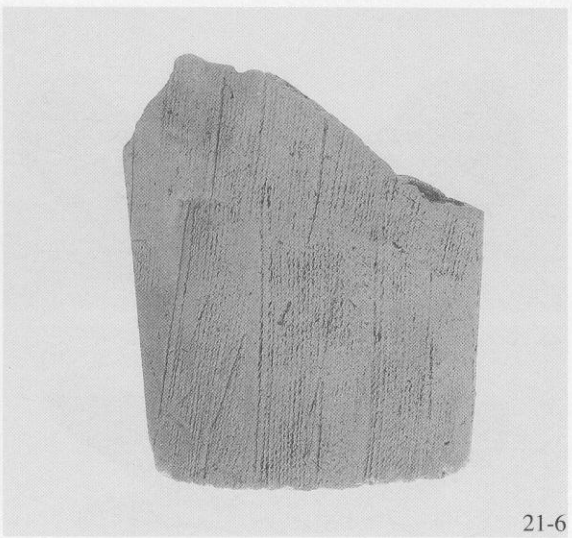

21-4

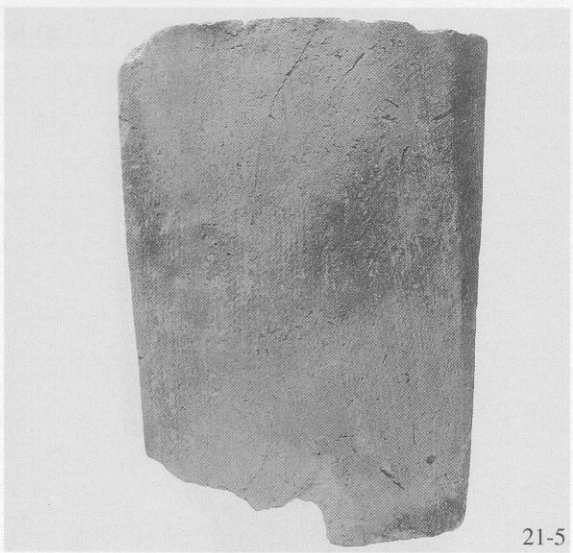

22-7

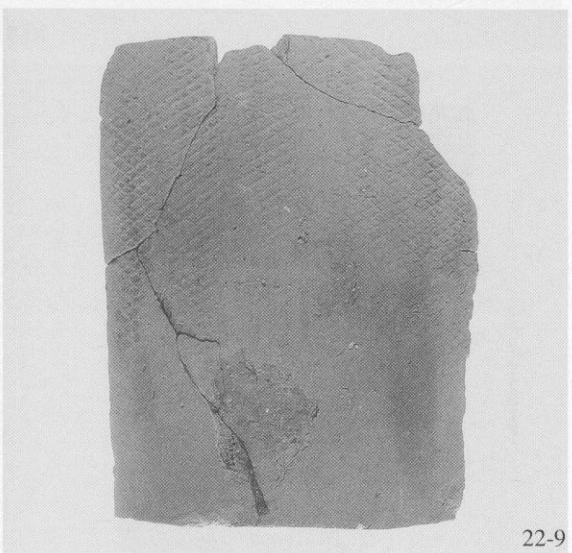
第9次調査出土軒平瓦・平瓦

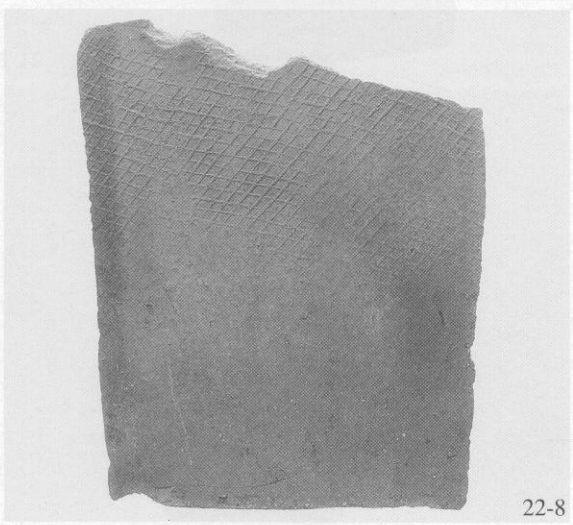
Pla.16

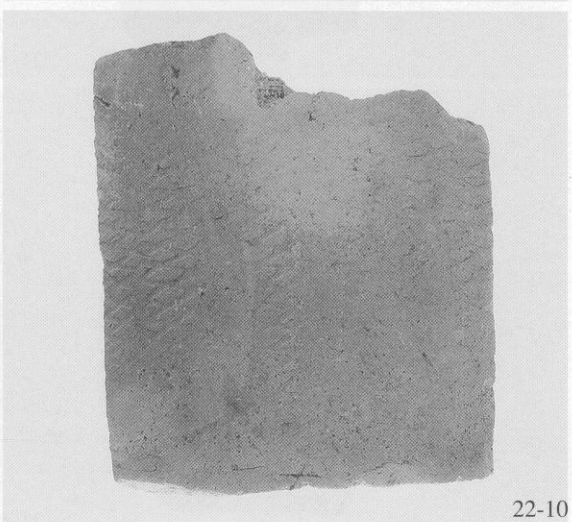

21-3


21-6

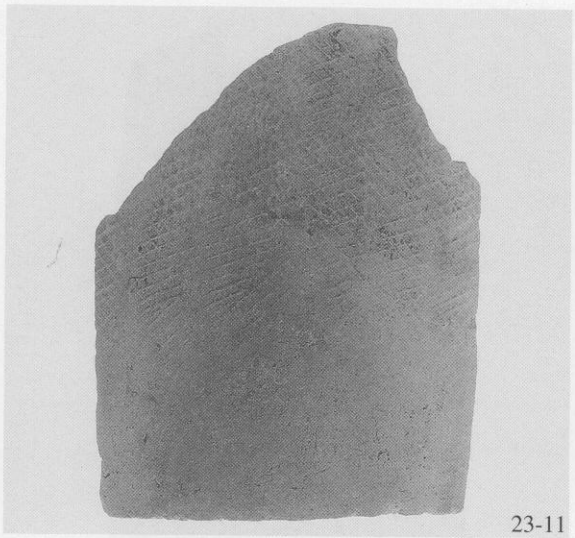

21-5

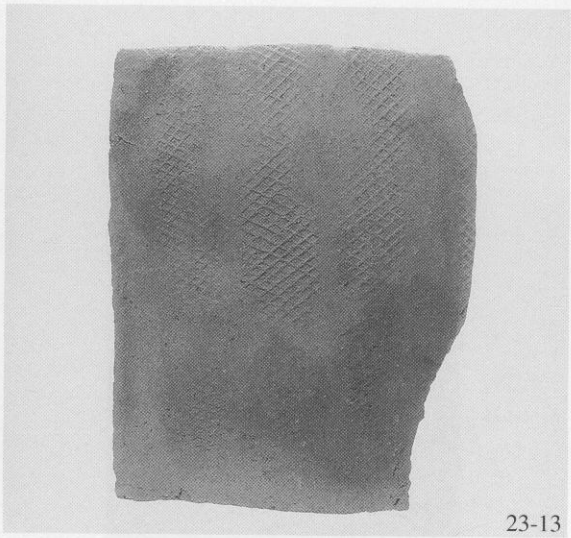

22-9

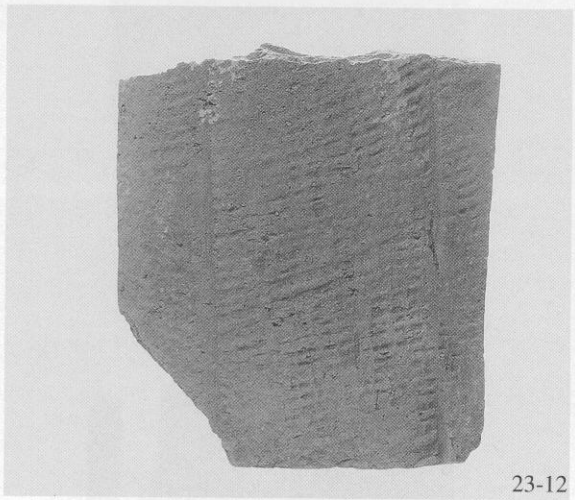

22-8

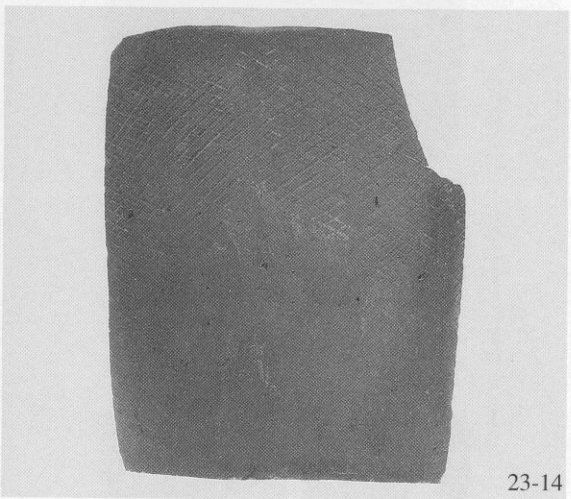

22-10

第9次調査出土平瓦

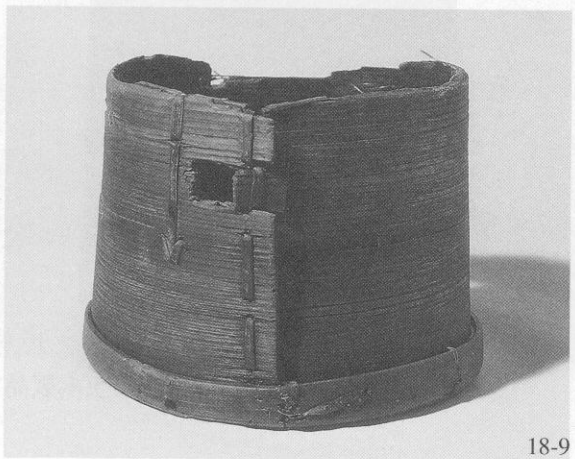

23-11

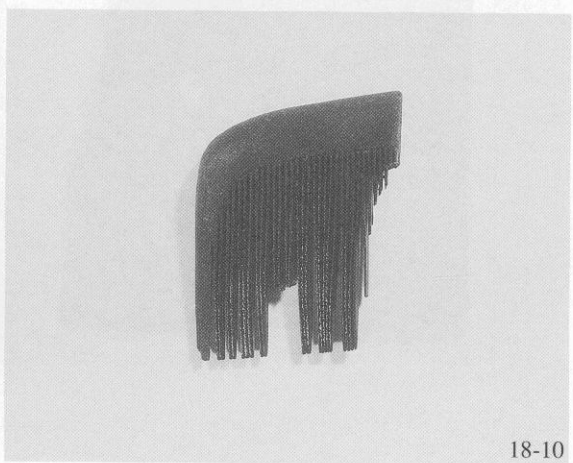

23-13


23-12


23-14

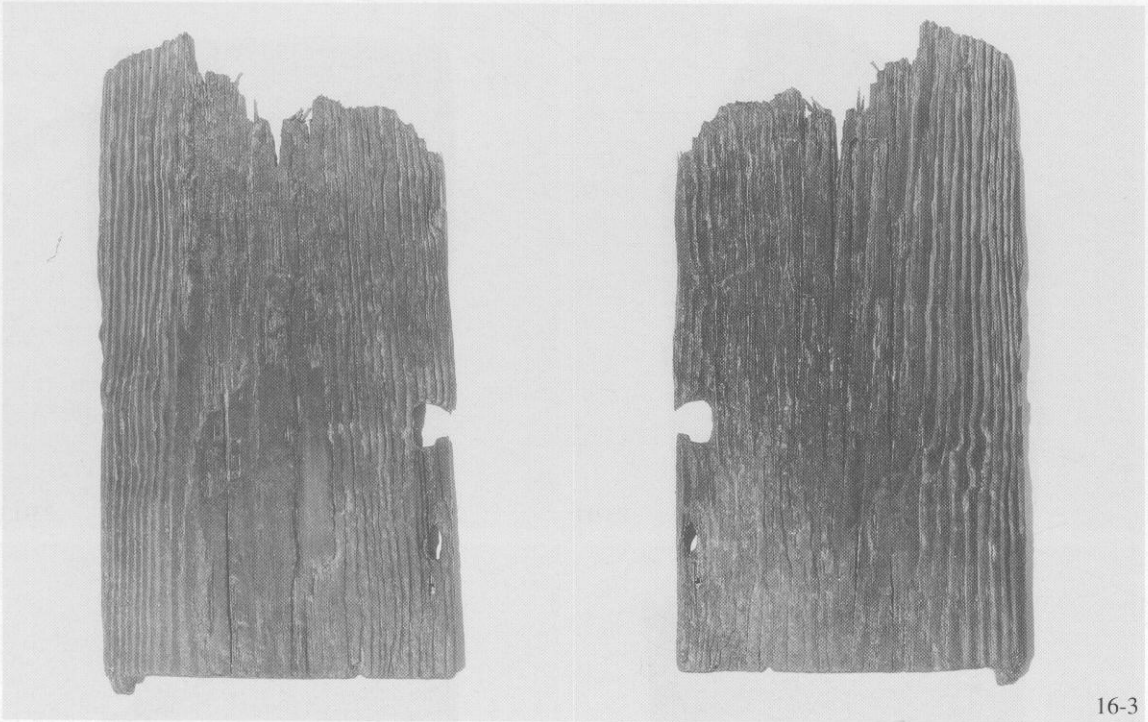
第9次調査出土平瓦


18-9

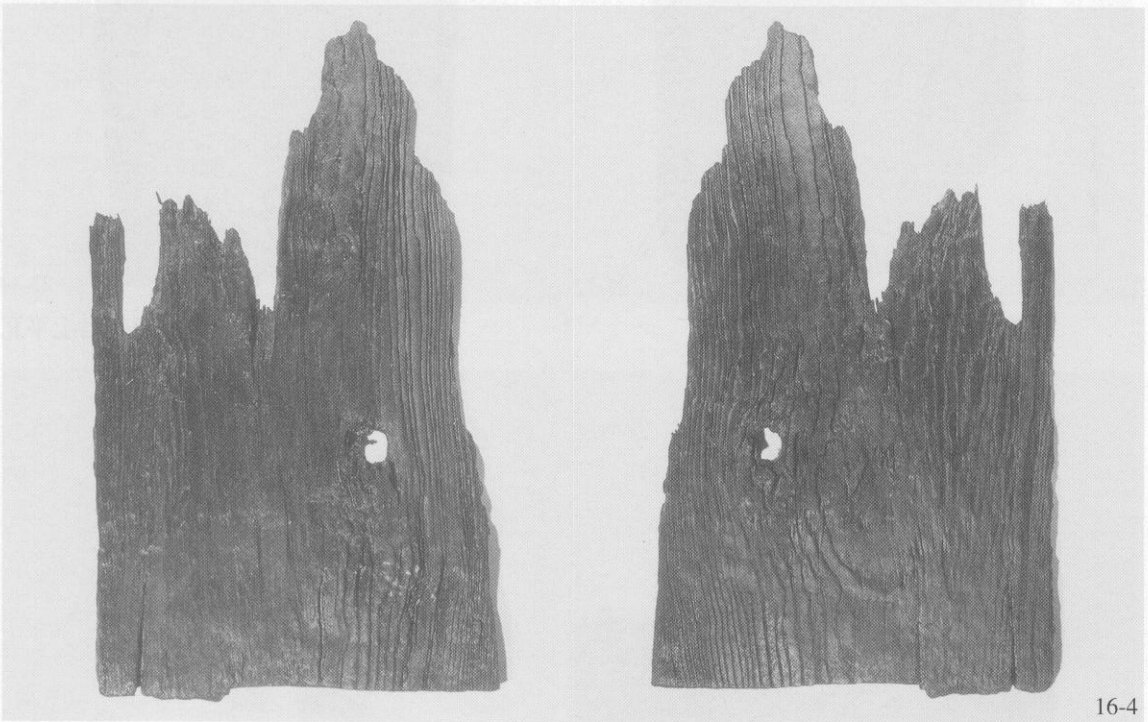

18-10

第9次調査出土木製品

Pla.18

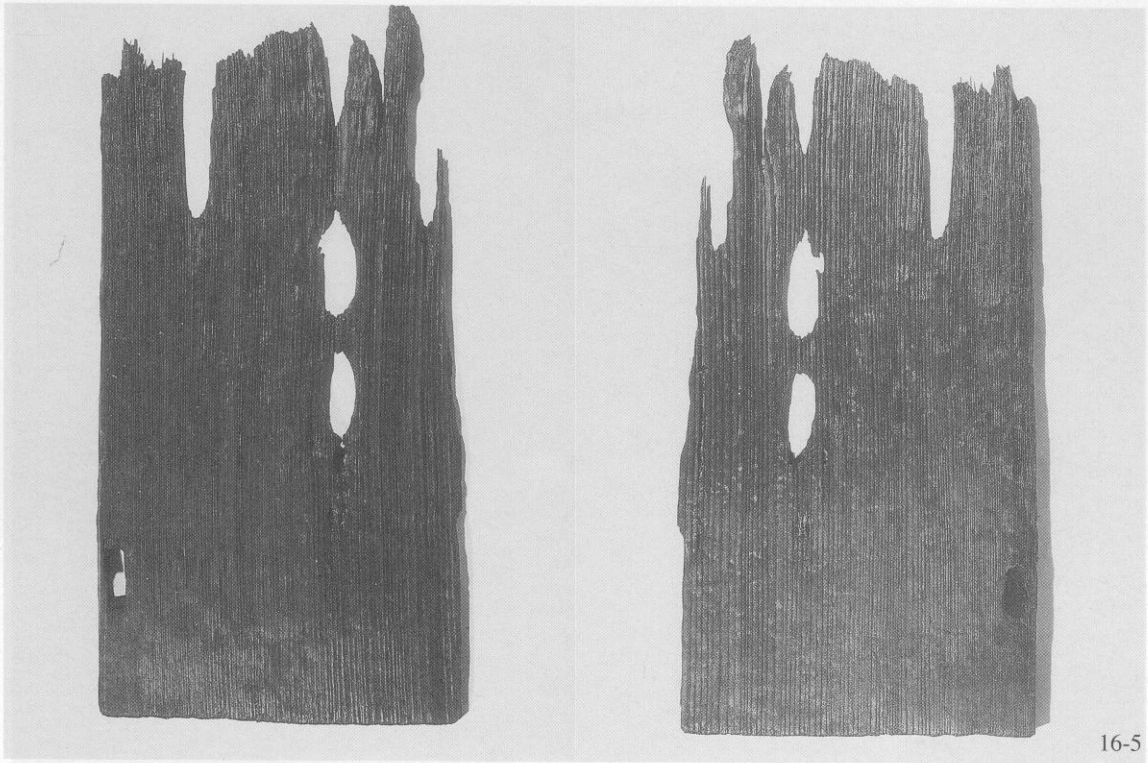


16-3

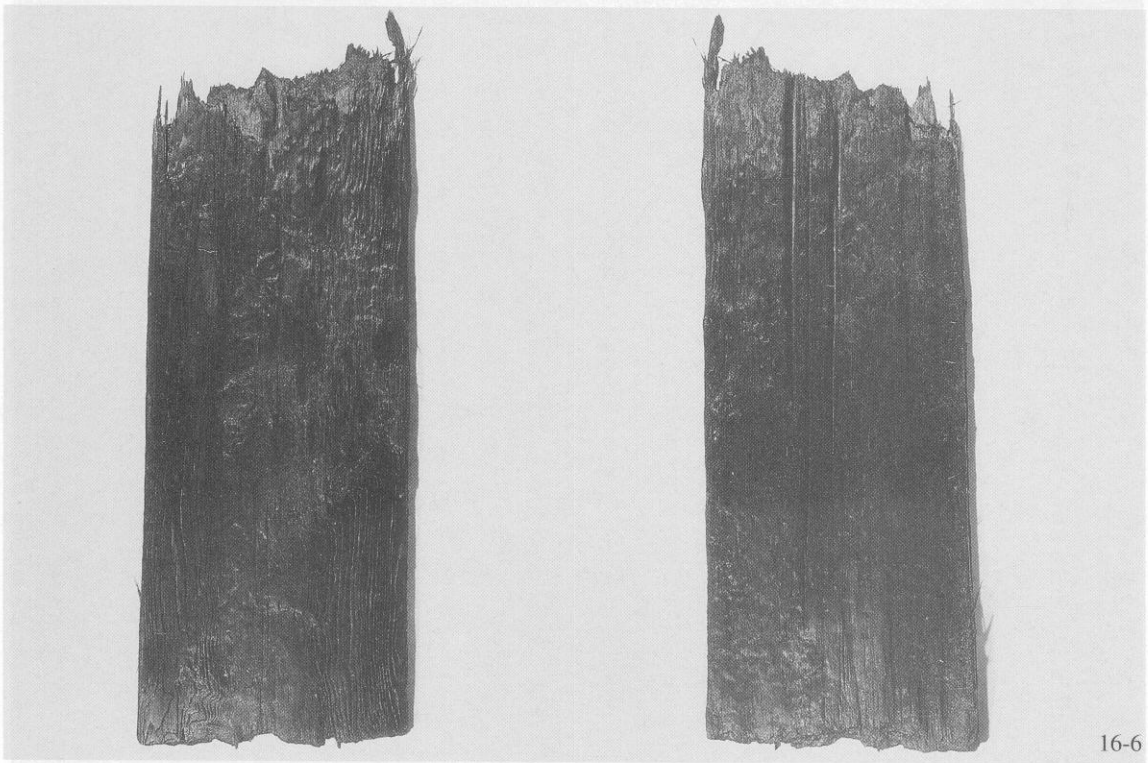


16-4

第9次調査出土木製品



16-5



16-6

第9次調査出土木製品

Pla.20



第10次調査全景（西から）



10SK010土器出土状況



27-1



35-2



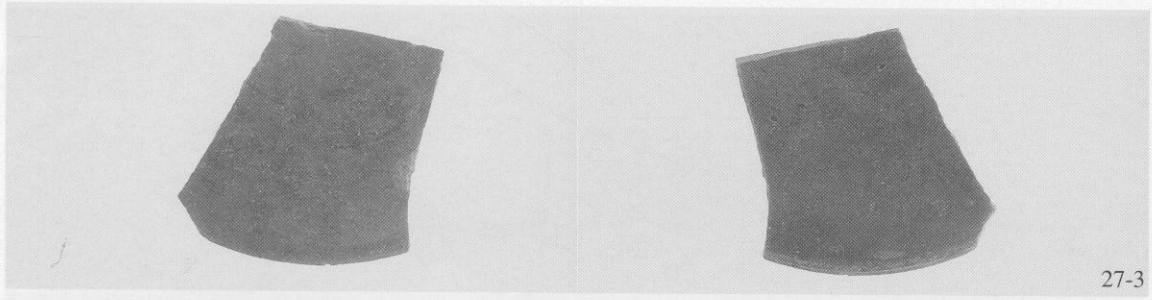
35-1



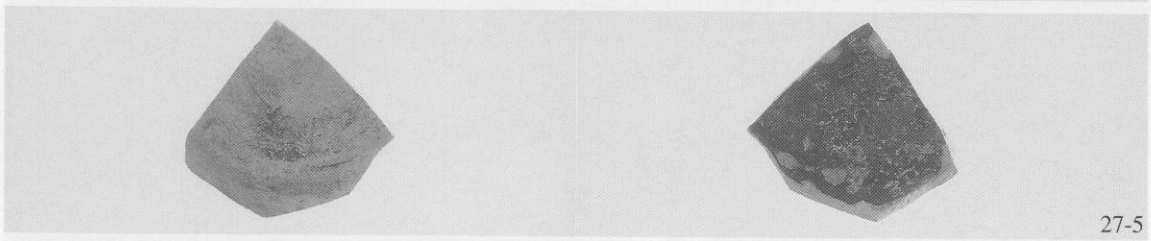
a

10SD001出土土器・瓦、10SK010出土瓦

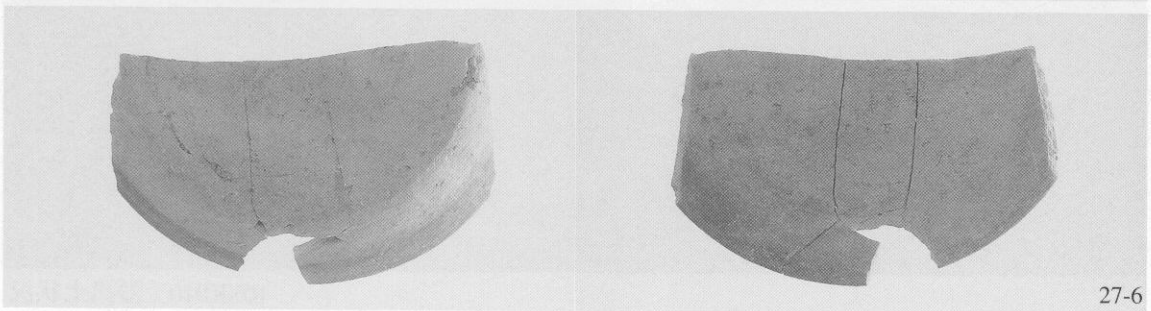
Pla.22



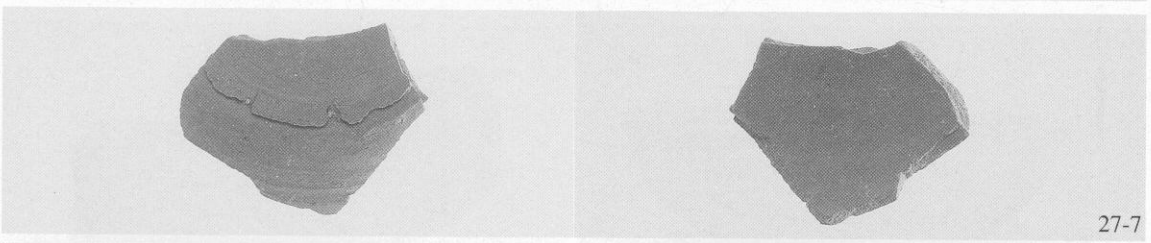
27-3



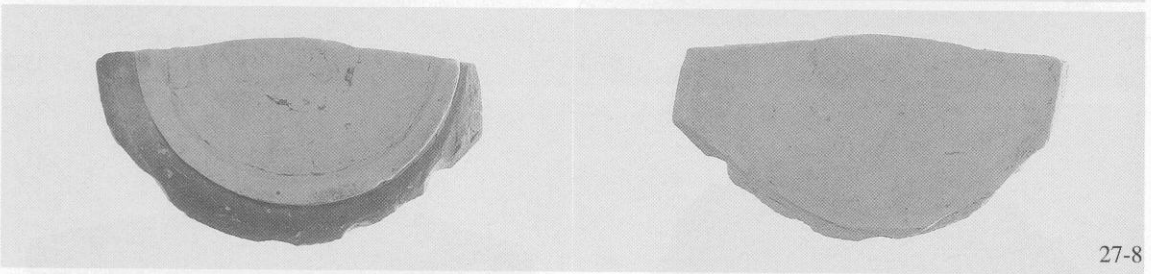
27-5



27-6



27-7



27-8

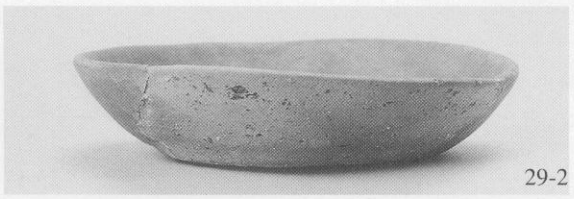
10SD001出土土器

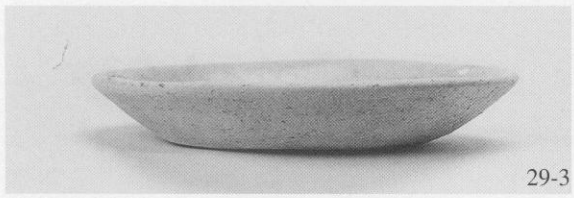


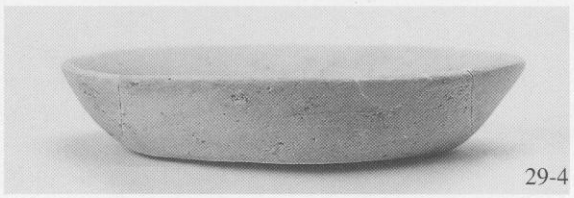
28-1　10SK002出土土器

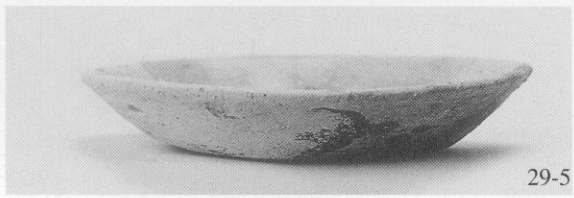
Pla.23

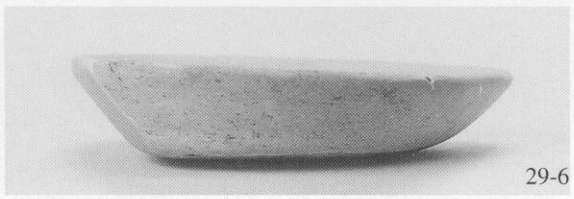

29-1

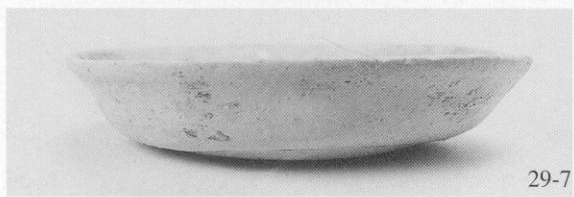

29-2

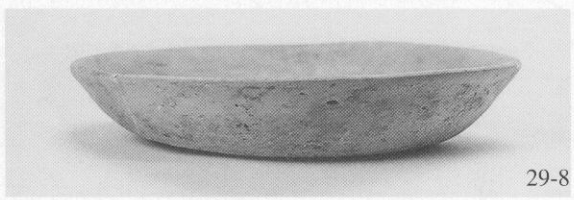

29-3

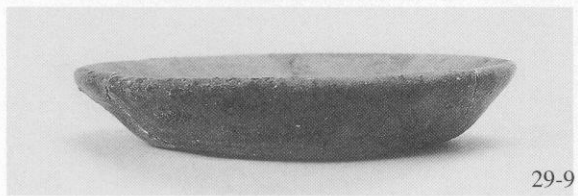

29-4

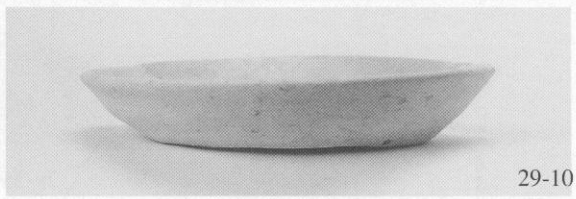

29-5

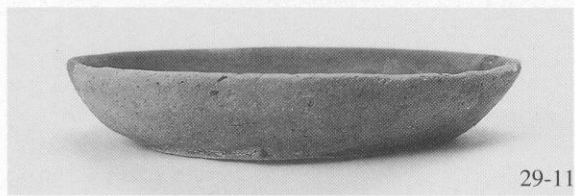

29-6


29-7

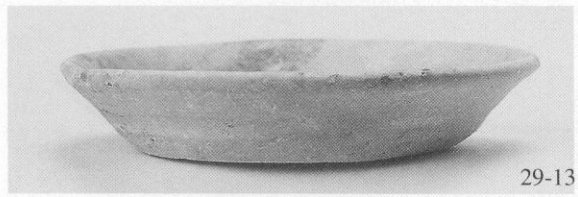

29-8

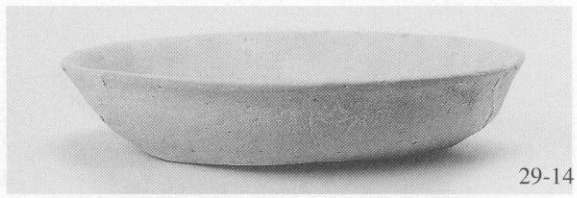

29-9

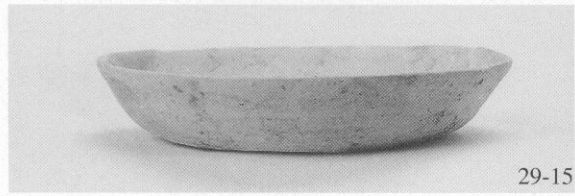

29-10

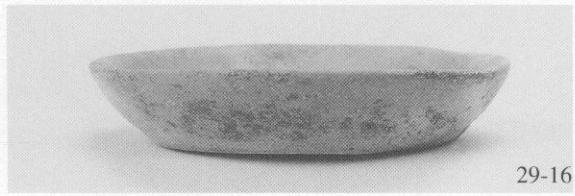

29-11


29-12


29-13

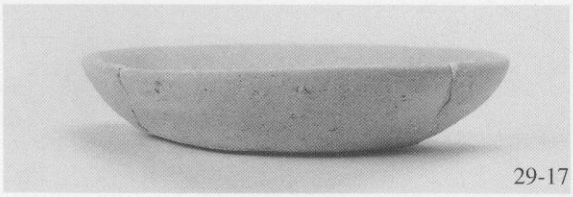

29-14

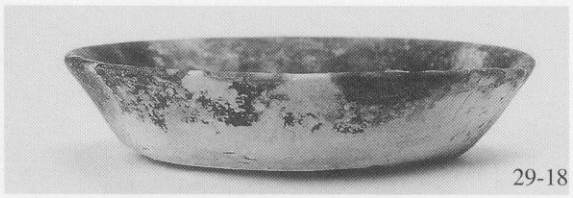

29-15

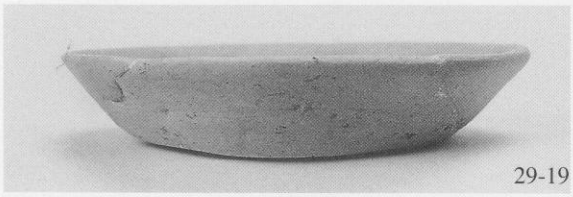

29-16

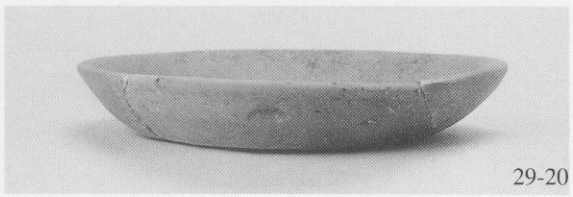
10SK010出土土器

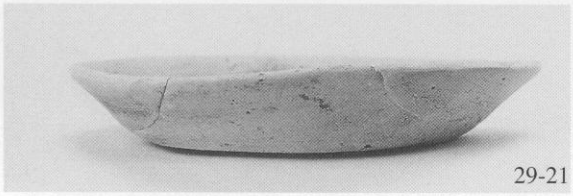
Pla.24


29-17


29-18

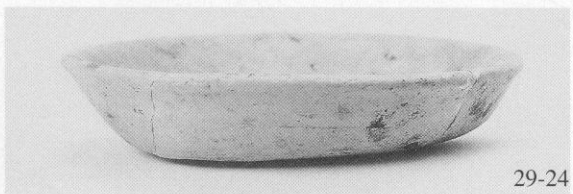

29-19

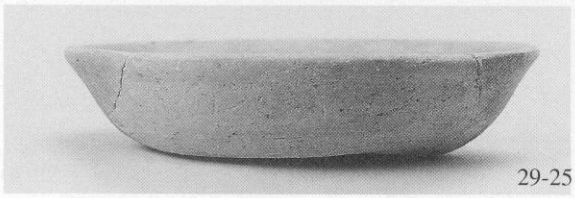

29-20

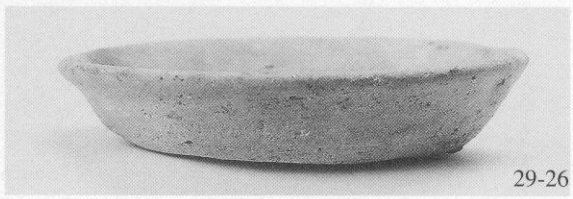

29-21

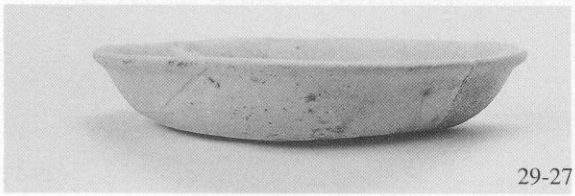

29-22


29-23

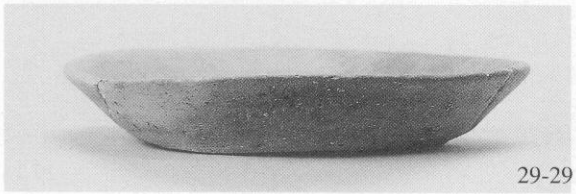

29-24

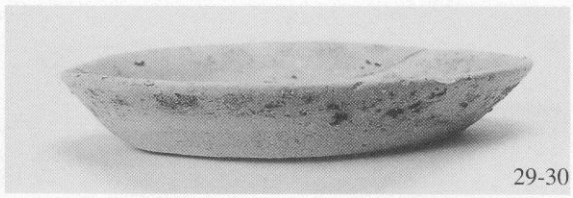

29-25

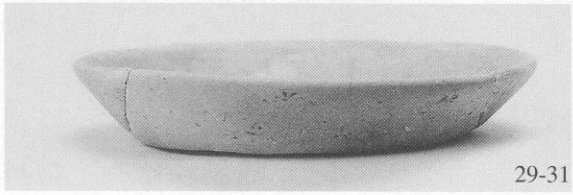

29-26

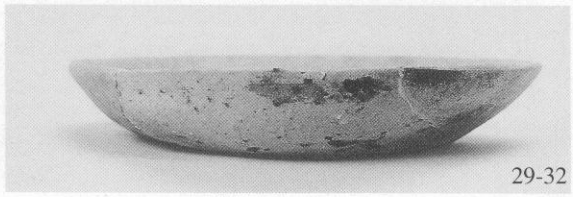

29-27


29-28

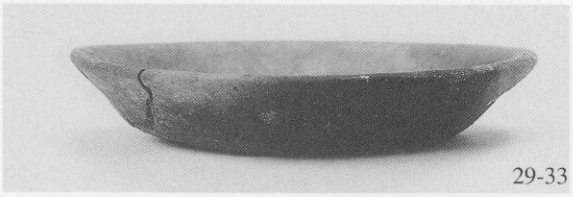

29-29

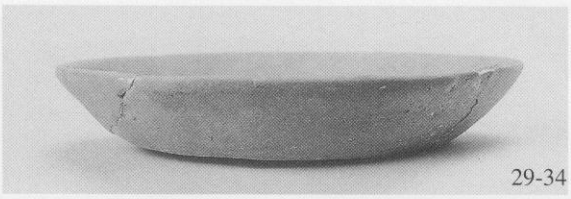

29-30

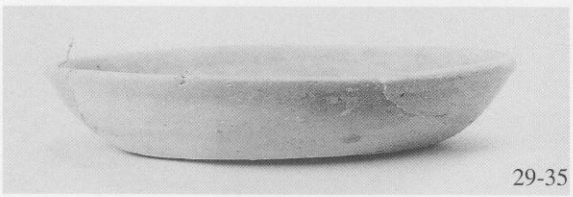

29-31

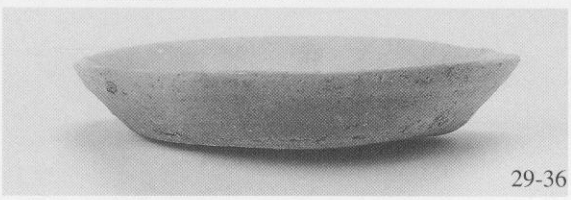

29-32

10SK010出土土器


29-33


29-34

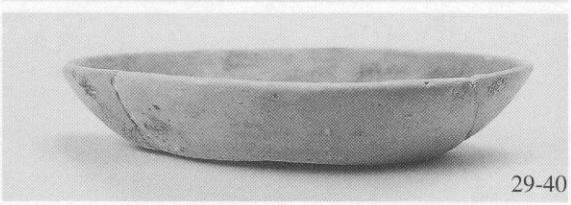

29-35

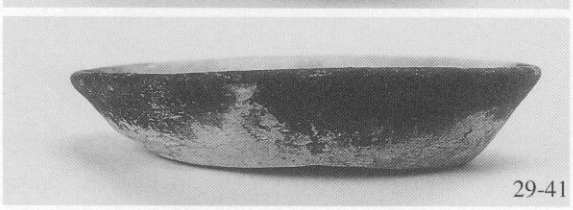

29-36


29-37


29-38

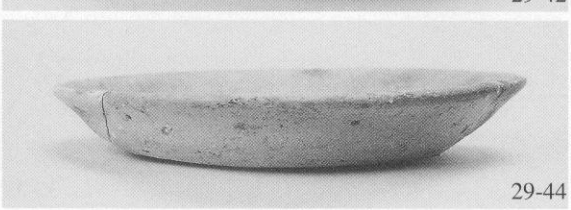

29-39

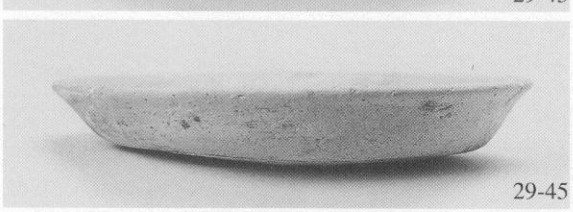

29-40

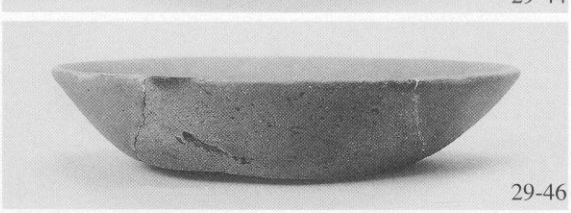

29-41


29-42

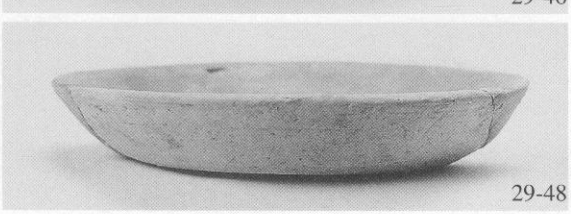

29-43


29-44


29-45

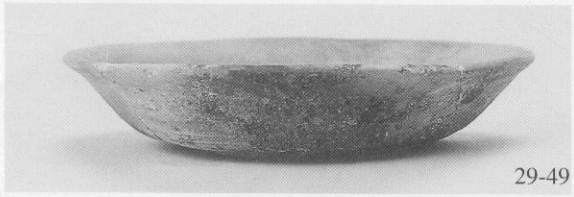

29-46


29-47

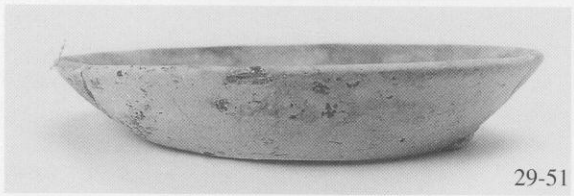

29-48

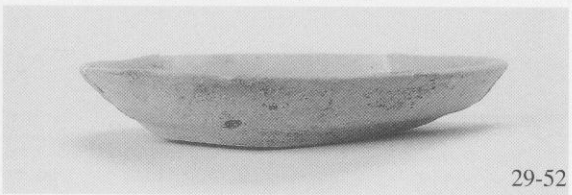
10SK010出土土器

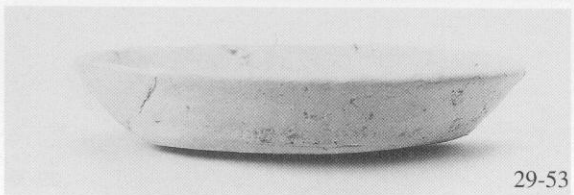
Pla.26


29-49

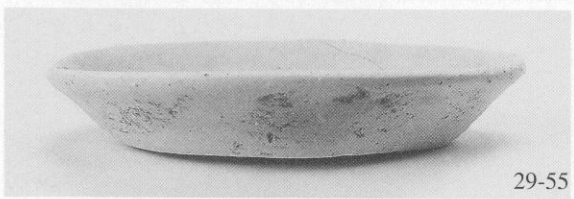

29-50

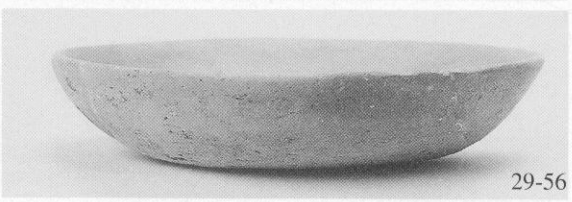

29-51


29-52

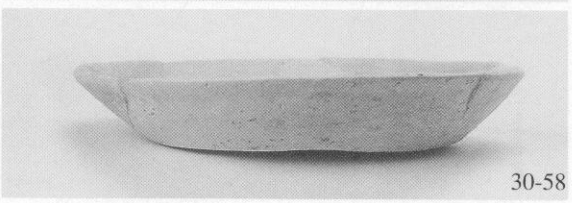

29-53

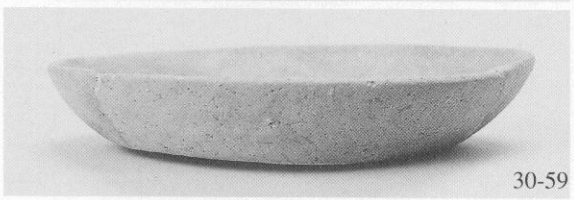

29-54


29-55

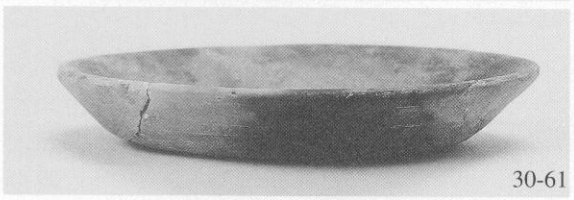

29-56

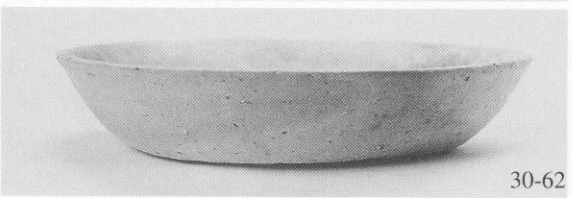

30-57

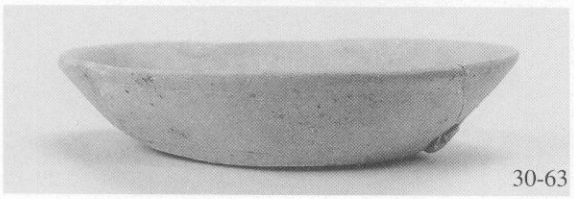

30-58

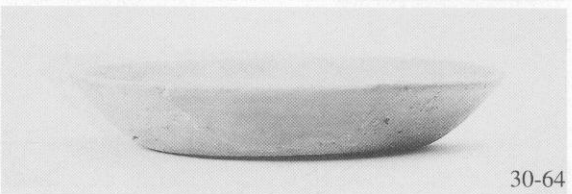

30-59


30-60

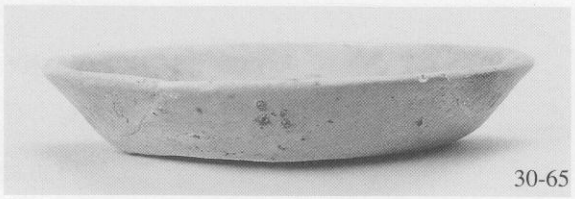

30-61


30-62

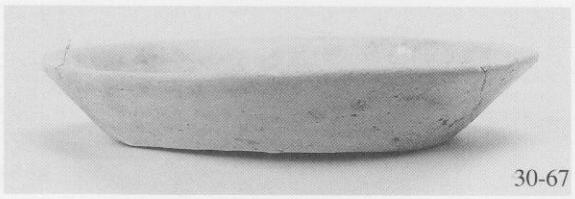

30-63

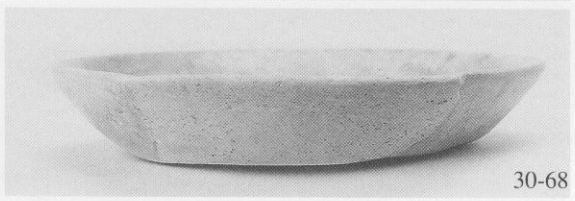

30-64

10SK010出土土器

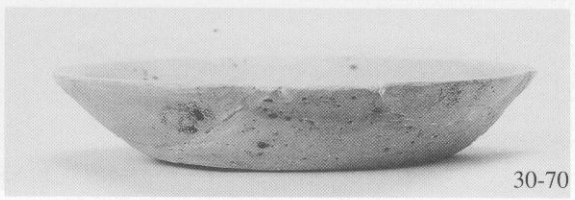

30-65

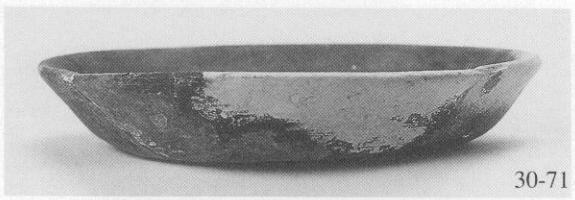

30-66

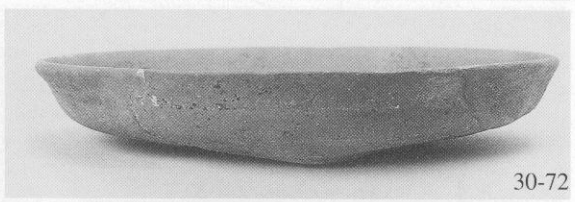

30-67


30-68


30-69

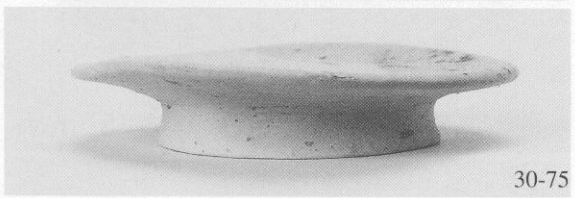

30-70

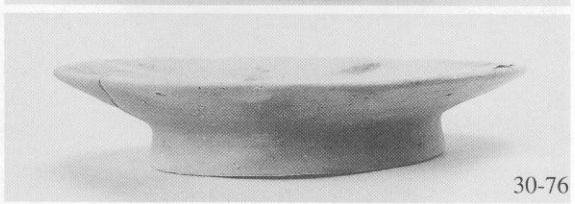

30-71

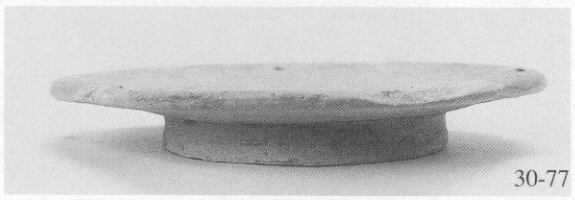

30-72

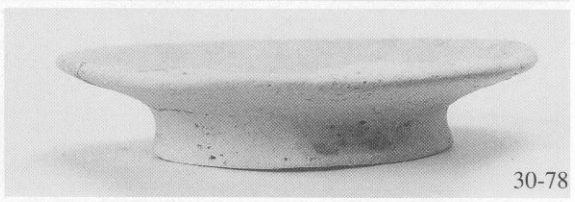

30-73


30-74

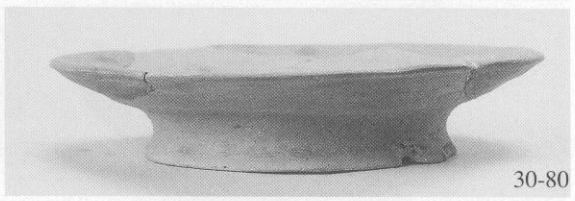

30-75


30-76


30-77

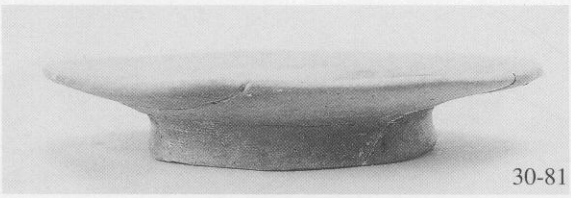

30-78


30-79

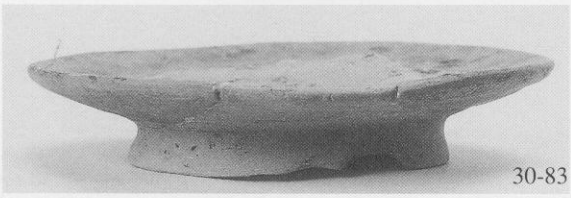

30-80

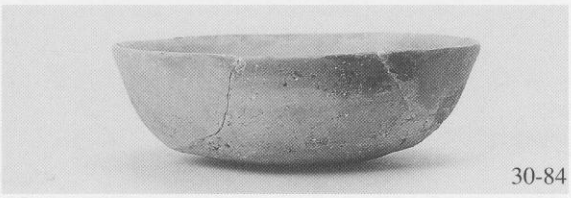
10SK010出土土器

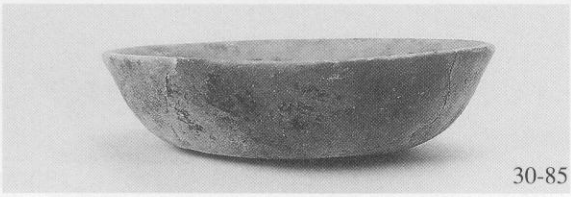
Pla.28


30-81

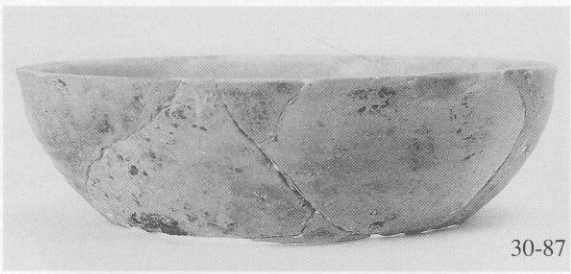

30-82


30-83


30-84


30-85


30-86


30-87


30-88


30-89


31-94


31-91


31-92


31-93


31-95

10SK010出土土器


31-96


31-97

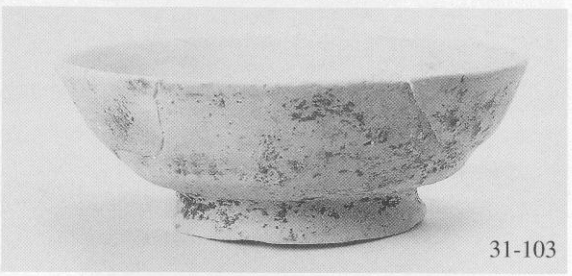

31-98


31-99


31-100


31-101


31-102


31-103


31-104


31-105


31-106


31-107

10SK010出土土器

Pla.30


31-108


31-109


31-110


31-111


31-112


31-113


32-114


32-115

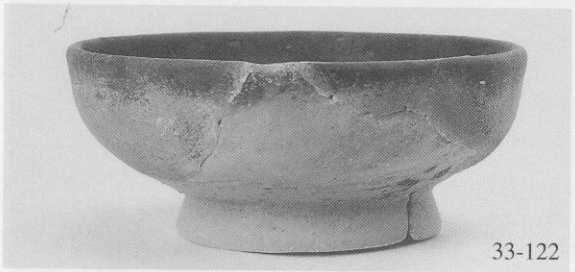

32-117


32-119

10SK010出土土器


33-120


33-121


33-122


33-123


33-124

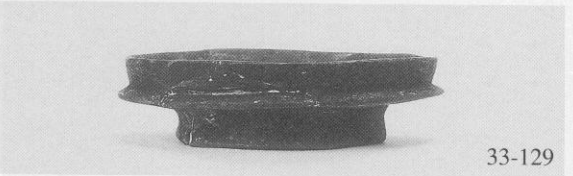

33-125

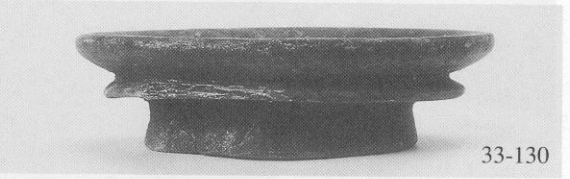

33-126


33-127


33-128


33-131


33-129

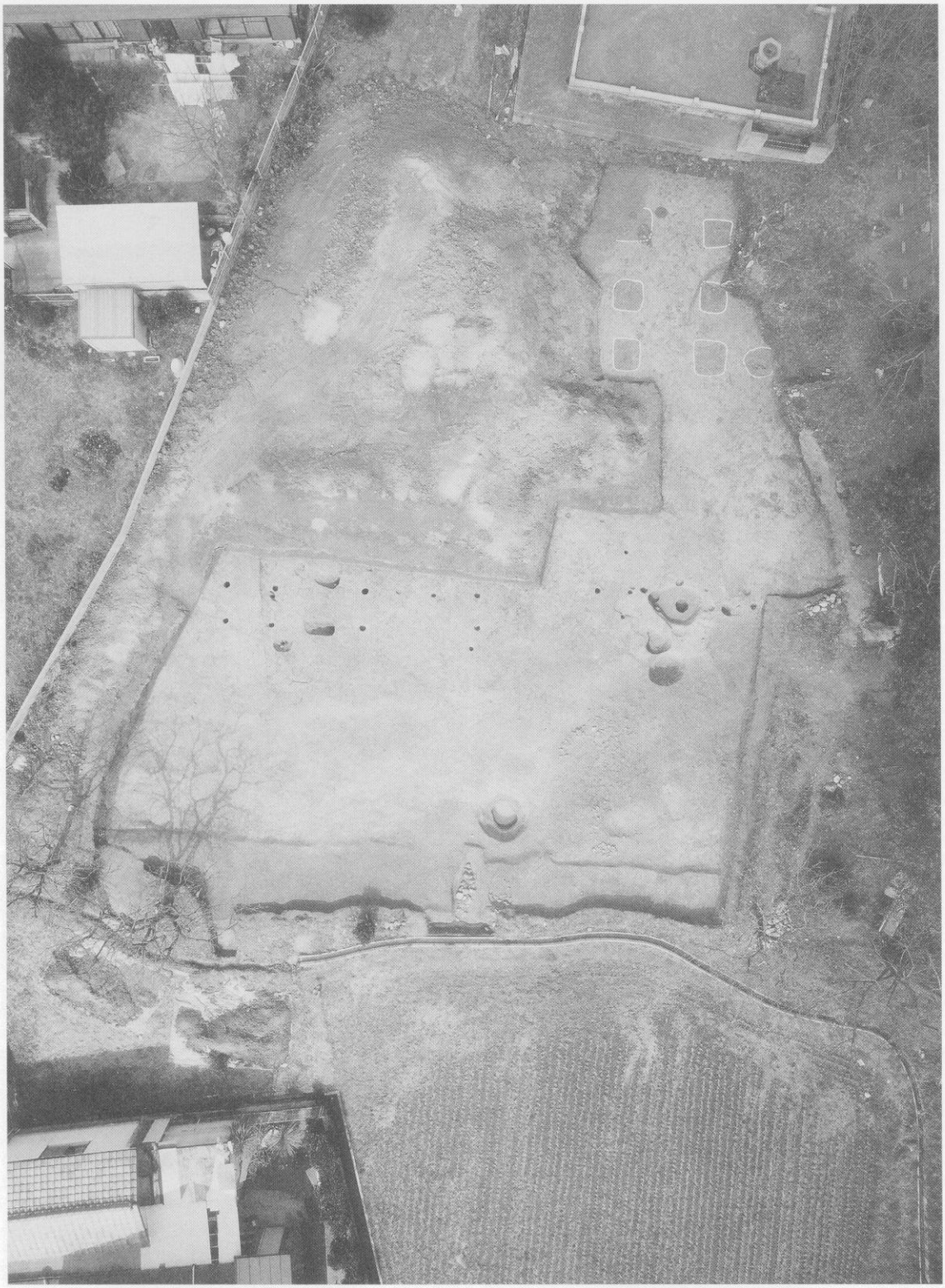

33-130


33-132

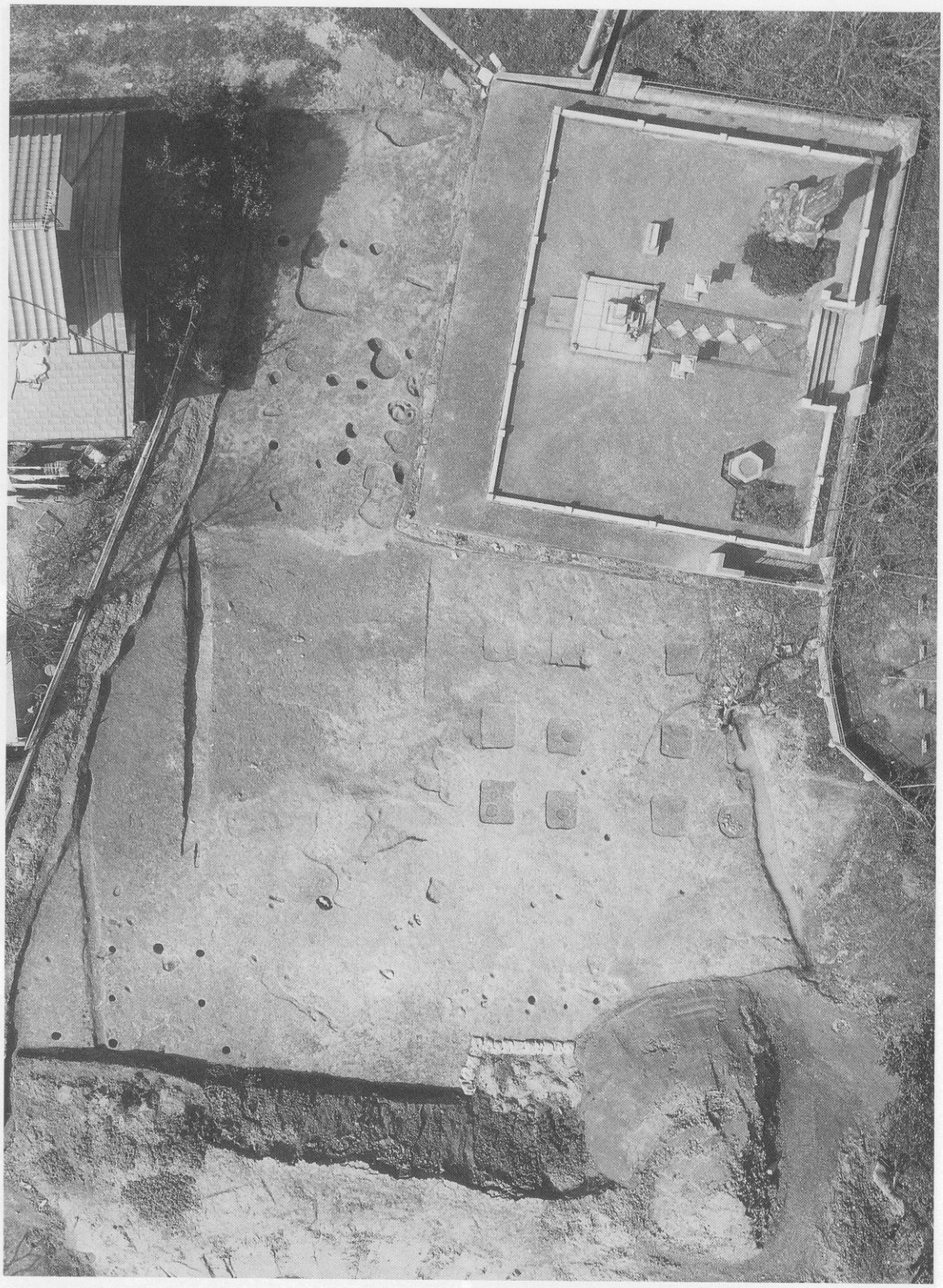

33-133

10SK010出土土器

Pla.32

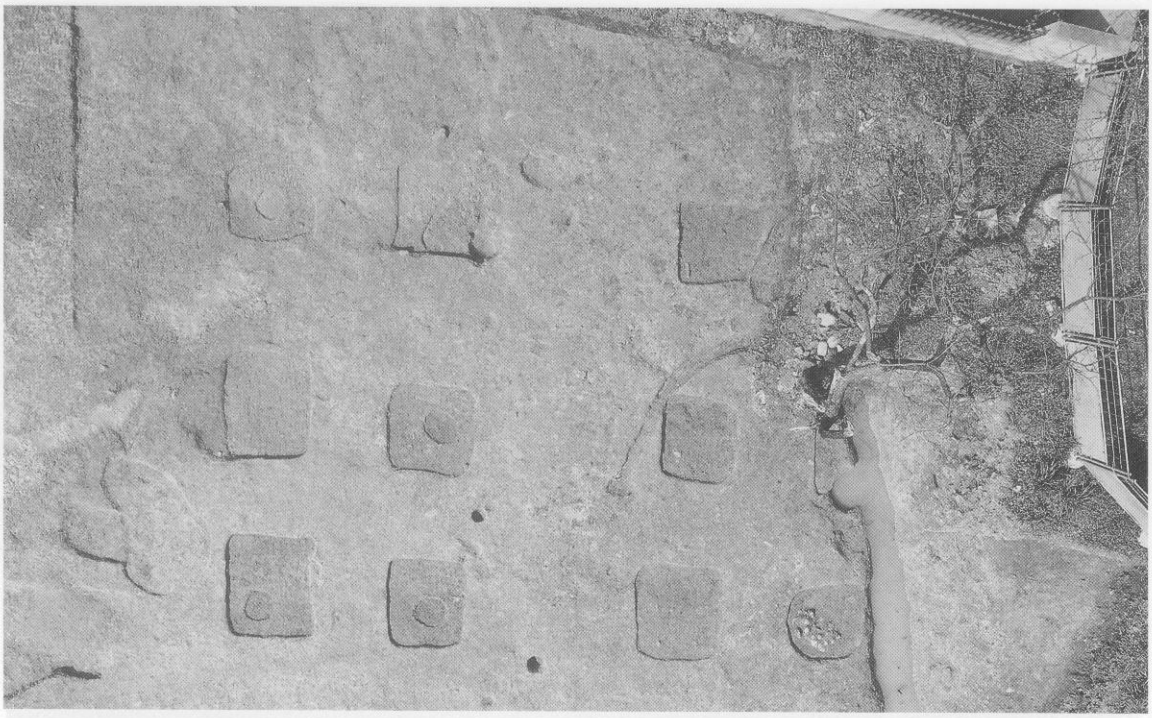


第13次調査　調査区南半分（空中写真・上が北）



第13次調査　調査区北半分（空中写真・上が北）

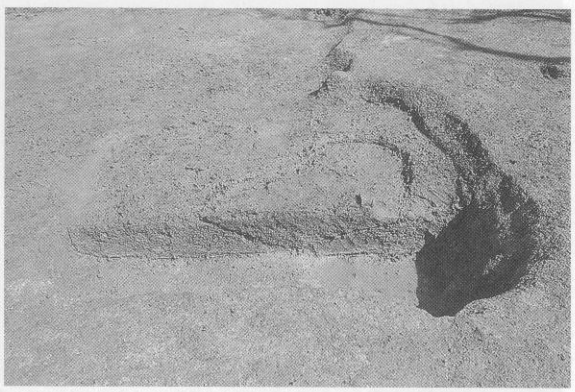
Pla.34



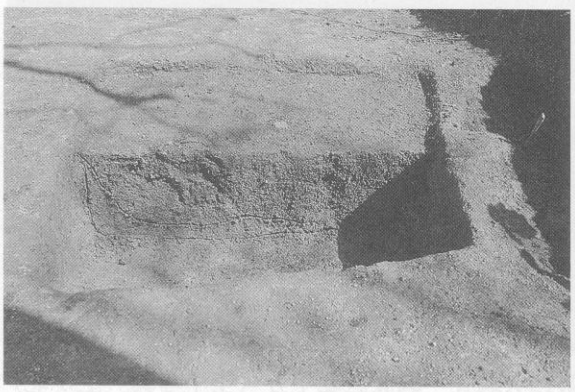
13SB020（空中写真・上が北）



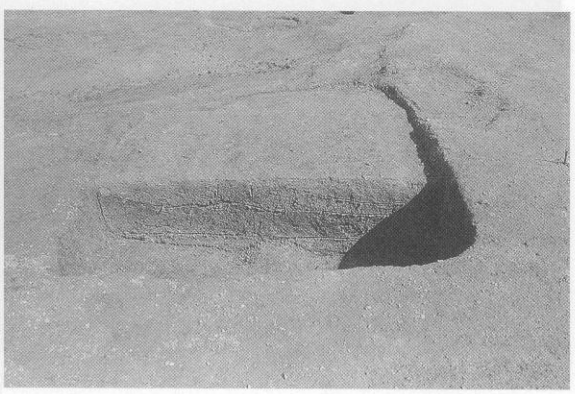
13SB020a（南から）



13SB020b（南から）



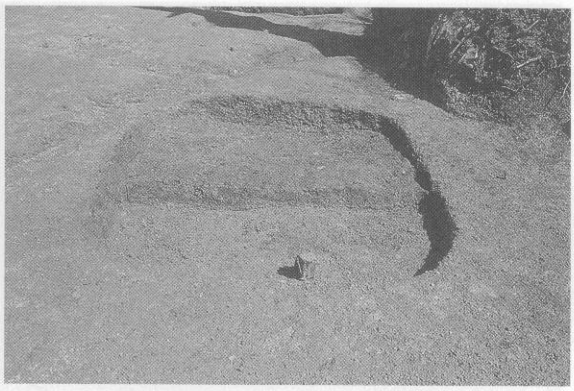
13SB020c（南から）



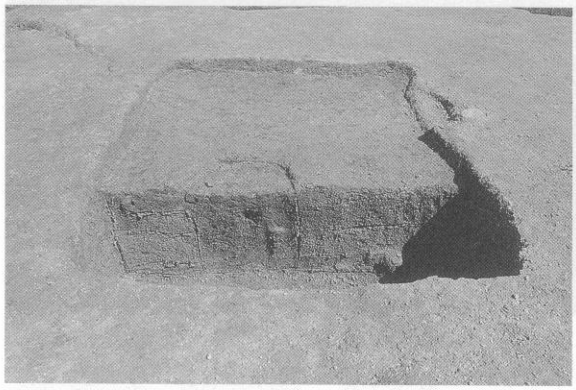
13SB020e（南から）



13SB020f（南から）



13SB020g（南から）



13SB020i（南から）



13SB020j（南から）



13SB020k（南から）



13SB020l（南から）

Pla.36



13SA010（空中写真・上が南）



13SA010（北東方向から）

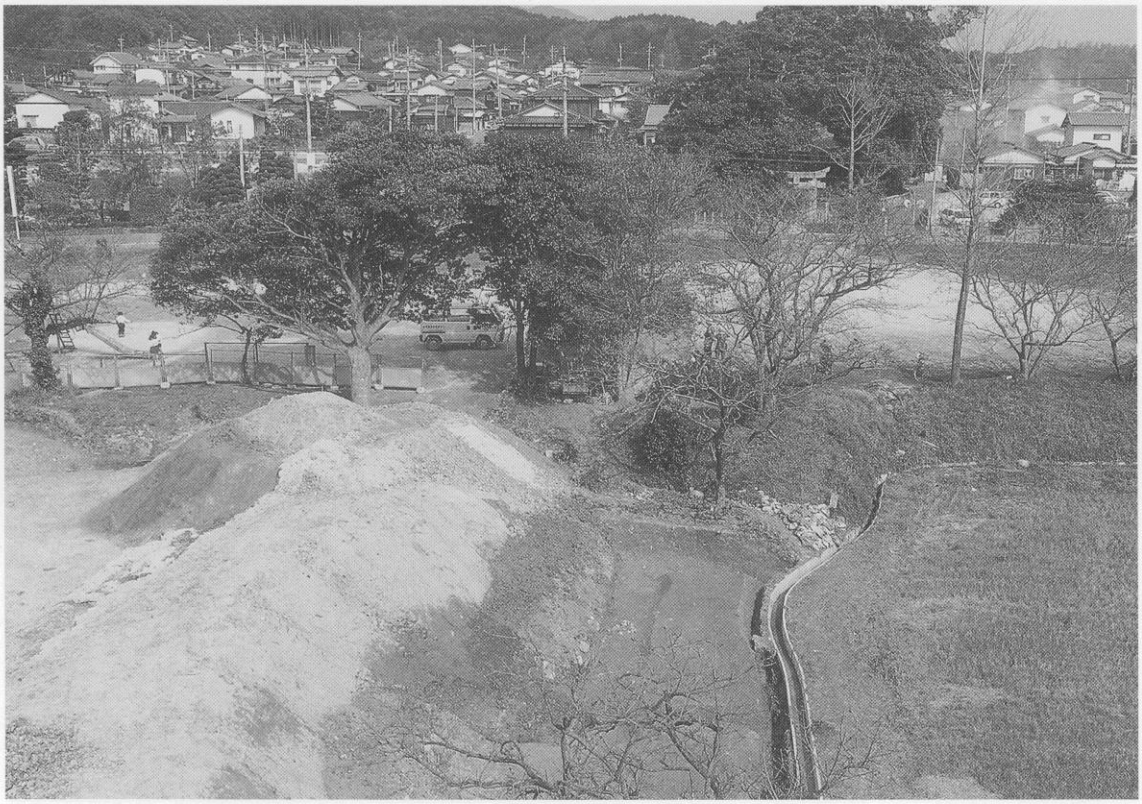


13SA010で最も残存状況の良好な部分（南から）



13SA010土層観察（東から）

Pla.38



13SA010と国分八幡社（空中写真・西から）



13SX002（南から）



13SX001（東から）



13SX001（西から）

Pla.40

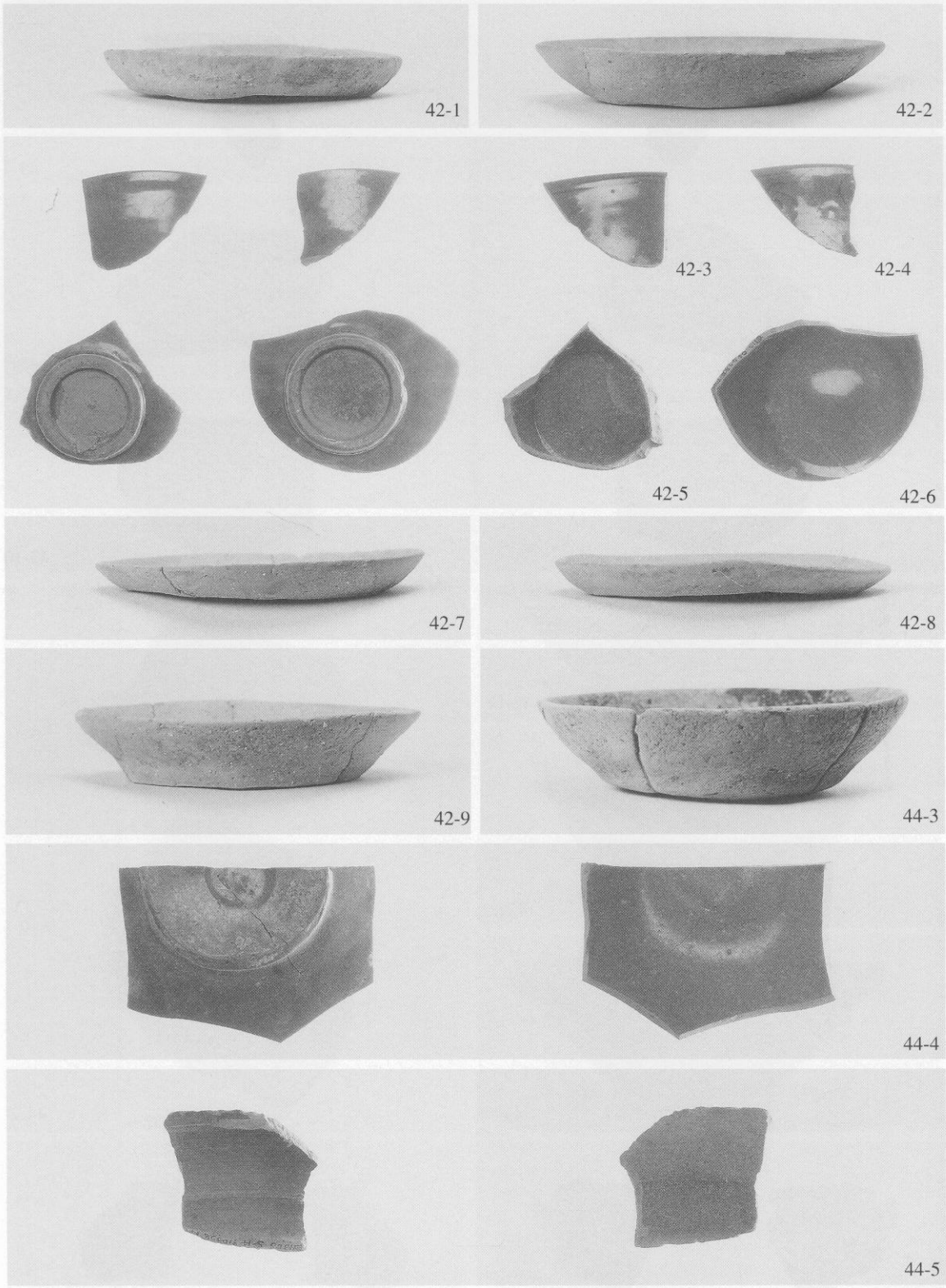


13SE003・13SK015（南から）



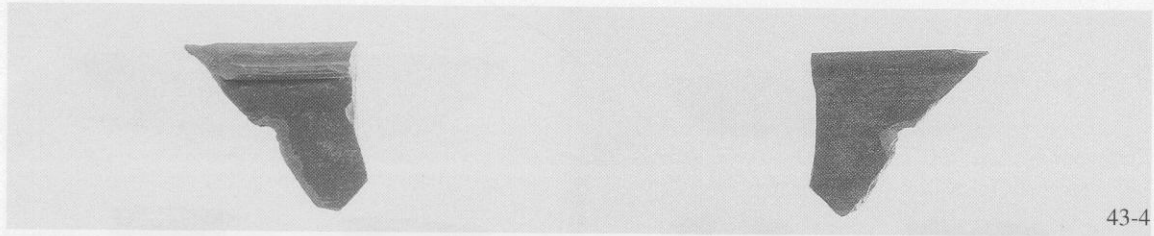
13SX030土層観察（東から）

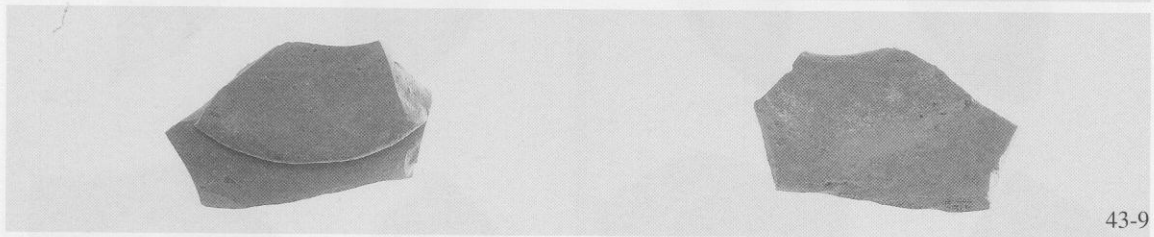
Pla.41

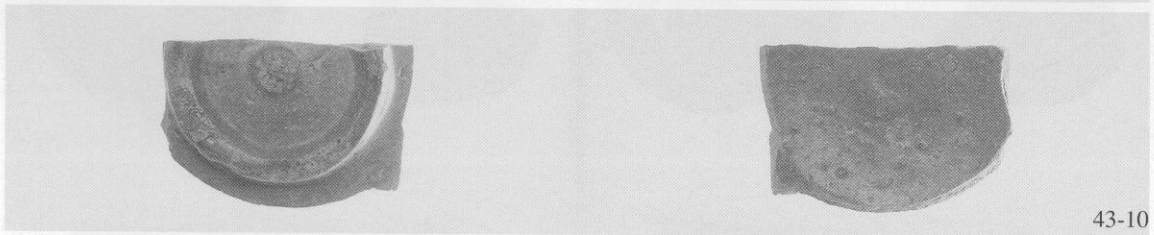


13SE005・13SX001・13SX014出土土器

Pla.42


43-4

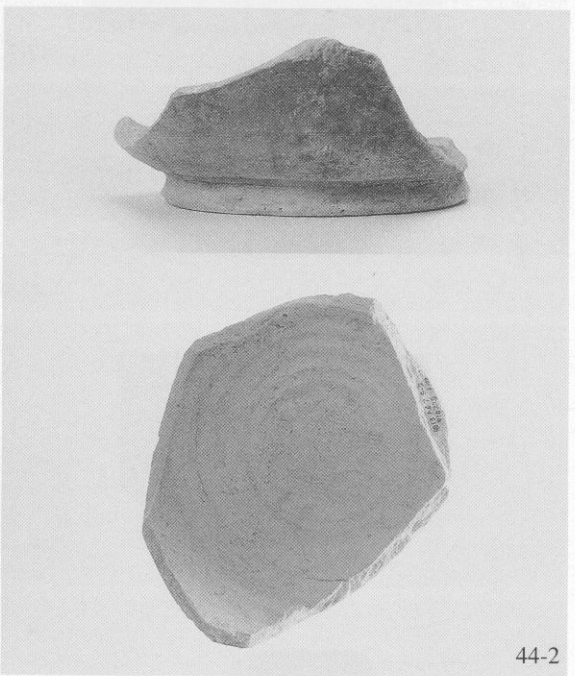

43-9

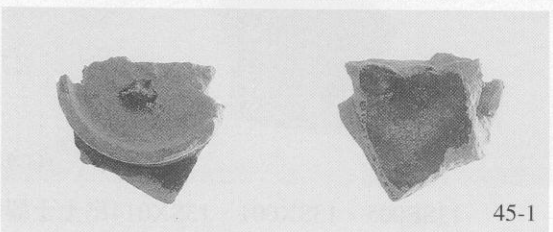

43-10

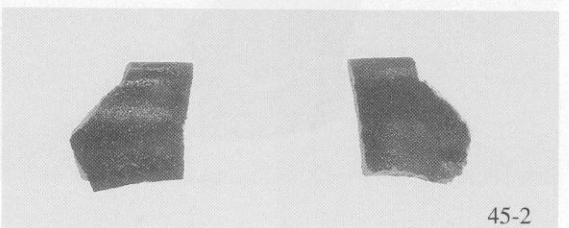

43-11


43-12

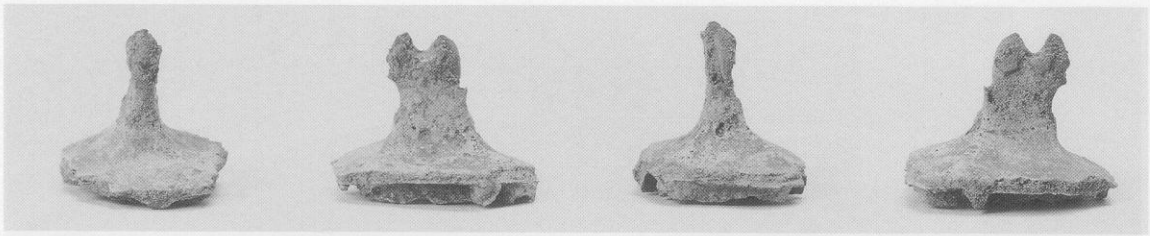

45-5

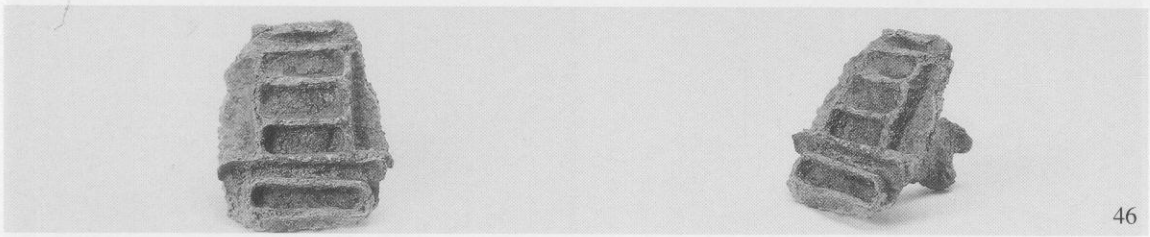

44-2


45-1

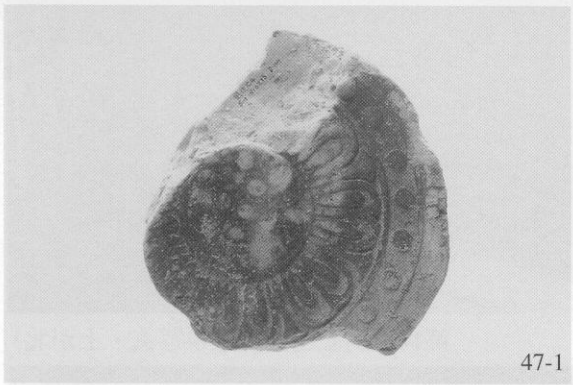

45-2

13SX030・012・026・暗茶色土層出土土器





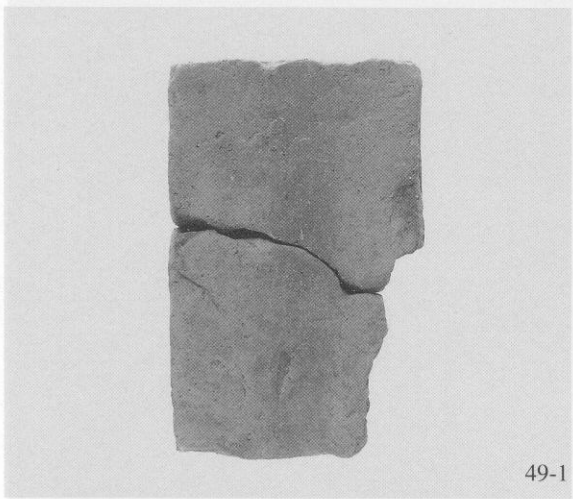
46



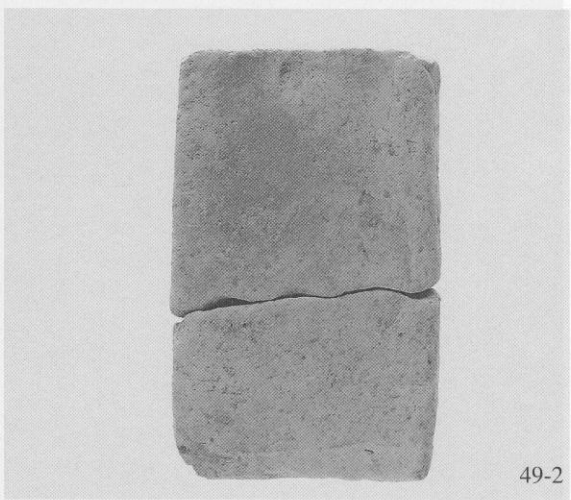
47-1



47-2



49-1



49-2

第9次調査出土銅製印章・軒丸瓦・塼

Pla.44



第14次調査全景（空中写真・上が北）



第14次調査西半部調査区（東から）



第14次調査上空から辻遺跡（住宅街）岩屋城跡（写真左上）を望む（空中写真・西から）

Pla.46



14SD005（南から）



14SD005土層観察（北から）



第14次調査下層遺構調査状況（東から）



第14次調査下層遺構調査状況（北から）

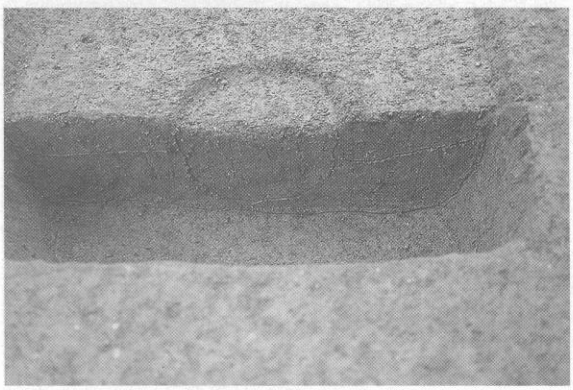
Pla.48



14SA070（南から）

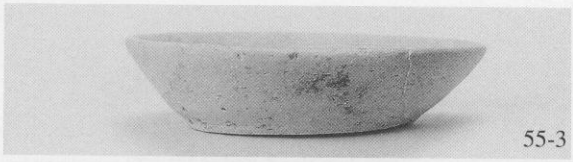


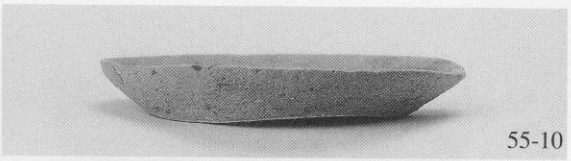
14SA070a土層観察（南から）



14SA070b土層観察（南から）

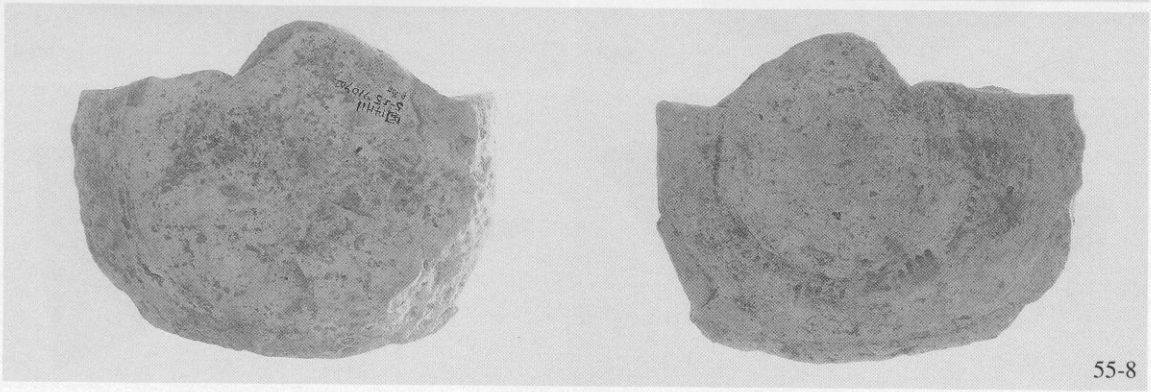
Pla.49

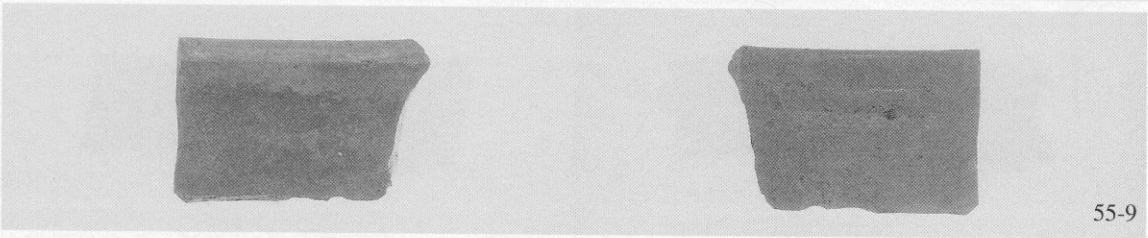

55-3

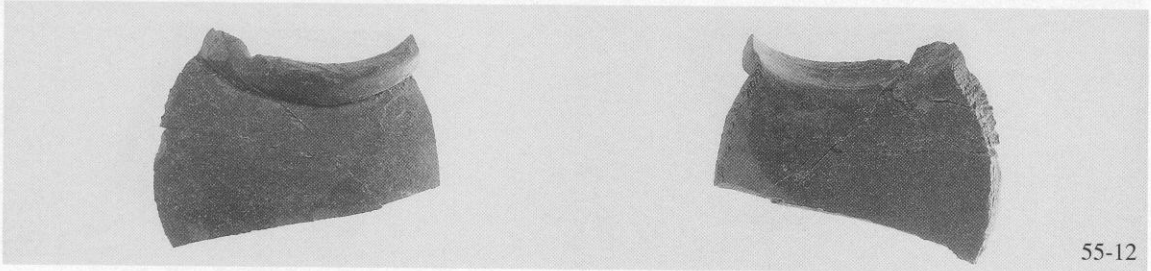

55-10


55-7


55-11

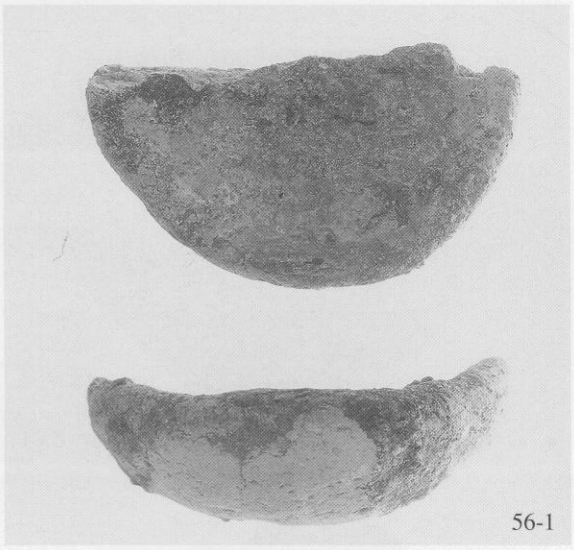

55-8


55-9


55-12

14SK020・025・040・083出土土器

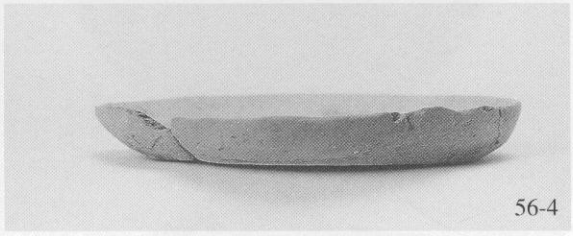
Pla.50



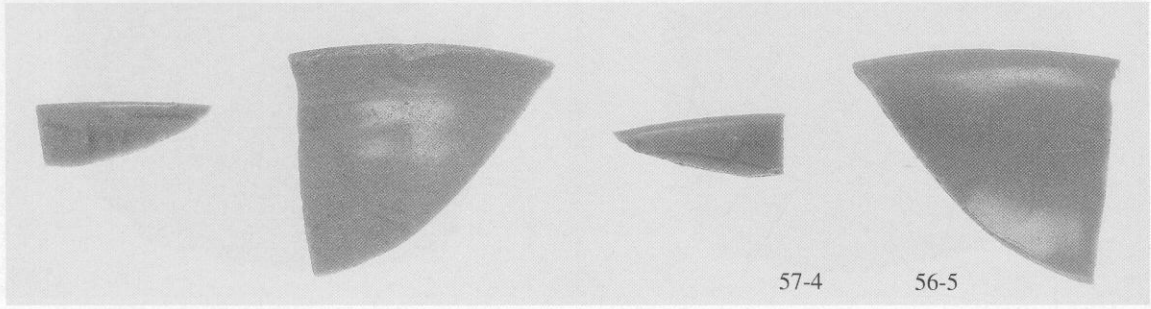
56-1



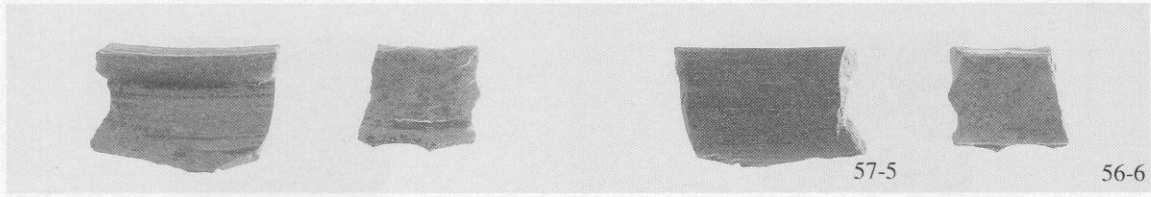
56-2



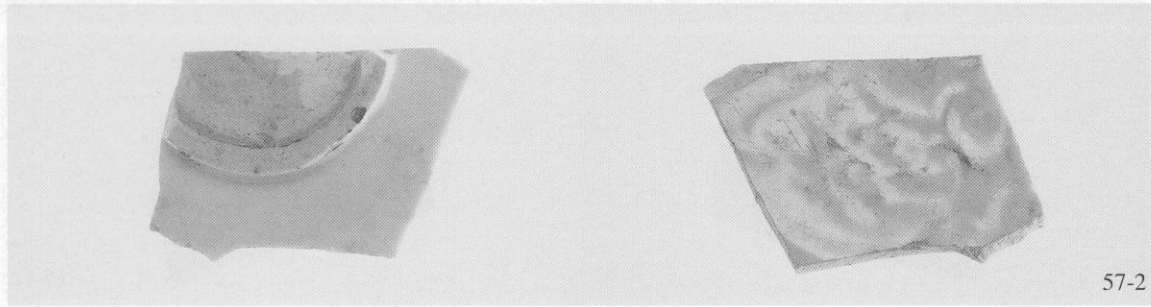
56-4



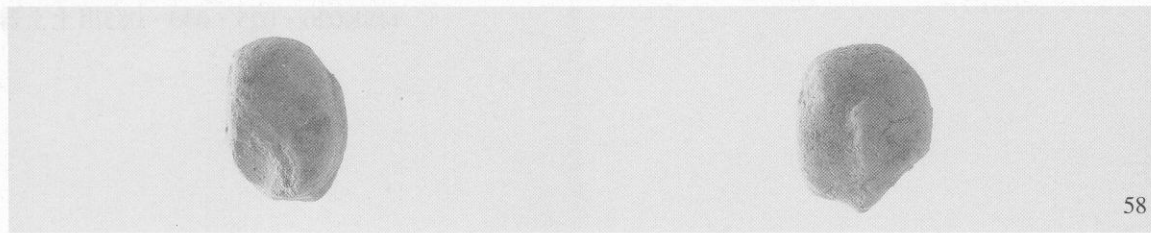
57-4　　56-5



57-5　　56-6



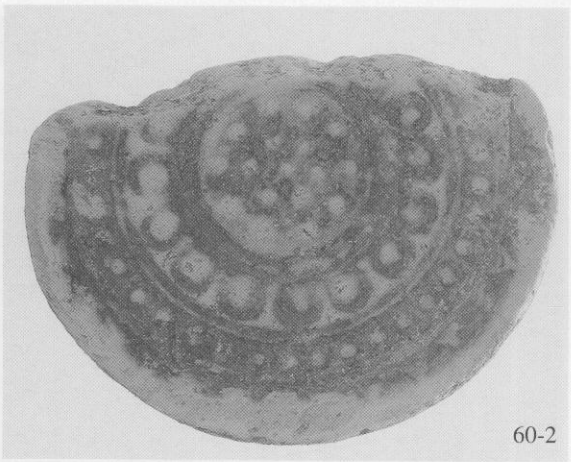
57-2



58

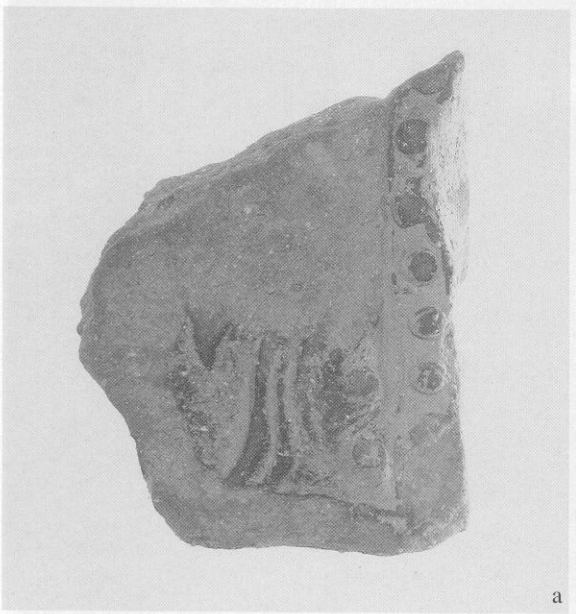
14SX010・016・024・037・050・表土・茶色土層出土土器

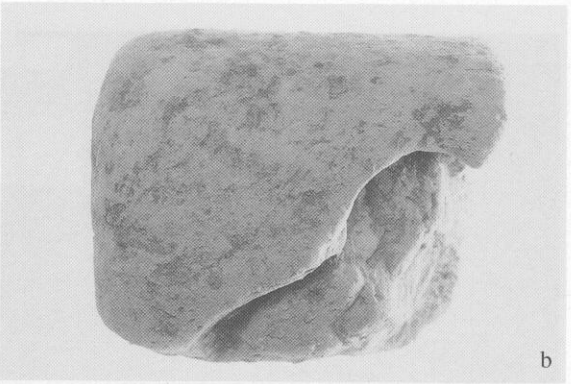

60-1


60-2


60-3


60-6

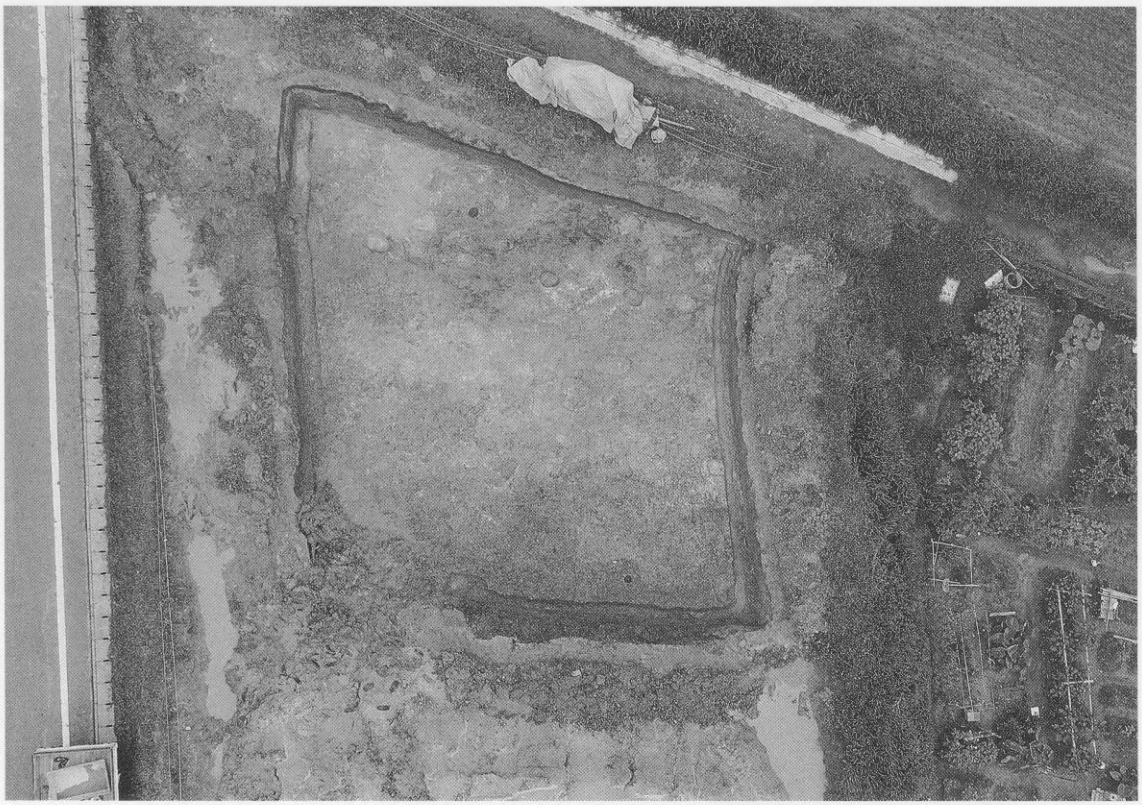

a


b


c

第14次調査出土瓦類

Pla.52



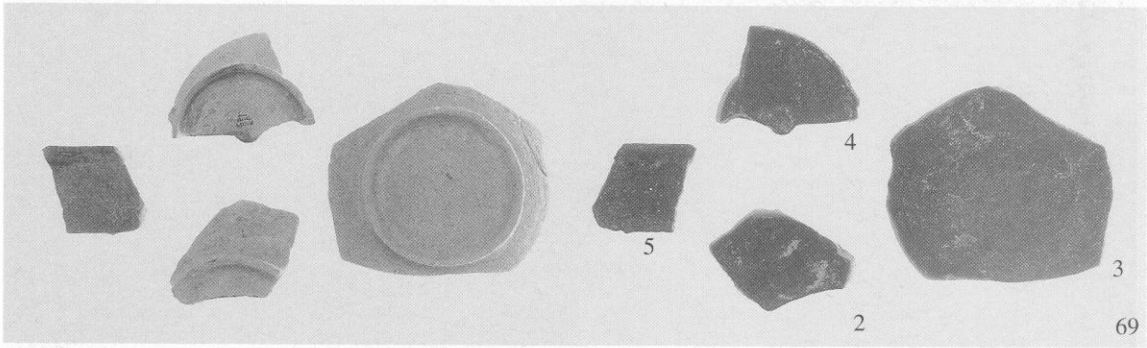
第15次調査北半部（空中写真・上が北）

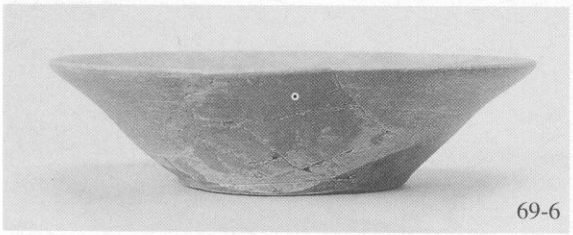


第15次調査南半部（北から）



第15次調査南半部下層遺構（北から）





第15次調査出土土器

Pla.54



第17次調査全景（空中写真・上が北）



第17次調査上空から筑前国分寺方向を望む（空中写真・西から）

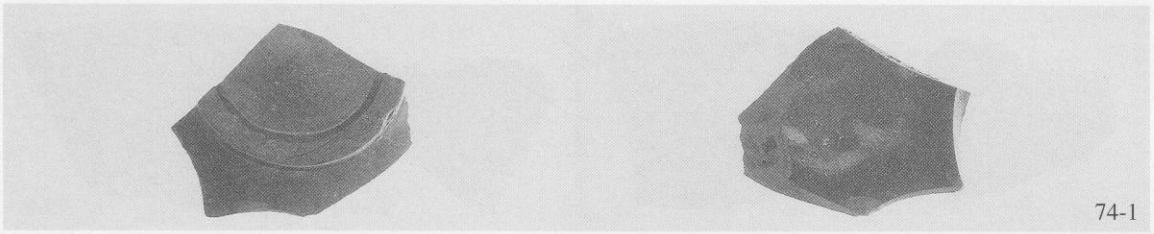
Pla.56

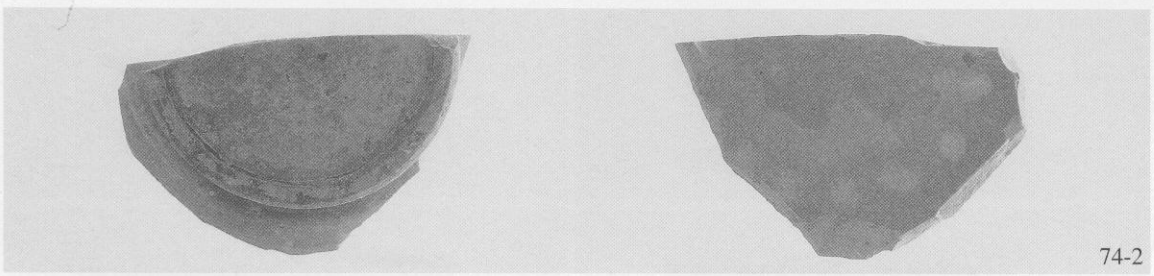


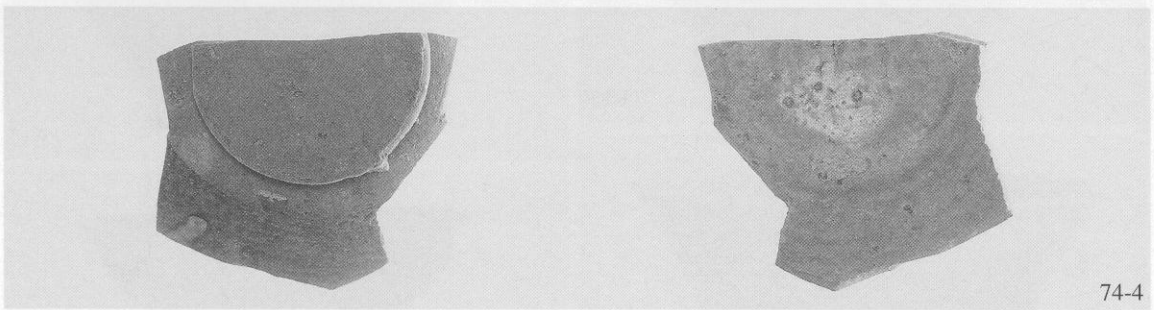
第17次調査北半部（空中写真・上が北）

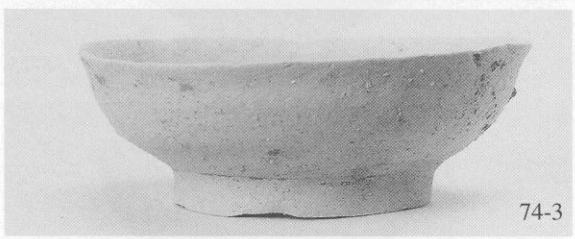


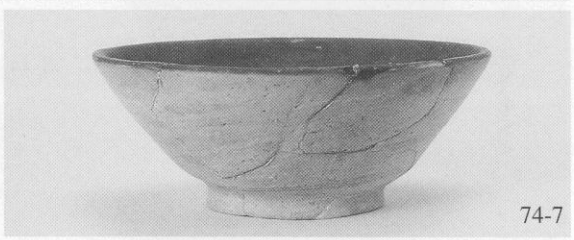
第17次調査南半部（空中写真・上が北）

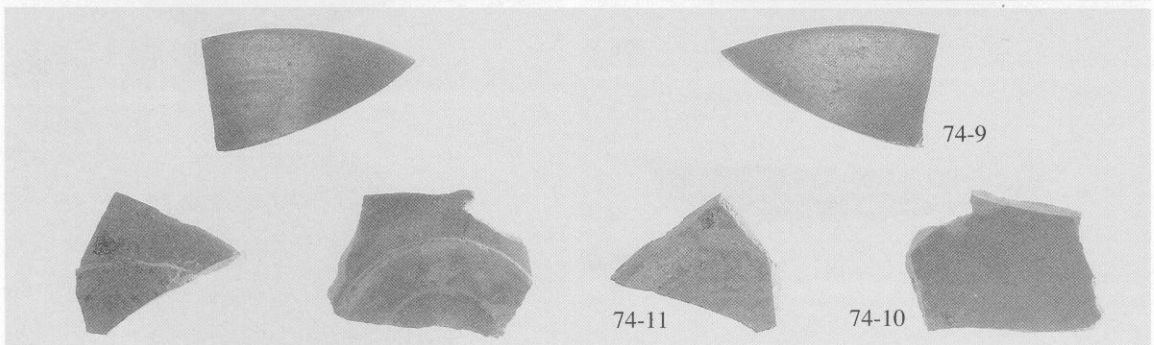

74-1

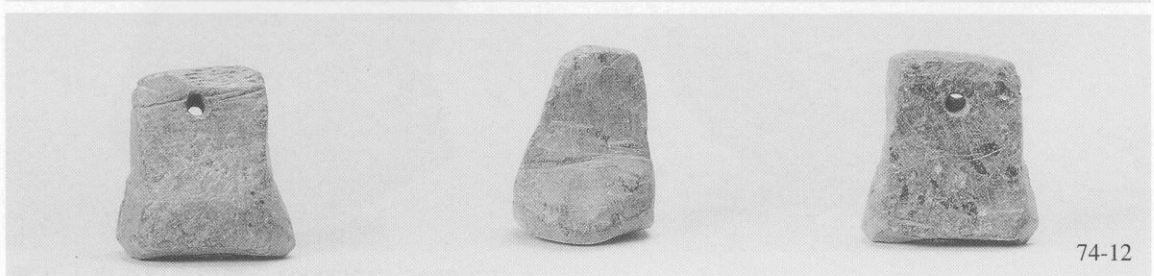

74-2


74-4

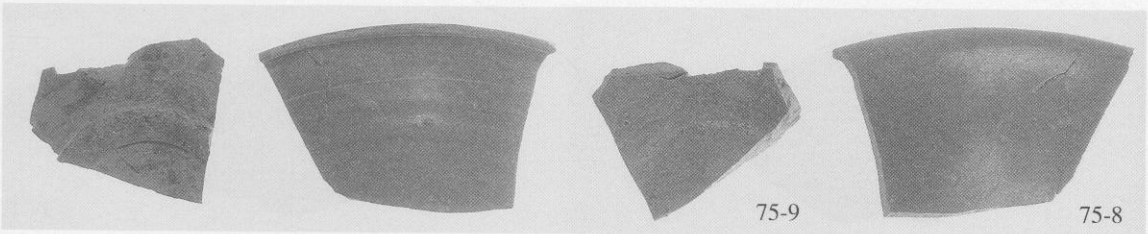

74-3


74-7


74-9
74-11
74-10

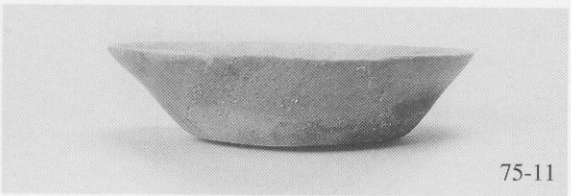

74-12

Pla.58


75-9

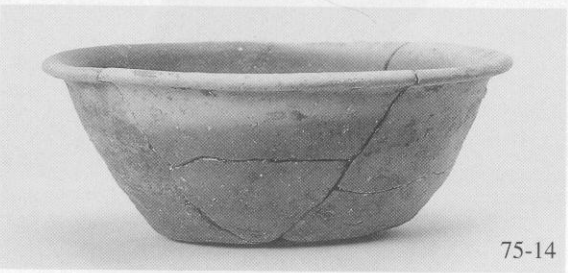
75-8


75-10

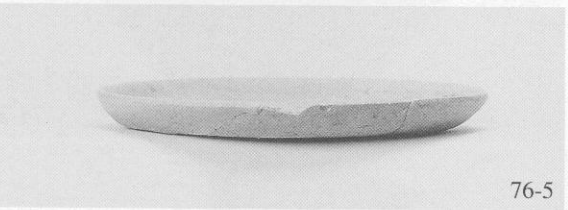

75-11


75-12

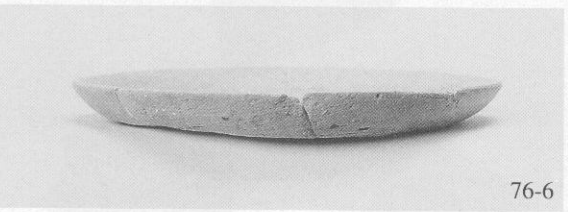

75-13


75-14


75-15


76-5


76-7


76-6


77-1


76-8

17SE015・17SD007・第17次調査出土瓦類

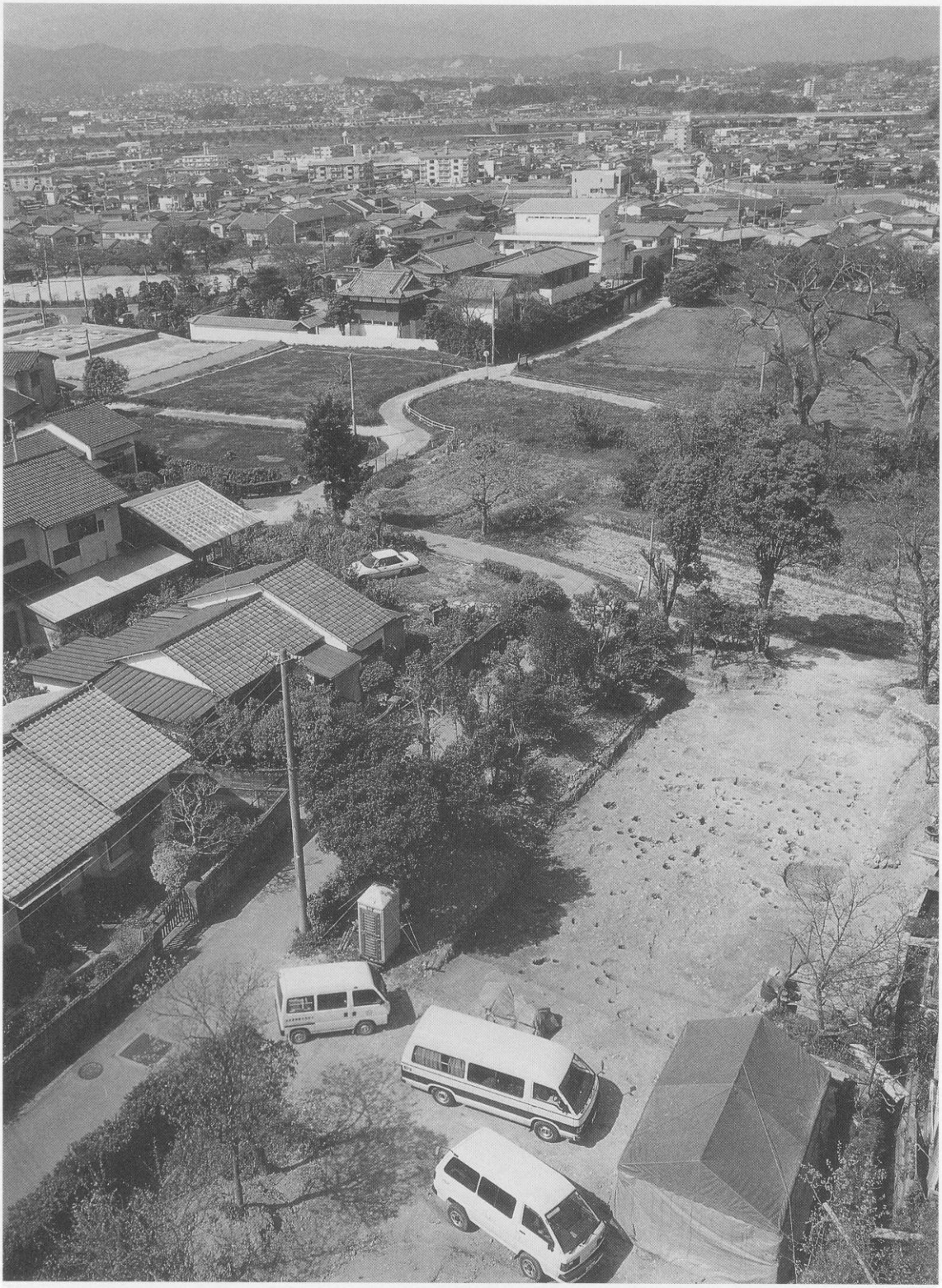


第19次調査全景（空中写真・上が北）



第19次調査西半部下層検出状況（東から）

Pla.60



第19次調査地上空から筑前国分寺跡方向を望む（空中写真・上が南西）



19SX015（南から）



19SK001土層観察

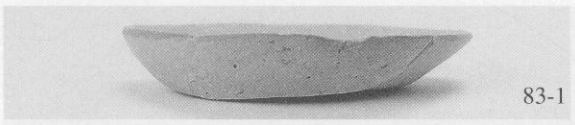


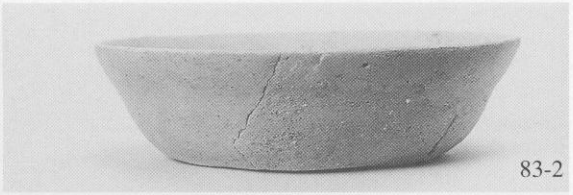
19SK010土層観察



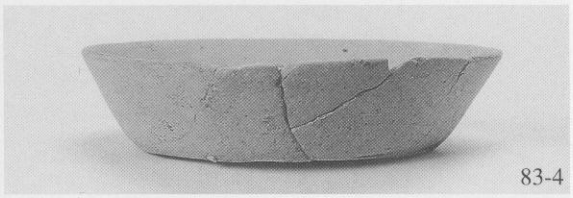
8ライン赤茶色粘質土層（東から）

Pla.62

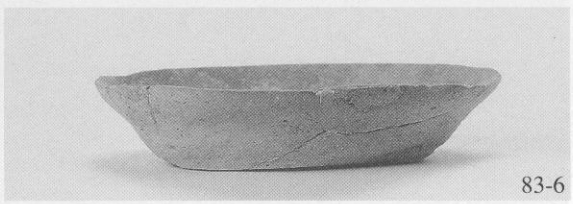

83-1

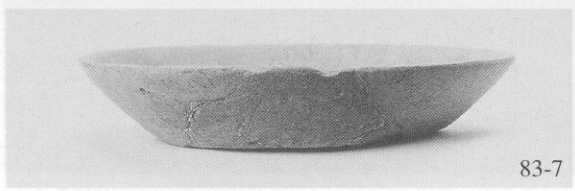

83-2


83-3

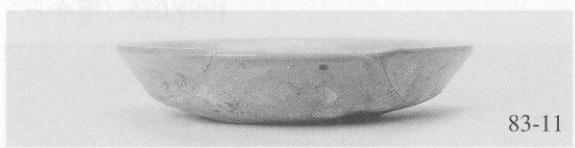

83-4

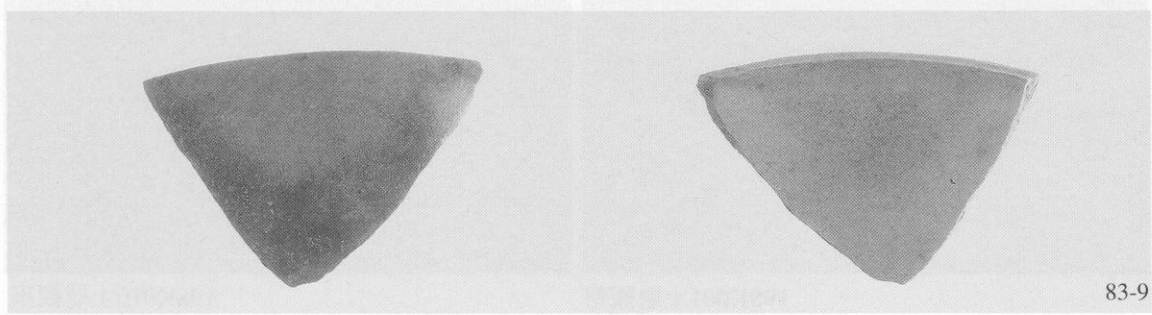

83-5


83-6

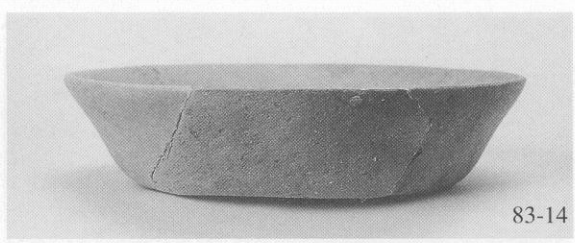

83-7


83-8

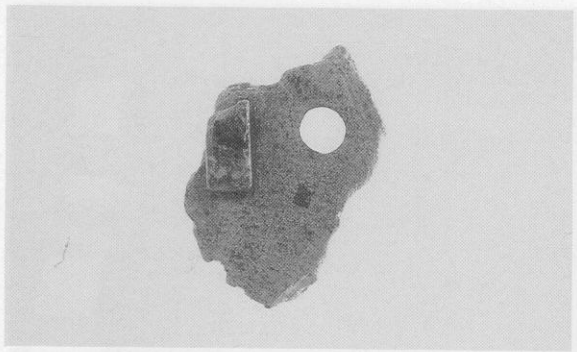

83-11

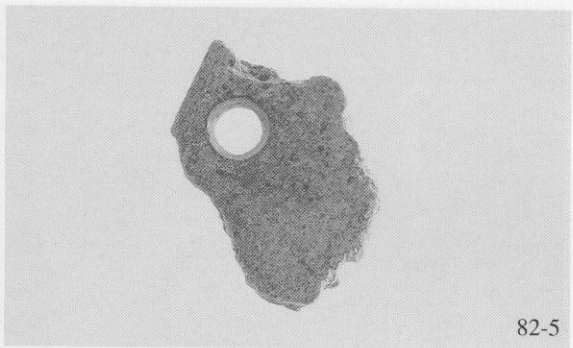

83-9


83-13

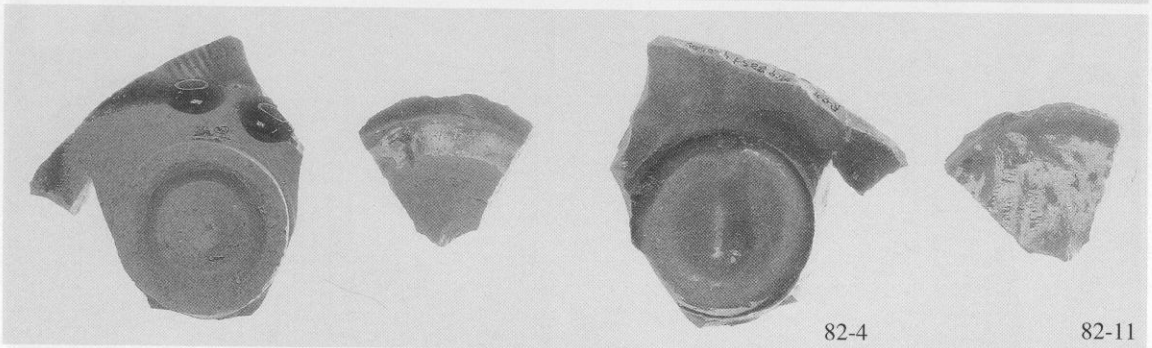

83-14

19SK020・048出土土器





82-5



82-4

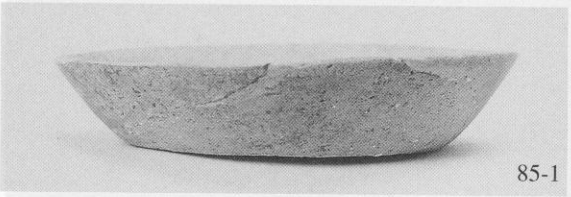
82-11



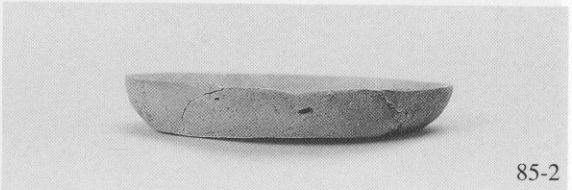
84-1



84-3



85-1



85-2



85-3

19SK001・011・19SX054・暗茶色土出土土器

Pla.64



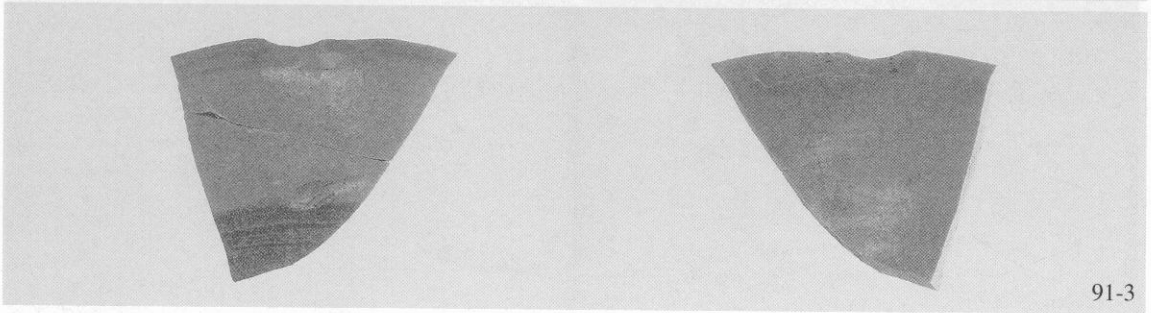
第20次調査北半部全景（空中写真・上が西）



第20次調査南半部全景（空中写真・上が南）


90-1


91-2


91-3

第20次調査出土土器

Pla.66



国分瓦窯跡調査区全景（北から）



国分瓦窯跡調査区全景（西から）



SX001全景（北から）



SX001燃焼部（北から）

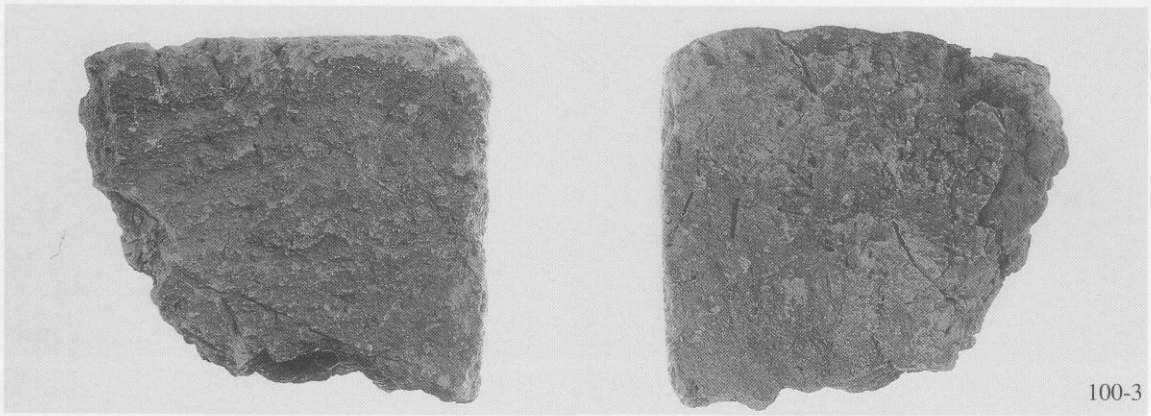
Pla.68

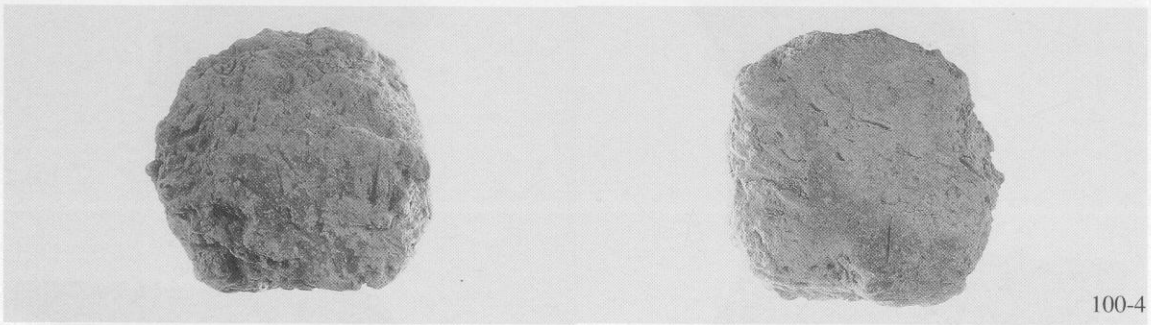


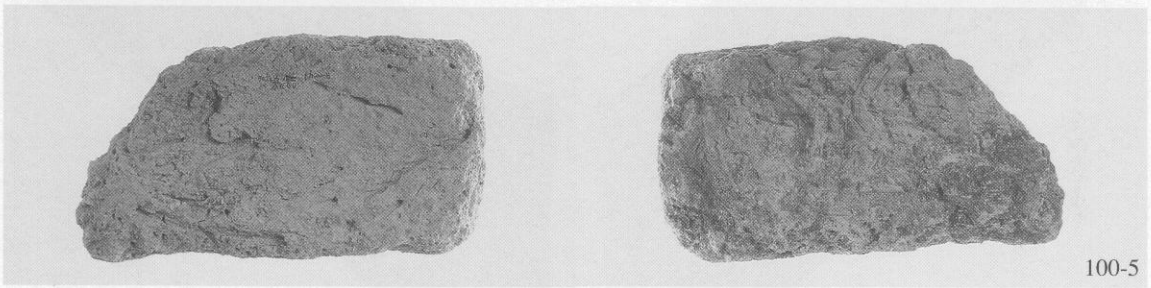
SX001燃焼部（西から）

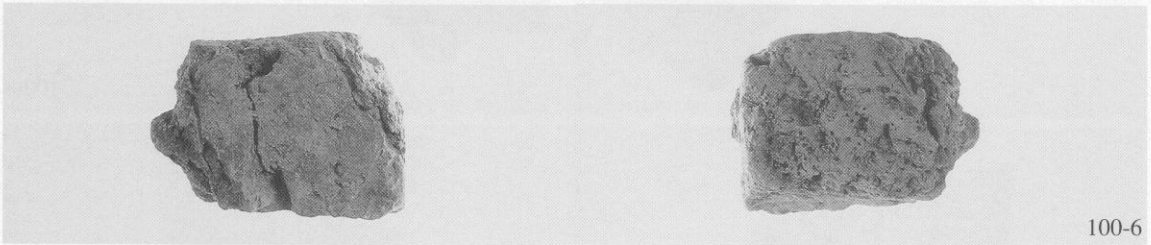


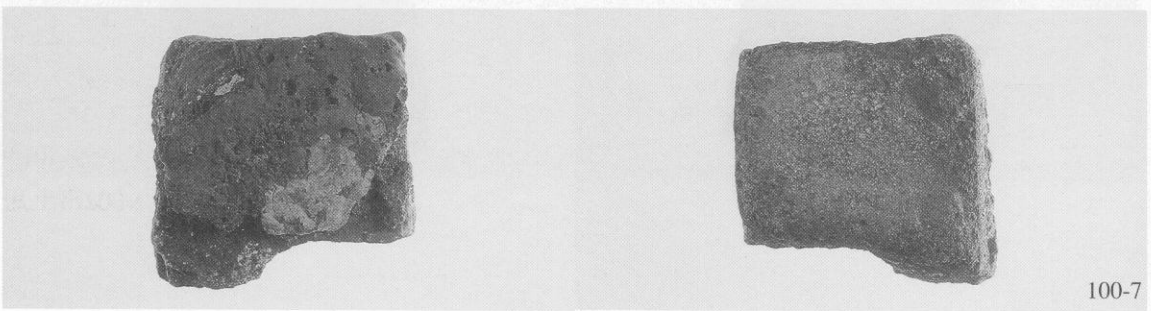
SX002前庭部瓦溜り（東から）


100-3


100-4


100-5

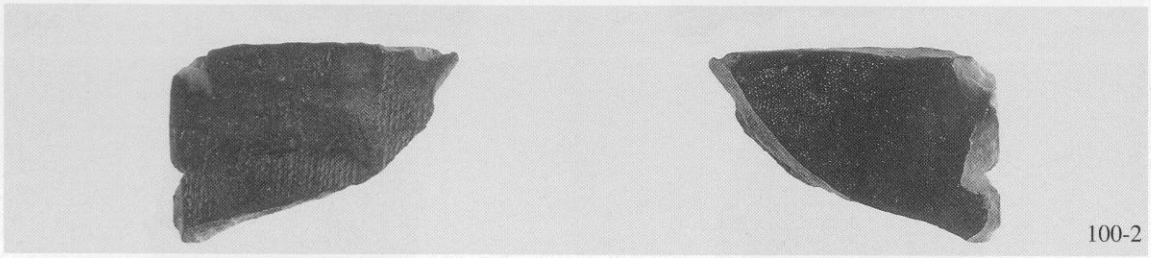

100-6

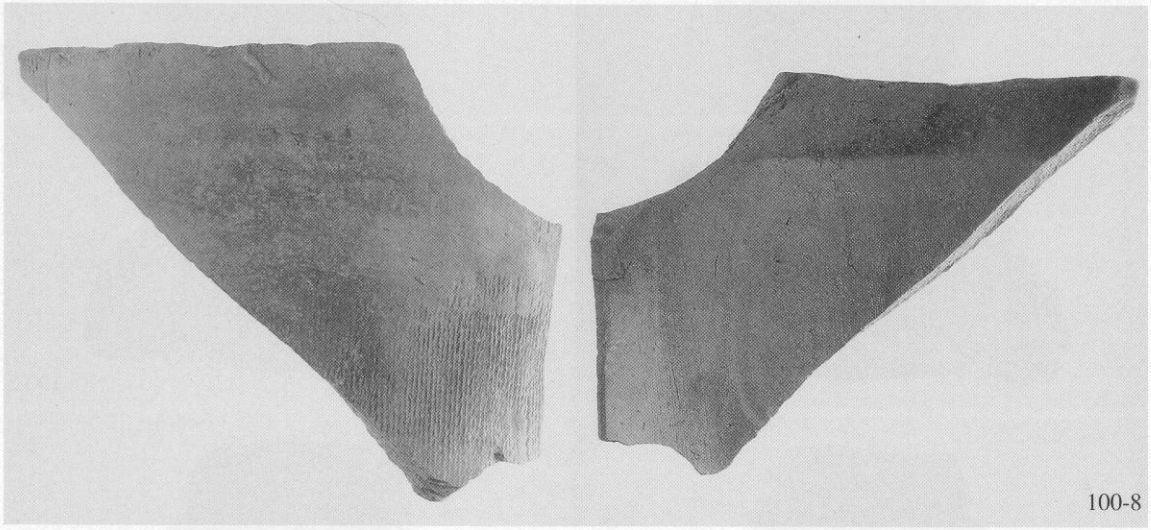

100-7

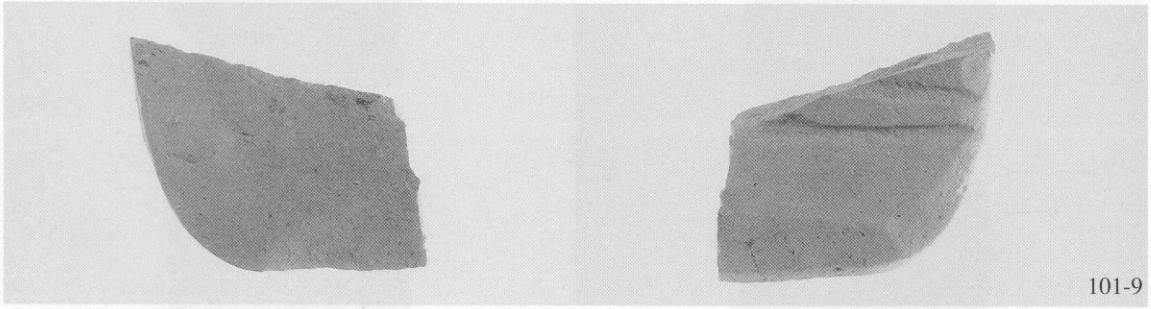
SX001出土窯体煉瓦

Pla.70

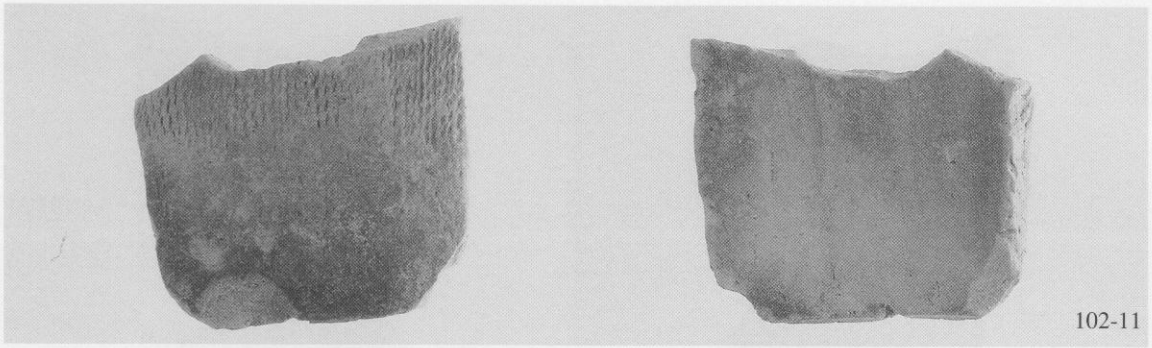

100-1

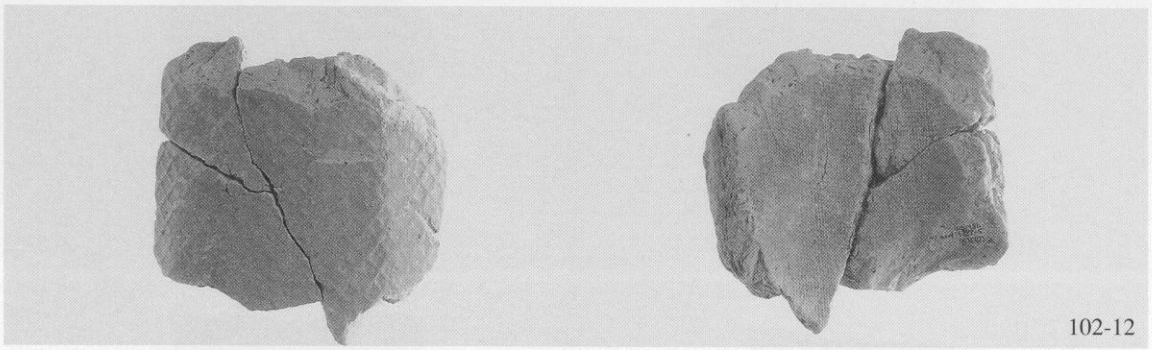

100-2

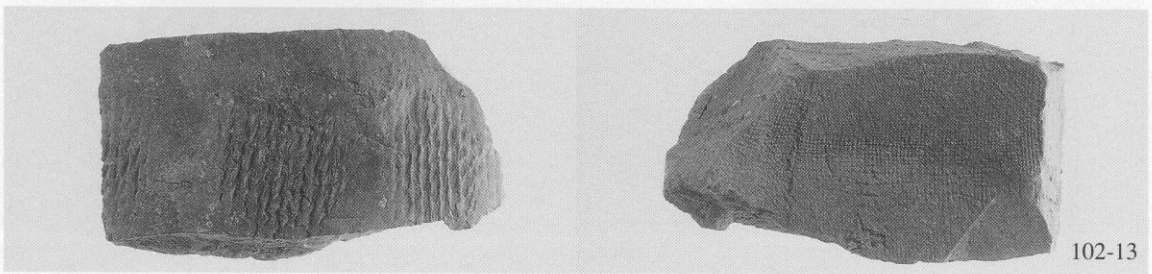

100-8

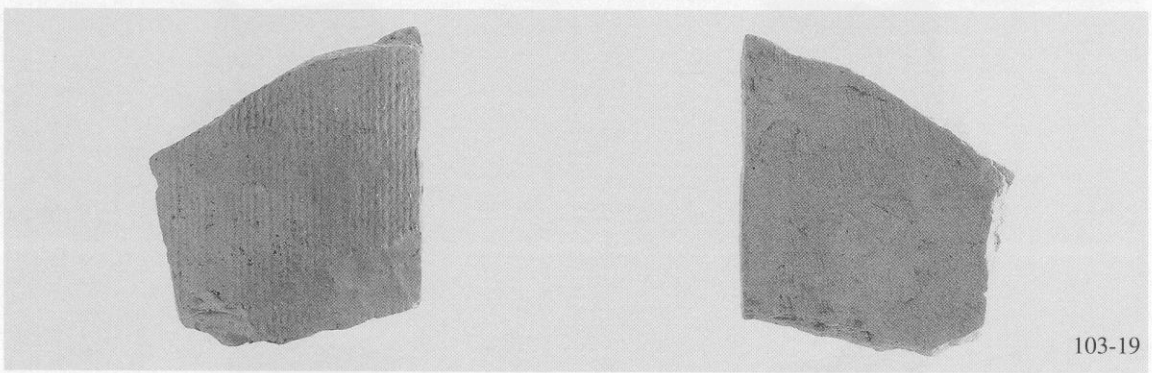

101-9

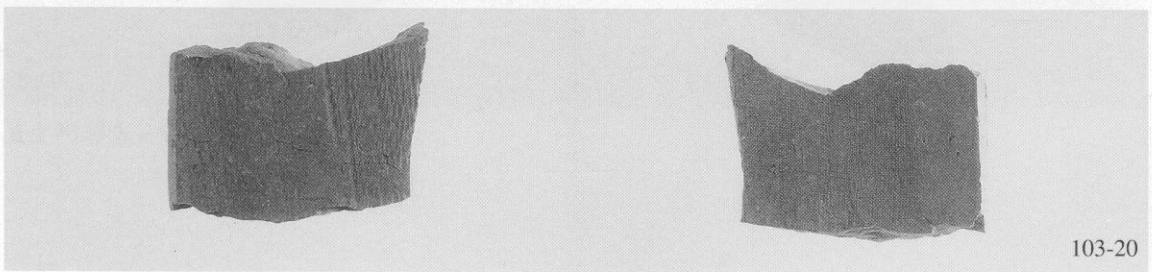
SX001・002出土瓦





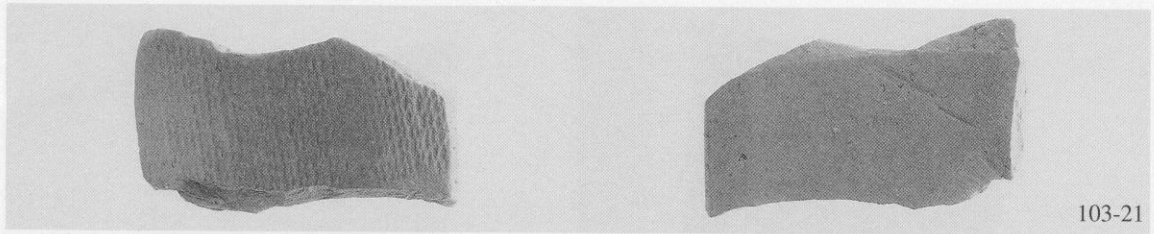


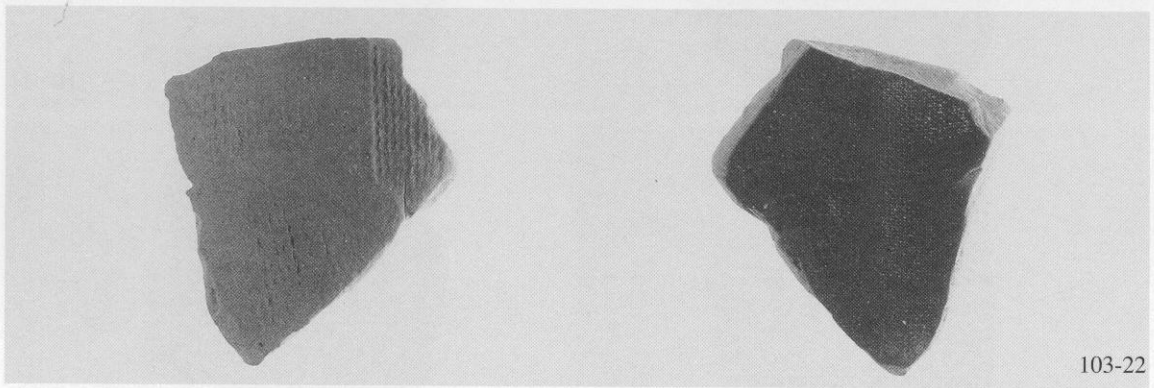


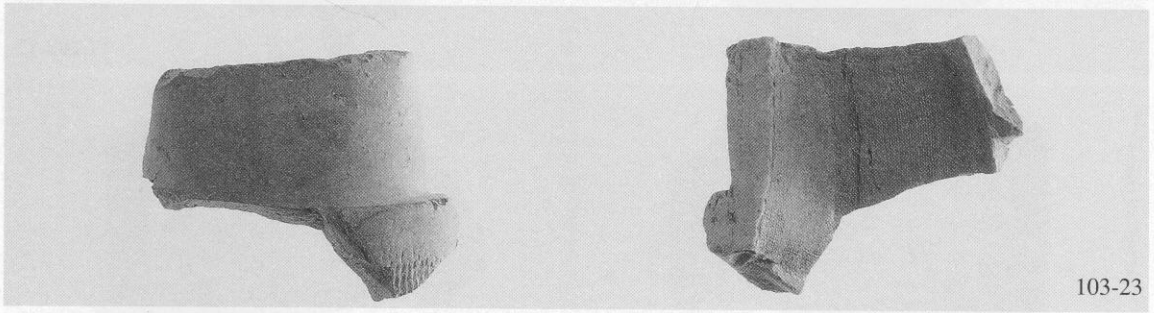


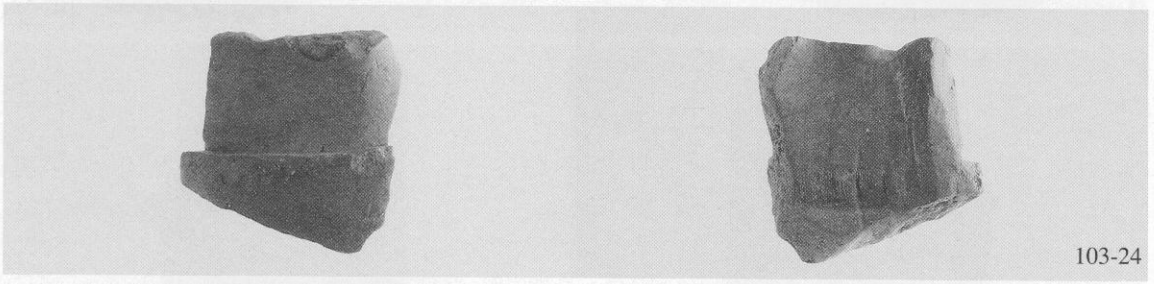
SX002覆土・青灰色粗砂層出土瓦

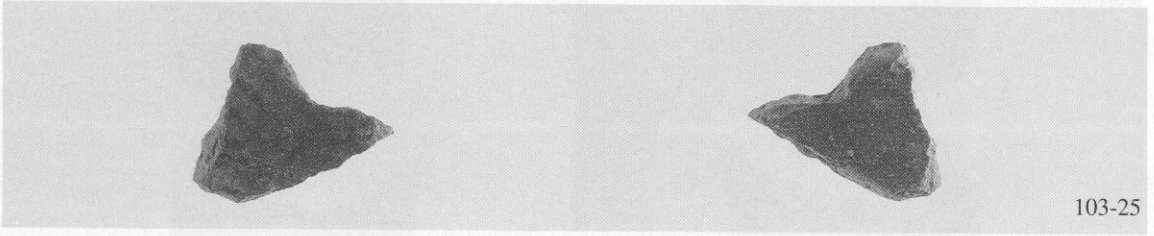
Pla.72


103-21

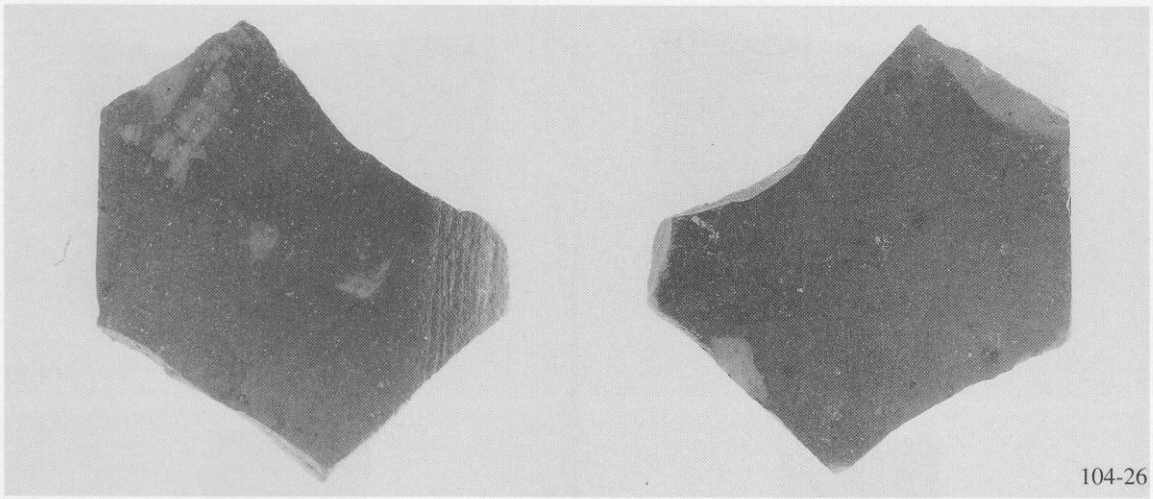

103-22


103-23

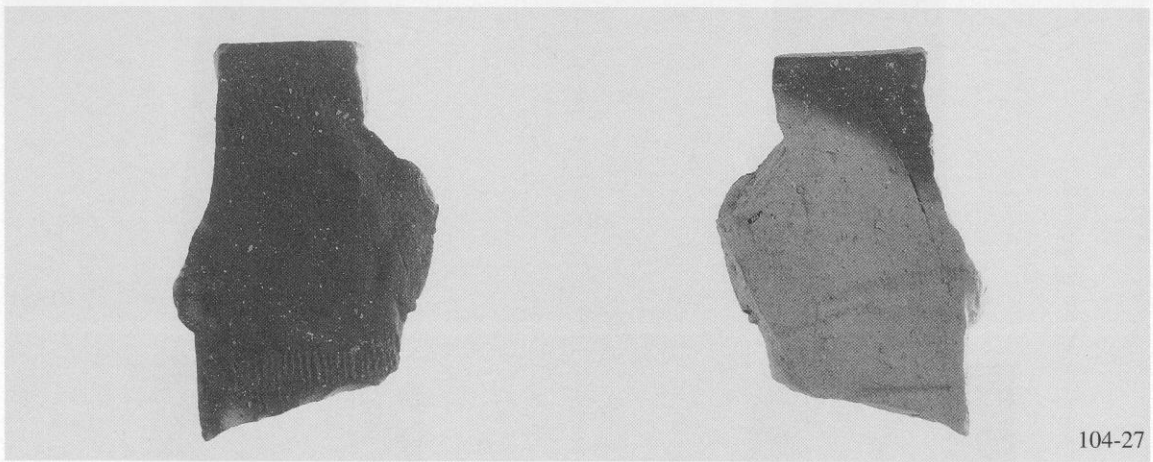

103-24


103-25

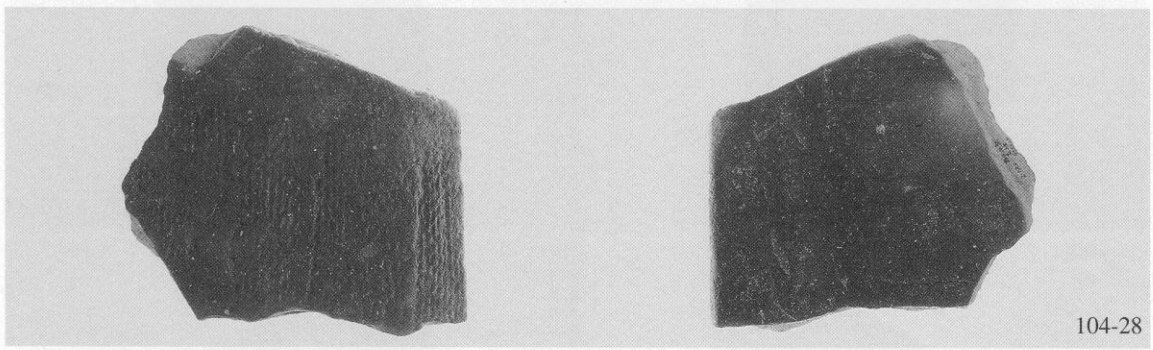
青灰色粗砂層・表採出土瓦



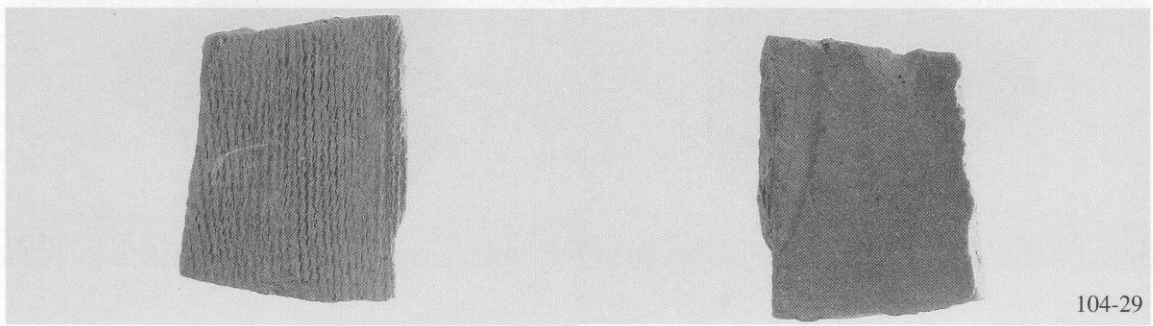
104-26



104-27



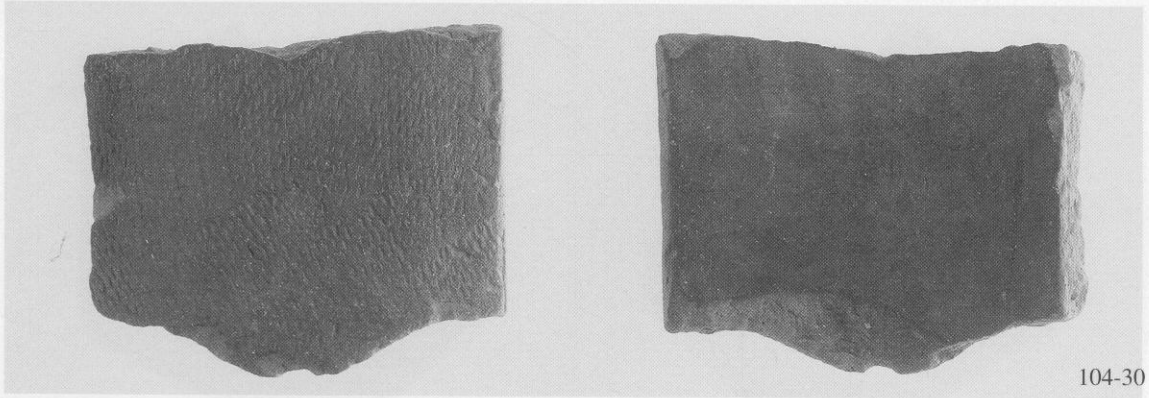
104-28



104-29

表採出土瓦

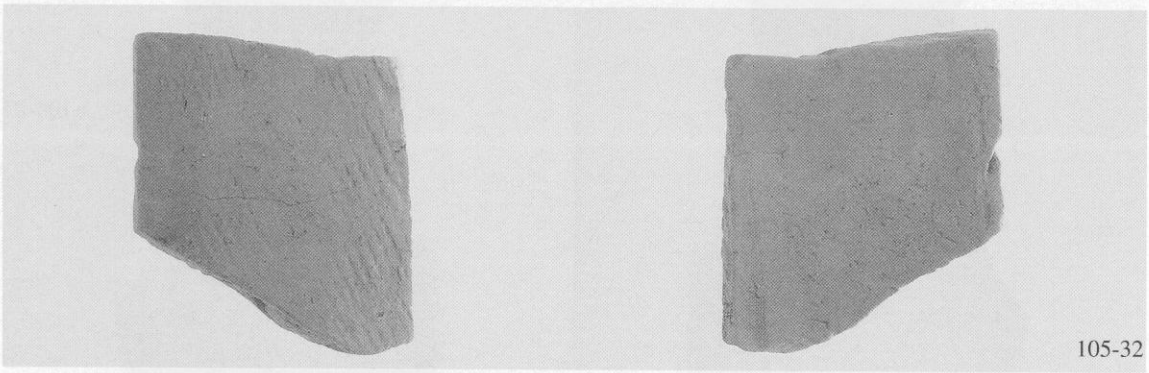
Pla.74



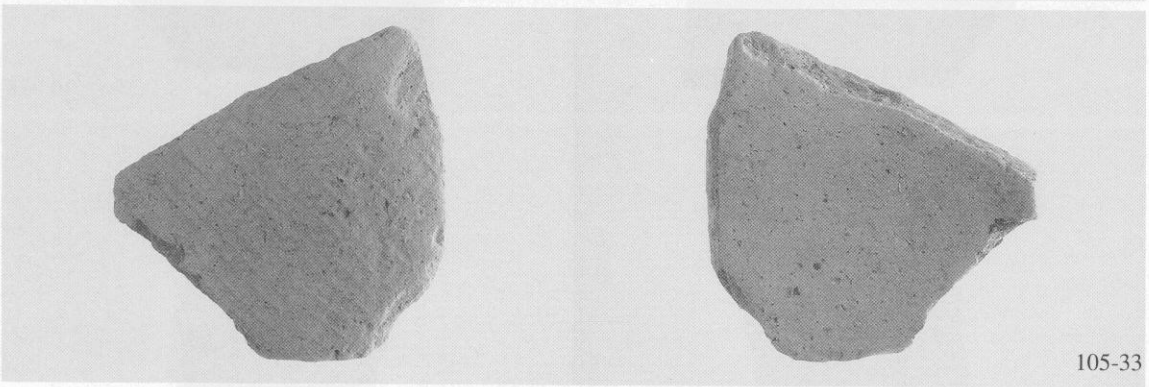
104-30



105-31

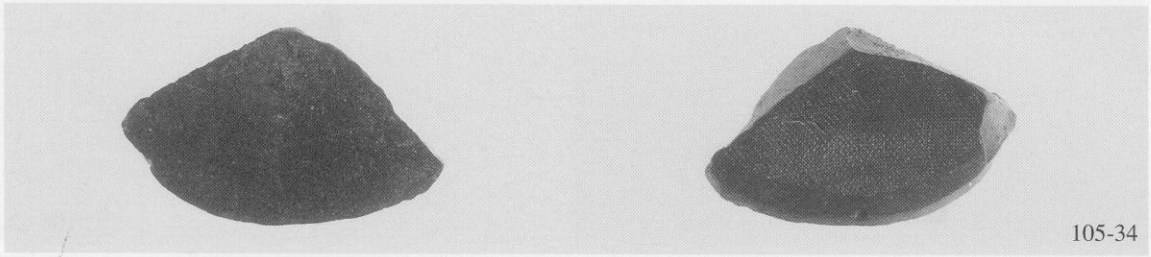


105-32

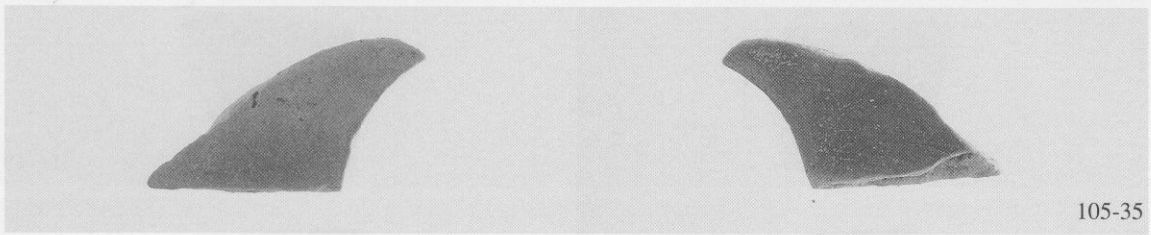


105-33

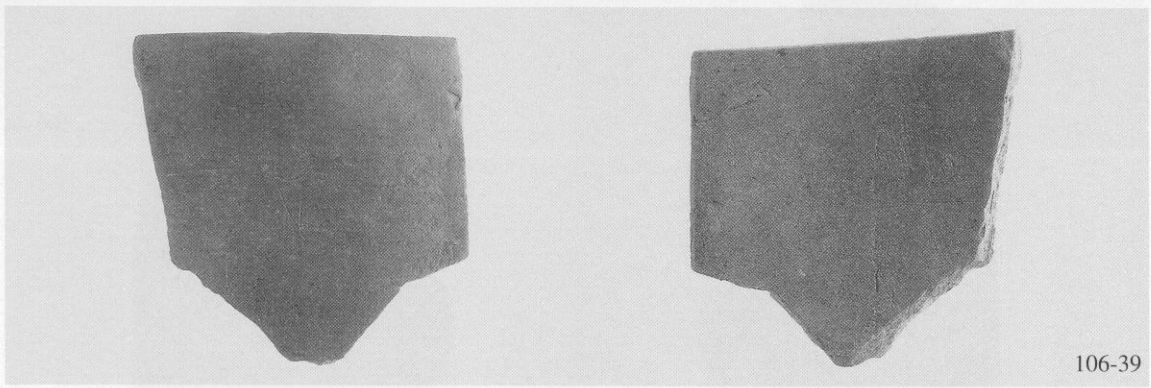
表採出土瓦



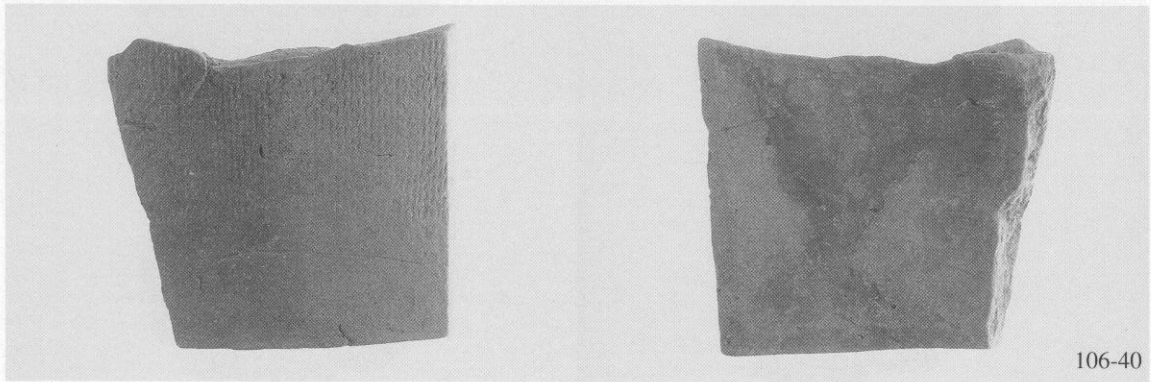
105-34



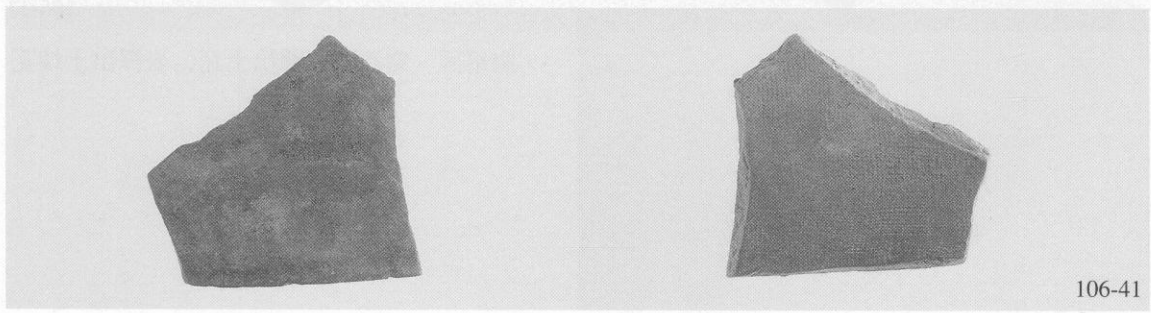
105-35



106-39



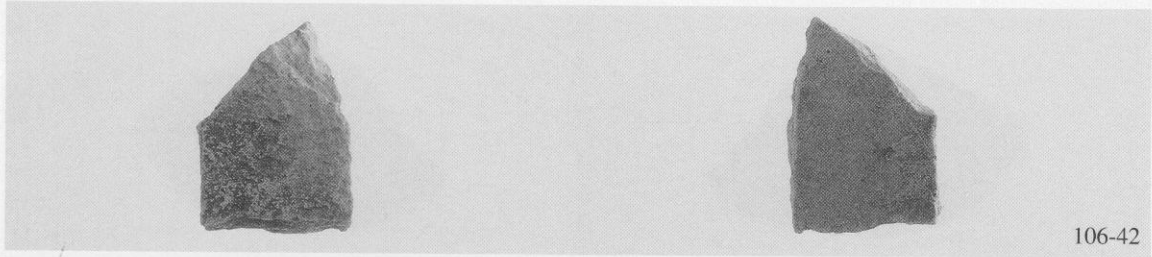
106-40

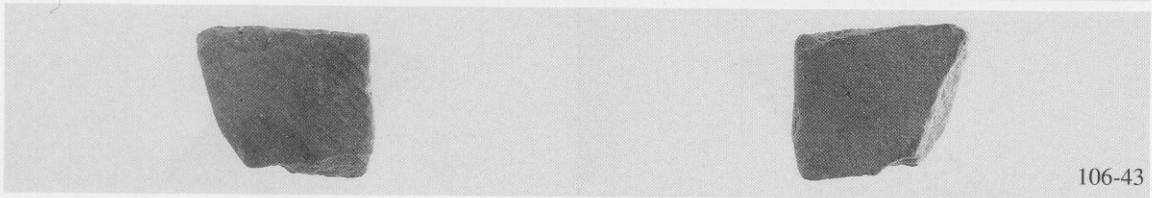


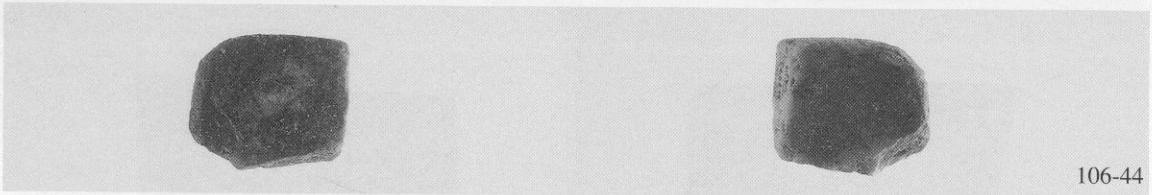
106-41

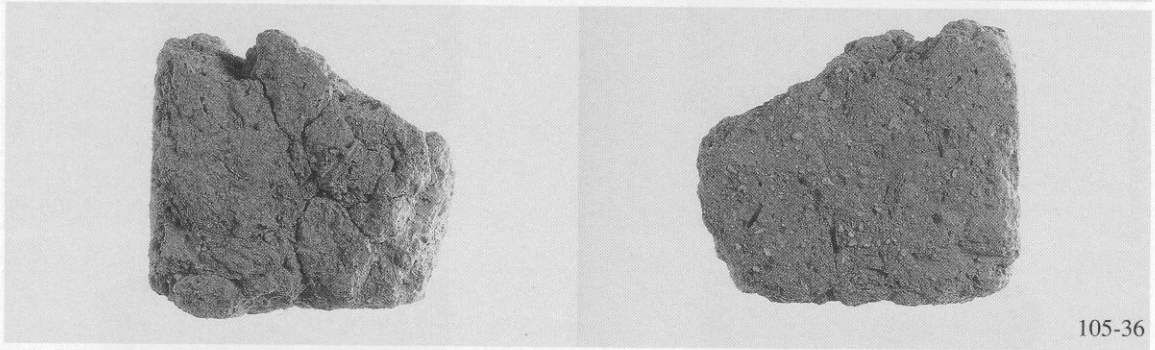
表採・窯東区出土瓦

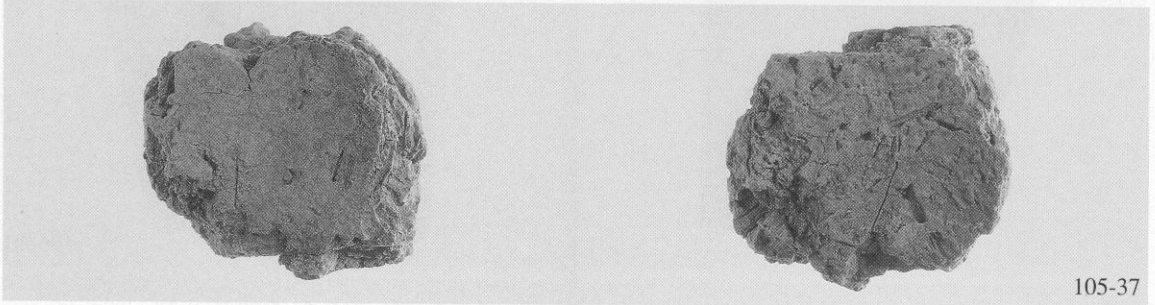
Pla.76


106-42

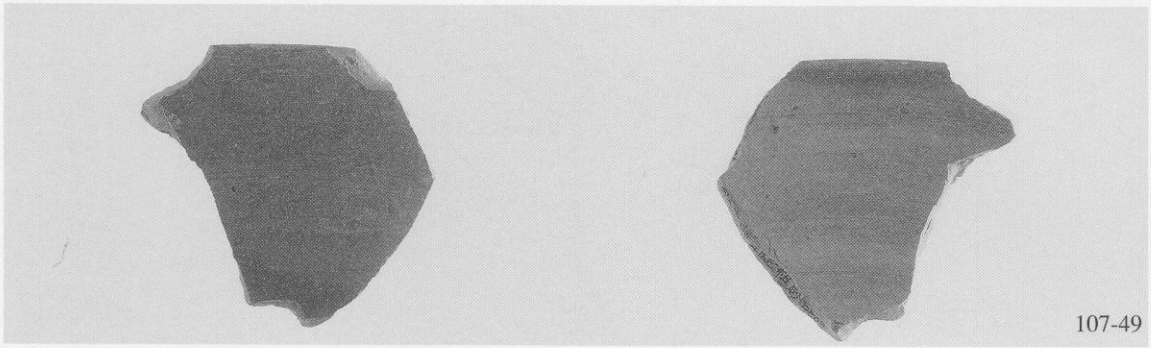

106-43

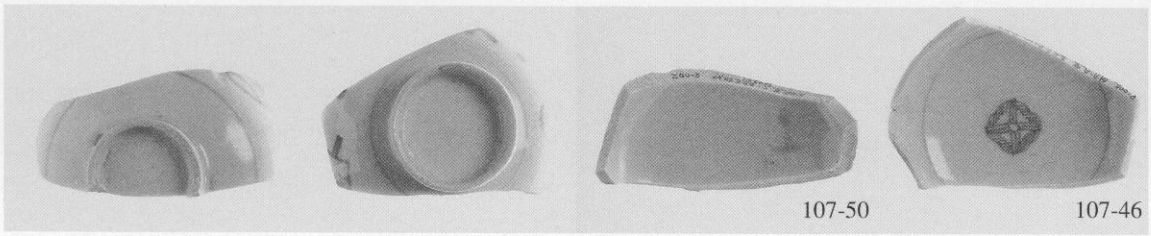

106-44

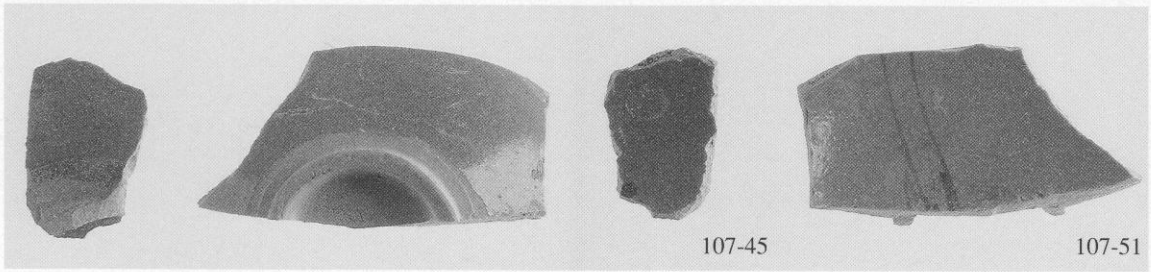

105-36

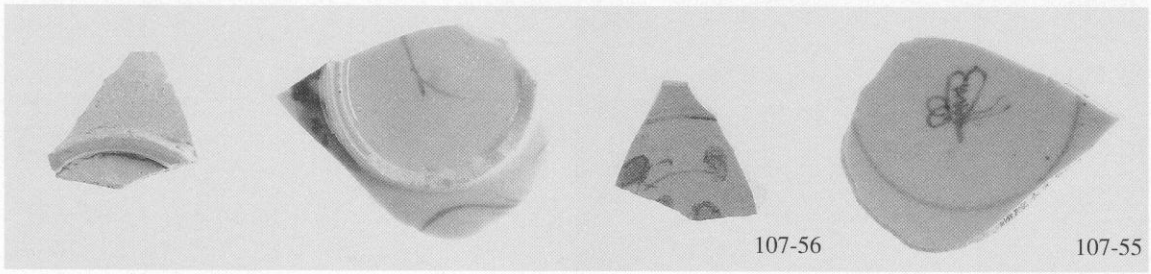

105-37

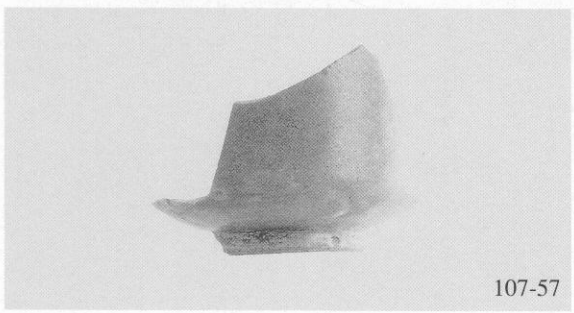
窯東区・窯西区表採出土瓦、表採出土煉瓦

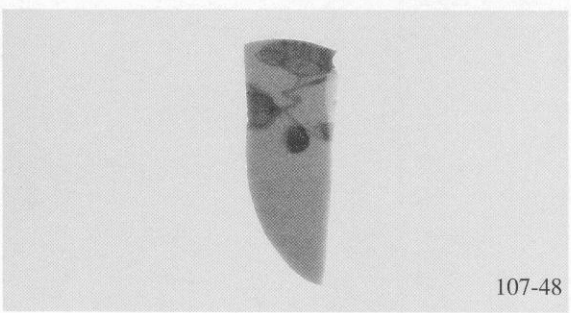

107-49


107-50 107-46


107-45 107-51


107-56 107-55


107-57


107-48

国分瓦窯跡出土土器・陶磁器

付編、筑前国分寺七重塔復原模型の製作

1、はじめに

この塔の模型は、太宰府市文化ふれあい館（太宰府市国分四丁目所在／平成8年4月27日開館）のシンボルとして建立されることとなった。シンボルの選択にあたっては文化課サイドから、館の立地が筑前国分寺に近接していること、九州管内に奈良時代のの建造物が残存していないことから学習の教材としても活用できることなどの観点から提案がなされ、協議の結果その規模は1／10とすることで決定した。決定後、その建立位置について協議がなされ、本館の高さが建築基準法によって12m以下に規制されており、1階の天井高を最大でも4m程度にしかできないことから、屋外に建立することとなった。さらにその位置は、館内のサービスホールから見えるように配慮したために、本館南側に隣接して建立されることとなった。その地点は庭園的機能を配慮した部分であるところから、塔のみを建設するのではなく、伽藍配置を盛り土によって復原し、その中に塔を位置づけることにした。

こうして屋外に展示することとなった訳であるが、復原模型の材質については未決定であった。そこで木造、石造、FRP（Fibre glass Reinforced Plastic／ガラス繊維強化プラスチック）の三者から選択するとして費用面、耐久面、管理面などから検討を行った。まず木造の場合、外観から内部の組み上げまで完全に復原できることで極めて魅力的であったが、費用面でかなりの高額になることが揚げられ、また屋外に展示した例がないことから、腐食による耐久面でやや不安な点が指摘された。なお、木造の例として大分市歴史博物館の豊後国分寺七重塔模型（1／10）が知られるが、館内に展示されている。次に石造の場合、費用面では次のFRPと大差なく、木造と比べて半分強の費用負担で完成するとともに、石という性質上耐久性では他に勝るものがない。しかし日本の木造塔婆で最も魅力的とも言える建築部材の表現が、各部にわたってかなり省略しなければならない点が指摘された。なお石造の例として讃岐国分寺跡に復原されている七重塔模型（1／10）が知られ、屋外展示が行われている。最後にFRPであるが、材質の耐久面は特に心配なく、費用面も石造並である。縮尺にもよるが細部の表現もかなりのレベルまで可能であり、彩色も自由に出来る点で今回はFRPで製作することに決定した。FRPでの屋外展示の例は東武ワールドに薬師寺、法隆寺をはじめとした様々な模型（ほとんどが1／25程度）が展示されており、短い期間ながらも一応の実績がある。この展示の視察で注意されたのはその彩色と退色である。東武ワールドにおいて薬師寺東西両塔の復原模型を比較した場合、その退色の度合いが西塔模型で大きく、東塔模型ではほとんど感じられなかった。これは西塔模型では柱を朱色に塗装するが、東塔模型では古色に仕上げられていたことによると判断された。朱色の退色が著しかったのである。このことを参考にして今回の復元模型製作にあたっては、外観を古色仕上げにし、創建段階の塔が今日まで遺っていたらこのような風景になったのではないかという観点で彩色を行うことで内部合意が得られた。なお、建設に際してFRP

特有の課題がいくつか指摘されたが、後章の中で述べることとする。

製作は、本館建設を請け負ったJV（佐藤工業・ナガタ建設・大森工務店）のもと株式会社トータルメディア開発研究所及び株式会社トリアド工房が実施した。作業にあたって細見啓三氏（一級建築士事務所「歴史建築舎」主宰）にはすべてにわたる監修をお願いした。記して感謝するものである。

（模型製作関係者一覧）

監修		細見啓三
製作	総括指揮	高橋　裕
	技術指導	中村　博
	営業推進	岩瀬俊明
	チーフプロデューサー	山口廣喜
	プロデューサー	高橋伸幸
	製作管理	加藤祐三・小林健樹
	製作チーフ	小酒井　貢
	製作副チーフ	桜井義文
	原型製作	藤田　聖・井口比左志・岡本　智・永島幸典
		広田恵介・並木祐二
	雌型製作	川田　隆・西野岳史
	樹脂型抜	曾根優子・後藤郁子・青木裕之・坂田由紀子
		廣瀬健一郎・八木真由美
	彩　色	町田圭子・筒井佳子・石橋　剣・松本弥生・倉橋浩二
	組立取付	藤江　毅・江川和良・涌井由多加・吉田嘉雄
		奥田晋司・坂江雄二・小野寺典子・安田圭司
		加藤憲治・黒木弘海・池田佳邦
太宰府市担当者		山野克弘・原口信行（建設課）
		狭川真一（文化課）

2、七重塔の設計

まず作業工程の第一として、設計図の作成を行わなければならない。筑前国分寺の場合、これまで復原案が出されたことがなく、また現存する七重塔も全くないことから、昭和　年豊後国分寺七重塔模型製作に使用された図面を参考にさせていただくこととし、大分市歴史博物館にその旨を依頼した。その結果、実際の設計者である細見啓三氏をご紹介いただき、図面の使用及び今回の設計に対してもご指導いただけることとなった。

さて作図にあたって豊後国分寺と筑前国分寺を比較すると、現存する遺構で最も大きく異な

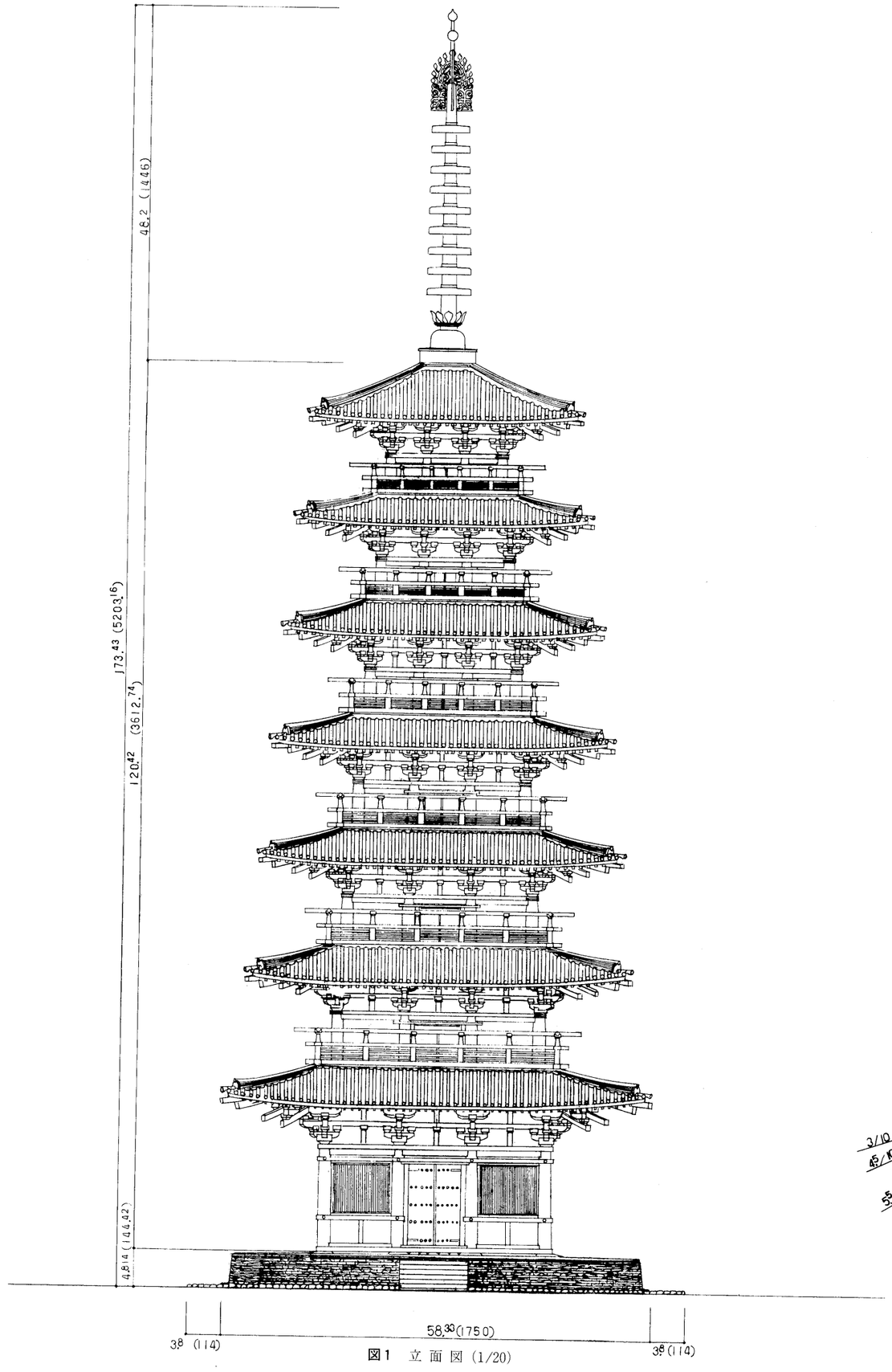


図1　立面図 (1/20)

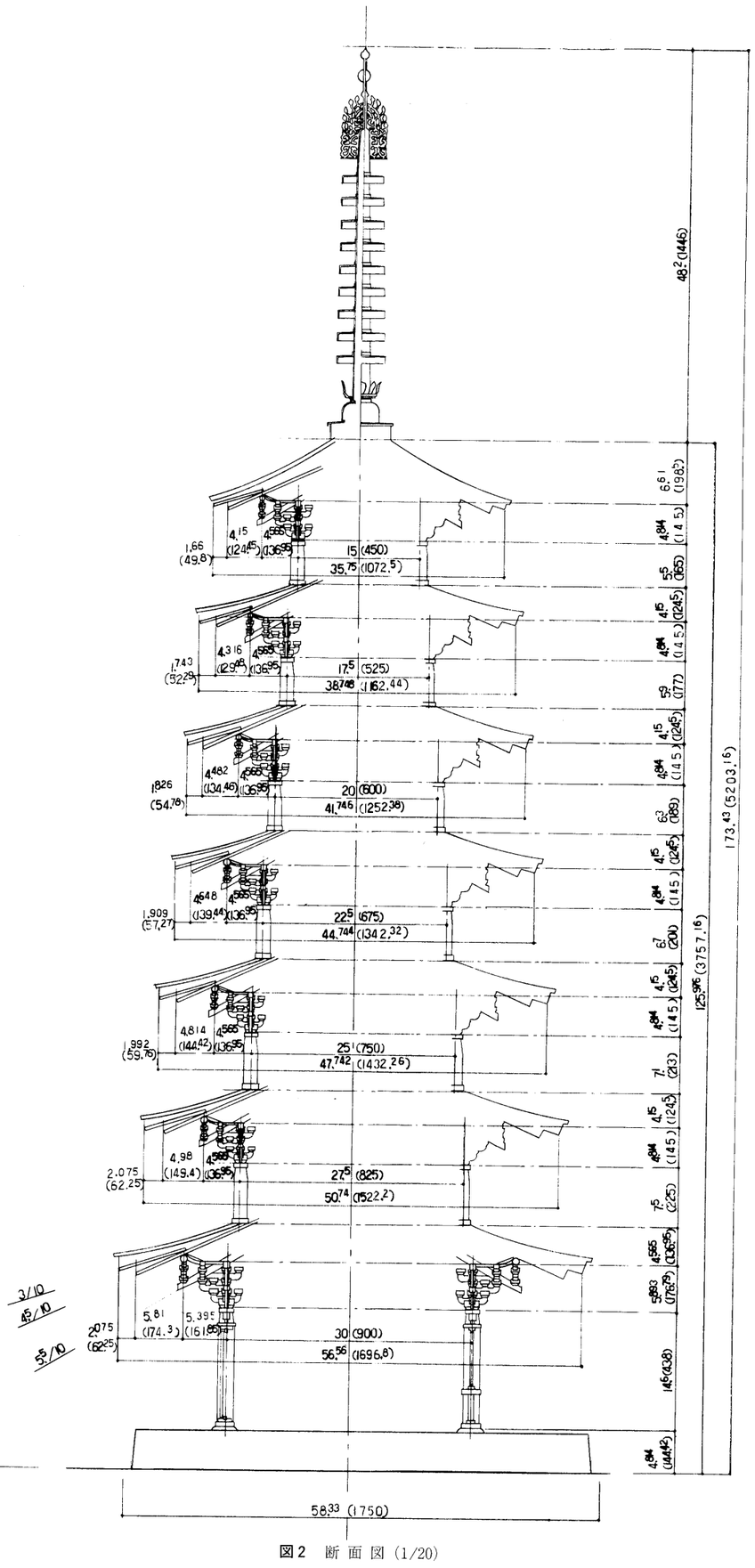


図2　断面図 (1/20)

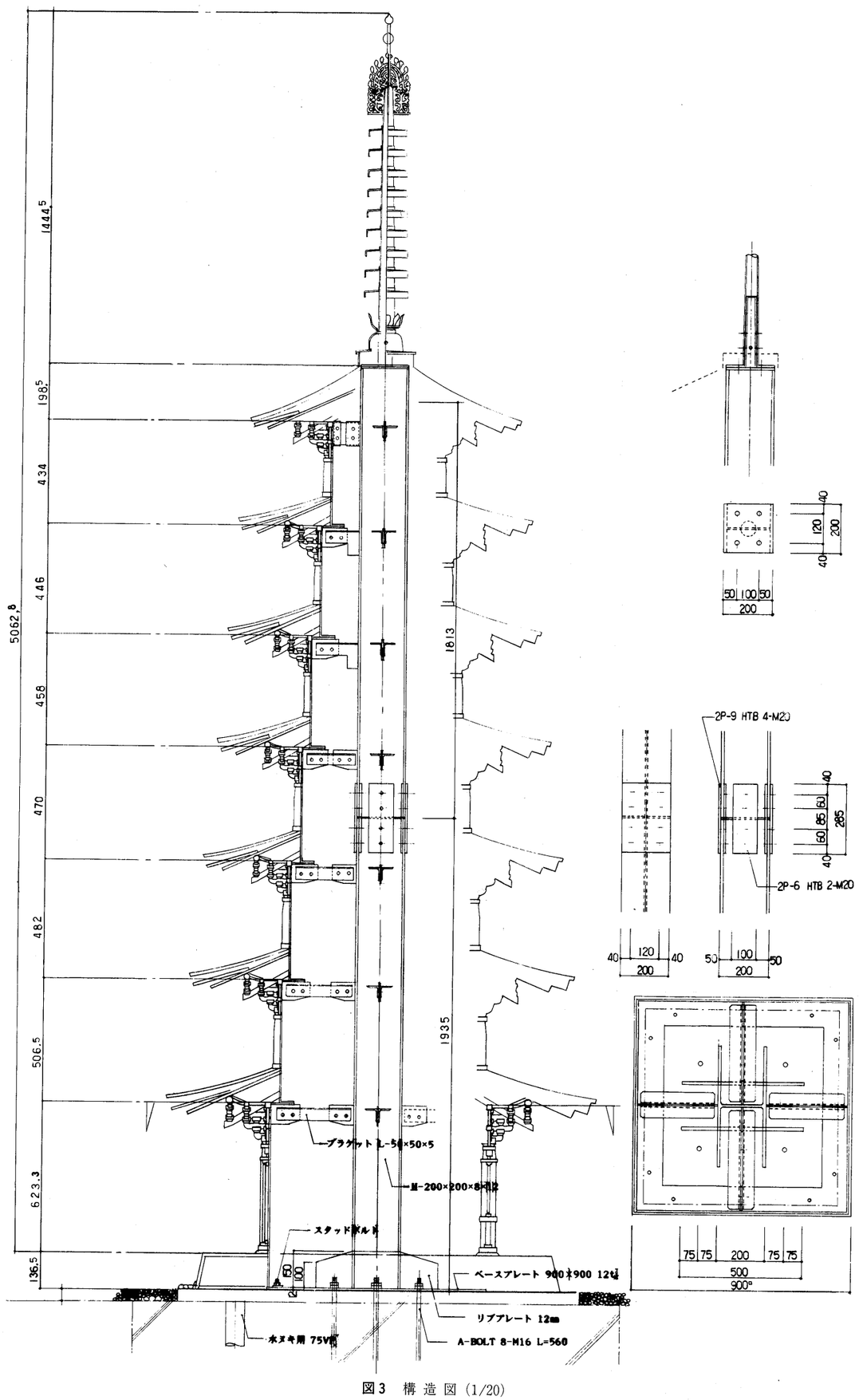


図3　構 造 図 (1/20)

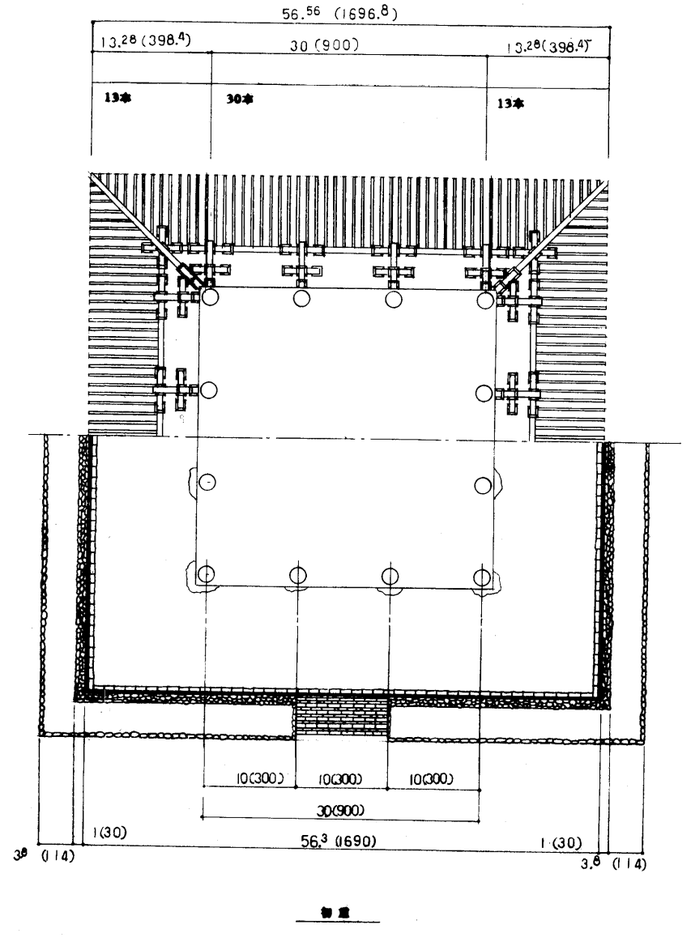
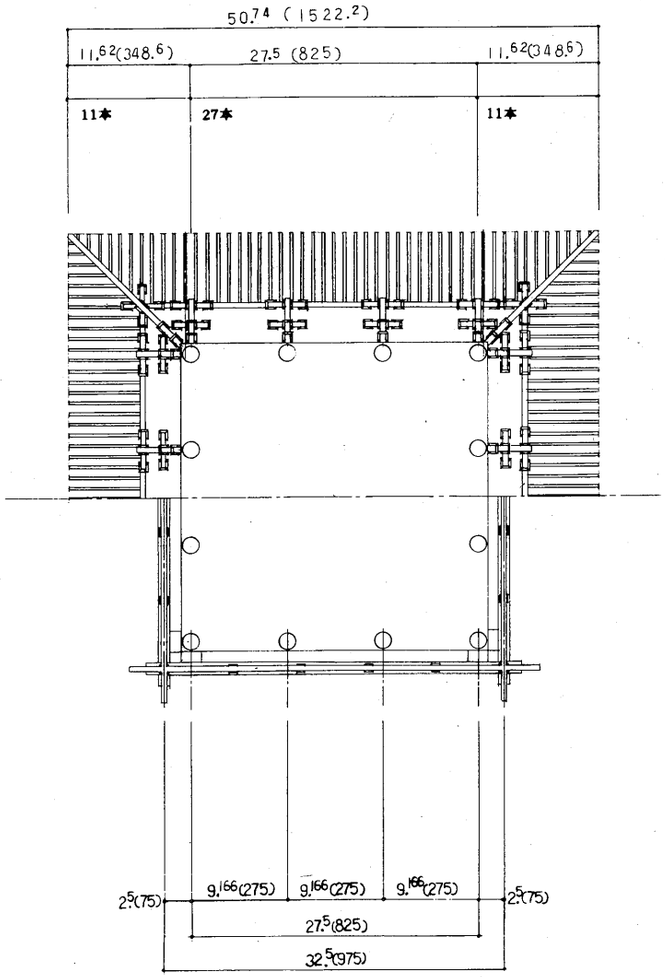
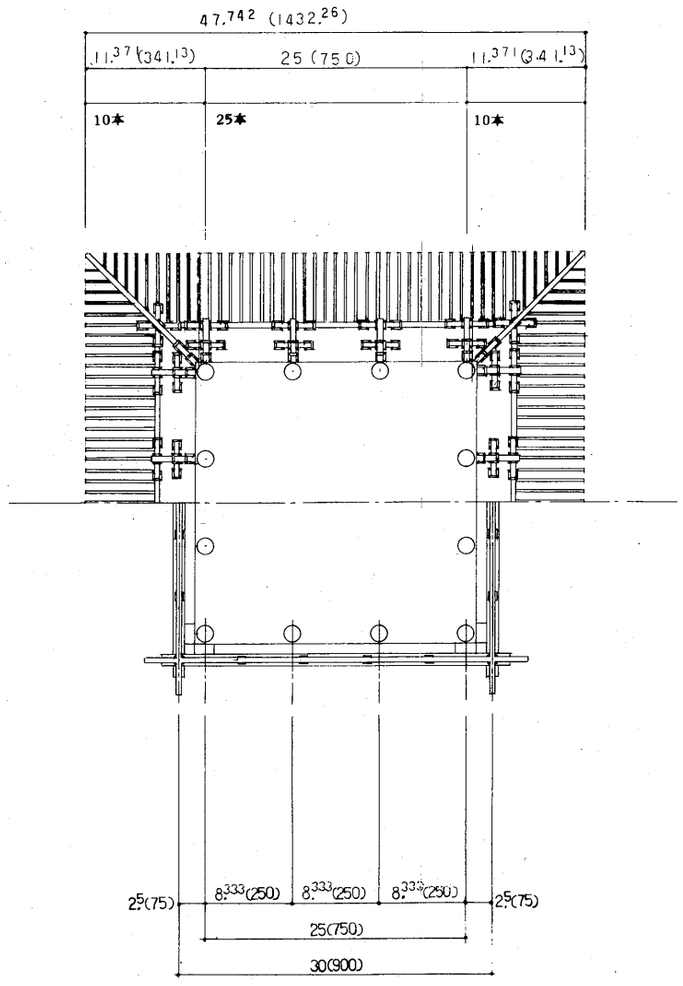


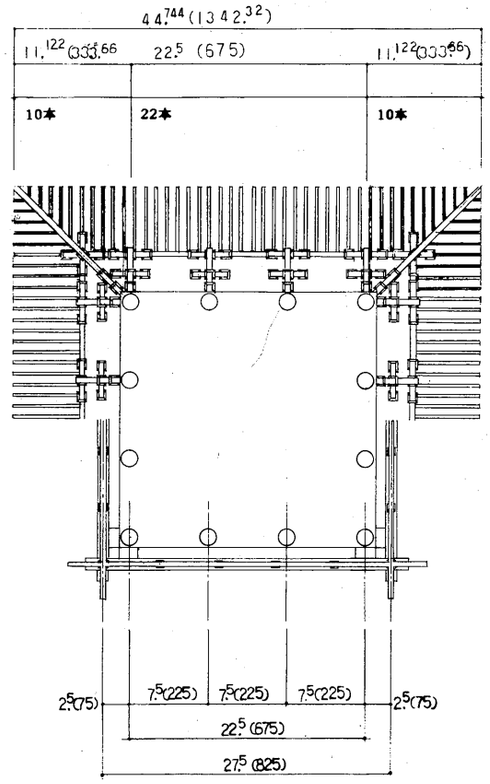
図4　初重見上図・平面図 (1/20)



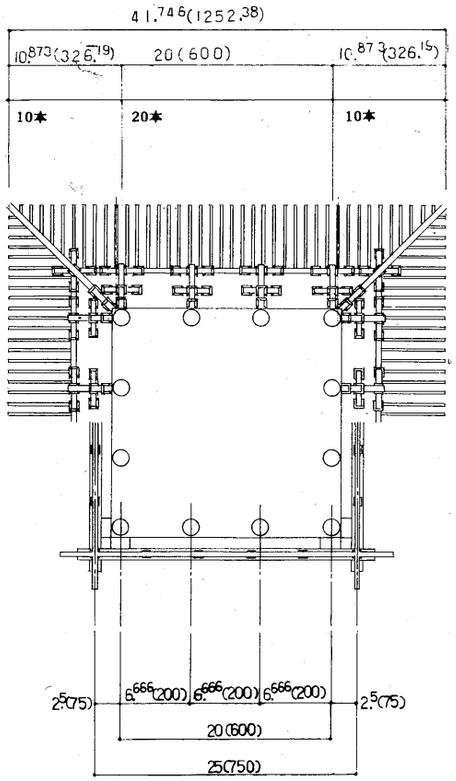
二重



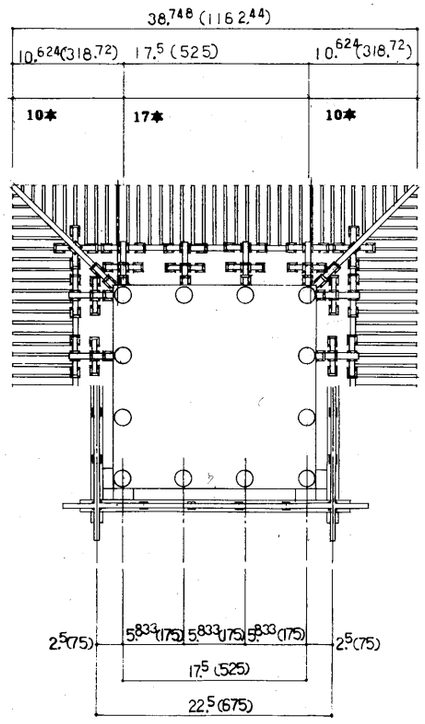
三重



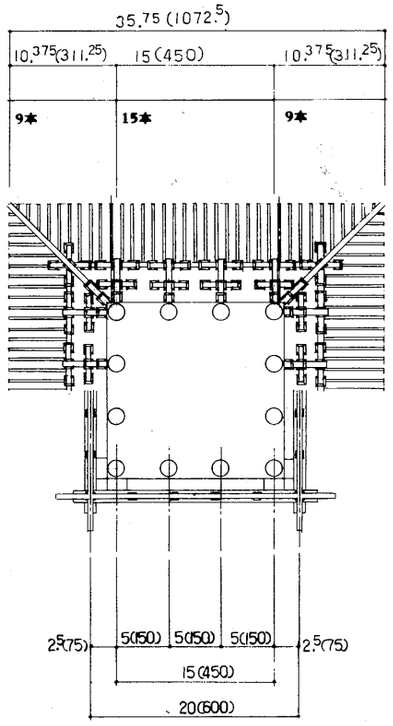
四重



五重



六重



七重

図5　二重～七重見上図・平面図（1/20）

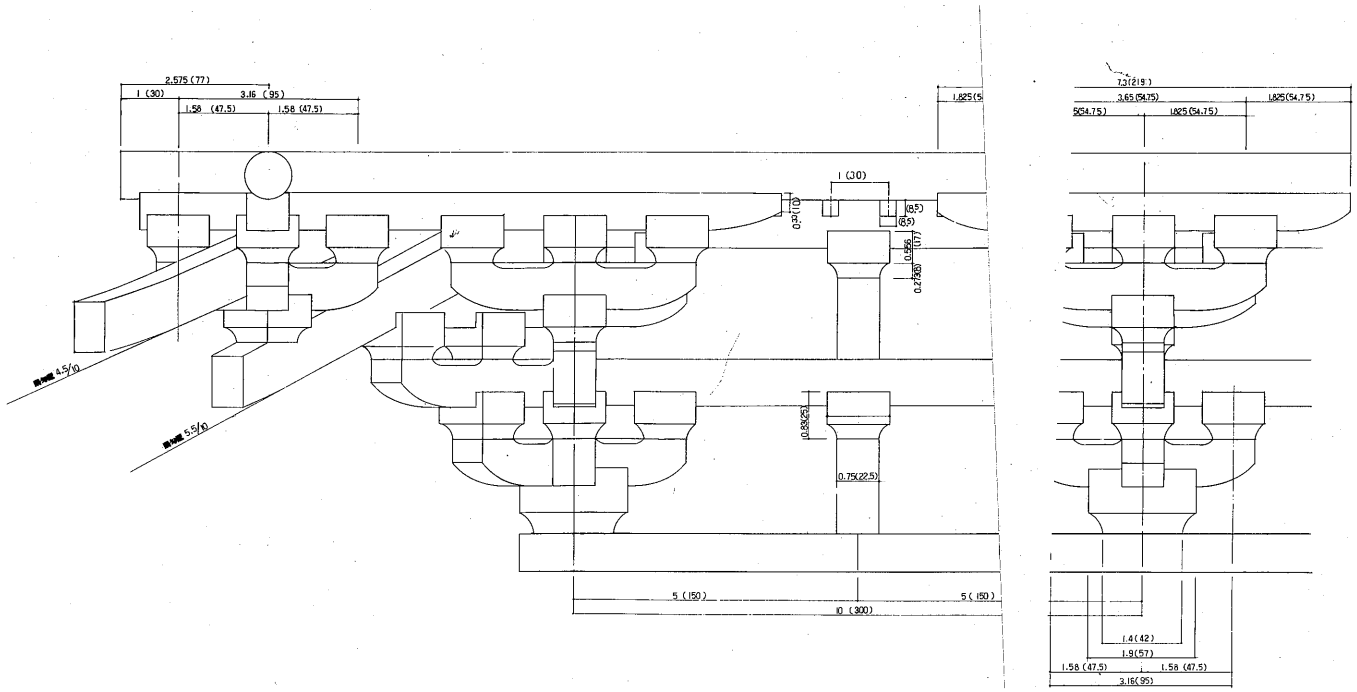


図6　初重組物詳細図 正面図（1/4）

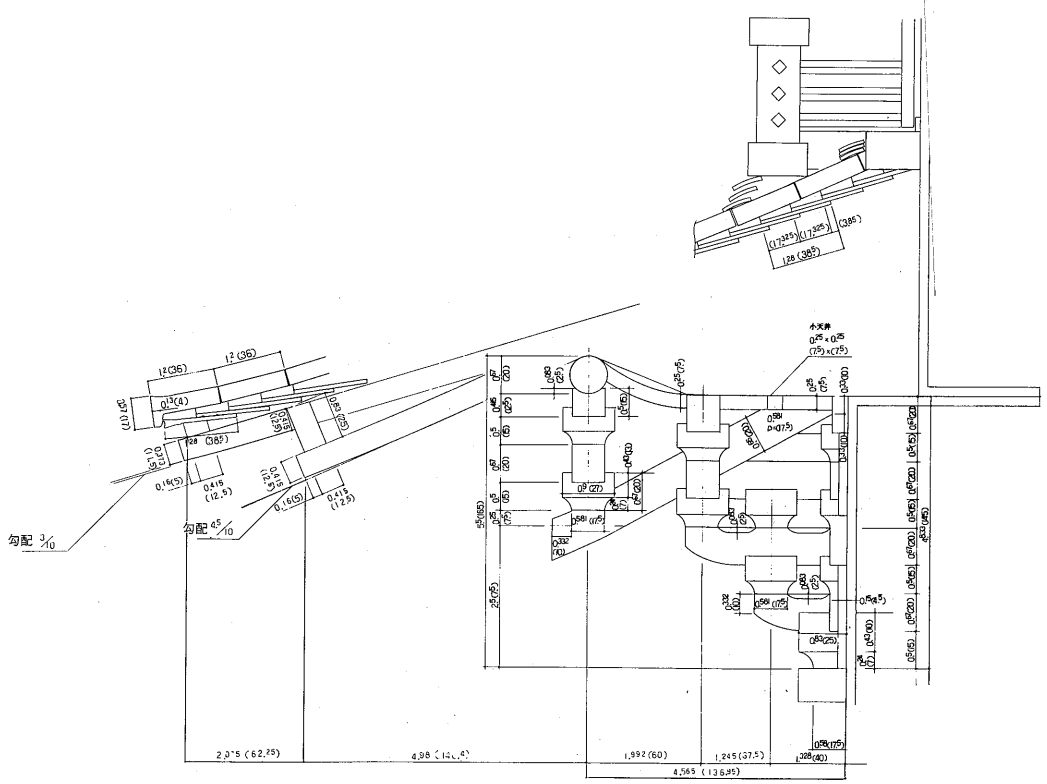


図7　初重組物詳細図 断面図（1/4）

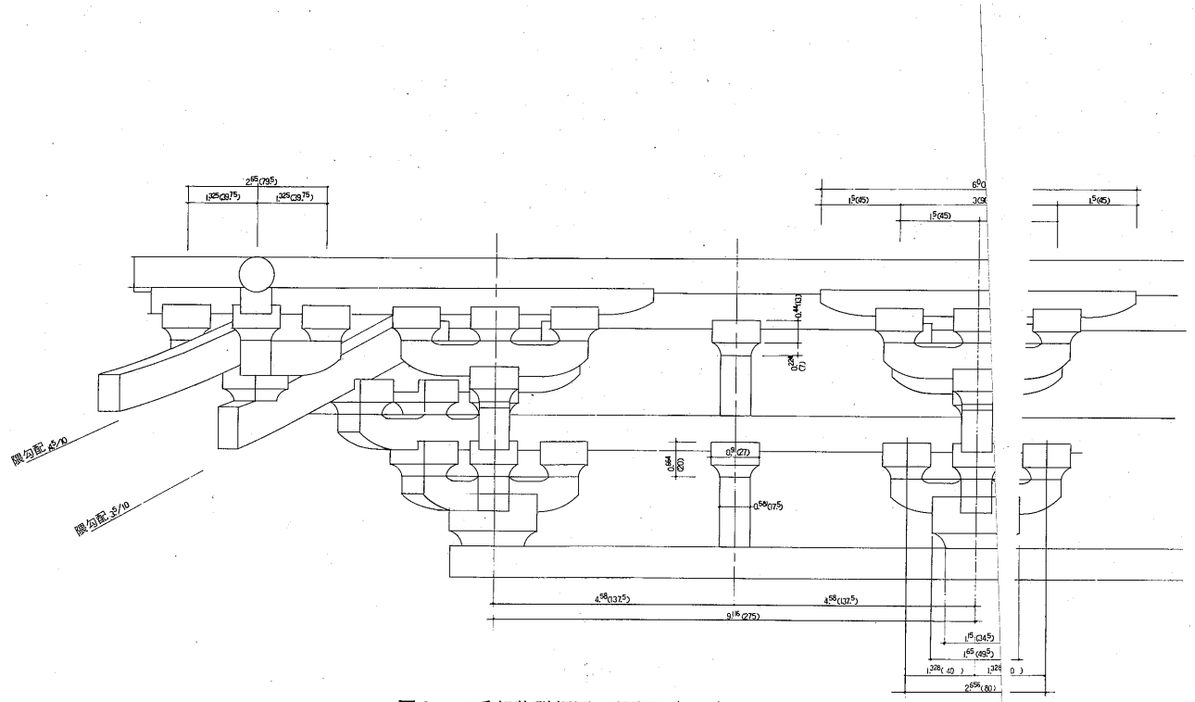


図8　二重組物詳細図 正面図（1/4）

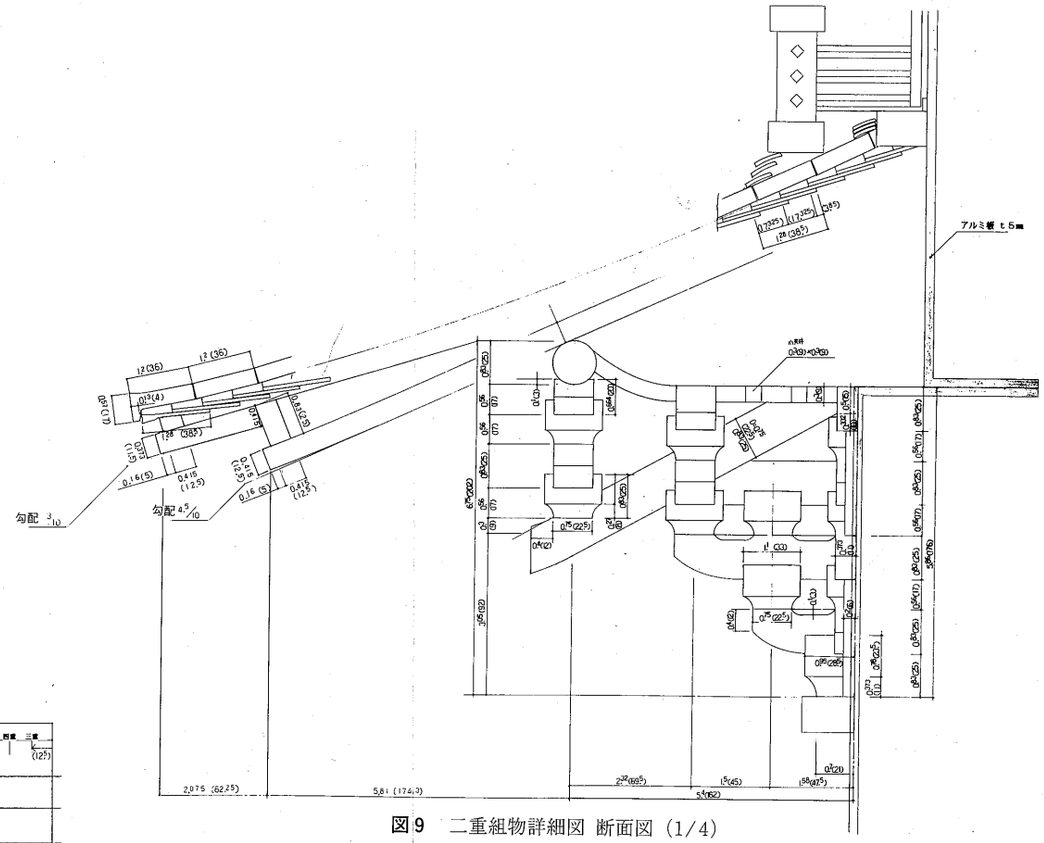


図9　二重組物詳細図 断面図（1/4）

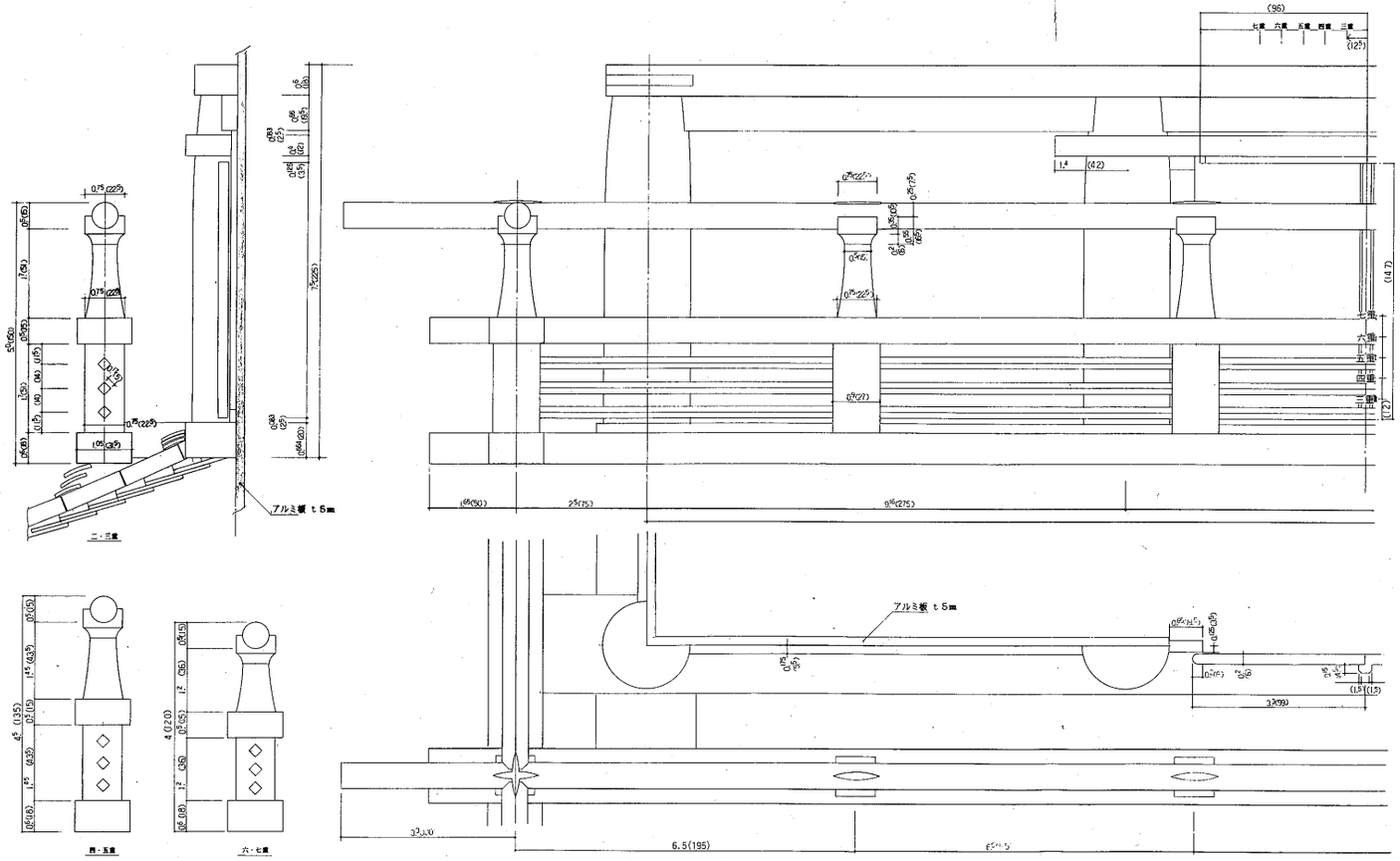


図10　二重軸部詳細図（1/4）

っているところは柱間であった。豊後国分寺の場合は初重の柱間が12尺3間であるのに対して筑前国分寺の場合は10尺3間である。このことを念頭に据え、単純にはいかないものの概ねこの比率（約83％）を参考にして作図を行うこととした。また図は原寸大の塔を製作するのと同様に捉え、本来の規模で図化し、模型化する上で1／10に読み替えた。では設計に関する留意点について、以下に列記する。

（塔全体に関すること）

・設計は尺によって行い、各部分の縮小によって生じる端数は四捨五入して完数にする。

・1尺は300mmとして計算する。

・初重の軒をやや大きく張り出す他は逓減率を一定にする。したがって二重から七重までの軒隅は一直線に並ぶ。

・七重の屋根の勾配は5／10とする。

（柱に関すること）

・初重以外の各層の柱は、豊後国分寺よりさらに5寸ずつ短くする（全体で3尺縮める）。これは豊後国分寺塔を復原設計する際に、『東大寺要録』その他の記事にみられる東大寺七重塔の塔身・相輪の比率を当てはめ全体高を決めたが、1／10模型として視覚的に捉えた時にやや塔身が高く感じられたことによる。

・二重以上の柱間寸法……初重30尺に対し七重は初重の半分の15尺と決め、他の層はこの間を均等に割り振るが、端数は切り上げもしくは切り捨てる。

・各重の垂木割は先ず隅柱心を垂木間隔の中心と会わせることを基本とし、その間は1尺歩みで割り付けた。その結果、初重と七重はこの計画通りきれいに納まったが、それ以外の重では多少のにごりがでることとなった。

・側柱の高さ……二重の柱の高さを7.5尺とし、他は4寸づつ短くする。七重では5.5尺となる。

・初重の柱は、上部1／3から細くする。

（細部組物等に関すること）

・高欄雨じまい……高欄下の隼斗瓦は3段となるよう、高欄の位置を下げる。

・組物部分の設計は初重と二重を作成し、三重以上は二重と同じとする。



写真1　工場検査風景

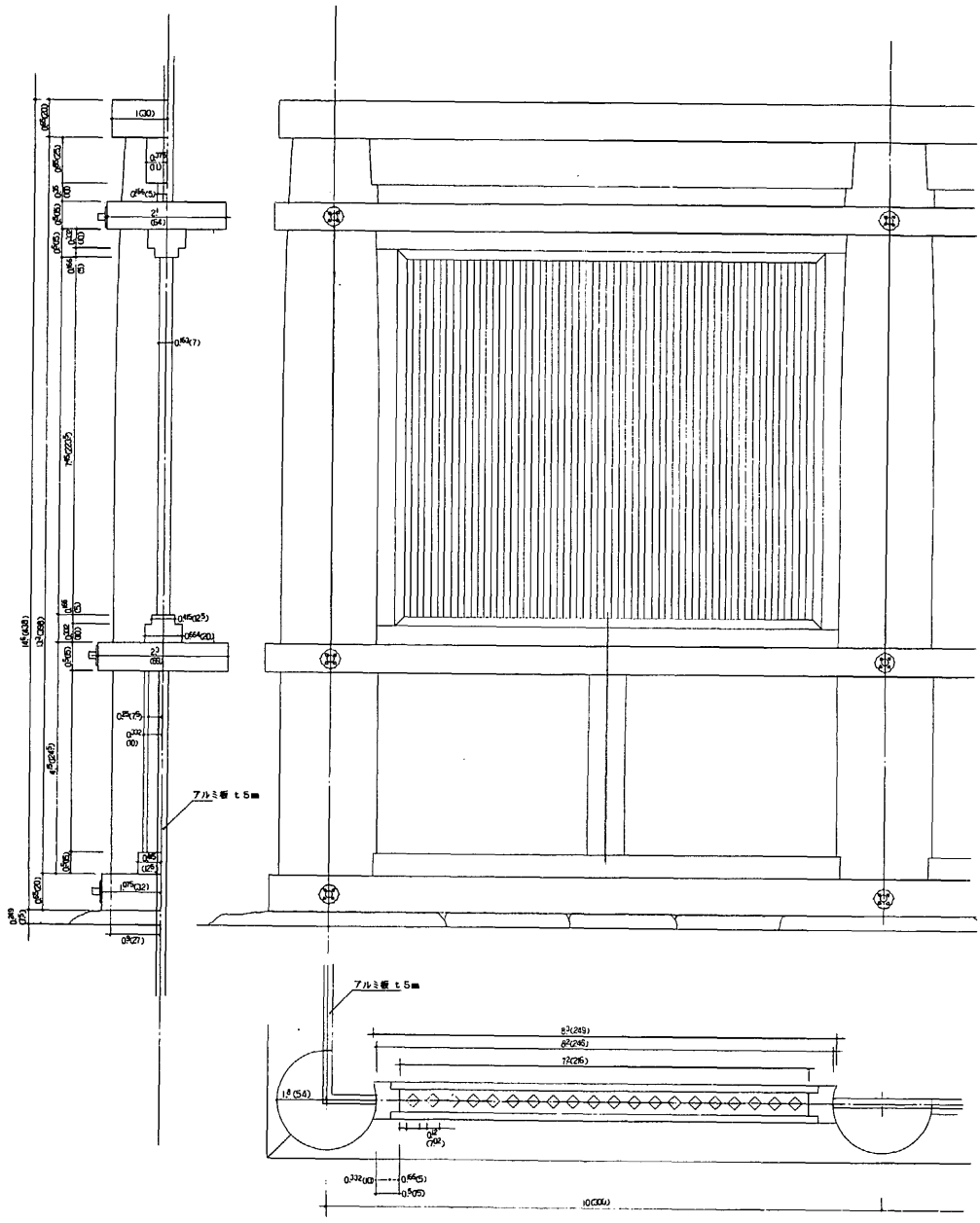


図11　初重軸部詳細図　連子部分（1/4）

・垂木割は1尺割（模型では1寸割になる）で配列する。

・瓦割については垂木割と同じか、またはそれに近い寸法とした。

・肘木には笹繰をつける。

・丸桁を直接支える実肘木は、柱間が狭いとき接合してもよい……六・七重では接合した。

(瓦に関すること)

・軒瓦、鬼瓦ともに筑前国分寺跡出土品をモデルとする。

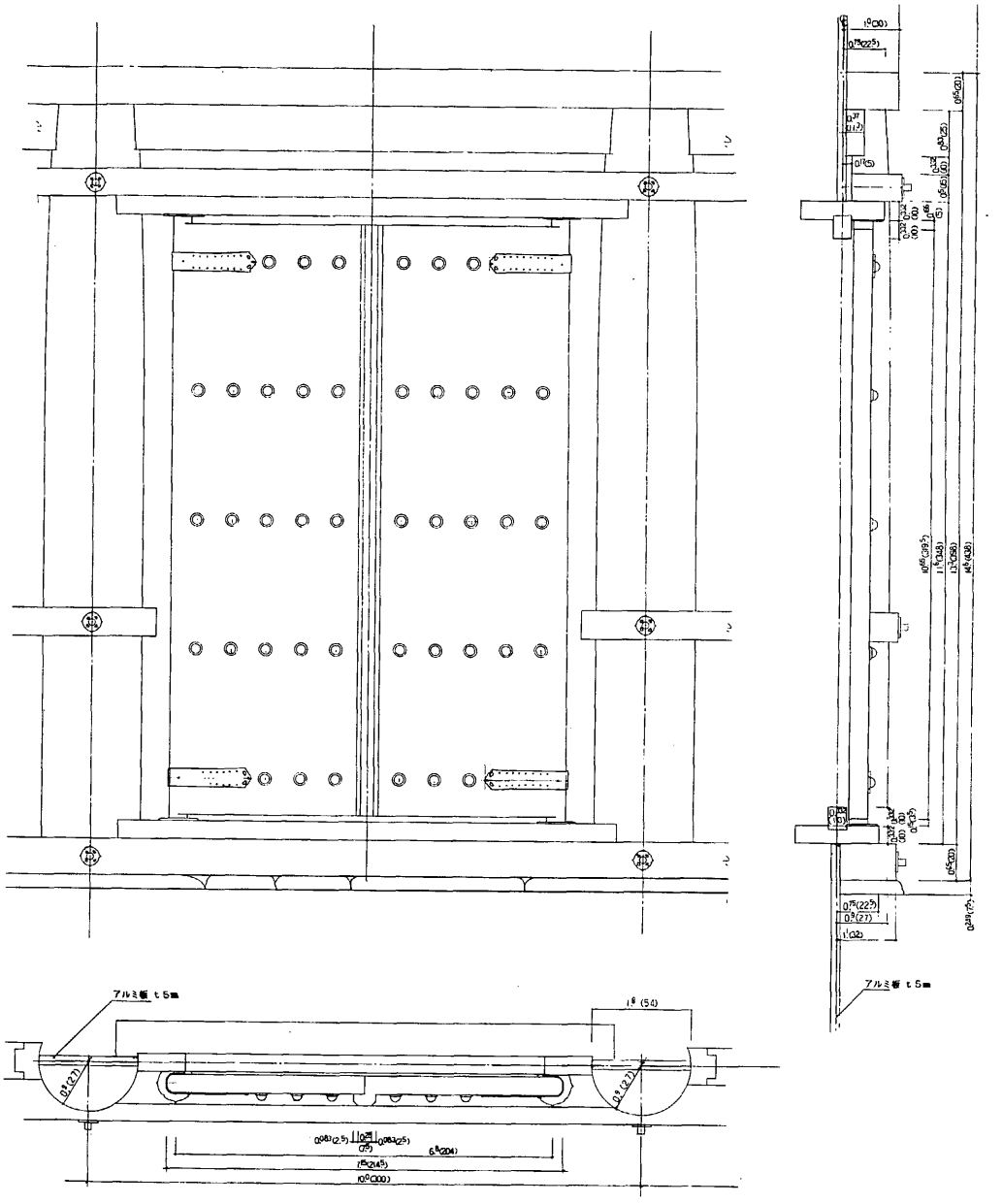


図12　初重軸部詳細図　扉口部分（1/4）

・隅降り棟には後世のような稚児棟はつけず一重とする。

・瓦の大きさには縮小をかけない。したがって瓦列の数が減少する。

（相輪・風鐸に関すること）

・相輪は奈良県当麻寺三重塔（西塔）使用のものを参考にする。

・風鐸は京都府高麗寺跡出土鋳型、風招は大宰府般若寺跡出土品を参考とする。なお相輪に風鐸は付けないこととする。

（構造に関すること）

・中心に通るH鋼柱は心柱として化粧する（初重のみ／下記連子窓の関係から）。
・初重の開き戸は開閉するようにする（メンテナンス用）。
・湿気除去を目的として上部に開口部を設ける……露盤下面に設けた。

（その他）

・基壇の化粧は瓦積みとする（現存遺構のとおり）。
・階段は西側に一箇所とする……実物では改修時に南北各一箇所づつ付設されるがこれは表現しなかった。東側は遺構の残存状況が悪く不明であるため、今回は設けなかった。
・礎石は現状の整備された塔跡のものを参考にする。
・外観は古色仕上げとする。ただし軒裏側など雨のかかりにくい所には本来の色をわずかに着色する（朱色は平城宮朱雀門復原用のものをサンプルとし、残存状況は元興寺五重小塔二重目を参考とする）。
・初重の連子窓はオープンにする（中が僅かながらも見える状態）。内部はアルミニウム枠が見えるため黒く着色する。
・スケールがわかるようにアイテムを検討する→→燈籠と人形の設置。

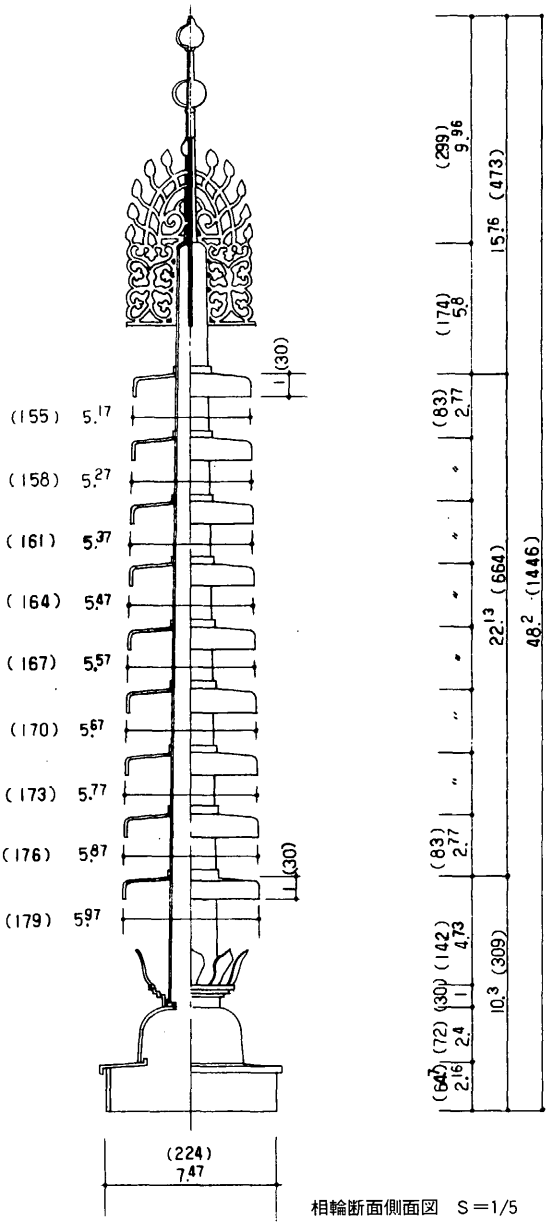


図13 相輪 断面・側面図（1/10）

図面の作成は受託者側が行い、細見先生及び市が検査を行いながら最終的な図面を仕上げるという工程で行った。上記したものの大半は外観を形成する基本的な問題であり、建築物の構造については受託者の提案を検討、承認する形で行った。以下、構造の概略を記載する。

・基礎以下には6mのコンクリートパイルを埋め込み、模型の沈下を防止する。
・その上部に鉄製H鋼材を立て、パイルと連結する。
・H鋼材から各層単位で腕を出し、駆体の内側でボルト等により固定する。

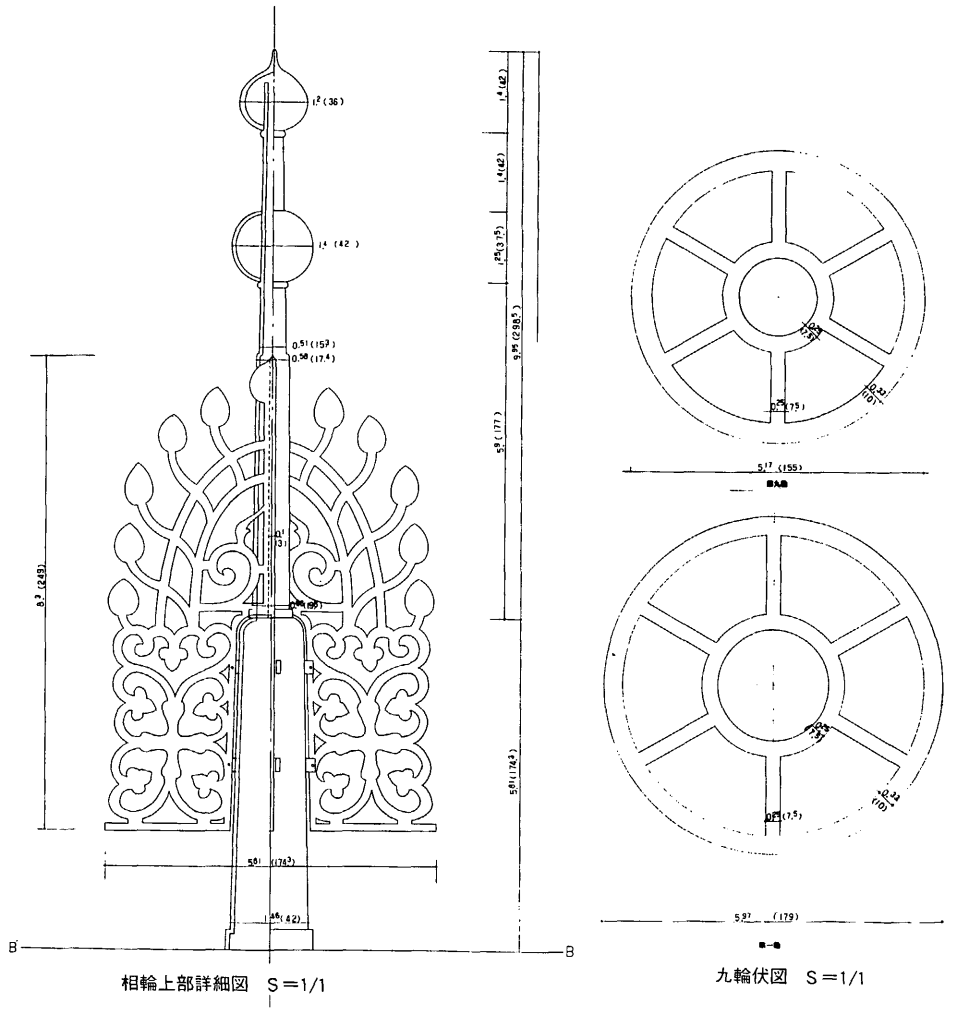


図14　相輪上部詳細図・九輪伏図（1/4）

・H鋼材上部に相輪を立てる。

・本体はアルミニウムの枠を製作し、それに部材を接着剤及びボルト等で固定する。外観を形成する様々な部材はFRPで作成する。

・組物の雄型は必要最小限の数だけ製作し、それを型取りして使用する。

・瓦も同様であるが、平瓦では数列を一度に型取りし、それを並べる方法を採る。

・相輪、風鐸は金属で製作する。

3、製作工程

ここでは製作工程の概略を、受託者から提出された資料に基づいて記述する。

原型製作

桧材を用いて必要な原型を製作する。桧材は材質が軟らかく加工しやすいという利点がある。作業にあたっては経年変化の雰囲気を出すために木目を強調した。

雌型製作

原型に離型材を塗布し、成形加工しやすいように割線を考え、粘土を半分程度埋める。その後常温硬化型2液性シリコーンゴムを塗り付ける。この際、補強としてガーゼを使用するが、ゴムが硬化した後、さらなる補強として樹脂で押さえる。樹脂が硬化すると粘土を取り除き、型を抜く。残る面すべても同様の作業を繰り返す。

注型型抜き

不飽和ポリエステル樹脂＋タルクを注型材料として利用したが、ABS樹脂を利用したものもある。注型材料には原料に顔料を混色している。なお瓦の場合、厚さが1.6mmときわめて薄いものとなるため、シリコーン雌型に注型材料が流れにくく、高温にして使用した。また気泡が抜けにくいため真空脱泡機を使用した。抜き取り後には、型の成型を行った。

下地ウレタン塗装

2液硬化型ウレタン塗料及び水性アクリル樹脂顔料（ビックアートカラー）を使用した。仕上げに至るまでには3～6回の下地塗りを行っている。

壁面部材製作

基本躯体は耐蝕アルミニウムとし、運搬及び現場組立を考慮して各層単位を基本とし、7分割とした。なお耐蝕アルミニウムは通常のアルミニウムより腐食に強く、強度もあり、さらに精度を出しやすいという利点がある。

部材の組立と取り付け

樹脂成型加工した長押等の長い部材は寸法を1点づつ測りだし、ヤスリ他の研磨工具を用いて切り出した。また桁（樹脂材）は伸びを考慮してコーナーの接点に1mmの隙間を開けている。斗共は型抜き、着色した部材を必要部分ごとに組み立てるが、躯体に接合する以前に大半を組み立てておく必要がある。なお隅斗共は53個、大斗共は28個の部品を組み合わせている。

部品の接着は不飽和ポリエステル及びタッピングビス（ステンレス）を使用したが、アルミ部分と樹脂部分の接着をより良くするため、アルミ表面を粗目のサンドペーパーで擦ったのち作業を実施した。

屋根の製作

屋根の原型は各階の1／4の範囲で作成し、シリコーンの雌型を製作する。製作にあたって部材が反る恐れがあったため、合板ベニヤでリブを作り補強した。その後、樹脂成型加工済みの屋根部材4点をつなぎ合わせて1枚の屋根を作る。屋根の接合には不飽和ポリエステルを接着剤として使用し、ステンレスのタッピングビスで固定している。

屋根瓦の固定

瓦はABS樹脂で成形された品を平瓦で4列分を1単位として張り合わせ、それを原型とする。それに不飽和ポリエステル樹脂を用いて型抜きし、成形加工したのち屋根に並べるという方法を採った。しかし屋根の反りが各層で微妙に異なっていることから、樹脂に軟FRPを混ぜ樹脂瓦板に柔軟性を持たせることとした。ただし隅の部分は1枚づつ葺いている。丸瓦は1点づつ接

着し、棒状のものを作成した後平瓦上に樹脂で固定している。ただし固定の強化を図るため、タッピングビスも併用している。

瓦の着色

瓦に使用する色は4色用意し、個体毎に塗り分けている。彩色には水性アクリル樹脂顔料を使用した。この絵の具は耐候性に優れ、変色、退色を起こしにくいとされているものである。

屋根裏部材の取り付け

地垂木、飛えん垂木は各2000個程度を型抜きし、屋根を裏返しにした状態でFRP接着で固定した。ただし接着面が少ないのでビス及び真鍮ピンで補強を行っている。

相輪の製作

水煙、九輪、擦管等は型抜きにより鋳造アルミで製作している。彩色はこの部分も古色仕上げとなるため、2液性ウレタン樹脂と金粉を使用している。金粉はきわめて固定が困難である。

フランジ取り付け

各層の内側に上位層を受け易いよう、また水平修正が行い易いようフランジを取り付けた。フランジは耐蝕アルミを使用した。

燈籠・人形の製作

燈籠は東大寺大仏殿の正面にある銅燈籠をモデルとし、計測値は『奈良六大寺大観』掲載の実測図から求め、同書掲載の写真及び原物観察で補足した。

燈籠は細かな部品から出来ているため、各パーツごとに原型（アクリル、バルサ材、ジェルトン材使用）を作成し、2液性常温硬化型シリコーンゴム（TSE-350）を使用して型を作り、不飽和ポリエステル樹脂にて成形加工を行った。この際に仕上げ時の塗装を考慮して、材料に顔料、鉄粉を混ぜ入れている。彩色は2液硬化型ウレタンと純金粉を用いている。火袋の装飾は、真鍮エッチングで型抜きした後パテ、ハンダ等でレリーフ状に盛り上げたのち塗装するという工程で行った。

人形は原型に博多人形を使用した。原型の人形は官人1体、僧形2体で山村延華氏の手になるものである。作業は原型を2液性常温硬化型シリコーンゴム（TSE-350）で型取りするが、原型が分解できないことから、油粘土を用いて抜け勾配を考慮し、型割、製作を行った。人形本体は顔料を混入した不飽和ポリエステル樹脂で製作し、型抜き後はバリ等を除去する成形を行った。彩色は行わず、材料に混入させた色調のままである。

現地建設

ベースプレートの上にリブプレートを取り付けた鉄製H鋼材を立てる。H鋼材（200×200 mm）はドブ漬け処理を行っている。この鋼材を心材として各層の完成品をユニックでつり上げ、上部から落とし込む形で重ねてゆく。各層はブラケットを介してボルト留めされる。

また基礎と模型基壇との隙間は、モルタルを充填している。

塔模型周辺の整備

文化ふれあい館敷地のふれあい広場の一郭に、筑前国分寺の中枢伽藍を復原できるようおよそ12m四方の範囲を選定した。外周りは鉄柵を施し、その内側に石積みを設けてGL面を約50cm高くした。これは見学者の目線を塔の二重目付近に置くことを目的としたことによる。また他の建物については、一応建物位置を砂の盛り土（高さ約5cm）によって表現したが、将来塔同様1／10模型を製作した場合すぐに設置できるよう、金堂と中門の下はコンクリートで地盤を強化している。回廊より内側には豆砂利を敷き詰めた。

そして最終作業として、スケールを表現するために伽藍の中心に銅燈籠の模型1基と、人形3体を配置して完成した。

4、おわりに

塔は平成8年4月27日の文化ふれあい館開館記念式典で除幕式を行い、市民に公開された。公開後はマスコミの取材もいくつかあり、注目されるところとなったが、色彩が古色仕上げである点で馴染み深いためか来館者の評判は上々で、一安心といったところである。

しかし安心ばかりではいられない点がある。FRPを使用したほとんど最初の大形屋外模型のため、その耐久性に実績がなく、今後の管理に課題がないわけではない。例えば退色であるが、東武ワールドの例をみる限りでは、数年は心配ないものの何年周期で補色をすればよいかが不明である点が揚げられる。また九州は台風が多く太宰府市も数年前、大規模な台風の到来で被害が出たことは記憶に新しい。この模型がどの程度までの台風に耐えられるのかは全くの未知数である（本原稿作成時に950HP、965HPの2つの台風が来たが幸い太宰府市は進路の西側になったため大きな被害はなく、塔も全く破損しなかった）。作業の工程をみても分かるように「折れる」「落ちる」という被害よりも「剥がれる」「割れる」といった被害が考えられ、破損する箇所も予想しにくい。また夏場の高温に対しては通気孔を設けて通風を良くし、伸縮する部材の接合箇所には隙間を設けるなどの対策を行い、冬場の凍結に対しては内部に水が進入しにくいよう配慮は行っているものの、どのような変化が起きるのか予想しにくい。落雷も心配である。

また人的被害については、柵（高さ110cm）を設け、無人警備のシステムを導入し、万全を期しているが近くで見学しようとして立ち入る人も少なくない。この部分は見学者の良心に頼るほかない。

このように課題はいくつか揚げられるが、こうした問題に対しては経年変化する部分を詳細に観察し、対応策を考えてゆくのが最も大きな課題であろう。

塔は奈良や京都のポスターを見てもわかるとおり、古都のシンボルである。太宰府は古代に都は置かれなかったものの、いつの頃からか古都大宰府として親しまれるようになった。真に古都のイメージを醸し出すためにも、将来は太宰府に原寸大の塔を復原してみたいものである。

最後にこの模型製作にあたって細見啓三氏はもとより、各所より様々なご協力をいただいた。



写真2　筑前国分寺七重塔模型完成状況

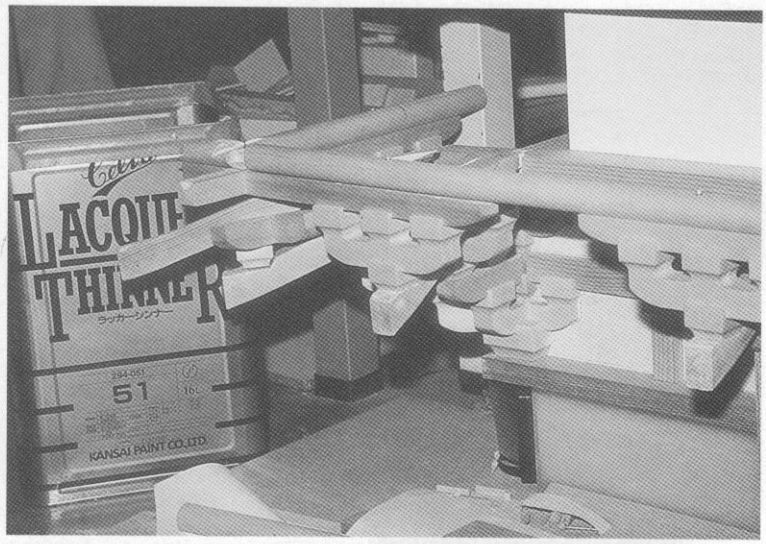


写真3
原型製作（初重組物）

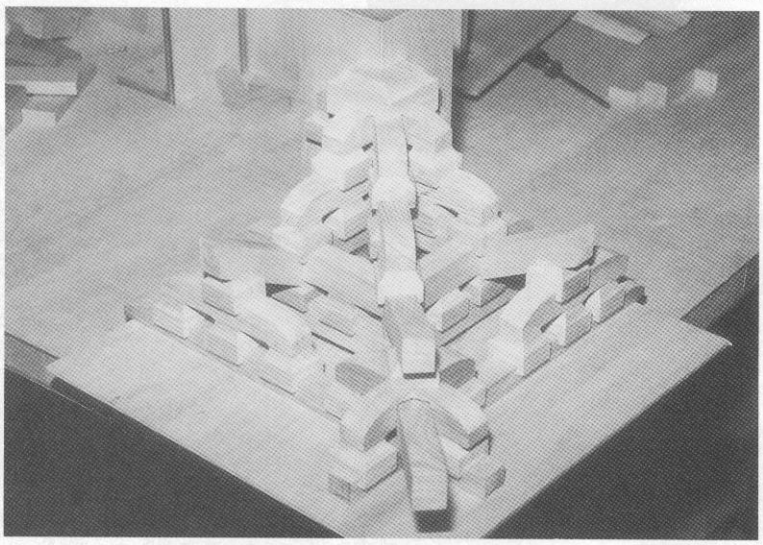


写真4
原型製作（初重組物）

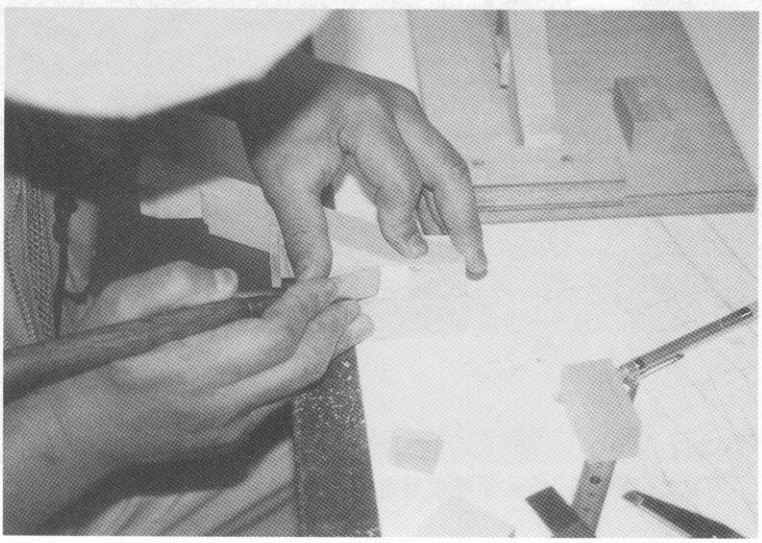


写真5
原型製作作業風景

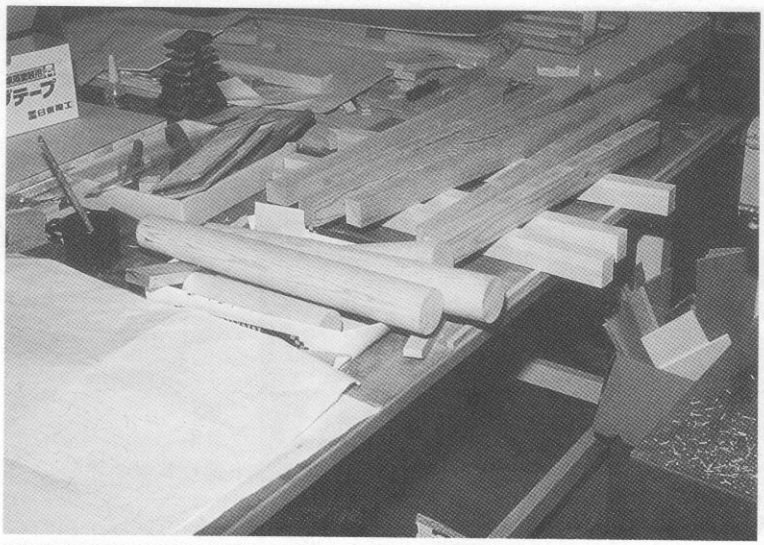


写真6
原型製作（柱など）

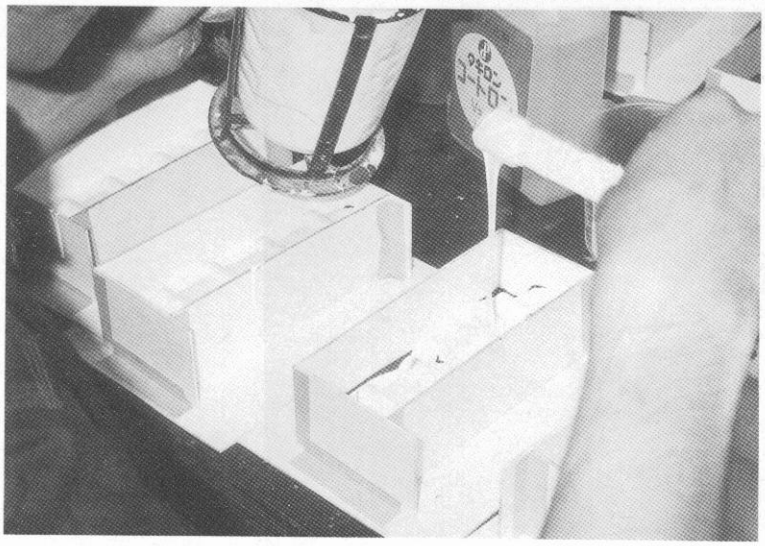


写真7
雌型製作（シリコーン
流し込み作業）



写真8
注型型抜き



写真9
下地ウレタン塗装

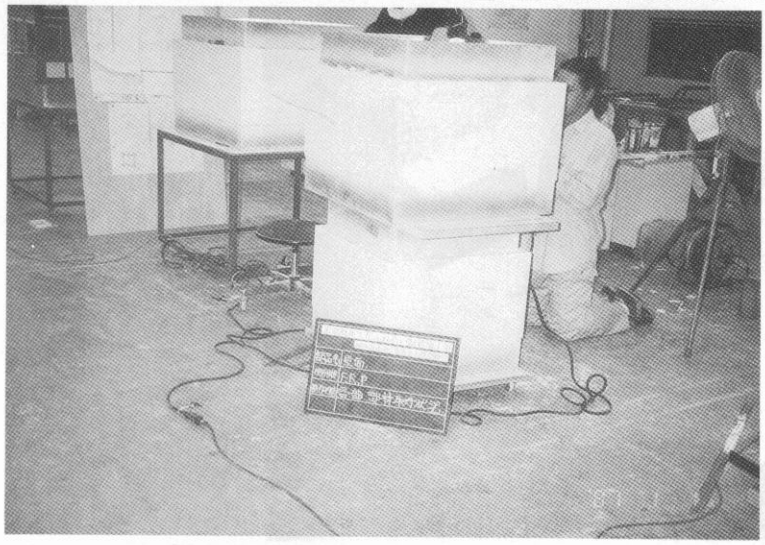


写真10
壁面部材製作

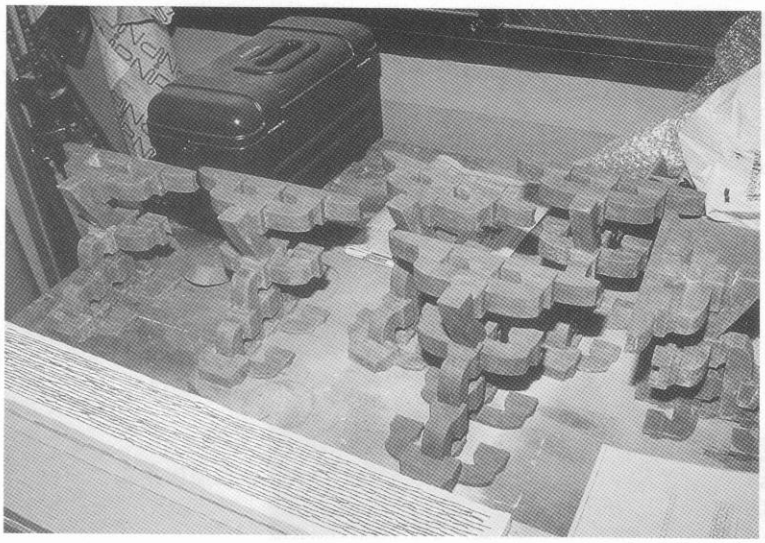


写真11
完成した部材



写真12
部材組立作業風景

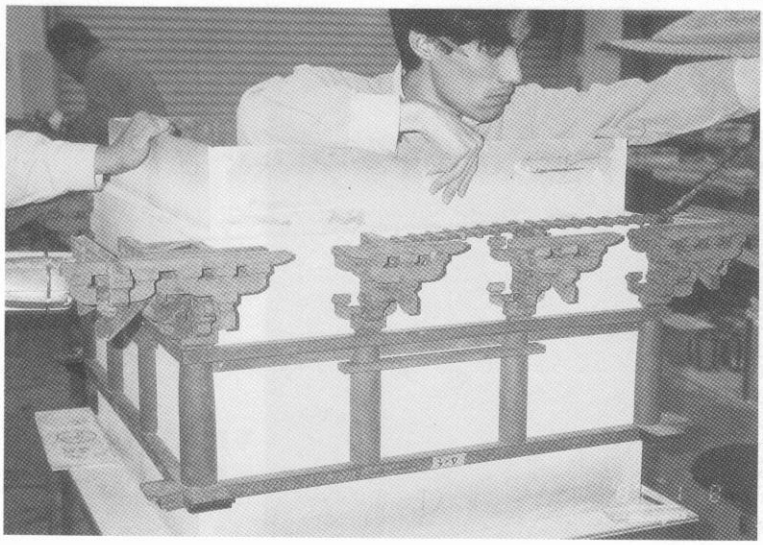


写真13
部材の取り付け

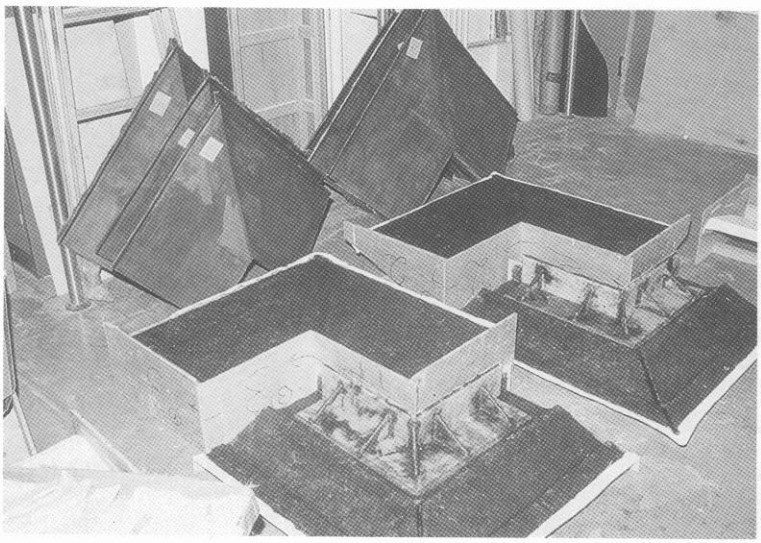


写真14
屋根の製作
（4分割された屋根材）

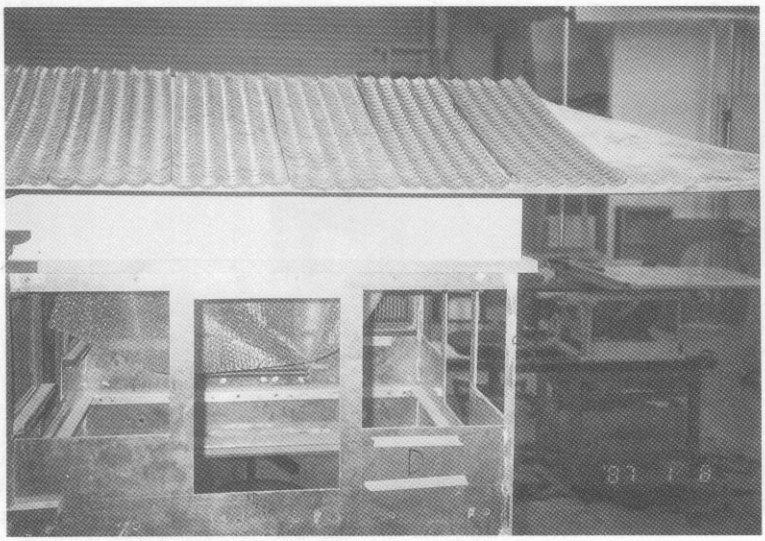


写真15
屋根瓦の固定

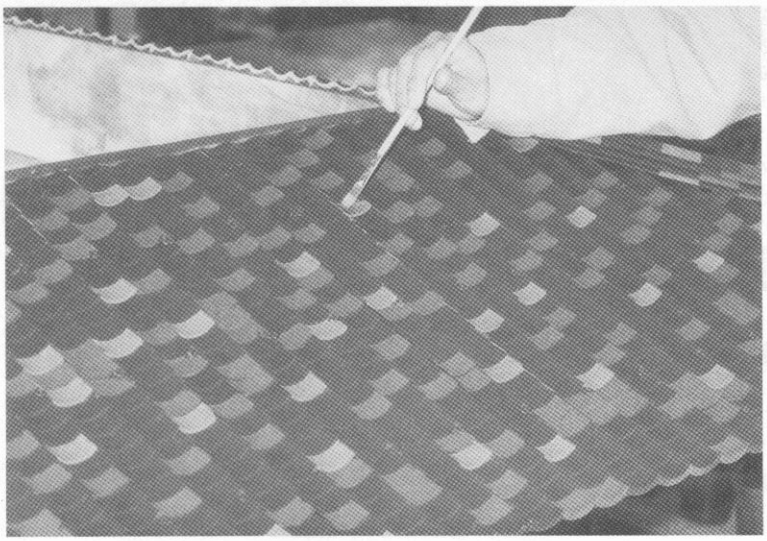


写真16
屋根瓦の着色

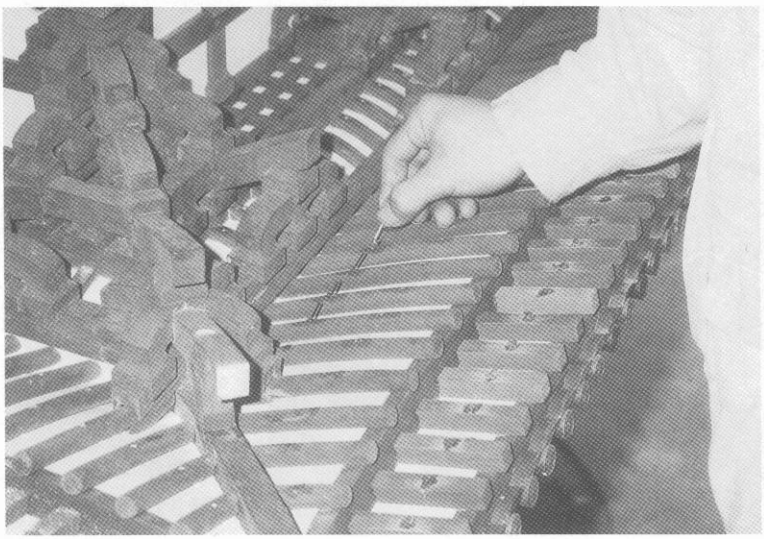


写真17
屋根裏部材の取り付け

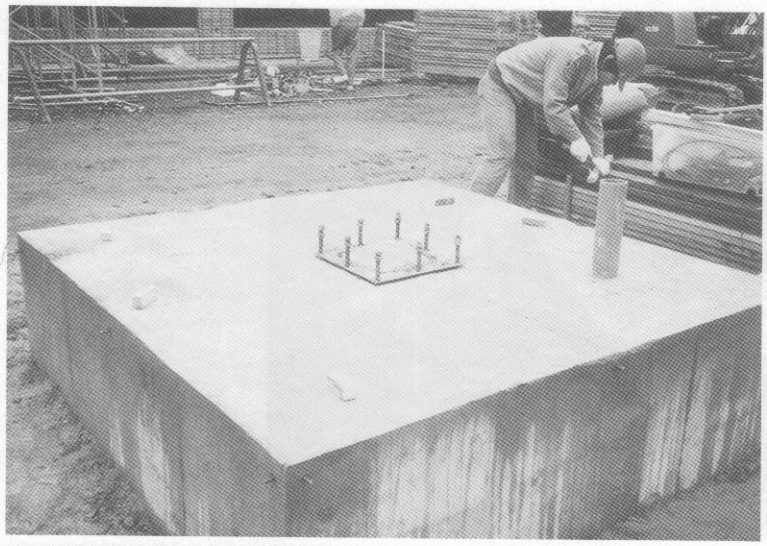


写真18
雨落溝に敷く
砂利の選択

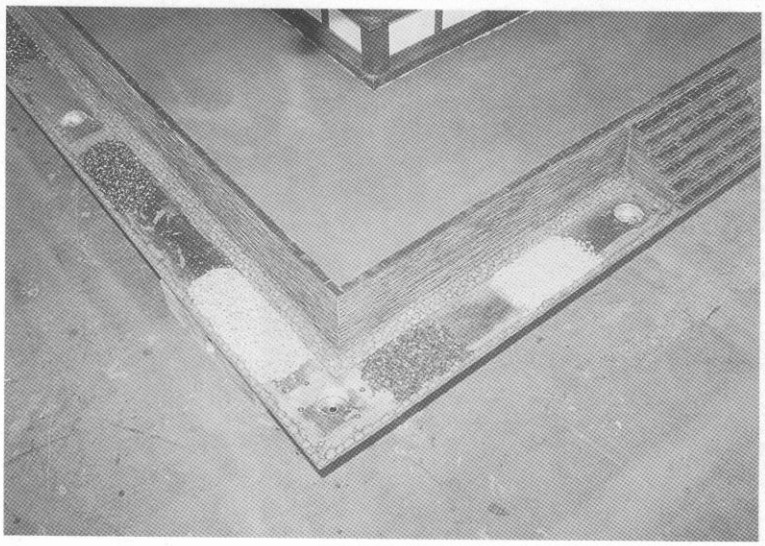


写真19
フランジ取り付け

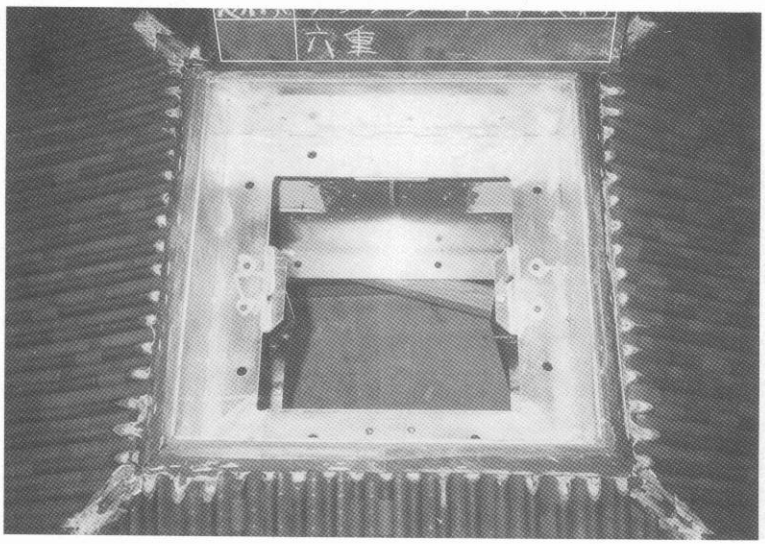


写真20
ベースプレート

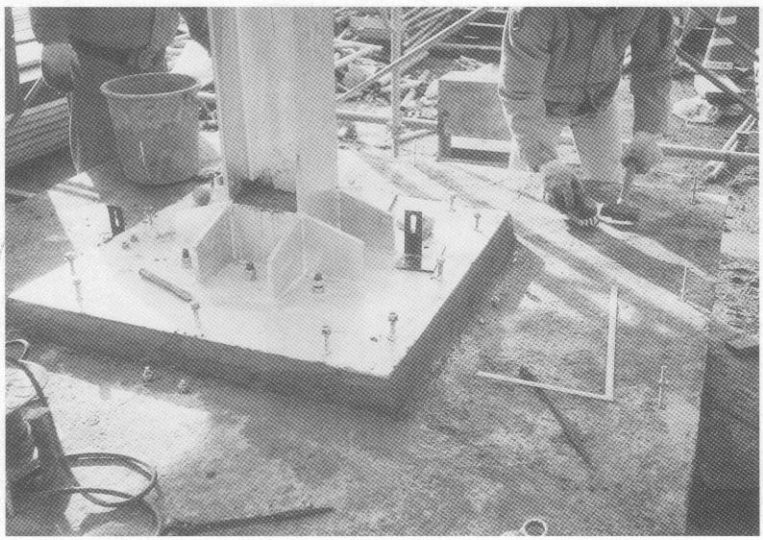


写真21
鉄製H鋼材を立てる

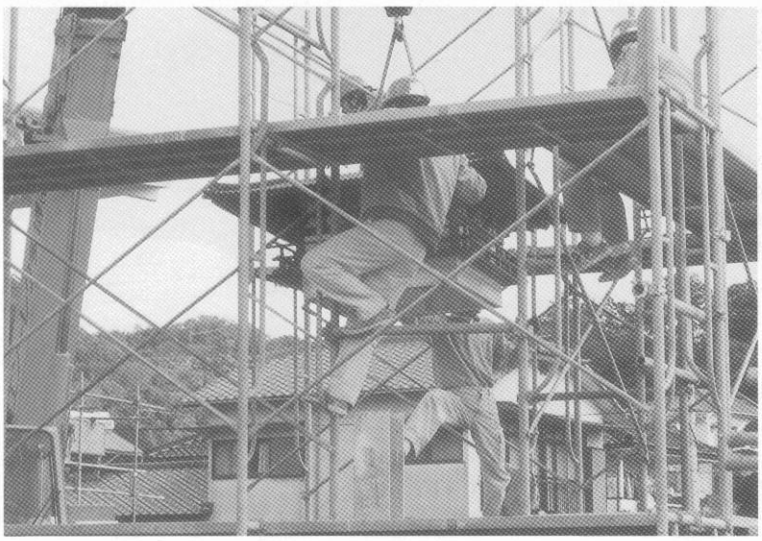


写真22
現地組立作業

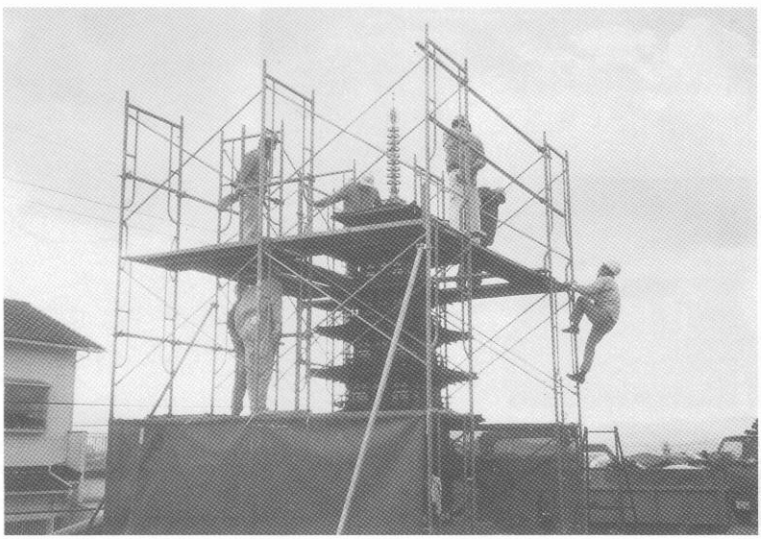


写真23
現地組立作業

記して感謝いたします（敬称略）。

石松好雄　　木村幾太郎　　栗原和彦　　横田賢次郎

大分市歴史博物館　　元興寺　　（財）元興寺文化財研究所　　九州歴史資料館

（文責　狭川真一）



写真24　七重塔模型と人物の対比（モデルは本館の看板娘で、身長は150cm・163cm）

筑前国分寺跡I　正誤表

P.34　表土　須恵器に、鉢（篠窯系）を追加
　　茶灰色土　須恵器・壺？→壺
　　暗灰色粘土　須恵器・破片（篠？）→鉢（篠窯系）
　　石製品・滑石製紡錘車を追加

P.35 S-20（9SE020）上層→S-20（9SE030）上面
　S-20（9SE020）黒色粘土→S-20（9SE030）黒色粘土
　S-20（9SE020）下層　土師器鉢を追加
　　黒色土器A→黒色土器B
　S-25（9SE025）　土師器・小皿a2を追加
　　輸入陶器・朝鮮系無釉陶器壺を追加

P.36　S-30（9SE030）　土師器・大椀cを追加
　　黒色土器A・椀を追加
　　木製品・井戸枠、曲物、櫛、円盤状板材を追加
　S-37（9SX037）　緑釉陶器・皿→緑釉陶器・椀

P.51　S-2（10SK002）　輸入陶器・朝鮮系無釉陶器壺を追加
　S-3（10SX003）　須恵器・鉢を追加
　S-10（10SK010）　土師器・甑を追加
　　黒色土器A・托状椀を追加
　　黒色土器B・小甕、托状椀を追加
　　瓦類・丸瓦、軒平瓦、無文せんを追加
P.65　Tab.10　13SE005→13SE005腐食土

P.67　Tab.12　13SD001→13SX001
　　13SD001灰色粘土→13SX001茶色粘土

P.72　S-1（13SX001）茶色粘土　瓦類・軒平瓦、軒丸瓦、平瓦を追加
　S-1（13SX001）　瓦類・軒平瓦、軒丸瓦を追加
　S-2（13SX002）　瓦類・軒丸瓦を追加
　S-3（13SE003）　瓦類・軒平瓦を追加
　S-5（13SE005）腐食土　瓦類・軒丸瓦を追加
　S-5（13SE005）灰色粘土　瓦類・軒平瓦を追加

P.73　S-15（13SK015）上面→S-15（13SK015）
　　瓦類・せんを追加
　S-30（13SX030）明茶色土　瓦類・軒平瓦、軒丸瓦を追加
　S-30（13SX030）上面　高麗青磁・椀IIIを追加
　　瓦類・軒平瓦、軒丸瓦を追加
　S-30（13SX030）黒茶色土　瓦類・軒平瓦、軒丸瓦を追加

P.87　14SX025→14SK025
　S-27の横に（14SX027）を追加

P.90　S-9→S-9（撹乱）
　　国産陶器・甕（常滑）を追加
　S-16（14SX016）　龍泉窯系青磁・小椀I-5b［1］→小椀IV［1］
　S-25（14SX025）→S-25（14SK025）
　　土師器・鉢を追加
　　中国陶器・鉢IIIを追加
　S-27→S-27（14SX027）
　　石製品・石臼を追加

P.91　S-50（14SX050）黄茶色礫層を挿入、陶器・壺を追加

P.104　Tab.20　第20次調査→第15次調査
　S-5茶黒色土　土師器・甕aを追加
　　黒色土器A・椀cを追加
　S-10　越州窯系青磁・椀I-5の後に（旧II-3）を追加
　S-12　龍泉窯系青磁・椀を追加

P.117　S-5（17SE005）暗茶色土　石製品・滑石製錘を追加
　S-5（17SE005）茶色粘土　瓦類・文字瓦を追加

P.118　S-15（17SE015）黒灰色土　須恵器・壺を追加
　　黒色土器B・椀cを追加
　S-15（17SE015）暗灰色土　土師器・鉢を追加
　S-20（17SK020）　越州窯系青磁・椀IIを追加

P.129　S-9（19SX005）　瓦類・軒丸瓦を追加

P.131　暗茶色土　土師器・把手を追加
　赤茶色粘土　須恵器・椀（播磨？）　→　須恵質土器・椀（東播？）

P.154　表採　火ちりん？　→　七輪？
　　瓦質土器・甕を追加
　窯西区表採　須恵器・壺を追加

P.163　1行目を全文削除し、P.158　1行目の前に追加する。

Pla.10　12-7　→　12-8
　　12-8　→　12-7

Pla.43　第9次調査→第13次調査

付編p.27　写真18　雨落ち溝に敷く砂利の選択　→　ベースプレート
　　写真19　フランジ取り付け　→　雨落ち溝に敷く砂利の選択
　　写真20　ベースプレート　→　フランジ取り付け

『大宰府史跡』正誤表

p.120 撹乱の表に追加　……　肥前系陶磁｜染付：椀

	誤	正
写真図版表紙	上が西	上が東
Pla.11 キャプション	SB4260	SB4280

筑前国分寺跡　I

太宰府市の文化財第32集

平成9年3月15日

発行　太宰府市教育委員会

福岡県太宰府市観世音寺1-1-1

印刷　大道印刷株式会社

福岡県春日市日の出町6-23